
真・恋姫＋無双 第三世界伝

テスト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫†無双 第三世界伝

【Nコード】

N8394T

【作者名】

テストス

【あらすじ】

荊州太守である劉表が主人公。漢王朝？天下統一？んなもん興味なし！荊州で悠々自適な王国生活をしつつ、乱世に否応がなく身を流される。魏呉蜀の三国に挟まれてバタバタしながら安寧を求めろ話。になるんじゃないかな。わからん。

主人公は氣を使う予定。でも最強は呂布なのは揺るがないです。オリ主オリキャラが出てきますがご了承ください。一刀は未定。一貫したストーリーは書けないと悟ったので場面場面を切り取る感じでお送りします。

第一話 きかんっ！（前書き）

小説書くの難しいね。

三国志知識無し、恋姫の記憶あやふやな作者がお送りする駄文。多分役職とか時系列とかおかしいんじゃないかな。

第一話 きかんつ！

戦を終え、勇猛なる兵士五　　と捕虜である黄巾賊七　　を引
き連れ荒野を突き進む。縄で繋がられ半ば引きずられるように歩く
賊どもは自らの身がどうなるのか思いを巡らしていた。斬首される
のか、牢に入れられるのか、はたまた強制労働か…。いずれにせよ
明るい展望など見えはしなかった。もしかしたら…と希望にすがり
つくも一様に暗い面持ちで歩く。

だが、賊の一部である。極々一部の賊はその「もし」を確信してい
た。何故朝敵である我等を生かしているのか、何故生かすために袁
家と糧食の交渉などしたのか…このことから決して悪いことにはな
らないと確信に至り、それどころか野心を燃やしていた。そんな一
部の賊は整然と従軍する兵の頂点、御大将に思いを馳せた。

- 荊州襄陽 -

「劉表様の帰還である！門、開けえええい！」

門兵が大声で帰還を民に知らせ、厳かな音を立て門が開く。

城へと続く大通りの端には庶人が平伏して軍隊が通過するのを待つ。
音一つたてず。賊はその姿を見て感服する。これが荊州の民か、俺
たちが襲ってきた奴らとは違いすぎると。その体つきはなんとも力
強く一目で武を修めているのがわかる。時折、他所から来た行商人
であろうか、落ち着きなく動いているのが目立つ。屈強な民に比べ
るとまるでその姿は子供のようである。もつとも、賊もそれは大差
はないのだが…。では、目はどうか。正直言つて見るまでもない。
精神は肉体に依ることを肌で知っているからだ。賊をみれば分かる。
一様に腐った目をしている。今まで襲ってきた民とはちがう。すっ

かり賊は雰囲気に飲まれていた。

賊は広場に集められ、万が一逃げられることのないよう、また、邪魔が入らぬよう兵にその四方を固められる。遂に裁きが下るのか、そう肩を落とし頭を抱える者もいる最中、声がした。

「これより王からの御言葉を賜る！平伏し、しかと聞けえい！

慌てて頭をこれでもかと地面に擦り付ける。死への恐怖からか、荒い息が広場を満たす中、壇上に上がった王が口を開く。その声は力強く通りでこの場にいる者に妙な安心感を与えた。

「さて、貴様らは俺の民を殺し、俺の村を燃やし、俺の金を奪った大罪人である」

誰もそれらは漢王朝のものであってこの声の主のものではない、などとは思わなかった。それは、漢王朝が衰退しているためか、本当はこの者のものであると理解させられたためか…

「これらの罪は斬首をもって償われるものである。だが、ここまで連れて来られた意味、分かる者もいるだろう。斬首はしない。なぜなら…俺は斬首などで済ますつもりがないからだ」

賊は怯えていた。命をもってしても償えぬのかと。それであればどうすれば許されるのかと。…このあとどれほど恐ろしいことを言われるのかと。

「貴様らは何とも愚かなものだ。何故賊になど身を落としたか…。真に哀れだ。その前に俺のところにくればよかったものを…。」

「それでは、裁決を言い渡す。貴様らは今後一切自由は与えられない。街に幽閉され強制労働にあたる。これよりあとは担当の文官に任せる。文官は滞りのないように、貴様らは文官の言うことをよく聞け。以上だ」

そう言つて城へ引き返す。

「ちよつ、ちよつと待つて下せえ、太守様！幽閉と強制労働つてのは一体…」

勝手に立ち上がり質問する者を取り押さえるべく動き出す衛兵を、足を止め振り返り劉表は片手で制しつつ答える。

「簡単なことだ。この街に住み、この街で働き、税を納め、この俺の為に生きる。それだけだ。ここで一生俺に尽くすんだ。言つておくが、途中で死ぬことは許さんぞ？貴様らは老衰以外の死因は認めない。…分かつたかな？愛する”民”よ」

「…ッ！」

コツコツと足音が響き、遠ざかる。

劉表の言葉のみを耳にいれていた”民”は徐々に文官の指示や遠くに聞こえる街の喧騒に気付く。あまりに現実感のない状況に命を拾った者は、まさか夢でも見ているのか、それとも、もう死んでいるのかと不安に駆られ意味もなくキョロキョロと周りを見渡した。

皆泣いていた。放心しながら、唸り声をあげながら、思い思いに泣きながらも皆共通していた。燃え上がるような強い思い。

『この御方の為に…！』

恐ろしいまでの忠誠心をこの国の民は持っている。まるで民全てが熟練の将のような、老獪な軍師のような…一人一人が気高く誇りを持つ、王であるかのような者が集う国

これはそんな『王国』の物語である。

「ふう〜、終わった終わった〜。まったく、何回やっても慣れないな」

「お疲れ様です、劉表様。しかし、太守様？政務が滞っております。人に説教を垂れるより自身の責任を為して下さいませ」

「…」

「ダッ！」

「あつ、逃げた！」

第一話 きかんっ！（後書き）

実は一話時点では主人公も場所も決まっていなかったという。お笑いである。のちに魏呉蜀に影響を与えたいから挟まれた荊州に決定。

第二話 ぶんかん！（前書き）

本当は次話のぶんかんっ！と一緒にしようかと思ったがなんとなく分けた

第二話 ぶんかん！

荊州は大陸の中央に位置し、その面積は華北・中原五州つまり冀州、
？州、青州、徐州、豫州を合わせた極めて大きなところである。そ
の肥沃な土地ゆえに多くの諸侯に狙われることになるのだが、また
別の話である。

「やれやれ、また竹簡が増えた。終わったかと思えば次を持ってき
やがる。文官どもは俺を過労死させるつもりじゃあるまいな」

そうつぶやく偉丈夫は荊州の太守である劉表、字は景升である。

「そんな愚痴を言っても賊も竹簡もなくなりはいけませんよ」

そう優しい声で苦言を呈すのは蔡瑁、字は徳珪である。茶髪を団
子にした髪型をした、その団子のように丸い顔をしている。妙齡の
わりに幼い体つきで道行く人に飴でも渡されそうである。本人は大
人の女性を目指し、事実その通りなのだがどうも周りはそう見てな
いようだ。不憫である。

執務室で劉表と蔡瑁は竹簡を処理する手を休めずにとりとめもなく
会話する。

「分かっていさ。頂も見えぬほど積み重なったとはいえ他の州よ
りずっと少ないんだ」

「本当に民に恵まれましたね、我々がやるのは租税、兵役、律令と
大まかな枠組みに過ぎませんからね」

「細々としたものなどやってられんからな、やったところで遠く離
れた場所から頭ごなしに言われるんじゃ出来るものも出来ない。」

「地方の領主の采配に任せて良かったです。最初はこんなこと言われてこれからどうなるんだらうと思いましたが…今思えばこの国だからできることでしたね」

「幸いなことに荊州の民は忠誠心が高いらしいな。最近、なんでも自警団なるものが動いてるらしい。領主や豪族が怪しげな動き、つまり、不正や賄賂の授受をしたとされた場合、問答無用で屋敷に押し入るのだそうだが…解散するとか」

「あら、それは残念。治安維持に役立ちそうなのに。何故ですか？」
「笑えるぞ。不正をする者がいないんだそうだ」

「…」
「…」

どちらが先にといいわけでもなく、堪えきれず二人は笑い出した。

「まったく、本当に面白いところですよ、ここは」

「まったくだな。何故こんなおかしな奴らが集まったのか。まこと不思議なものよ。まあこいつらのおかげでこちらとしては楽になっていいんだが…」

劉表の訝しげな顔を見て蔡瑁は穏やかに笑う。

「よし。こいつで政務終わりつと…。なあ、お蘭。休憩してもいいよな？」

真名を呼ばれた蔡瑁は答える。本来の真名は蘭々と言うのだが劉表だけはこう呼んでいる。蘭々はそう呼ばれることを不快に思っていない。それどころか喜んでいる。劉表だけが使う呼び名であることに何か特別な想いを持っているのかもしれない。

「お疲れ様です。書簡は私が片付けておきますので休憩してください」

い。休憩なんですから遊んじやだめですよ？」

「また子供じゃあるまいし、わかってるさ。ったく、そっちが子供みたいな見かけしてるくせに……」

そう言った途端、蘭々から何かドス黒い気が立ち昇り見るからに恐ろしいものを形作る。蘭々といえば、垂れていた目はきりりと釣り上がり冥い瞳は収縮している。

「おおつ、久々にみたなあそれ。お蘭、お前それを街中でやってるもんだから噂になってるぞ。曰く、鬼、曰く、断罪者、曰く、幽波紋。いや、良かったなあ。お前の幼い容姿が皆に愛されて！」

「流悟様……！」

劉表の真名を叫び怒りを露わにする蘭々を尻目に逃げるように立ち去る流悟。政務が残っていることから追いかけていたい気持ちを必死に抑え、流悟の背中へ「流悟様のバカー！」と投げかけるのに留める。そついう姿こそが子供扱いされる要因であるのに気付いていない。

「流悟様はすぐ私のことをバカにして……！」

プンスコと頭から湯気を出しぶつくさと文句を言う蘭々。竹簡を片付けながら流悟のことを考える。

でも……今はあんな無邪気でも、ちゃんとしているときはカッコいいんだよなあ……

そこまで考え先程とは別の意味で顔を赤くする蘭々である。熱くなつた顔を冷まそうと窓を開ける。外を眺めていると修練場の方に流悟の姿が見えた。しばらく見ていると何やら武官と談笑していた。余談ではあるがその武官は見目麗しい女である。

あの人の魅力を知らぬはあの人自身のみ…か。

窓から離れ席に座る。竹簡を片付けながら思う。

流悟様？あなたは自身に着いてきてくれる者を不思議に思っていますか、そんなことではいけませんよ？…もう私たちはあなたにぞっ
こんなのですから

第三話 ぶかんっ！

「流悟様、ちょっとこいつを見てくれよ、なんだと思いますか？」

「…わからん、なんだその出来損ないの木彫りの像は」

「わからないんですか、こんなにそっくりなのにな？」

「藍道、どうでもいいがその気色の悪い声をやめろ、ぶっ飛ばすぞ」

藍道と呼ばれたこの男が流悟の側近、黄祖、字は孟博その人である。自ら作った像に頬擦りし、だらしなく顔を歪めているが歴とした将である。流悟はその像がなんなのか気付いていたが、それを指摘し、この気が触れた者の思い通り事が進むことを嫌い突き放している。それでも、自分の世界をひた走る藍道はまるで応えない。

「ああ、世界一かわいいよ、道蓮ちゃん。ちゅっちゅちゅちゅ。……かあわいいいいよおおおおお！ああああっ！！」

なんとも不気味である。体を打ち上げられた魚のごとく弾ませ奇声を喚く。流悟含め武官文官が距離を置く中、それに近づく勇者がいた。

「嬉しいわ、藍道！私のことそんなに愛してくれていたなんて！」

馬鹿が増えた。そう思いがっくりとうなだれる。多くがこうなるであろうと思っていたが、それは予測であって希望ではない。こんなことが当たっても誰も得しないのである。

藍道と近づき難い空気を醸し出すこの女は藍道の妻、姓名は孫堅、字は文台、真名は道蓮である。この二人、今でこそこの有様である

が以前は殺し殺されの敵同士である。それが何故こうなったか……

本来江東の虎と言われた道蓮に藍道が勝てるわけもないのだが藍道は運がよかった。藍道には年に一度訪れるという『賢人の日』があり、それが奇しくも決戦の日に来た。道蓮を畏にはめ崖に突き落とすと言うところで目が合った。矢が刺さった。互いの胸に、互いの心に。

「ああつ、そして我らはいつまでも一緒に！なあ、道蓮！」

「ええつ、いつまでも一緒よ！ねえ、藍道！」

大変だったのはそれからである。総大将は降るわ、藍道はそのことを隠蔽しだすわ、敵は道蓮が死んだと思って撤退するわ、恨みを持つ…。明らかに藍道の私情で軍を混乱させたことは軍規違反なのだが敵総大将を捕えたこと、味方に大きな損害がなかったことで鞭打ち10回で済んだ。打たれているとき藍道はまるで応えてなく、熱に浮かされたようにニヤニヤとしていた。

こうして、道蓮はこの国にきた。道蓮は自身はもう死んだ身として新たな人生を送っている。炊事洗濯掃除を覚えまさしく良妻である。残してきた孫策、孫権、孫尚香、その他仲間は気にならないのかと尋ねると

「知っているか？虎は子を崖に落として育てるのだそうだ」

そう笑いながら言った（真面目にしゃべれるのならいつもそれでいてくれと流悟は思っている）。

この馬鹿騒ぎも蘭々がきて終わる。

「そろそろ始めますよー。席に着いてください」

真面目な雰囲気を取り戻し、それぞれ席に着く。蘭々が周りを見渡し、準備が整ったと流悟に目配せする。流悟はそれにうなづくと、宣言する。

「これより、軍議を行う！」

第三話 ぶかんっ！（後書き）

男だしコブ付きだし、とくに描写する気が起きなかつたので短くなつてしまった。

第四話 ぐんしつ！

襄陽から数里先、山を越え林を抜け崖に沿うようにしてそれはある。水鏡女学院。才気ある若者を集め学問を教えている私塾である。そこにいるとある幼女が大層優秀だと噂を聞きつけ流悟は女学院へ足を運んだ。

「何度来られても駄目なものは駄目です。彼女はまだ幼く未熟。私ももつと教えたいこともあります。彼女が誰かに仕えるにはまだ早いでしよう。」

また断られてしまったか……。そう恨めしげな顔で女学院の主、司馬徽、通称水鏡先生を見るも彼女は涼しげな顔で扇子を口元に当て表情を隠していた。

こっちは太守だ、こうなったら権力にものを言わせて……。そう卑屈な考えが頭をよぎったとき、扉の向こう側から声がした。

「しえんしえん、お茶とお菓子をお持ちしました。」

舌つ足らずな声である。こんな頭の緩そうな子もここにはいるのかと少しばかり驚く。

水鏡は入室を促すと「失礼します」と扉を開けた。その声の持ち主はくしゃりと破顔させながら愛想良くしている。なんとも微笑ましいものである。薄い桃色の髪、わずかに垂れた眉、頭身の低い身長、ちよこちよことした歩き方、全てが見る人を穏やかにさせてくれた。だがその服装は妙なものをしていた。体軀に合わぬ大きめな黒の帽子は円筒状で頂上は平らだ。つばは反り上がり、へりは鋭角に折り返っている。黒の服は前裾が直角に切り取られ後ろ裾がやけに長い。

どこかで見た姿かと思えば、いつぞやの祭りで見た手品師の姿だと記憶から掘り起こした。

その癒しの姿に先程の卑屈な考えはどこへいったか、もう一度水鏡に頼み込む。

「水鏡先生！お願いします！せめて一目だけでも、一目だけでいいのです！徐元直に会わせてください！荊州には彼女が必ず必要になる！」

ひゃい！と先程の幼女が驚いたのか妙な声を出した。

水鏡は少し考え、幼女に問うた。

「単福よ、この御方は荊州の長、劉表様です。この御方の統治、政策、教育、思想、何でもよろしいですからあなた自身の考えを言うてご覧なさい。」

「ふえっ！？しっ、しかし、太守様に失礼では……」

「構わないよ、かの高名な司馬徳操の弟子の評価なら金を払ってでも聞きたいくらいだ」

たわわっ、と慌てて妙な声をあげる単福であつたが二人が逃がす気がないことを悟り何度か深呼吸をすると覚悟を決め、語り出した。

「それでは……。劉表様は前漢の景帝の子という家柄に申し分なし。儒教国家であるこの大陸では大きな利点であります。家柄が良いだけで名士や有力者が集まってきましたから。しかし、劉表様は賊すら自身の側近に置くと聞きます。その徳の高さは敬服致しますが儒教を重んじる者は不満が溜まっているはずです。しかしながら、その様子はみられない。それが賊すら飲み込む徳の高さ故か、別のもの

か……。なんにせよ、内に憂いを出さぬその統治は盤石であると」

「軍事はと云えば、荊州の肥沃な土地を背景に人口は増え続け徴兵には困らない。武具の材料も江夏に大陸有数の鉾山がある。しかしながら、大きな欠点として馬がないことが挙げられます。同じように馬を扱える者も極めて少ないので騎馬隊など夢のまた夢。今後は涼州の精悍な馬、もしくは、幽州の白馬義従に代表される駿馬が必要となるでしょう。」

「内政は、及第点であると。税も物価高くも安くもない。何か目新しい政策を実施したわけでもない。にも関わらず発展し続けているのはひとえに民と土地のおかげです。土地が恵まれているのは先程触れましたので、民について。荊州の民全てがあなたに心酔していることから民の忠誠心、愛国心はもはや狂信的。それ故に税を払うことなど惜しみない。税を着服していたものや脱税がなくなったことで財政の健全化もなされている。ですが、あなたは一つ不思議な政令を出しました。”武を修めることの奨励”です。まだこの政令は評価する時期にないかとは思いますが、私見を言わせていただきます。人には得手不得手があります。私には武は必要ありません」

驚いた。ただの幼女がこれほどの確な意見を言えるのか。幾つか流悟自身も考えてはいたが自身の年齢の半分にも満たないであろう子供が自分以上に思慮深く弁が立つ。やはり、軍師は必要だ。そう、改めて思う。流悟が考えている間にも単福は語り続けた。

「……このような理由で劉表様は乱世で大きな役割を果たすことでしょうか」

ようやく終わり、単福もふう、とため息をつき喉が乾いたのだろう、台の上のお茶を飲んだ。それは流悟のお茶であることに気付かずに。

「あの…如何だったでしょうか。」

流悟がそれに応えようとしたとき、
水鏡が遮った。

「…本当にそれで終わりですか？別に聞きたいことがあるのでしよう？」

単福が一瞬驚くような顔をした。

「先生には隠し事ができましえん、たわわっ」

噛んでしまったことに驚きごまかすように妙な口癖を言った。そして、流悟に向かい、こう言った。

「今まで劉表様をみてきて思ったことがあります。劉表様は何が目的なんだろうと。天下を統一したいのか、それとも、漢の再興だろうか、弱き民の救済か、貴方にはそれが見えないのです。降りかかる火の粉を払うだけの日和見主義。それが貴方自身の評価です。…あなたは一体なんのために戦っているのですか？」

精一杯目に力を入れ、流悟を見極めようとする単福。流悟はあやふやに答えることはできぬと感じ、目を閉じ、思いを巡らす。しばらく時間が経ち考えがまとまったのか、口を開く。

「単福よ、貴様は民をどう思う？」

えっ、と疑問に思う単福であったが無視する様に流悟が話す。おそらく質問したわけではなかったのだと思い黙って耳をすませる。

「貴様は民を弱いと言ったが、俺はそうは思わない。民ほど強いものもない。民がいなければ税も取れない、飯も食えない。国なんてあつという間に破滅よ。太守や刺史、宦官…帝に至るまで民の小間使いよ。」

そこまで聞いて単福は青ざめる。帝をそのように言うなんて…。この場に三人しかいないと知っていても周りを伺ってしまう。

「俺はその強き民をみていたい。民が何を考え何を為すか、何を求め何を捨てるか…そのための手伝いをしようと思っている」

話は終わったと湯飲みに手を伸ばすが中身が入っていないことに気づき、顔をわずかに顰めたあと、手を引っ込める。

単福は流悟の答えを聞いて水鏡をみつめる。水鏡もその覚悟を問おうと目を逸らさない。しばらく見つめあったあと、水鏡は諦めたようにため息を着いた。

「劉表様、徐元直を会わせましょう」

流悟はハッと顔を上げる。水鏡は立ち上がり単福の後ろへ、そして、肩に手を乗せるところ言った。

「この子が徐元直です。自己紹介なさい」

「はいっ、姓は徐、名は庶、字は元直、真名は天里あまりといます！劉表様、これからよろしくお願いしましゅ！たわわっ！？」

「はっ？…おっ？お前が徐元直？」

「はい！天里と呼んで下さい！」

キラキラした顔で流悟を見上げる天里。何かバツが悪そうに目を逸らし水鏡を見る流悟。

「図つたな、水鏡」

こうしてなんとか軍師を迎えることになった流悟。能力は折り紙付きだが、後ろを振り返りその姿を見ると妙に不安になる。妙な格好に杖を持ち鴨の如くついてくる。歩く度に大きな帽子が揺れて顔まで被さってくる。

「たわわっ、前が見えないでしゅ！お先真っ暗でしゅ！」

非常に不安になる流悟であった。

第四話 ぐんしっ！（後書き）

天里の演説は適当。書き溜め終了。しばらく投稿無し。

第五話 ほうぎよ！

靈帝崩御す。その報は大陸を駆け巡り民を震撼させた。漢の信徒は嘆き悲しみ、野心ある者はほくそ笑み、智ある者は乱世が訪れることは免れぬと未来を想像した。そんな中、荊州はというと、そんなことは知らんとも言うようにいつも通りであった。もちろん、荊州にもその報は届いている。にも関わらず動じぬのはなぜか。理由は一つである。

我らは漢の民にあらず、ただただ劉表様に準ずるものである。

劉表への圧倒的な信仰である。

漢が今更なんだというのか、我らを賊から守ったか、腐敗した役人から救ったか。否、断じて否である。我らを救いは劉表様お一人。劉表様だけが賊から、役人から守ってくださいました。道を示してくださいました。

もはや荊州の民は漢から逸脱していた。とはいえ、劉表は漢から任ぜられた太守、漢の臣である。靈帝崩御にさいし玉座の間での軍議を大荒れにさせていた。

「今すぐ靈帝に見舞いの品と使者を向かわせなければ……」洛陽は今、大將軍何進と十常侍筆頭張譲との間で権力闘争の真っ只中である！そのような中のこのこと出向くなど身を滅ぼしに行くようなものぞ！」「…今更漢に伺いなど、必要ありますか？雅であった蝶も年老いて泥にまみれ、もはや蛾と見間違っばかり。見捨ててしまえばいい」「しかしそれで叛意ありとみられては……！」「おや、怖気づきましたかな？」「貴様っ！」

ダァン！

藍道が白熱しすぎた議論を遮るべく床を足で強く踏み叩く。その結果、床に穴が空き足が落ちてわたわたと慌てているのは愛嬌と言えよう。

その姿をよそに黙りこくった文官武官の中から蘭々は一歩前に出て言った。

「劉表様、我らでは議論も議論にならない有様。どうか劉表様が方針を御決めになって下さい。我らはそれに従い全力で成し遂げてみましょう」

流悟は腕を組み、頭の中で今まで出た情報をまとめ、思考する。

何進は劉弁を皇帝に擁し、張讓は劉協を擁しようとしている。考えるまでもなく本来であれば長子の劉弁が皇帝に即位するのだが、劉弁は病弱であることと後ろ盾が脆弱であること、さらに付け加えれば、十常侍を敵にまわせれば必ず謀殺されると気付いていることから即位することを固辞している。対して劉協はまだ幼い。政治など何もわからずただ優しく接してくる張讓に甘えている。もっとも張讓はその未熟さに目を付け、騙して信頼を勝ち得ているだけなのであり、皇帝になった暁には自身が実権を握るつもりでいる。

恐るべきはこの皇帝不在の権力闘争をしている間に董卓なるものが洛陽へ向け進軍していると多くの行商人が言っていることだ。権力欲に駆られ洛陽に攻め入るのだとするのならば、洛陽の内に向いた愚者共などひとたまりもなく吞まれてしまうだろう。そうなれば天下は董卓のものである。武力を背景に天子を従え、勅をもって暴虐非道をなしても不思議ではない。そうなれば荊州にも何か無理難題を向けられることも考えられる。それは是非とも避けたい。

では、董卓は正義感をもって洛陽に弔問に向かっているとしたらど

うだろうか。その道中、天子に仇なすものを征伐するのだとしたらどうだろうか。宦官の一部の清流派と呼ばれる清廉潔白なものとの組み、漢の再興を望んでいるとしたら、それはなんとも眩いことだ。是非ともそうなって欲しいと願う。

この政争は董卓が鍵を握っている。そう思い、決断する。

「蔡瑁、董卓は確か天水領主だったな？」

「？はい、確かに董卓は涼州天水出身で天水を治めているとか」

「なら、そこに食料、金銭、武器、宝石、なんでもいい。寄付してやれ。荊州太守劉表の名を喧伝する事を忘れるなよ」

「なっ!？」

ニヤリと笑いながら言った流悟の話の内容に、周りの文官は驚きざわめいた。蘭々は一瞬、周りと同じ様に驚いたものの、すぐに気付いた。

今更我らが洛陽に行っても董卓に先んじられ旨味はない。であるならば、董卓がもたらすものに対処できる体制を取るべきだ。もし董卓が暴君であるならば天水への寄付が荊州を守るだろう。自身の協力者に災厄をもたらす事はするまい。もし善良であるならば、寄付を恩に感じ感謝するだろう。我らとしては皇帝と通ずるものに協力者ができるうえ、足りなかった涼州の精悍な馬も調達できるかもしれない。どう転んでも利がある。

蘭々は改めて主を誇りに思いつつ敬服した。

「分かりました。直ちに送りつけましょう。」

おおっ、と周りが驚く声を意に介せず流悟が宣言する。

「これにて軍議は終了だ！さっさと散って通常業務に戻れ！」

第五話 ほづぎよ！（後書き）

毎度毎度の尻切れトンボ。携帯で打ってるからかなあ。頑張ってる書いても短いな

第六話 ほうぎょ！！

軍議が終わり、蘭々と天里を引き連れ執務室へ向かう。執務室に入り蘭々が天里のために椅子を引き座らせ、自身は茶の準備をする。

「お蘭は洛陽と董卓の動き、どうみる？」

流悟が茶を淹れている蘭々の背を、特に臀部を薄目で凝視しながら問う。

「そうですね、董卓がどれほどの人物か知りませんが洛陽の魑魅魍魎共を飼いならす事などできますかね？あっさり潰されたりして。そうなったら私たちは大損ですよ。流悟様、首括るときは一緒ですよ」

蘭々があえて先ほどの軍議の決定を否定する。流悟もこのおふざけを理解しており薄く笑いながら返す。

「何をバカな。もしそうなくても国庫には山ほど金があるわ。それに死因は老衰以外許さんといつも言っているだろう。お前は俺と共に生き、死ぬのだ。…くっくっくっ、一地方領主に献上して破綻した太守なんて末代までの恥になるなあ」

蘭々は前段の言葉に頬を赤らめつつこのおふざけを続けようと口を開こうとするが、その前に天里が遮る様に話す。

「恐らく董卓は何進が張讓か清流派か、いずれかに、もしかすると全てに協力者がいるのでしょう。そうでなければこうも早く行動を起こせるはずありません。その協力者も自らの利に動き董卓を利用

せしめんとする者。しかし、董卓もそれに気づかぬはずなく、それに乗るおつもり。それは必要な情報はすでに董卓の元にあるということでしょう。もはや全ては董卓の掌の上。この絵図を書いたは音に聞く軍師賈文和。謀略に長けたこの者ならば洛陽を手中に入れる事も夢では……。？たわわつ、私何か粗相をしまちたか？たわつ」

流悟と蘭々の面食らった顔に気付き、途端に慌て出す天里。流悟と蘭々互いに目を交わし困った顔をして笑う。

「まったく、天里は真面目だな。周りの動きが気になって仕方ないのかもしれないが、もう少し自分に気を払ってみる。……お茶が冷めているぞ」

たわわつ、と慌てて茶を飲む。気が急つて気管に茶が入りむせてしまふ。その姿に苦笑しながら蘭々が後ろに回り背中を撫ぜる。

「こんなに足元が見えていないんじゃないじゃ軍師は任せられませんね」

その言葉に返す言葉もないのか、帽子を首まですぽつとかぶり顔を隠す。それでも、あうあう、という言葉が籠って聞こえて容易に赤くなつた顔が想像できた。

流悟はその微笑ましい二人の姿に思わず頬が緩む。そして、窓へ向かい空を見上げ思う。

この空の下に洛陽がある。董卓がいる。この乱世の中で自身を高みに向かい飛翔させんと。願わくば共に天まで登れるよう、高潔な強き者であることを、そう願った。

緩やかに進む大軍がそこにあった。その先頭に立つ幼女二人。一人

は不安気に、一人は勇まし気に進軍していた。

「詠ちゃん。ホントに大丈夫かな、こんなに軍を率いて…」

「月、情けない声出すんじゃないの！安心しなさい！この賈文和に不可能は無いの！洛陽の情報も入ってるし劉弁様劉協様が”英雄”を待つてることも掴んでる！いい、月。貴方が英雄になるの、私たちが英雄にするの！だから大船に乗った気でいなさい！」

「…私は詠ちゃんや皆と一緒にいられるなら……」

月と呼ばれた薄い紫色の髪をしたどこか儂気で高貴さを感じられる子、姓名は董卓、字は仲穎の言葉は無視され、詠と呼ばれた緑の髪をした眼鏡の強気な子、姓名は賈馱、字は文和は燃えていた。

「いや、賈馱っちゃんも気満々だな」

「霞さん…」

霞と呼ばれた姓名は張遼、字は文遠はけたけたと笑みを浮かべながら、そのわがままな身体をサラシで隠す程度の格好を誇るようになってながら月に並んだ。

「安心しいや、月。ウチだっておるし”飛將軍”呂奉先だっておるんや。華雄だつてや。まあ、あいつは謀略なんてまどろっこしくて嫌いなのか不貞腐れて後ろの方に引っ込んでるがいざとなれば月を守る為に突っ込んでくるわ。まるで猪みたいにつ！」

ニシツと月に笑いかける。その笑顔に月は少し気持ち晴れる思いがして釣られるように笑った。

「ふふつ、ありがとうございます霞さん。肩の荷が下りました。もうここまで来てしまったのです。私も覚悟を決めましょう。これは

殿下を救う大義ある行い。迷わずまっすぐ進みます。華雄さんのように」

チラッと月は霞の顔を伺いいたずらが成功した童女のように微笑んだ。霞の顔が面食らっていたからだ。

「くっ、はははっ！月も成長したってことや！よっしゃ！ウチもしつかり付いてったる！たとえ何があってもこの大陸の果てまで、なんやったら羅馬まで一緒や！約束やからな！」

これ以上ないくらい霞は笑い月に誓った。月も力強く頷き、目前となった洛陽を見た。

魑魅魍魎の都、洛陽。敵は強大、変幻、なれど私たちには頼れる味方がいる。こんなに弱い私を助けてくれる心強い味方が。詠ちゃんが舞台を整え、霞さんが後ろを支えてくれる。華雄さんと恋さん、それにねねちゃんが前を切り拓いてくれる。こんなにも仲間がいて負けるはずない。私はなんて幸せ者だ。私はもう…、もう何も怖くない。

董卓が洛陽入りして数日の間に何進は張讓に殺され、張讓は華雄に討たれた。魑魅魍魎跋扈し都は僅かばかりであれどその姿を変えようとしていた。

第七話 えっけん！（前書き）

いろいろ悩んでいるのであるべく今後に影響を残さないようにと書いてたら山なしの駄文に。

110616

全削除した上で修正。影響でないように書いてたつもりがこの有様馬鹿である。張遼が別キャラになったので日常パートを入れて、らしさをだしたつもり。関西弁で敬語ってどうすんの？

第七話 えっけん！

荊州襄陽。そこへ向かう三人の将、張遼、呂布、陳宮。彼らは洛陽の統治が一段落したところで、賈馮に天水への援助の礼を兼ねて有力諸侯である流悟と友好関係を築くようにと言われ、やってきたのだった。

張遼が馬をかばらばらつと闊歩させながら言う。

「しっかし、すごいところやな。途中の小さな村でも本格的に武の稽古をしとるがきんちよがぎょうさんおったで」

「それより、町には必ず一つは私塾があるのがすごいのです！こんなに多く私塾があるということは、智者は荊州に集まり、門下生は多く存在しているということなのです！この門下生が成長すれば文官は磐石なのですぞ！」

「……」はんがつまい

武を褒めた張遼に被せるようにして持論を言う姓を陳、名を宮、字を公台。横でまぐまぐと点心を大量に食らうは姓は呂、名は布、字を奉先。みるものを昇天させる表情で食らっている。

「ほれっ、馬鹿な事喚いておったら見えてきたで。荊州太守劉表の住む都、襄陽や」

「でっかい都なのです。こんなの禁止なのです。天水が見窄らしく思えてしまいますのです」

陳宮が凹むように言う。その様子を見て呂布が慰めるように言う。

「……関係ない。襄陽には襄陽の、天水には天水のいいところがある。それぞれ違ってみないい」

「ほええ、恋は恥ずかしいことを言うのう。それこそ禁止にしたほうがええで〜」

「恋殿を馬鹿にするなです！」

陳宮が馬に立って放つ飛び蹴りを張遼は軽く躲し、飛龍偃月刀で陳宮の襟を引つ掛け高く上げる。

「うわわっ、このバカ霞！降ろすのです〜!!」

張遼は無視し呂布に話しかける。

「なあ、恋。劉表との謁見の話をしたいんやけど……」

「……霞にまかせる」

それきり黙ってしまう呂布に、やっぱりか、といったふうにしてため息を吐く張遼。

「……そういうと思ったがな〜。ウチかて苦手なんやがな〜」

そう言って頭をガシガシと搔く。その振動に飛龍偃月刀の先の陳宮がぶらぶらと揺れ、たまらず抗議する。

「やめるのです〜！ゆ、揺れるのです〜…。うづつ！」

もう目前となつた襄陽。謁見にさいして不安材料だらけの三人であつた。

「劉表様、洛陽よりの使者が謁見を求めています。数は三人。名は張遼、呂布、陳宮であります」

執務室にいた流悟に伝令がそれを伝えると、流悟は悪どく笑つ。

「まったく、ようやくか。天水の奴らがそのまま着服して董卓に報告していないのかと思つたが杞憂で本当によかつた」

流悟の言葉に蘭々思わず吹き出した。

「ホントそうですよ。以前言つた冗談が真になるかと思ひましたね。しかし、あれだけの食料に金銀財宝をただ儲け儲けと思う人間がいたとしたら頭が空っぽか我らじゃ太刀打ちできない存在ですよね」

「その通りだな。だが、とりあえずはこれで一安心だ。次はこの損害を回収できるかだ。なんとしてでもこの謁見を通して董卓に、できることなら殿下に会うぞ」

蘭々は、はいつ、と言ってそれきり会話を打ち切る。もう謁見の間だ。一段上がった場所に流悟の席があり、そこに座る。蘭々はその少し後ろで立つ。

「よく来てくれたな、張遼、呂布、陳宮。三人も来てくれたことで貴様らが敬意と謝意を表していることがよくわかるぞ。董卓とは良い関係が築けそうで俺も満足している」

流悟の言葉に答える張遼。

「はっ、我ら三人がこうして劉表様のもとに訪れたのは天水への援助に大変感謝していると直接申し上げたかっただけであります。そして、我らが主、董卓様も劉表様と良い関係を築きたいとおっしゃておりました」

流悟はもうこの言葉で十分であった。董卓は我らとの繋がりをお求めている。それが明らかになったのだから。

「天水、というよりも涼州全体であります、あの地は作物が育ちにくく、飢えが蔓延しているのです。その結果、民を徐々に居なくなってしまう税も思うように入ってこない状況でありまして、劉表様の援助はまさに天の恵み。重ねて御礼申し上げます」

「いやいや、構わぬことよ。飢えは万人の敵。飢えに苦しむ民を救うのは、この大陸に住む者として当然のことよ。幸いにも私には他に与えられる食料と金と立場があった。それをなしただけのこと。

……それより、この街はいかがかな？私の自慢なのだ」

堅苦しく繰り返しになる御礼の言葉を避けるように話題を移す。

「はっ、この街の民は精強で清廉、生きるという目的の他になにか一つ野心のようなものを抱いているという感想をもちました。我が涼州ではこのような民など見たこともありません。さすがは荊州の王、威光はしつかりと届いているということかと」

「なるほど。なに、荊州は土地が豊かであったからであろう。食の確保と、賊に襲われることのない安全の確保、この二つが満たされたからこそ生きる以外の事ができる。もっとも、自慢なのはそこで満足する者とそれ以上を渴望する者のうち、後者が多いことなのだがな。」

本当に嬉しそうに言う流悟。

「土地が豊かであることは本当に感じます。ここに来るまでこの呂布が飯店の出す匂いに何度誘われたか、数えることもできません。この者の鼻は確かです。本当に良い作物がなるのでしょ」

「うむ。絶品であろう。土地のおかげもあるが民の努力の賜物よ！惜しむらくは海がないことよ。川はあってもそれで満たされるものでないからな。新鮮な海産物を食ってみたいものよ」

「涼州から来た者としては馬乳酒を見ないのが不思議です。荊州では一般的ではないのでしょうか？」

「うむ。そもそも荊州は馬がいなくてな。他所からひよろひよるの馬や老馬を飼っている者を見るがあまり、うまくいってないようだな。軍馬は金に物を言わせて買ってはいるがそんな状態じゃとても騎馬としては機能しないな。どうしたら良いかね？」

困ったような顔をする流悟。内心では、ここまで言えばわかるであろう？、と足元をみている。もちろんそれに張遼は気づいてその上で言った。

「おおつ、それならば我らにお任せを。天水に援助していただいたこの恩、馬で返させていただきたい。涼州の精悍な馬五千と飼料、調練の出来る者、世話の出来る者を用意しましょう。」

おおつ、という周りの文官の驚く声が響く。騎馬の調達が急務な状況に助け舟が来たのだから。

「ほおつ、それは重畳。しかし、今まで馬がいなかった状況、五千もの馬が入る厩舎がないな。まあその件も含めて今後荊州と涼州、ともに話しあおう。……しかし、そうまでして我らに報いてくれるとは董卓とはさぞや高潔な人物なのであるう。どうであるうか張遼。一度董卓に会わせてはもらえんか？洛陽の様子も気になっておったしな。」

ようやく本題に入れる。大分遠回りをしたが十分な利を確保できたと流悟は判断した。それは張遼も同じであった。慣れない敬語に腹の探り合い、いつため息が出るのかわからないくらいであった。

「それは是非。本来であれば董卓様が訪れなければいけないところを逆になってしまったことが、なんとも心苦しいことですが……」

「いやいや、貴様ら状況はよく分かっているつもりだ。陛下のお膝元を留守にするわけにもいかんだろう。気にすることはない。……よし！謁見はこれにて終いよ！宴の準備ができておる！我が荊州の自慢の料理の数々、たんと味わってくれよ！」

目的はひとまず達し、謁見を終わらせる流悟。流悟としては董卓の謁見、馬を一時的とはいえ調達できる。今後恒久的に馬を調達できるかは文官共の仕事だ。張遼としては、馬の流出はあまり好ましいことではないし、多大な出費だ。だが、天水への援助のおかげでそれをなすことができた。さらには、今後話し合いをするということ。はまた、会って関係を紡げるということ。あの大荊州を味方にするこのなんと心強いことか。今後同盟に発展することも期待できる。

その日の宴は実に盛り上がった。張遼は蘭々と飲み比べをし、呂布は底なしの胃袋と天使の食べっぷりに多くの料理人と周りの兵士が昇天した。かくいう流悟もその一人である。陳宮はといえば、天里と政治軍事談義をしていた。天里を甘く見ていたのか完膚なきまで論破され涙目になり呂布に縋りついていた。藍道は道蓮と一緒に宴には来なかった。道蓮は死人でいかに友好的な関係の者でも露見することはまずいからだ。藍道はそれに付き合ったかたちである。

宴が終わり酔いつぶれた張遼といつの間にか呂布の膝下で寝ていた陳宮を呂布が案内された部屋まで持ち帰る。

「むにゃ〜、恋〜。宴はどうやったか〜？楽しんだか〜」

寝ぼけながらも張遼が話す。それに答え、コクつと頷く呂布。張遼からはその様子を見れないのだが、構わず話す。

「そうか〜。そりゃそうやるな〜。見たことないようなもんがわんさか出てきおったからな〜。さすがは劉景升！さすがは荊州！つつ

うことやな」

呂布は何が言いたいのかわからないといった様子である。張遼もただ、つぶやいていただけなのであろう。

「……劉表も腹は黒いけどええ人そうやったし、洛陽の月や賈馮つちもちつとは喜んでくれるかの」

「……きつと喜ぶ。霞はよくやった。恋じゃできない」

呂布が張遼を褒める。普段呂布の言葉が少ない分、張遼は余計に心がこもっているのを感じた。

「……そうだったらええなあ！よし！明日にはここを出るんや！さつさと寝るで！今日はみんなひとつの布団や！」

張遼がぱつと布団に押し倒し、狭い布団で三人で寝る。張遼が押し倒したそばから寝始め、陳宮は息苦しそうに、呂布はその姿を見たあと自身も静かに目を閉じた。

洛陽では董卓と賈馮が三人の分まで政務をしている。ただでさえ大変な洛陽の復旧と宦官共の粛清。いくら人がいても足りない。早くここを出れるように三人は眠りについたのだった。

襄陽の門の前。馬の手綱を持った三人と流悟、蘭々、天里、藍道と

流悟の親衛隊がそこにいた。

「劉表様、わざわざここまでお越しくださるとは、光栄でございます」

張遼が頭をさげる。

「いや、もはや我らは友よ。友の出立を見届けぬなど劉の名折れ。……また襄陽に来てくれよ。今度は馬乳酒を持って」

ニヤリと笑って言う流悟。思わず笑う張遼。

「ハハツ！いやはや劉表様は抜け目ない！次は必ず……いえ、出来ることならば涼州にお越しく下さい。ぜひとも我らが城を見ていただきたい。その時には盛大な宴を開きましょう」

「ああ、約束しよう。いつになるか分からんが必ずまた相見えよう」
一度視線を合わせ、ふっと笑う。

「さて、友の出立だ！貴様ら盛大に見送れえい！」

そういうと街中から歓声が響いた。どこからか爆竹の音もする。祭りでも始まったのかと思うほどであったが、それが三人の見送りのためであるとわかると自然と胸が熱くなった。流悟を見てみるといたずらが成功したような顔をしている。周りは呆れた顔だ。

名残惜しいが出立である。これ以上語るべきことはなく、また、必要ない。それほど心を通わせていた。
馬に乗り別れの言葉だけを言う。

「それでは、皆様！おさらばです！」

それだけ言って去っていく。目指すは洛陽。三人は董卓と賈馱に良い報告ができると、顔を緩ませて向かったのだった。

第八話 えっけん！！（前書き）

110612：言葉使い修正。それにともなって少し加筆

第八話 えっけん！！

洛陽の城の隣、以前まで宦官が住んでいた屋敷に目当ての人物はいる。

「よく来てくれましたね。私が姓は董、名は卓、字は仲穎です」

「ボクは姓は賈、名は馭、字は文和と申します。董卓様の腹心であり軍師しております。」

流悟は洛陽に来ていた。流悟は洛陽に入ったとき、驚いていた。以前見た洛陽の様子とまるで一変していたからだ。以前は街全てが貧民街と言っても過言ではなかった。民の目は昏く沈み空気は淀んでいた。右の路地をみれば男が女に群がりその身体を喰らっている。左の路地をみれば性別も年齢も分からぬような者が残飯漁っていた。

流悟はこれを見て思ったものだ。自分の街はこうはならん。このような死都にはしないと。

それが今や董卓の統治により想像もできないほどだ。街に活気ある声が溢れ人の通りも活発だ。路地にいるのは精々ネズミが数匹闊歩しているだけ。それを見て流悟は董卓の手腕は確かであると確信に至った。

「謁見に応じていただき感謝する。私が荊州太守劉表だ。今日は洛陽に来て驚いたよ。俺が以前来たときは民が皆腐ったような目をしていた。それが今や見違えるようだ。この様子ではさぞ皇帝陛下劉弁様もお喜びであろう。洛陽の英雄董卓！いやはや、もしかすると三公や大將軍、相国すら夢ではないのではないかな？」

流悟はできるだけ友好的に、そう言った。そう言ったのだが、なにやら様子がおかしい。董卓は悲し気に、賈馱は苛立たし気に。

「劉表様、謁見に応じるなど当然のことです。むしろこちらから感謝させていただきませう。天水の者から話は聞いています、援助してくれたと。私たちが出て行って不安に思っていたであろう民が喜んでいたと。手を差し伸べてくれる人はいるのだと。本当にありがとうございます。それと、劉表様。私共が相国などとてもとても。そのような恐れ多い官位など私などでは務まりません。……私たちは未だ一地方領主に過ぎないので」

そういう董卓に流悟は動揺する。一地方領主。つまり、洛陽の英雄董卓が未だに褒賞をいただいていない。宦官という寄生虫のいなくなった今、皇帝の権力は絶大である。ならば自身が寵愛する董卓を冷遇するなどという矛盾が起きようはずはない。しかし、現実はどう。一体なぜだ。

流悟は思考する。

劉弁は未だに皇帝を固辞し褒賞を与える者がいないのか？ いや、違う。固辞していたのは宦官に殺される危険性があったからだ。宦官のいなくなった今、その心配はない。ならば、与えるつもりがないのか？ いや、違う。宦官が皇帝を傀儡にしていたのは周知の事実。その宦官がやった何進大將軍殺害の罪を裁き皇帝復権に導いたのは褒賞に値する。ならば、与えることができない状況にあるのか？

そこまで考えて思い至る。考えうる最悪の状況。まさかと思いがながら質問する。

「…劉弁様は壮健だろうか」

外れてくれと願いながら、しかし、それを裏切った。

「……亡くなりました」

流悟は肌が粟立つのを感じた。

「劉表様には申し訳なく思っております。このようなときにボクたちを援助してくれたなんて。もうボクたちの計画は看破されておりますでしょうから、ひとつの隠し事なくお話させていただきました。……まさかボクたちもこのような形で計画が頓挫するに飽き足らず、死ぬことになるであろうとは思っても見ませんでした」

賈馱が自嘲するように語る。

「一体どこの誰が信じるのでしょうか。劉弁様は『病死』し、ポツと湧いた地方領主が信任を受け、代わりに政務を為しているなどと。私自身ですら信じることなんてできない」

もう賈馱には遠くない未来が見えているのであろう。董卓は幼き皇帝劉協を傀儡にし、暴虐の限りを尽くしている。董卓討つべし。つまりは、反董卓連合。

なんとか打開策を探すべく流悟は質問する。

「劉協様は今何を…？」

「劉協様は姉の死を悼んで部屋で泣いております。それに劉協様は幼い、あの方がなにをしようと董卓がやらせているだけにしか見えないかと。それに…劉協様は張讓に懐いていたのです。張讓を殺

したボクたちを、更には劉弁様を間接的に殺したと言えるボクたちを恨んでさえいるでしょう」

もう聞きたくないとすら思える状況に流悟はなんとか光明を見出そうとしていた。たとえ、どんなことをしてでも荊州は守らねば…。

「間接的に殺したとは…？」

「…ボクが考えている以上に劉弁様の心身は弱っていました。劉弁様は殺されるかどうかの瀬戸際で何進が死に後盾を失った。そんな中、どこぞの軍まで進駐してくる。そんなギリギリの状況に耐えられなかったのです。血を吐いて心の臓の動きを止めてしまった。」

「…もう少し耐えてくれれば。…とんだ愚帝だったかと」

「詠ちゃん！」

あまりの暴言にたまらず声をかける董卓。ハツとして申し訳なさそうな顔をする賈馱。

「…申し訳ございません。出来うることならば、聞かなかったことにして頂きたくあります。」

「…別に構わんよ」

そう言いたくなる気持ちもわかる。

「このこと民には…？」

「知らせておりません。この報が知られたら、あつという間に大陸に広まってボクたちは終わりです」

流悟は、「ボクたち」の中に俺を入れなくてもいい、と考えていた。洛陽に来た当初は有能で荊州に必要な人材、いずれ仲間に入れて見せようと考えていたが、こうなった以上、惜しいことである

が切り捨てる事も吝かではないと、ある種、冷酷な考えをしていた。といつても、賈馱がここまで話すといふことは流悟を逃がすつもりがないといふことであるうことも薄々理解していた。

「もつとも、未だに寄生虫は隠れていることでしょう。民には分かつても、遅かれ早かれ地方の太守、有力者には露見するかと」

だから、その前に対応しなければ…。

「劉協様に会わせる。」

その言葉に怪訝そうな顔をする賈馱。

「なぜか聞いても？もう劉協様が何言つても無駄であるかと…」

「そのまえにその気色の悪い口調をやめろ。こうなつてしまった以上、我らはもはや一蓮托生。真名を交換し、事に当たるべきだ」

流悟はそう言つて二人の目を見る。なんとしてもこの窮地から脱する。自身の目にその覚悟を込めることと、董卓と賈馱が覚悟を決めることができるよう出来る限る力強く目を見た。その目に応えるように賈馱は「っコホンと咳を払うと言つた。」

「姓は賈、名は馱、字は文和、真名を詠。ボクはあなたを信頼し、ともに歩むことを誓うわ」

「詠ちゃん…。わかりました。姓は董、名は卓、字は仲穎、真名を月。あなたを一太守として対等であり、互いを敬い、道を違えればそれを正し、永久にともに歩むことを誓います」

「確かに受け取った。俺は姓を劉、名を表、字を景升、真名を流悟という。ともに困難に当たり、ともに乗り越えることを誓おう」

三人はそう言っつて、流悟に真名を授けた。

太守同士の真名の交換。いかなる同盟や血の絆より重いつながりである。

「では改めて。劉協様に会っつてどうする気？今更あのお方が何を行っつても無駄よ」

「そっついうことじゃないさ。…おそらくもつ月へのよからぬ噂は流れていっつと考えるべきだ。であれば、もう止まらん。ならば、やる事は限られていっつる。連合の掌握と終端の指定だ」

「…どういっつ事よ」

「…詠よ、この絶望的な状況に頭が煮えていっつるのか、月への罪悪感で考える事をやめていっつるのか、どちらにせよ、そろそろ冷静になれ。…月の前で話せる事ではなかるう」

顔を近づけ、月に聞こえぬよう小声で会話しようとする。が、それを月が顔をぐっつと近づけ意地でも聞こうとする。

「私だっつて覚悟を決めたんです。洛陽に入る前にも決めましたけど…。今度こそ絶対この覚悟を違えないんです。…仲間はずれは駄目です」

流悟と詠は真名を授けたときの月の目を思い出し、大丈夫だというように頷き、三人で話す。

「へう……。だ、大丈夫なんですか、それ」

「…貴方、それ大変な罪よ。もう最悪の部類の」

「俺にはこれしか思い浮かばん。それより、どうだ？出来るのか、謀略の徒賣文和よ。」

「…出来る。やってみせる。もうボクたちが生き残る術はそれしかない」

詠の目が灯った。

戦いの火蓋は落とされ、それは目前である。そこで利を得るはどこの誰か。それは天すら知り得ない。

第八話 えっけん！！（後書き）

今後の展開、頭には浮かんでるが忘れないだろうか。なぜだろう。メモを取る気がしない。

第九話 れんごう！（前書き）

地の文で真名なのは、劉表が真名を預けられたか否かで違っていません。

天里の格好はシルクハットと燕尾服のマジシャンスタイルを想像しています。首までかぶるときは虚無僧状態。

虚無僧の幼女：ゴクリ

第九話 れんじゅう！

流悟は袁紹より送られた檄文に従い、兵三万を連れて集合地点へと向かっていった。董卓討つべし。そう書かれた檄文は多くの諸侯の下に送られ、それは流悟も例外ではなかった。

目的地に着いてみると、もう多くの諸侯が到着しているのがわかった。諸侯の存在を示す旗が多く立っている。ざっと見てみると、袁の旗二つ、その一つに添うように孫の旗。曹、公孫、馬。有力な諸侯は揃っているようである。流悟は遅れてしまったかと思いながら、近くに立っていた兵に聞く。

「荊州太守の劉表だ。連合に参加するために来たのだが、どこに天幕を立てればいい」

その兵が指示する場所を確認するとそこに向かって歩き出す。天幕の作成は兵に任せ流悟は会話する。

「さて、これから連合による戦が始まるわけだが……お蘭はなぜそこにいる。文官だろうに」

実は出立前にもこのやりとりをしたのだが、またしている。つまり、おふざけである。

「だって言ったじゃないですか。死ぬときは一緒だって。あの言葉は嘘だったんですね、酷いです、ヨヨヨ」

「いや、この場だとお前が死にそうなんだが……。それに死ぬことは許さんと言った気がするんだが……。都合のいいように捏造しないでくれ」

その言葉に泣き真似をやめて抗弁する。

「いいじゃないですか、私だって武を修めてるんですよ。いざとなつたら兵の一人や二人！」

そう言つて、やあ！とう！、と勇ましく声を出し、手を出し足を出し。ただ残念なことにその体つきのせいで子供のお遊戯にしか見えない。しばらくそうしたあと、呼吸を整えて言う。

「それにここであつて文官としての仕事はできません。地形の把握だつて諸侯の軍事力の分析だつて、糧食の管理だつて文官の仕事なんですから！」

拳をぐつと掲げながら自信満々に言う。その言葉に流悟は、こいつはどこにだつて着いてくる気だなとため息をつきながら笑う。

そうこうしているうちに軍議が開かれるという伝令の声を聞き、流悟と蘭々と天里はその伝令の後ろを着いて行く。そんなときである。なにやらこそこそと話し声が聞こえる。耳を澄まして聞いてみる。

「おい、あれが荊州の……」「荊州太守劉表、高潔な民を慈しみそれを育てる者だとか……」「王国の主……」「王の中の王、劉表……」「獅子王劉表……」

どうやら流悟のことが噂になっているようだ。特に否定的な噂でもない。中々気分のいい流悟であつたが、次の言葉で一変する。

「見かけと趣味は違いますなあ」「曰く、露出調教師劉表」「曰く、緊縛放置愛好家劉表だとか、おお、怖い怖い」

いわれなき噂である。なぜこんな噂が…そんなしたことないのに…。だがすでに犯人はわかっていた。こんな噂を流し、俺に復讐する存在。その犯人にどさつと肩を組み、一言。

「お前か？」

「なっ、なななんのことが、わかかりかねますです、はい」

蘭々がもはや自白するように否定する。

「お前以外にいるか、このバカが！なんて噂流しやがる！うちの領土内ならまだしも他所まで広まってんじゃねーか！」

「私じゃないって言ってるじゃないですか！幽波紋の蔡瑁は分かりませーん！」

「それだそれ！その二つ名恨んでんだろ！それ俺が流したわけじゃねーから！」

ポコポコ蘭々の頭を叩きながら言う流悟。蘭々は頭を守りつつ足で反撃するが軽くかわされ、ムキーツとなっている。にもかかわらずその姿はどこか嬉しそうである。その姿を見て噂話をしていたものは思うのだ。

「劉表の傍に添うは、被虐趣味蔡瑁」と

ギヤーギヤーと喚き伝令を困惑させながらも軍議をする天幕に着くとようやく騒ぎも落ち着き、厳かな雰囲気を取り戻す。この先は英傑が集う魔窟。一筋縄ではいかず、気を抜けば喰われる。荊州を守るため、董卓軍を手に入れるため、流悟は天幕の中へ進んだ。

もうすでに席は埋まっている。さつさと自己紹介をして周りの諸侯を観察する。

まず目を引くは金髪の呆れた髪型の袁紹だ。何が面白いのか高笑いをして周りの諸侯のこめかみをヒクつかせている。後ろにはおかしそうに笑う文醜と、くたびれたような顔良。

その隣は袁術。蜂蜜をすすする愛らしき幼女。後ろにはお守り張勳。張勳の隣は孫策。見るものを震え上がらせる恐ろしい顔で流悟を見ている。それもそのはずである。孫策の母孫堅を討った（と誤解している）のだから。といつても流悟としては心外である。そもそも死んでなどいないし、戦場では総大将といえど死は付き物である。そのありふれたものに恨みを抱くなど、そのようなことをしているより自身の情弱さを呪えと思っているからだ。そんな風に思っている流悟だ、当然孫策に好感情など抱くはずもない。いくらこちらに孫堅がいようとこちらに牙を剥くなら容赦などしない。もちろん、出来ることならば孫堅と孫策がまた仲良くしている姿を見て見たいものであるとも考えていた。

恐るべき覇気で他を威圧するは曹孟徳。鬪體を従え佇む姿はまさに威風堂々である。曹操は天幕に入ってきた流悟をみて舌舐めずりし
て考える。

（あれが荊州の劉表……。誇り高き民を統べる、通称獅子王劉表。又の名を露出調教師劉表……。露出調教……）

「桂花、夜になったら私の天幕に来なさい」

桂花と呼ばれた猫耳軍師は最初は急に何を言い出すのかと思ったが、何事か思い至り蕩けた顔をしてコクコクと頷く。

袁紹の隣には公孫？。特に特筆することもないが、流悟にとっては幽州の駿馬は魅力的である。しかし、荊州との距離と袁紹曹操などの諸侯が邪魔であるのですでに諦めている。いずれ袁紹に滅ぼされるであろう、哀れである。

その隣は流悟は知らぬ者。涼州の雄と言われた馬騰の娘、馬超である。太い眉に馬の尻尾のような髪型。つまらなそうにブスツとしている。

その隣も知らぬ者。桃色の髪によく発育したその体。とても戦場に出そうにないその者は劉備。何が楽しいのかニコニコしているが、後ろの黒髪美人関羽は真面目そうに立ち、ちびっ子孔明は諸侯を見定めるように観察している。

目の引く諸侯はその程度であとは有象無象といったところか、そう流悟が考えたとき、袁紹が話しかけて来た。

「あら、劉表様？いつだったか糧食を融通して差し上げたかと思うのですが、その御返事はまだですか？」

当然くると思っていた質問だったので慌てることなく答える。

「ああっ、黄巾の賊のときのことが。もちろん忘れていないぞ。ただ、かの名門、袁家にふさわしい高貴なる贈り物を選ぶのに時間がかかってしまったな。ようやく金の馬車の作成に取り掛かったところなんだ。もうしばらく待っていたただけるかな？」

嘘八百である。金の馬車などという狂ったものは作ってもいないし、そもそも流悟は踏み倒す気である。黄巾の賊狩りのときみた曹操の

姿を知っていればいずれ袁紹など踏み潰される愚物だと確信していた。

「…金の馬車……。分かりましたわ！楽しみにしておりますわね！おーっほっほっほーっ！」

諸侯が馬鹿を見る目でいるのをまるで気にせず高笑いである。それに調子をよくしたのか続けて話す。

「さて、皆さん！今更言うまでもないことでしょうけれど、この私が反董卓連合の檄文を発した袁・本・初ですわっ！」

後ろで文醜が、よっ、麗羽さまー、と声を出し、顔良は音の出るものでパフパフっつとしている。当然、盛り上がるわけもないのだが。

「先ほどまでにいろいろ決まったわけですが、まだ決まってないことがありますわ！わかりますか、華琳さん！」

「わからないわ」

いや、いろいろ決まったこととはなんだ、と憤る流悟だったが横にいた名も忘れた諸侯に聞いたところ、行軍の順番や誰が偵察を出すかといった小事だったので溜飲を下げた。

「それは華琳さんではわからないでしょうね！なら、教えて差し上げます！この連合を率いる総大将ですわ！」

「あなたでいいじゃない。檄文だした張本人なんだから責任持ちなさいよ」

「うぐっ」

何がうぐっなのか。当然の帰結である。その呻き声に公孫？がまともめる。

「はい決まったな。総大将は袁紹！みんなも問題ないな？」

唯一文句がありそうなのが袁紹本人である。

「もう少し私を、こっつ、褒め称えるように…」

「何もないうなら私は自分の天幕へ帰らせてもらっわ」

袁紹の言葉を無視し、続々と諸侯が出て行く。その後ろ姿を恨めしげに眺める袁紹であったが、とりあえず自分が総大将になれたことに満足し高笑いした。

流悟も自分の天幕へ帰り、しばらく蘭々と天里と、袁紹は馬鹿だったなあと談笑していたのだが、ふと思いつく。天里を水鏡女学院の姉弟子に会わせてやろうと。

天里を連れ劉備の陣へ向かってみると、なにやら騒がしい。流悟は何事かと思いきよく見てみると曹操と関羽が言い争っている。面倒事は御免だと思いき、踵を返し機を改めようとする、そいつはそこにいた。

「はあ〜い、会いたかったわよ、孫呉の仇」

褐色桃髪の狂虎、孫伯符。

「ずいぶんと不敬だな。猿の子飼いがなにをのたまう」

「なにも言わないわよ、仇を見て私がどうなるかを知っておきたかったの。よかったわ。しつかり殺したくなってる」

何がよかったか。瞳は収縮し殺気は垂れ流し荒い息を吐き、見る者が見れば医者に強制送還だ。

「雪蓮！」

孫策の後ろから周瑜が走ってくる。

「何をしている！ここは劉備の陣だぞ！」

「あら、知らなかったわ。ごめん冥琳。もう帰るわよ…用は済んだから」

背を向け横目で流悟をみるが、先程の狂気は消えすっかりいつも通りといったところか。その背に言う。

「孫策よ、牙を剥くのは勝手だがその相手が違っんじゃないかね？ 貴様らはまだ敵にもならないよ」

「まだ…ね。安心しなさい。猿なら綺麗に食い尽くしてやるわよ。それまで待つてなさい。あなたの頭蓋で酒を飲み母様の供養にしてやるわ」

そう言っつて孫策は去って行った。流悟はふうとため息をつき思う。厄介な奴に睨まれたものだ。遠くに見える自陣にいる能天気な藍道の姿をみると憎たらしく思える。まあ、もう済んだことだと思いき直し、妙に静かな天里をみると、バツタリと倒れている。孫策の殺気に負けたか、本当にこいつが軍師で大丈夫かと心配し、また思う。

今日は姉弟子に会うのはお預けだと。

次の日である。

「あわわっ、朱里ちゃん。私たちのこと、姉様だって、どどどっし
ようっ」

「はわわっ、雛里ちゃん。どうしようもこうしようもないよ。姉
様なんて呼ばれるの初めてだよ」

「…姉様」

「あわわっ!」「はわわっ!」

愛らしき幼女が三人。内二人が天里の『姉様』発言に妙な口癖を発
して動揺する。その姿をみると、この二人があの水鏡女学院の門下
生だとは、それも水鏡から『伏龍』『鳳雛』などと称えられたとは
とても思えない。天里よ、姉弟子で遊ぶな、と流悟は思う。

「あのー、今日は劉表様は何をしにおいでで…」

流悟に話しかけるは劉備玄德。流悟はこの劉備が他の者とは違う何
かがあると感じ、見定める為にも訪れていた。

「なに、俺はただ天里を姉弟子に会わせてやりたいと思ったから来
ただけでな。何か用事があるわけじゃない」

これも本当である。劉備がいかなる人物であろうとも今はただの根
無し草の義勇軍。なにか同盟を結ぶとか仲間になるとかそういう以
前の問題である。

「中山靖王の末裔なんですけど…怒られないんですか？」

「ほう、だから劉の姓か。別に構わんよ、大事なことは名より実。その名にそぐわぬ力量であるならば、それは滅びへの道。貴様はそうではないから優秀な仲間が集うのであろう？」

心底安心したようにため息をつく劉備。流悟としては当たり前だ。もとより荊州のことしか頭にない人間である。劉備が中山靖王の末裔であろうと天子を名乗ろうとこちらを邪魔しなければ勝手にすればいいと思っている。

「あと一つ、お聞きしたいことがあるのですが、よろしいですか？」

先程までの情けない顔を一变させ真面目な顔で流悟をみる劉備。流悟は先を促し問いを待つ。

「実は私たちの中にも荊州の人間がいるんです。その人たちは荊州で生活できなくなったから私たちに加わったんです。なぜだかわかりますか？」

「荊州では民に武の習得の奨励、一定以上の裕福な家庭には私塾での学問習得を義務付けている。それができぬものには出て行ってもらう他ない。だが、できぬものに対しても我らは他の州に仕事と住所を斡旋している。それを待てぬ者が何処かに放浪し、運がよければ誰かに拾われるのだろう」

劉備がその言葉に怒りをこらえるように拳を強く握るも、なんとか冷静に話す。

「それがわかっていながら…。…そうです。私たちに加わった人たちも斡旋してもらおうとしてたんです。でも、いつまで経っても斡

旋の順番がこない。そんな状態で村にいとと言われるんですって。

『劉表様への恩を忘れたのか』って。だから…』

そう言っつて俯く劉備。なるほどとも思える流悟。今まで斡旋が決まったにもかかわらず民がいなくなっているのはそう言う理由かと納得する。村人の目などという視点で政策をするなど考えたこともなかった。だが、

「だが、荊州にそのような弱い民は必要ない。」

流悟は切り捨てた。劉備は絶句し流悟の顔をキッと睨むもひるむ様子もないその顔を見てぼつりと呟くように語る。

「私、貴方がもつとすごい人だと思っていました。でも、やっぱり、それは違うと思います…」

「…私はそういう弱い民が蔑ろにされるような…そんな国じゃ駄目だと思っただから義勇軍を作っただんです。みんなが笑顔で、みんな幸せになれるような国にしようと思っただから作っただんです」

劉備は残念そうに自身の夢を語った。もしかしたら劉備は流悟と協力できると思っただのかもしれない。勇名轟く流悟に強き民。加えて同じ劉の姓に親近感を覚えたのかもしれない。もし流悟がこれから弱き民を保護すると言ってくれば、きっとそうだったであろう。だが、そうならなかった。

ふうと一息付き周りをみると公孫？と知らない青髪白服の女がいた。話を聞かれてしまったかなと思っただが、別段秘密の話でもないしいかと思ひ直す。

「天里、そろそろ帰るぞ」

孔明、士元と真名を交わしそれぞれの帽子を交換したりして遊んでいた天里に声をかける。たわわつと慌てて帰陣の準備をし、姉弟子たちに別れの言葉をかける。

「たわわつ、朱里姉様、雛里姉様！今日は楽しかったです！さよならです！」

「ううっ、天里ちゃん」

流悟も劉備に別れの言葉をかける…前に

「…貴様に拾われた民はいまどうしてる」

民であった者のことを聞いた。

「…兵になれない人は文字を教えて文官に、女性や子供は幽州にいます。みんな、幸せそうですよ。いつか立派になって劉表様のもとにつて」

「…そうか」

薄く笑ってその場をあとにし、やかましい陣を抜け整然とした自陣に入る。もう飯の時間だ、炊事の煙が立ち昇っているのが見える。

「なあ、天里？俺は弱い民を見捨てているかな？」

天里はくふつと口元を隠して笑いながら言う。

「そんなことないです。荊州の民は生きるのに一生懸命で、流悟様

に報いようと一生懸命で、こんなに強い民はいません。弱い民がないのにどうして見捨てることが出来ましょう。私は流悟様とこの民を誇りに思いましゅ」

しっかりと目をみて話す天里。たとえ最後に噛んでしまっても目を離さず流悟を見続けている。いくら噛もうともその言葉に嘘はなく自身の主張に恥ずべきものがないからだ。

「フツ、馬鹿なことを聞いたな。悪かった。この俺が俺自身を、民を疑ってなんとなるか。よく言ってくれた。もう俺は迷わん」

これより向かいは？水関。守りしは華雄と張遼。二人の内張遼は騎馬の育成に必要な人材、生かしておかなければならない。奴なら賈馱から話を聞いているだろうから無理せず引くだろうができる事なら俺とぶつかっておきたい。自然にぶつかり自然に引く。それが計画に必要なだからな。

流悟は天里の帽子を外し頭にポンと手を置いた。くしゃくしゃと撫でるとくすぐったそうに身をよじっている。そんな事をしながらこれから来る？水関での戦闘の準備をするのだった。

第九話 れんごう！（後書き）

どこで区切ろうかとぐだぐだしてたら急にこんなに長く…。

一人称と三人称と訳分からなくなった気がする。

ほとんど進んでない上、原作準拠かな？すみません。

第十話 れんじゅうー！（前書き）

文字数9125。突然長くなりすぎでしょうjk
こっという文字数が不安定なのも文才の無さとなんでしょうね。

第十話 れんじゅう！

溪谷にそびえる巨大な石造りの建造物、？水関。そこに立つ旗は張旗と華旗の二つ。その関に向かう劉と公孫の旗に集いし兵三万。その数は？水関を落とすにはあまりにも心もとない。だが、総大将袁紹の無茶な要求に弱小勢力は断る事ができなかったのだ。そうして、華麗に優雅に勇ましく前進した。

「よろしいのですか？流悟様は董卓軍を手中に置きたいのでしょうか？このままでは万万が一でも劉備か公孫？が討つ可能性がありますよ」

蘭々は流悟に問うと、流悟はさほど悩みもせず答える。

「構わないさ。普通城でも関でも落とすには攻める側は守る側の三倍の兵力を必要とする。斥候の情報では？水関には八万の兵がいるとのこと。圧倒的に寡兵なこちらが落とせるはずがない」

そう余裕綽々で答える。そう、流悟の言うとおり普通ならば落とせるわけがない。普通ならば。だからこそその普通を覆す事のできるものが苦言を呈す。

「たわわっ、しかし、華雄將軍は大層武に誇りを持っている上に直情型の人間であるとか。もしそこを突かれては大軍といえど関の意味をなさず瓦解するでしょう。……朱里姉様と雛里姉様が気づいてないわけありません」

流悟は劉表軍最高の頭脳にそう言われてしまうと途端に不安になってしまう。いや、まさか、そんな馬鹿な事を。一瞬悩んだが、その

悩んでしまったという事実が対策を講じなければならぬという証だと感じさせた。

「手を出すか。……嫌がらせにもなるし」

とある陣営の方を向きながら悪い顔をして言った。

「七乃ー、もつと蜂蜜水はないのかえ〜？蜂蜜水が切れたのじゃー！」

そう喚くは袁術公路。連合で袁紹に次いで兵と糧食を持ってきた大勢力である。その勢力に見合わず袁術自身は無能で矮小懦弱。ただの蜂蜜喰らいであった。

「もう、いけませんよ。またぼんぼん痛くなっちゃいますよ〜。こんなところで痛くなったら麗羽様に笑われちゃいますよー」

そう注意するのは張勳。袁術の副官であり補佐をする立場にあるのだが、その仕事をまともに果たさず袁術にやりたい放題させている。自身も袁術でやりたい放題しているのだが。

「うつつ、痛くなるのも笑われるのも嫌なのじゃ……。じゃが、飲みたいんじゃないー！」

「まあー、ホントお嬢様つてば駄々っ子さん ほんの少しだけですからねー。……ぼんぼん痛くなってるお嬢様も可愛いですし」

「な、七乃？今最後の方に何か不吉な言葉が聞こえたような気がする

たんじゃが……」

「気のせいですよー。ほら蜂蜜水です。ジャンジャン飲んでくださいねー」

「おおっ！うははーっ！蜂蜜水なのじゃ！……んぐっ、んぐっ……プハーッ！このとろりとした食感と甘みがたまらんのじゃー！」

「まあっ、お嬢様つてば鳥頭 どんどん飲んでぼんぼん痛くして私を楽しませようなんて、よっ、三國一の空っぽ頭！かわいいぞっ！」

「うははーっ！もつと褒めてたも！」

国の頂点が放蕩三昧である。こんな有様で袁術が統治する揚州は大増税に大規模徴兵。農民の成り手がなくなる上、税を払うこともままならない。揚州民は困窮し、国は傾いていた。もっともこの二人にそのような些事、知っているはずもないのだが。

徴兵された兵はなにか訓練をするわけでもなく必要最低限の伝令と行軍の手順だけ教えられ、あとは武器を渡され放置されるだけ。もはや兵と呼ぶにもおこがましい別のものになっていた。そのような兵が大勢ででかい顔するなど厄介者以外の何者でもないし、役に立たない。

流悟はその役立たず共を有効活用すべく袁術の陣に来ていた。

「袁術様、劉表様より謁見の申し出がきております！」

伝令からそう言われる袁術であったが、はてと首をかしげ張勳に聞いた。

「劉表……？劉表……？ん、どこかで聞いたことがあるのじゃが誰であったかの？のう七乃、知っておるか？」

さすがの鳥頭である。

「前漢の景帝第四子の魯恭王、劉余様の子孫の方ですね。それに、我が揚州の隣、荊州を収める太守様ですね。いけませんよ、お嬢様。この御方はお嬢様より格上なんですから、そんな口の聞き方じゃ殺されても文句言えませんよ。しっかり敬語を使って媚を売りまじょうね。」

「わ、妾より上か！……ぐぬぬ、そのような方がなぜ妾に……。とりあえず、はよ通すのじゃ！」

「というよりこちらから出向いたほうがよろしいのでは？というわけで伝令さん、今から向かうので場所を教えなさい。」

張勳が一本指を立てて言うのだが、その伝令は困ったような顔をして言った。

「いえ、もうすでにこちらに來られてお待ちしております。この天幕の外で。」

その言葉に袁術と張勳は動きを止め体を固めるのであった。

「……」

「……えっ？」

驚きと戸惑い、そして、恐怖の表情を顔に貼り付ける袁術と張勳。

その袁術に大股で威圧感を与えるようにして近づく。

「ああ、あつう〜」

近づく。

「……」

あと数歩近づけば、その未成熟な体躯にぶち当たるといつところで、ようやく袁術が意味を成す言葉を吐いた。

「ううううめんなさいなのじゃ〜〜!〜!〜!」

頭を下げ必死に許しを乞うた。

「……」

「……」

足を止め、しばらくの沈黙の後、流悟は口を開く。

「くっ、くくく。はははははっ!」

笑い声だ。袁術がぼかんとするなか、流悟ははばかりらず少しの間笑い続けた。そしてようやく、その笑いも収まったときに伝令に言う。

「伝令。張勳を呼んで来い。もう別に怒ってないからとな」

張勳はその伝令を聞いて、怒っている人はみんなそういふんですと愚図ったそうな。

張勳も揃い茶と席も用意されたところで流悟が話しだす。

「さて、袁術よ。貴様は先程、『ごめんなさい』といったが、それは何に対して謝ったんだ？」

袁術が怪訝な顔をしながらも答える。

「劉表様に外で待たせたことと、妾たちが失礼なことを言ったからじゃ。……言ったからであります。」

キツと睨むとすぐに訂正する。流悟はその様子を見て内心ほくそ笑む。

「そうだな。貴様が失礼なことを言ったのは貴様が無知、無学、無教養であるからだ。だが、こうして叱責され反省し謝罪できる。つまり、これから改善することができるということだ。では、私を外で待たせたこと。これはどうであろうか？これも貴様の無能さは大きな要因であるといえよう。だが……張勳。言ってみろ」

「恐れながら。…劉表様を外でお待たせしたこと、これはすべて私の怠慢が原因であります。将たる私が、軍の一兵に至るまで規律と礼節を教えてこなかったことがこのような事態を招いたかと」

うんうんと満足するように頷く流悟。

「その通りだな。貴様らの統治の噂やこの軍勢を見ていればわかることだ。なにも兵としての心構えなど教えられてきてない。なんとも不幸なことだ。貴様ら無能についてきて、ぼろ雑巾のように死ぬのだから」

暗い顔をして反省した様子を見せる袁術と張勳。そこに流悟は救いを見せるようにして本来の目的を語る。

「さて、そこで私がこの場に訪れたわけだ。私はもともと貴様らの客将孫策の無礼について説明をしてもらおうかと思ってきたのだ」

「孫策の無礼？…失礼ながらそれは一体……？」

はあ、とため息を付き呆れたような顔をする流悟。その顔にどうしても袁術と張勳がびくびくと反応する。

「聞いてもいないか。まあ仕方あるまい、俺が話そう。実は、孫策が何の許可もなく我らの陣の前でうるうる殺気立った目で徘徊し、あまつさえこの私に”殺してやる”などと言いおった。このような者、その場で切り捨ててしまおうかとも思ったのだが、まずは飼い主の袁術に話を伺おうと思っただけ。こうしてやってきたのだ」

二人はその言葉に顔を真っ青にし、孫策に対しての怒りを表した。

「うぬぬ……あの孫策めえ。拾ってやった恩を忘れおって妾に恥をかかせるとは」

「いや、なにを逆恨みしておるか。原因がどこにあるかわかってないのか。貴様らの管理の甘さだ。貴様らの躰が手ぬるいせいどころが被害を受けた。……私は貴様がこの乱世でどうなるかと何の興味もない。貴様がこの後どこぞの諸侯に乱を起こされようと、兵が裏切ろうと、私には関係の無い話だからだ。だが、この連合の中では話は別だ。集団として以上、飼い犬の手綱を握る程度は必要だ。わかるな？」

じっと黙り、何の反論もないことを確認し次に進む。

「袁術、貴様は将の手綱を握ることができるか？張勳、貴様は今から兵の手綱を握ることができるか？」

出来るわけがない。今までそのようなことやった試しもないし、知識もない。二人して助けを求めるように流悟の顔を下からのぞく。

「袁術、私は所詮荊州の太守だ。貴様の将の手綱の握り方など教えることはできん。だが、兵の手綱の握り方なら多少の心得はあるつもりだ。」

袁術は落ち込み、張勳はぱあっと花が咲いたように。

「袁術、兵を五千でいい。そいつらを私に貸せ。私がそいつらを一端の兵にしてやる。張勳もその兵を見てよく学ぶんだ」

もう、この中で誰が絶対的な強者がはつきりしており、それに逆らう気を起こすものなどいなかった。そうして、袁術の兵五千と流悟の兵五千、計一万で？水関へと向かうのであった。

「ふう。これで自兵の損耗を回避しつつ、袁術兵の強化、もしやすると袁術自身の統治も孫策に厳しく当たるかもしれない。孫策も袁術を下すのに少しは苦労することであろう。まさに一石三鳥といったところか」

流悟が自陣に戻り蘭々と天里と話す。

「大丈夫ですか？素人が混じると余計に被害が増えそうですけど」

「心配いらんさ。俺と藍道が率いるからな」

「ああ…。それなら問題ないですね。流悟様の護衛は？」

「たわわっ、流悟様が出て大丈夫なんですか？軍師としてはあまり望ましいことでは…。」

「大丈夫ですよ。流悟様は守りに関しては劉表軍最高ですからね。天里ちゃんはまだその姿を見たことないですけど、見たら絶対大丈夫って思いますよ」

「たわわ、流悟様すごいです〜。」

尊敬の目で見ると天里を撫でると、話を戻す。

「とはいえ護衛は必要だからな。護衛は早苗さなえとクーにやってもらおう
な」

「よくもまあ…。寝首書かれないように注意してくださいよ」

「そんなことないってわかってるくせに」

流悟が早苗といった者の名は馬元義。クーは張曼成。本来の真名は空乱くわらんなのだが、皆にはクーと呼ばせている。どちらも黄巾の賊から成り上がりである。兵に志願しその忠誠心と力量で昇龍のごとく出世した。その二人を流悟は重用していたのだった。

その頃の袁術である。

「……七乃。もう行ったかえ？」

「……はい、もういないみたいです」

「……なんなのじゃあやつは！！こんな偉そうに説教かますとは！
！こんな無礼な奴みたことないわ～～！！」

「そうですそうです！！私たちはただ、ちよ～～と知らなかった
って言っただけなのに！そうです、お嬢様！！あんな奴にはこの戦
いが終わったら孫策を仕向けて戦わせてやりましょう！！」

「いや、それは駄目じゃ」

「えっ。……えっ、なんでですか」

「なんでもじゃ」

「……お嬢様。お召し物が濡れています。…もしかして……」

「いや、違うのじゃ！怖くて漏らしたとかでは決していないのじゃ！
「！」

「……お嬢様。私も少し漏れています。……あの人には手を出さない
ようにしてほしいよね」

「……うむ。本当に怖かったのじゃ。このつさは孫策ではらせとして

もらおうかの……」

「……そうですね」

流悟が？水関を見てみると関羽と趙雲が関に向かって怒鳴っている。関には何の変化もないように見えるが、こちらにはどうやら動きがある。孫策が劉備に近寄り協力するようである。華雄は以前、孫堅にいいように敗れたという話だからそこを突いて挑発するのもかもしれない。いよいよ討って出るかもしれない。流悟は出陣を急いだ。

袁術に借りた兵を見ると、一様に怯えている。当たり前だ。本来、後ろに下がって高みの見物をしようとしていたところに最前線に飛ばされたのだ。何の覚悟もないものが足を丸めうずくまっている。その袁術の兵に流悟は話しかける。

「何を怖がっている？」

「劉表様……。私共は怖がってなど、先陣の名誉に打ち震えて……」

その言葉を遮って、もう一度問う。

「何を怖がっている？」

その言葉に答えることができず、黙ったままになってしまいが、周りがささやくように言う。

「……人を殺すことが怖いです」「殺されることが……」「家族を残していくことが……」「名を残せず有象無象になることが怖い」「この

戦場の狂った熱気が……」

口々に言う袁術兵はもう泣いていた。

「そうか。だが、貴様らは兵隊なのだ。もう今更甘えは許されない。とはいえ覚悟もできない。であるならば、どうすればいいかわかるか。」

ぶんぶんと首を左右に振り否定を表す。

「気を楽しむことだ。戦というものは気負ったものが死ぬ。そういうものだ。どうすれば気負わなくなるかわかるか。……おい、藍道」

「あいあい。オラツ劉表軍の精兵よ！ここに戦場に連れ出された哀れな新兵がいる！！だが、ともに戦場に向かう同士である！こいつらとともにまた会ったために、自信をつけさせてやろうじゃあないか！！オラツ全員、笑えっ！！」

その言葉に劉表軍が一斉に笑い声を上げた。喉を震わせ、腹を震わせ、目はギラリと獰猛に。

流悟は大声で出陣の合図を出す。

「我らはこれより劉備陣の左方を抜け？水関の前へ出る！臆するな！関から出てくるものは頭に血の上った猪よ！兵は將の言うことをよく聞きそれを守るだけで勝てる戦だ！行くぞ！！」

あっけに取られていた袁術兵は突然の出陣命令に驚きながらも劉表軍の行動の早さに押されるようにして急いで準備した。

「劉備、公孫？、孫策。華雄は出てこないようだな」

孫策の方は見ずに劉備に話しかける。

「あ、劉表様。そんなんです。孫策さんの挑発であと一歩だったと思っんですけど。これからもう一度孫策さんがやるんです。」

そう残念そうに言う劉備。

「その前に、私にやらせてみてはくれぬかな？必ずや華雄を誘いこんで見せよう」

そうニヤリという流悟。劉備はブルブル顔を振りながら、胸を振りながら、答える。

「そ、そんな私に許可を求めるなんてとんでもないです。どうぞやっってください」

ならばと、劉備に背を向け？水関に向かう。

「よし、藍道」「合点だ」

藍道は大きく息を吸い、同じように大きく口を開け、大きな声を出した。

「華雄よ！俺がわかるか！貴様を散々に打ち倒した孫堅を殺した黄祖だ！よくもまあ貴様はあのような愚物にやられたものだ！あつさり俺の策にはまり、虫のように死んでいった！あの虫に負かされるなど貴様の武は虫をも殺せぬものなのだな！」

そう言つて藍道の武器の丸太の如く太い鉄棒を掲げる。

ハハハハハハッ！！！！

劉表軍と袁術兵が一斉に笑う。劉表軍は勇ましく、袁術兵は顔をひくつかせながら、声を出した。

とたんに前から後ろから殺気を感じる。前は華雄。後ろは孫策。

しばらくすると、関が開き、それこそ殺気が溢れでてくるようだ。

「黄祖おおおお！！貴様よくも死した武人を誇つたな！！いくら孫堅は敵とはいえ、死人を汚すなど生かしておけん！！孫策の前に私の金剛爆斧に吞まれて消えろ！！」

「ほう、自身の武ではなく、死人の武を汚されたことに怒るか。どうやらただの猪ではないようだな」

流悟はそう言つて華雄も仲間に入れる事を決意した。

流悟も華雄が突っ込んで来ることをただみているだけではない。後ろに下がり右にいる劉備軍と半包围できるようにする。

「藍道！華雄は任せた！俺は兵を率いて袁術との約定を果たす！いか、殺すなよ！」

手を振るのが見えて、自身は兵に指示する。劉備軍が右手にいることを確認し、軍の右翼を率いて？水関に突撃することにした。劉備が空いた穴を埋めてくれることを期待してだ。

「我らはこれより？水関へ突撃する！臆した者から死んでいくぞ！

しっかり笑って声を出せ！声を出せば無理な力が抜けていく！行くぞ！突撃！」

笑い声か荒い息遣いか区別のつかぬ様な声を出しながら新兵と古参兵が行く。だが、たしかに新兵は高らかに笑う古参兵の声に安心感を覚えていたのだった。

「なっ、なんだこいつらは！？戦場で笑いなど、狂ったか！？」

「ハツハツハツ！いいぞいいぞ！敵には脅威を！味方には安心を！弱兵は数にも入らん！殺し尽くせ！ほら、左翼！壁が薄いぞ、なにやってんだ！」

流悟が指揮し、自身も長刀で敵を打ちのめす。

「流悟様！前に出過ぎです！お下がりを！」

「早苗か！丁度いい、関門前はどくなってる！」

黒髪縮れ毛を前に垂らし目を隠すようにしている隠れ巨乳早苗に聞く。

「未だ華雄軍が溢れています、孫策軍が猛烈な勢いで向かっています！遠からず突破するかと！しかし、関の奥に張遼軍と思しき影！撤退が遅れている模様！」

「なんだとっ！……よし！俺が道を作る！早苗はその道を通ってしばらく関門に陣取れ！上手く邪魔して孫策軍を通さぬようにしろよ！クーも早苗について援護しろ！」

黄土色の髪をあちらこちらにはねさせた髪型のまな板クーに言うが、反論される。

「おいおい、それじゃあ主の護衛がいなくなるんじゃないのかい？ そいつはいただけねーです。早苗、流悟のために死んでくれい」

「安心しろ！もう俺は引く。お前らも危なくなったら逃げろよ！わかったら準備しろ！」風”えええええ！”

流悟が長刀を関門に向かって振り抜く。すると、びゅうつうつという音とともに風が生まれ、関門に向かった。その風は兵を吹き飛ばすほどは強くなく、そよ風ほど弱くなく、しかし、ひるませるほどの風だった。

「人遣いの荒い主です。……早苗！道はできた！お前さんでそこを開いてくださいませ！周りはクーにお任せい！」

「了解！あたしの赤蹴球はすべてを破砕する鉄球！ぶち当たるのが嫌ならその頭蓋を蹴らせなさい！どっせええええい！！」

「クーの鉄筒砲は音もなく貫く光の矢！死すら気づかずその場に崩れんしゃい！！はああああ………といっても吹き矢なんで、フツ！！」

早苗は鉄球を蹴飛ばし兵を吹き飛ばす。その道に迫る兵は吹き矢によつて喉を貫かれていた。

「大丈夫なようだな。よし！我らは撤退する！そろそろ藍道も決着が付いている頃だ！藍道隊と合流するぞ！」

そういつたところで藍道の声が聞こえた。

「劉表軍の黄祖、董卓軍の將華雄を討ち取ったぞー!!!」

「……あいつ、なんで討ち取ったの?……いや、あいつが俺の言うことを守らぬわけあるまい。きつと馬鹿だから雰囲気ですってしまつたんだな。違くない」

華雄を失った軍は総崩れになり、兵は降伏する者、逃亡する者、情勢が見えず戦い続ける者がいたが、結局?水関は落ちた。遠くで孫策軍が?水関の一番乗りを宣言しているのが聞こえる。流悟は早苗とクーに先に宣言するように命じておくべきだったかと思つたが、過ぎたことであると思ひ直した。張遼は虎牢関へ撤退し、華雄は自身の元にある(はずである)。なんとか流悟の思い通り事が進んでる状況であつた。

「劉表様」

ん、と振り向くと袁術兵がそこにいる。返り血を浴びて、怪我を帯びて。たしかに成長していた。

「劉表様、この度はありがとうございます。あなた様とあなた様の精兵のおかげで生き残ることが出来ました」

「礼など必要ない。私は貴様らを利用しただけだ。さつさと袁術のもとへ帰れ」

「それでも礼を言いたいです。我らは精兵の勇ましい笑い声で味方が隣にいるのだと体で感じられました。戦は一人のものではないのだと知りました。あなた様ともでなければ気づかずに死んでい

たでしょう」

「そうか」

素っ気無く言う流悟。その言葉の意味を知ってか知らずか、袁術兵が言う。

「……劉表様！我々もあなた様とともに！これからもあなた様と……」
遮って言う。

「駄目だ。袁術との約定は兵を使えるようにして袁術のもとに返すこと。これを破れん。貴様らはもう一端の兵。それどころか将としての才を感じるものもいたぞ。袁術のもとで励むんだな」

くうう、と悔しむ袁術兵。その様子に流悟が、これは独り言だが、と前置きを言って話す。

「私は孫策が嫌いだが殺したいわけではない。この言葉をどう思い貴様らがどう行動するか私には計り知れんことだが、私はそれを誇りに思うだろう」

「……劉表様、それはもう独り言になっておりません」

おっと、とっておどける流悟。兵にはもう流悟のもとに行けなかったことを名残惜しむことはなく、はっきり目標が見えていた。

「劉表様。最後にもう一度、ありがとうございます！」

袁術兵全員が大声でそれを言うと、戦前とはまるで違う様子で去っ

ていった。

？水関陥落。なかなか手間取ったがなんとか攻略できた。この後に立つは難攻不落絶対無敵七転八倒虎牢関。飛將軍呂布までいるという。我らの目標としては呂布を自然に負かせること。これが出来れば呂布を失ったとして虎牢関から撤退する状況は不自然には映らないだろう。難儀なことだが、やらなければならぬ。だが、その前に目の前のやるべきことがある。それは、捕らえた華雄を討つたと言った藍道を叱責することだ。

「呬、あの人のアレ。見えたか」

「すごかったの！びゅーって風が吹いたの！」

「私も初めて見た…。アレは氣だ。氣を風に変質させ突風を作り出した。こんな氣の使い方見たことない」

「ほお。氣にはそんなこともできるんやな。って、ちょ、呬！どこ行くねん！」

「あの人のところだ！あの人に師事すれば私はもっと強くなれる！」

「待って！突然のこのこ行って何になるんや！おい、呬！おっ！」

第十話 れんごう！！（後書き）

華雄は萌えキャラより燃え。武人として生きる。
早苗の外見はソフトハウスキャラのモブキャラ。
クーは適当。

凧のところはこの先どうなるのか分からん。

次回、虎牢関戦！予定

第十一話 れんごう！！！

虎牢関を落とすため攻撃する連合軍。関門を破るための木槌を運ぼうとするも弓兵に撃たれ門に辿り着くことなく倒れて、撤退する。被害だけが飛躍的に増す連合軍のその布陣は前段から右手に曹操、左手に袁術。少し後方に挟まれるように袁紹。その右後方、つまり、中段右は劉備、中段左に公孫？、挟まれるように馬超。後段は右に孫策。左に流悟が配置されていた。この布陣は成果を出した孫策と流悟を妬んだ袁紹と、この連合で風評と実績が欲しい諸侯の間で利害が一致した結果であった。

流悟は後方に？水関があることで後ろから奇襲を受ける心配もなく、兵に裏方業務を任せて、つまり、暇だった。といっても普通であればようやくとれた僅かな休みに等しいはずなのだが。

「しかし、虎牢関は堅牢だな」

「そうですね。こちらとしてはこの調子でお願いしたいですが、こつも変化がないと眠くなります」

「……平和だな」

「……平和ですね」

流悟と蘭々がぬぼぼとしていているその脇では、手足を繋がれて早苗とクー二人を相手に手合わせする楽しそうな藍道の姿があった。

「ぬわっ！ちよ、やめっ！だあああっ！流悟様！ホントに！悪かったと！反省！してます！だからっ、こいつら！止めてあああああ
ああー！！」

じたばたと見苦しく喚く藍道であったが流悟は見向きもしない。

「平和だ。一点の曇りもなく」

「平和なのは結構ですが、華雄はどうするのです？縛って猿轡させてますが暴れまわって手に負えません」

困ったように顎に手を当て腕を組む蘭々。

「放っておけ。今俺たちがなにを話しても無駄だろう。武人には武人の流儀がある。荊州に戻り月と道蓮と藍道で話でもさせてやれば大人しくなるだろうさ。その頃にまた話せばいい」

片目を閉じて、ふふんといったふうに流悟が言う。

「そうですか。ならこの件は終わりつと。それじゃ次です。最近流悟様に謁見したいと来る曹操軍の将、楽進についてです。もちろん門前払いしてありますが……。もうずくと来てますよ。氣について教えてくれとうるさいですし。いい加減にして欲しいです」

うんざりしたように蘭々が言うが、流悟も顰めっ面だ。

「まったく。曹操も虎牢関攻めに参加してるのにな。まああんな攻め方してたらいつまで経っても落とせんし、攻めに参加させるより俺に会わせたほうが楽進にとって良いと考えたのかね」

流悟がただでそんな思惑に乗ってやるほど優しいわけもないのだが。

「流悟様から袁紹か曹操に抗議しておいてくださいよね。鬱陶しい」

「しかしなあ。馬鹿な袁紹に会うのも覇気垂れ流しの曹操に会うのも一苦労なんだよ。しかもそうすることも曹操の狙いな気がしてな」

「ん」

対応に苦慮する二人であったが、どうにも緊張感のないのは楽進の打算なき純粹さを理解しているからである。楽進の気持ちに応えたいという思いはあるのだが、背後に曹操の影が見えるところしても一歩引いてしまっていた。

「……会ってみるか」

「……いいんですか。私たちに得はないかと思えますよ」

「分かっているさ。だが、こう粘ってくれたら会ってやりたくなるのも人情だろ？うまくすれば仲間になるかもしれないぞ？それに得が無いなら作り出せばいいし」

「なにより暇だしな」

愉快そうに言う流悟に、呆れた様子で腰に手を当てる蘭々。

「……最後のが一番の理由でしょうに」

「本日は謁見に応じていただき有難くあります！私は姓は楽、名は進、字は文謙であります！」

必要以上に大声でハキハキと話す楽進に暑苦しそうにする流悟。

「今日、謁見に応じたのは貴様が何度断られても心折れず、度々訪れたその情熱に胸打たれたことである。普通であればこのような機会は得られぬと思ひ私の寛大な心に感謝でもすればいい」

流悟は言いながら自身の胡散臭さに最後の方が雑になってしまう。蘭々の笑いをこらえている姿が目に入るからだ。楽進はそれに疑問に思うことなく素直に言う。

「はっ！恐悦至極にございます！」

素直だ。本当に。

「して、何用で来たのか聞こうか」

「はっ。この楽進、劉表様に氣を御教示していただきたく参上しました」

「氣だと？なぜそのような事を」

「はっ。実は？水関攻めの際の劉表様を見させていただきました。その際、劉表様が長刀を振るうと突風が生まれました。その風、私には氣を使つて生み出されたもののように感じたのです」

論理性などなく感覚でものを言う楽進。だが、氣に携わるものなら

ば、それは正解である。

「して、その風が氣によるものだとしてそれがどうした？」

決して氣を使つて出したとは言わない。敵国人に余計な情報など渡せない。たとえ、相手が確信を得ていたとしても。

「あのような氣の使い方生まれて初めて見ました。私も微力ながら氣を使うものです。私は今まで自身の氣を体に巡らし強化し、殴る、蹴る。氣を飛ばし目標物を粉碎する。それしかやってきませんでした。それしか出来ないと思っていました。しかし、劉表様の氣を見て、その常識をぶち壊されたのです」

やはり、楽進は甘い。そう流悟が思うのも無理はない。自分から情報を垂れ流してしまうのだから。こいつはまだ利用できると思わぬ収穫に流悟と蘭々は静かに色めき立った。

「貴様に氣を教えた師匠はどうした？曹操のもとに他に氣を使えるものは？」

「どちらもいません。私が氣を使えるようになったのは山の中で熊に襲われたときに無我夢中で突きをしたら、いつの間にか氣が吹き出ていましたので…。もちろん無意識では氣を纏わせている者もおりますが、私のように氣を操ることはしません」

もう流悟は笑いが止まらなかった。

（氣を使える者はいないか。ならば楽進の氣と意識の無い流れ矢に氣をつければ、個人では曹操には負けん。もちろんこの話が真か確認しなければならぬが、十分すぎる情報と言える）

「そうかそうか。ならば氣を知らなくても無理はないな。……よし。こうして出会えたのも何かの縁。少しばかり氣を教えてやるう」

「本当ですか!？」

にっこり笑って肯定する。

（曹操め。樂進に大した情報を渡してないからと偵察を兼ねて送り込んだんだろうが、完全な誤算だったな。俺にとって最大の贈り物になったぞ）

「よし、樂進。普段通り氣を使ってみる」

流悟は外に出て兵に人払いをお願いしてから樂進の氣をみる。樂進にとって最も適切な氣の操り方、合った能力を見るため、と言う建前で流悟にとって脅威にならない能力にするという本音を実現させるように動く。

樂進は氣を拳に集め近くの岩を砕く。その砕いた岩を上へ投げ、その岩目掛けて氣を放つ。

「はああっ!」

その岩は粉碎し、もはやどこにあるかわからなくなった。

「どっでしようか?いつもこうしているのですが……」

樂進は自身の氣の未熟さを恥じるように上目遣いで聞く。

「なるほどな。貴様は氣を硬化させ対象物を破壊しているんだな」
流悟は楽進の氣を分析する。

「そう……なんででしょうか。意識した事がなかったのだから
ん」

「最初はそういうものだ。自らの最も得意なものが氣となる。貴様
はあまり難しい事が考えられぬだろう？ならば、無理して考えない
方がいい。今からまるで別の能力にするなど時間の無駄だ。得意な
ものを伸ばしていけ」

（その方が俺にとって都合がいい。硬度の操作など俺の氣の前には
子供騙しよ）

「そこでだ。先ほど氣を硬化させているといったな。つまり、貴様
は硬度を操作する事に長けているということだ。ならば、今度は氣
を柔らかくして放ってみる」

流悟に従いなんとか柔らかくなるよう念じながら放つ。すると、対
象物だった岩は破壊されずに残った。流悟と楽進はその岩に近づき、
触ってみる。

ふにふに。

「「おおっ！！」」

その岩に触れる前に弾力のある氣に触れ、二人して声を上げる。

「成功だな」

「はいっ！」

何に役に立つかわからない能力を作り出し、それでも喜ぶ楽進を見てついつい流悟も嬉しくなって微笑む。

「鍛錬を積みめば形状や粘度も変えられるだろう。良かったな。これからは自身で創意工夫してやっていけ」

流悟の言葉を背に受け、楽進は岩についた氣をぷにぷにしながら、聞く。

「劉表様はどういった氣なのですか。あの風が得意なことなのか？」

流悟は一瞬探りに来たかと思ったが、楽進の顔を見て改めた。純粹に不思議そうな顔をしていたからだ。

「俺は氣の指導をしているつもりだが？それ以上を求めるならこれで終わりだ」

流悟はそう言つて氣の指導をさっさと切り上げようとしたのだが、わずかに沈んだ楽進がなにやらもじもじと体をよじっている。

「……劉表様！あ、あの、よろしければ一つお願いが！」

「……氣の指導でもう一つお願いを聞いていると思うが、まあ、言うだけ言ってみる」

大真面目な顔で楽進は頭を下げる。

「ありがとございます！では！……りゅ、劉表様のことを師匠とお呼びしてもよろしいでしょうか！？」

「……理由を言ってみろ」

「わ、私は今まで師といえる人物がいまませんでしたので……憧れていたのです。そういえる人がいる事に」

流悟はあまりにもくだらない願いに肩透かしを喰らったが、その言葉にふと、思い返す。

（そういえば、今まで部下を数多く見てきたとはいえ、氣の指導をしたものはなかったな。経緯はともかくこいつが初めての俺の弟子なのか）

（俺が教え、ともに成長を喜んだ……俺の弟子）

そう思うと、とたんに目の前で頭を下げこちらを伺う楽進のことが愛おしくなってくる。自分の言うことを疑うこともなく犬のように忠義良く従う自身の弟子。

「楽進。俺のことはそう呼ぶのは構わないが……良ければその前に貴様の真名を預からせてもらうことは駄目だろうか？」

その言葉に頭を勢い良く上げ、ブルブルと顔を横にふる。その姿は濡れた犬が水を払うかのようだ。

「そんな滅相もないです！！私などの真名など受け取っていただくなど、逆に失礼です！！」

「なぜだ？俺は貴様を初めての弟子、それも愛弟子だと思っている。この短い期間だったが、たしかに絆を築けたと思う。真名というものは大切なモノだ。立場や官位など関係ない。嫌であれば断ればいい。俺も怒りはしない。……それでも駄目だろうか？俺は貴様と真名を交換したい」

ただの村の義勇軍上がりと荊州太守、それを超えた一対一の人間同士の言葉に、流悟から出される最大級の賛辞とも言えるほどの言葉に、楽進は顔を真っ赤にし、体を震わせた。そうしたあと、反射的に右拳を左手で覆った。

「姓は楽、名は進、字を文謙！真名を凧！生涯劉表様の弟子であることを誓います！！」

（ああっ、なんて愛おしい。このような感慨は今まで感じたことがない。俺個人のたった一人の弟子。俺だけの弟子）

「姓は劉、名は表、字は景升。真名を流悟。生涯凧の師であることを誓おう」

二人は真名を交換し、まるで一枚の絵のようにその場に動かず佇んだ。これほどの良き日に余計な邪魔が入ることを嫌うように。しばらくその空気を体に刻み、流悟が口を開く。

「凧。一度ずつ、呼んでくれないか」

「はい。流悟様。……お師匠様」

凧のその言葉を聞くと、噛み締めるように頭を上へ向けた。風がふつと凧いだあと、また言う。

「風、もう少し気の指導をしようか」

「はいっ！..!」

「俺は何も風が得意なことなわけじゃなかった。俺は風とは順序が逆だったんだ。最初に考えた。この荒れた世でどうすれば生きて行けるか。いくら武を修めても火計にも水攻めにも無力だ。ならば、どうする。そう考えて思いついた。……なあ風。この世界は何で出て来てると思う?」

「……わかりません」

流悟は薄く笑い風の頭を撫でる。

「たとえば、風。太陽がなくて生きていけると思うか?」

「いえ、太陽は大地を照らす恵みの光。それがなくて生きていくなどとても無理です」

「そうだな。では次。我らが立つ大地、これがなくて生きていけるか?」

「いえ、当然無理です。我らはどこに入ればいいのです」

「そうだな。では次。我らの喉を潤す水はどうだ？」

「必要です。日が照らす大地を水が潤さねば、干からびてしまします」

「そうだな。では次。我らが吸うこの目に見えぬ空気、風と言い換えてもいい。これはどうだ？」

「……わかりません。必要かもしれませんが」

よくわからぬ禅問答に戸惑いながら答える。

「俺もこれはよくわからん。だが俺も必要と考えた。生物は呼吸し新しい風と古い風とを入れ替えている。ならば、石や水といった呼吸をしないものを考える。彼奴らに風など必要であろうか？おそらく必要なのであろう。水は波立ち、石は転がり、新たな側面を見せる。……なににより、ない状態が想像できない」

風はそれが一体なんなのだろうかと思いつつ黙って聞く。

「これが俺の思いつきだ。この火、水、地、風。この四つを自由に操ることができるならば、この世界に生きるものにやられる道理はない。これを理解せずとも確信しひたすら求め続けた。そうしたら、いつの間にやら気が宿っていた」

そう言って足で地を叩き、離れた場所の土を盛り上がらせた。

「これが俺の氣だ。すごいだろう？」

ふんぞり返る流悟。それを見て風が笑った。

「さすがはお師匠様です。私の氣などまだまだですね」

「弟子に負けるわけにはいかんよ」

流悟は意地悪く笑う。

「……なあ凧。俺はお前が敵の将だと知って、自身の能力を教えた。損得勘定じゃない。お前が俺の弟子だからだ。お前が曹操に包み隠さず報告しようとするのは将として当然だ。むしろ報告するべきだ。だが、もし、お前が俺のところに来るといふなら……」

「……お師匠様。私もお師匠様とともにいる姿を夢想しています。ですが、それは所詮夢想。私は曹操軍の将、楽進であり、そうであれたからこそして出会えたのです。そして、それはこれからもなのです」

凧のきつぱりとした物言いに流悟は何も言えなくなってしまう。

「……ったく。凧はうまいことをいう。まあ、致し方なし！凧よ！貴様は曹操のもとで鍛えろ！次会うときは、さらに成長した姿を見せてくれよ、愛弟子！！」

「はっ！お任せを！お師匠様！」

そう言って曹操の陣営に向かって歩き出す凧。

(……くそっ、してやられたな。意図していなかっただろうが、こんな気分良く負かされるとは。情報を持っていかれた。それも総大将のものを。)

それでも、何故か清々しい気分になり流悟は自身の天幕へと帰る。
もう今日の虎牢関攻めも終わりだ。天幕で軍議が開かれる。袁紹の
馬鹿騒ぎを聞くだけでうんざりするのこれから曹操の得意気な顔
を拝まなければならぬことに、流悟は憂鬱になっていたのだった。

第十一話 れんじゅー……！（後書き）

氣の説明回。

第十二話 んんごう！！！！！（前書き）

エクスクラメーションマーク多すぎ。いつかサブタイ変える。
文字数11120とか多すぎ…。本当は区切るうと思っただけど
「！」を少なくしたくて詰め込んだ。そのくせ原作準拠多し。

第七話大規模改定したんで見てやってください。

右翼左翼の区別が付きにくい人は右翼が曹操側、左翼が孫策側と思
ってください。

第十二話 れんじゅう！！！！！

連合総大将袁紹の天幕、そこでは軍議という名の先の虎牢関攻めの反省会、もとい、袁紹の発狂会場の体をなしていた。

「なぐにをやつてるんですの！美羽さん華琳さん！いつまで経っても落とせず終いで！こんなのでは全然華麗で優雅なんかじゃありませんわ！」

袁紹は何もせず、それどころか道を塞ぎ邪魔をしていたことを棚に上げ、袁術と曹操を怒鳴る。

「しかし、麗羽姉様？あの関に辿り着くこともできんのじゃが……
こんな攻略できるのかの？」

たまらず抗弁する袁術。だが、袁紹にそんなものは通らない。

「だまらっしゃい！言い訳なんて聞きたくありませんわ！あなただの石塊、ちよちよと行ってばいばいと壊してくればよろしいじゃありませんの！？」

よろしい訳がない。そのやり方をまず教えてもらいたい。諸侯全員の気持ちであった。

軍議にきて、はじめはしてやったりといった曹操の顔がいまや般若となっていた。対照的に流悟はニヤニヤしているのだが。

「だったら、あなたが先頭に立てばいいんじゃないやなくて？私たちできぬことがあなたにはできるのでしょう？後学のために華麗で、優雅で、勇ましいあなたの指揮を見せて欲しいものだわ」

顔をひくひくさせ、暴言を吐かぬよう必死に自制しながら曹操は言う。

「おーほっほっほっほ！わかりましたわ！次は私が出て、あの無骨なものをけちよんけちよんにして差し上げますわ！！」

「ちょ、麗羽様！」「おおっー！ようやく出番かー。燃えるぜー！」

向こう見ずに出陣を決定し、その危険性がわかる顔良が驚く。わからぬ文醜が、面白そうだから、という単純な理由で賛同してくることに袁紹は気を良くし高笑いをした。もうこれは覆らぬと肩を落とす顔良である。

言質は得たと曹操はまとめる。

「なら、私はあなたの後ろでとくと拝見させてもらおうわね」

「妾はもう嫌なのじゃ。一番後ろにいるからの……」

どこか元気がない袁術である。もうこの連合に参加して散々な目にあっている。哀れである。

「おーほっほっほっほ！構いませんわ！どうせ私が関を落としてしまふのですから、どこにいようと勝手にしなさい！もうこれで軍議を終りにしますわ！私は関攻めの準備をしなければならぬのでしてねー！」

準備をするのは主に顔良である。

このとき、流悟は袁紹達の会話を聞いていなかった。それ以上に気になる存在がそこにいたからだ。

（錦馬超。貴様は何をそんなに沈んでいる？）

馬孟起。連合での初めての会合でも、ぶすつと気に入らなそうにしていた。

（こいつ、もしや今の洛陽の状態を知っているのか？この連合に正当性はなかっただ名声を得るための餌に過ぎないことを、だから、気に入らない顔をしているのか？だとしたら、連合に参加した目的は何だ？……いや、待て。こいつは西涼の洛陽から遠く離れた地から来ている。そのような者が他の諸侯を差し置いて洛陽の情報を得る可能性は低いだろう。洛陽の情報はなく、この連合が不当なものであると思う理由。……まさか、そういうことなのか？）

流悟は天幕から出ていった馬超を追い、話しかける。

「馬超」

「んっ……。あなたは……。劉表様！しっ、失礼しました！」

振り返り、暗闇で誰が話しかけたのかわからなかったのか、訝し気な顔をしたが誰かわかると驚き跪いた。

「楽にしる。呼び止めて悪かったな。だが貴様に聞きたいことがあつてな」

そのまま跪き続ける馬超。漢の忠臣馬騰の教育の成果か。流悟は気にすることもなく続ける。

「貴様、連合で会ったときから今の今まで、何か気に入らないような顔をしているが一体なんなんだ？」

「……いえ、決してそのようなことは」

「いや、確かにしていた。誤魔化すな。次は許さん」

話を進めるために軽く恫喝する。しばらく黙ると馬超が意を決して話す。

「……劉表様はこの連合をどう思いますか？」

「何を意図した質問なのかわからないな。正確に言え」

「この連合が、董卓を倒し洛陽を、陛下を救うことになるのか否かということですよ」

「遅かれ早かれ虎牢関はいずれ落ちる。そうなれば董卓は終わりであるろう？洛陽に進み陛下を董卓の手から解放すれば、それは救うと言えるだろう」

流悟はそう言ったが、馬超の顔は晴れない。

「……なにがそんなに気に入らない？救われなければいいと思っっているのか？」

「いえっ！決してそのようなことは！ただっ！」

「ただ？」

「……ただ、本当に董卓が悪政を行っているのかと、そう思うので
す。」

そう言う馬超に流悟は自身の予測が正しかったことを確信する。

（こいつ、やはり月を知っているのか。洛陽の情報を得ずとも月の
人柄と統治を知っているからこそ連合に不信感をいだいている。そ
う言われれば月は涼州天水の人間。馬超は西涼。なにかつながりが
あっても不思議ではない。だからこそ気に入らない顔をしていたの
か）

そこで流悟は一つ思考を進ませる。

（錦馬超。連合を嫌悪し月に同情せし者。それでも連合に参加した
のは時勢もあるがなにより、月を救うためにきたのであろう。虎牢
関を落とし洛陽に月がないということになれば連合は逃げた月を
追うだろう。そのとき、必要なものは何だ。騎馬である。騎馬を使
い背を向ける月に食いつく。その任を負うために、そうして上手く
逃がすか匿うためにここまで来たのだ。漢への忠義を為し義を尽く
す。実に高潔である。こいつは使える。）

「馬超。私の天幕まで来い。内密の話だ」

天幕の中。流悟と蘭々、天里は馬超とともにそこにいた。周りを兵で
固めさせ厳戒態勢である。

「さて、馬超。貴様を呼んだのは私の連合に対する考えとそれに貴
様も加担してもらったために席を設けた。では、私は連合に対して、
ただの計画を遂行するための道具としか思っていない。それを為す

ためにここにいる」

「計画……?」

「そつだ。その計画とは、董卓の救出だ」

目を見開き、驚く馬超。

「私は連合が結集する前に董卓と洛陽で会っているのだ。洛陽は活気に満ちていたぞ。たしかに董卓は善政をなしていた。その董卓がいつの間にか暴君として名を馳せ、それが事実として蔓延した。私はそれを心苦しく思っていてな。なんとか助けてやりたいが、すでに多くの諸侯が連合に参加し、董卓に勝ち目がなかった。私も荊州太守として荊州の民を守る身。董卓軍に助勢することができなかった。故に連合軍の中から隙を見て助けてやろうと思って、ここにいる。実は我らが討ち取ったと言った華雄だが、我らが匿ってしつかり生きているぞ」

馬超に考える暇を与えぬよう一息で衝撃的な事実を立て続けに突きつける。

「……な、なな。いったいそれをなぜ?」

要領を得ない馬超に答える。

「なぜ貴様に話したか、貴様が董卓に肩入れし救うつもりであると見たからだ。つまり、我らの目的は同じ。わからぬと思ったか? 見くびられたものよ」

声も出ない馬超である。しばらく驚き呆れたままであったが、覚悟

を決めよう。

「……協力できないと言ったらどうなりましょうか？」

「考える必要もない。貴様は協力するよ。その顔が教えているぞ。もう腹芸など他の奴に任せておくんだな」

見透かし笑う流悟。協力しない理由がない。ここで仮に協力せずにも月を救える確証などない。もし連合が逃げる月を追わず情報収集してからまた董卓討伐に向かうとしたら、もし月が洛陽に居続けていたら。馬超には何も出来ない。馬超には確かな情報を持っていないのだから。

馬超は一度頬を叩いたあと、言った。

「この馬孟起、劉表様に協力させていただきたくあります！」

「よし、では馬孟起。貴様に我らの計画を話そう……」と思ったがその前に。貴様は漢をどう思う」

唐突な質問に戸惑う馬超だったが、少し考え申し訳なさそうに言う。

「私は……漢のことをあまり好ましく思っていないません。涼州はもともと洛陽から離れ漢への敬意もあまりありません。涼州は五胡の侵略を受けている上に作物もなかなか育たない。そういうところです。民が飢えているにも関わらず朝廷は税を上げてむしりっていきます。そんな状況なのに母様はどうして、漢に尽くすのか、私にはわかりません。」

普通であれば漢に生きるものがこのようなことを言うなど斬首に等

しき罪であるが、流悟とっては都合が良かった。

「馬騰も心苦しく思っているだろうさ。賢臣は二君に仕えず。馬騰は決めているのさ。漢がいつか復興するのを支える覚悟を、ともに死する覚悟をしているんだ」

馬超も思い当たるフシがあるのである。反論せずに黙る。

「まあ、それはともかく。貴様が漢を好いていないことが分かってほっとしたよ。この計画は大罪なのでな」

流悟は裏切る事のないように月との血判状に馬超の名を加え判を押させ、馬超に計画の全容を話した。その話を聞いた馬超はとたんに蒼褪めこつ言った。

「……母様。漢の忠臣の娘が漢を裏切ることをお許しください」と

「おーほっほっほっほ！華麗に進軍ですわ！」

虎牢関前。金ピカの兵を無策に突き出す馬鹿がいた。布陣は袁紹が前段。中段に右から孫策、真中に劉備と公孫？、左に曹操。後段は劉表と馬超。離れて後ろに袁術であった。

「なあ天里。総大将があんなところにいるんだ。きつと関から出てくるぞ。もちろん呂布もな。そうだったとして、そのまま袁紹を放っておいて殺すのと、守るのではどっちが得だ？」

流悟が遠慮無く袁紹を切り捨てるような発言をする。

「たわわっ、それはさすがに守ったほうがよろしいかと。いくらあんなでも連合軍総大将。死んでしまったら泡沫諸侯も撤退を叫びますし、士気も落ちます。なにより、あんな兵を我らが管理しなくてはならなくなるなんて最悪です」

流悟は、死んだほうが士気が上がりそうだがなあ、などと思いつつ天里に同意する。

「そうだな。ならば誰か護衛でも出そうか」

「しかし、我らは後方に位置し、前の各諸侯に邪魔されています。この状況では、護衛に出した者が危険でも援軍を出す事も出来ません。前の諸侯に期待するしか……」

腕を組み考えるが妙案が出てこない。

「うーん。ここで待機するしか無いか……。董卓軍の将の頭が煮えてない事を祈るか……」

そう考えている丁度そのとき、関が開き董卓軍の兵が流れ込んできたのである。

「なんや？あの金ピカは。阿呆みたいに突っ込んでくるで」

「あの旗は……袁紹なのです！河北の雄で四世三公を輩出した有力者なのです！きつとあれが総大将なのですぞ！」

「あれが総大将？兵はとろとろしとるし指揮もなつとらん。なにより総大将があんな前に出てくるか？」

張遼の疑問も当然である。総大将は奥に引っ込んでいるものだし、それが定石で正解だ。だが、袁紹の頭の出来を忘れてはいけない。

「袁紹は大陸一の馬鹿であると言われているのです！きつとあれは功を焦ったのです！これは好機でありますぞ！総大将を討ち取れば我らの勝ちなのです！全軍であのバカを討つのです！」

陳宮の意気軒昂な言葉に近くにいた兵士が色めき立つも、張遼がかさず諫める。

「待てや！袁紹は問題ないやもしれんが後ろの曹操と孫策は厄介やで！釣られて関から出す罠やないんか！？」

当然考えられることである。なににより？水関では関から出て負けたのだから、慎重になるのも自然である。

「大丈夫なのです！袁紹の軍は広がって後ろの軍が回り込める隙間などないのです！それに曹操は袁紹と領地が接していて敵国の

間柄！ここで袁紹の兵士が減ることは願ったり叶ったり！袁紹自身に護衛をつけるとは思いますが呂布殿なら蹴散らしてくれるのですぞ！孫策は袁術の客将でもとより寡兵！？水関で成果を挙げていることもあり、無理な戦はしないはずです！」

一理ある、と張遼は思った。呂布への過剰な期待には不安だが呂布がやられる姿も想像できない。さらにこの好機を逃しては次はない。賈馮から無理せず退くように言われていたがここで袁紹を潰してしまっても悪くはない。あの劉表も参加していて華雄もやられてしまっていたことが冷静な判断を欠いた。

「……よっしゃ！こうなったら連合全部ぶっ倒して月のもとへ帰つたるわ！全軍用意せえ！これから討つて出るで！今までの鬱憤晴らしてこいやあ！！」

「張遼隊は左翼に、陳宮隊と華雄隊は右翼に、呂布隊は本陣に向かうのです！あとは各自の判断に任せるのです！銅鑼を三回鳴らしたら帰ってくるのですぞ！」

「……でる。」

「おーほっほっほっほ！あのおばかさん達、関から出てきましたわ！みなさん、全軍突撃です！華麗に、優雅に、勇ましく打ち倒しなさいー！」

「あらほらさつさー!」「……うう、あらほらさつさー」

馬鹿な掛け声に気合が入ったか否か、袁紹軍が包囲するように進軍する。が、所詮弱卒。董卓軍が激突すると、袁紹軍は弾けるように陣を食い荒らされ死者を築いていった。

顔良が守る本陣前、そこに相對する呂布隊一万。董卓軍の中でも精強で董卓軍から選びぬかれた者しか入ることはできない精銳であった。情弱な袁紹軍にその精銳を止めることなどできるはずなく、押し込まれていく。

「右翼にいる文ちゃんに伝令〜!早くこっちに来て!この人強すぎるよ〜!」

「……じゃま」

方天画戟を振るう呂布。そのなんでもないような攻撃がとてつもなく重い。閃光のように速い。

「きゃあああ!〜!」

飛將軍呂布を相手にするには顔良は力不足。金光鉄槌でなんとか守りに徹するもジリ貧であった。

「伝令!顔良將軍が呂布に押し込まれております!直ちに救援を、とのこと!」

「なにいいい!?斗詩の危機だとお!?そこのお前!ここはお前に任せた!ここには将はいないし、今は押されてっけど、いずれ数で押しきれる!それまで耐えてろ!アタシは斗詩の救援に向かう!」

うおおおお斗詩、待ってるよー！」

「ちよ、文醜將軍!!??」

名もなき兵の困惑した声を無視し、本陣に向かって突き進む文醜。もうすでにその崩れた本陣は袁紹の目の前までに迫っていた。

「ねえ朱里ちゃん。前の方から悲鳴が聞こえるんだけど大丈夫かな？袁紹さんが邪魔で通れないし、救援にもいけないよ」

情けなく声を出す劉備。手をばたつかせ慌てる孔明。

「はわわっ、まずいですよ桃香様！前に見えるは真紅の呂旗！飛將軍呂布です！もしかするとここまで突破されるかもしれませんよ！」

「ここまで突破…?…ここまで!??そ、そそれはまずいんじゃないかな朱里ちゃん!どどうしよう!??」

いまいち危機感のなかった劉備であったが、孔明の言葉に必要以上に慌てだす。

「救援を出しましょう！軍は出せずとも将は出せます！ここで袁紹さんを討たれては連合は総崩れ！何としても袁紹さんを守りましょう！」

袁紹がやられたら後ろの劉備軍にも被害が出るかもしれない。自軍

を守るためにも救援に行かなければならない。

「雛里ちゃん！誰を行かせたらいいかな？」

「愛紗さんは桃香様の護衛がありますので、鈴々ちゃんに行ってもらいましょう」

合点なのだ！という元気な声とその横からもう一人。

「私も行きましょう。このまま伯珪殿のお守りをしていては敵の首も挙げられませんのでな」

趙子龍。公孫？の客将で劉備との関係もある常山の昇り竜がそこにいた。

「桂花、あれは？」

「あの紺碧の旗に張の字。張文遠でしょう。張遼の操る騎馬は神速と言われ、そこから発せられる偃月刀の攻撃は瞬き。指揮にしてもあの姿を見ればわかるように一廉のものかと」

舐め回すような視線で張遼を見つめる曹操。これから曹操が何を言い出すか、予想がついてその目に嫉妬する荀？であったが自身も張遼の有能さを理解しているからこそ黙っていた。

「あの将、欲しいわね」

ぺろりと舌なめずりする曹操に案の定、といったふうの荀？。分かっている寂しいものである。

「いずれ袁紹の兵を抜きましよう。その時に春蘭と秋蘭を出せば捕らえることも可能かと」

目を閉じ、なんとも思っていないません、というふうを装う荀？。

「桂花？私が張遼を欲しいと言っても妬いてくれないのかしら？」

そついつて荀？の背中に回り、耳の縁に沿うように舐める。

「…っ！……んっ…華琳様、私は……張遼が我が軍にとって、必要な人材であると……ひう！」

話す荀？を無視し、背中に指を這わせる。ぴんつと背を反らせ強張る。その持ち上がった顎に手を添え誘導する。荀？の潤んだ瞳が何かを期待しているかのようにだった。曹操はその顔を確認し笑うと、荀？の口に自身の口を重ねた。

「…んっ、…ちゅ…、はあ……んっんっ、はあ。……華琳様あ」

「ふふっ、可愛い子ね。けどお預けよ。ここは戦場。敵が攻めて来るといふのに睦事などしてる時じゃないわね」

華琳様から始めたくせに、と恨めしげな顔をするが、正論なので黙る。

「さて、春蘭と秋蘭を呼びなさい。張遼を捕まえるわよ」

覇気を取り戻し、目を光らせる霸王が立つ。

「おらっ、どかんかい！この神速の張文遠の前に雑兵が立つんやないわあ！」

袁紹軍を蹂躪する張遼。少し下がって周りを見れば呂布は袁紹の旗の近くまで食いついている。もしかしたら本当に袁紹の首を持ってこれるかもしれない。陳宮隊華雄隊は数に負け押し込まれている。このままだと呂布隊が包囲されるか虎牢関に雪崩込まれるか、おそらくあの兵数から見て両方をやられる可能性が高かった。幸い、張遼隊の方は被害も少なく敵もまばらになってきた。左翼はもう大丈夫だと判断し、呂布の方で首を上げる手伝いをするか、右翼で兵を支えるかしようと思ったところ、声がかかった。

「我が名は夏侯元讓！曹操軍の大剣なり！張文遠！貴様に正々堂々の一騎打ちを望む！！」

張遼は一つ舌打ちをする。

「お前さんがあの夏侯惇かい。聞いたとるで、夏侯の姉は猪やと。猪なら猪らしくさっさとかかってこんかい！！」

「戯言を！望みどおりさっさと死ね！！」

張遼は早く勝負を決めて救援に向かうために挑発をした。それを受けてあっさりと乗る夏侯惇。張遼の思い通りではあったが誤算だったのは夏侯惇を甘く見たことか。

「はあああつー!」

ぎいんという金属のぶつかり合い。耳障りな音をたて周囲に響かせる。その衝撃に思わずうめき声を上げる張遼。

「うぐつ、やるなあ惇ちゃん。手が少しシビれたやないか。……惜しいなあ。こんな場じゃなけりやもつと長く楽しみたかったのにな。悪いの、惇ちゃん。ウチには帰るべき場所もあるし、一緒に居たい人達も居る。その人ら守るためにもちやつちゃと終わらせてもらうでえ!」

「何を訳のわからぬことをごちゃごちゃと!華琳様の褒美のためにさっさと捕まれ!」

飛龍偃月刀と七星餓狼の交わす剣戟に周囲の者は近寄れず、ふたりだけの世界へと没入していった。そうして膠着し双方が疲労していったときに事件が起きた。

「うぐあつー!」

突如うめき声を上げる夏侯惇。その目には深く矢が突き刺さり血の涙を流していた。

「ちよ、惇ちゃん!」

思わぬ事態に狼狽える張遼。

「あ、姉者あああ!!」

遠くから聞こえる声。言葉から張遼は妹の夏侯淵だと判断する。夏侯淵は夏侯惇に慌てて駆け寄り肩を抱いた。

「大丈夫か、姉者!……張遼!貴様、一騎打ちではなかったのか!」

感情的になり目を血走らせ張遼に言う。

「いやいや、待ってってえ!そんなん知らんし、こんな楽しいじゃれ合い誰が水差すかい!!ただの流れ矢や!」

さすがに謂れのない疑いをかけられるのは勘弁と必死に否定する。とはいえ、夏侯淵も畏ではないと頭では理解していても、冷静さを欠いたその心では黒いものが渦巻いていた。

「うつつ、落ち着け、秋蘭。私が周囲の警戒を怠ったのが原因だ。張遼は関係ない。それより……」

スクツと立ち上がり大声で言う。

「聞けい、曹操軍の精兵よ!我が精は父から、我が血は母から頂いたもの!そしてこの五体と魂、今は全て華琳様のもの!断りなく捨てるわけにも、失うわけにもいかぬ!我が左の目……永久に我とともであり!」

そう言って自身の目玉を喰らう夏侯惇。その常軌を逸した行為に曹

操軍は沸き立ち、張遼隊は怖気付いた。

「さて、張遼！待たせてしまつてすまなかつたな！続きをしよう」

「なつ……」

片目を失つてもその闘気はまるで衰えず、むしろ立ち昇るようだ。張遼はその様子に驚かざるをえない。

「どうした！？構えろ！この一騎打ち、まだ終わつてなどいないぞ！」

その言葉、手傷を負つたものだとは思えない。

「……ええ、ええなあ……あんたみたいな修羅と対峙できるなんて、武人としてこんな幸せな事ないわあ。ホント、惚れちゃいそうや」

くくつと笑つて、言う張遼であつた。

「せやけど！この戦まだ終わつたわけやない！武人の趣味に走つて、将としての仕事果さんでおくなんざできるかい！惇ちゃんは今もう戦えへん！この勝負預けとくわ！」

「なつ！逃げるのか！」

背を向ける張遼に投げ掛ける夏侯惇。

「なんとも言い！ウチはどこまでいつても董卓軍の将、張文遠や！月と一緒におられるんやったら、いくらでも泥被つたる！……オラツ張遼隊！お前ら半分は残つて曹操の相手をしい！つっても倒す

ことが仕事やない！持ちこたえて待つとれ！もう半分はウチと恋の
とこ行く！わかったら返事せえ！」

応ッ！という勇ましい声をして、この場は任せると張遼に応える。
張遼も、ウシッ！、と笑って呂布のもとへとひた走る。

「……………逃げられたか……………」

夏侯惇が言うが、実際は止めを刺さずにくれたということであ
ろう。いかに猛将といえど片目を無くして正常に戦えるわけもない。
さすがに血を流しすぎた夏侯惇が膝を付いたところで夏侯淵が近づ
く。

「姉者！……………なんて無茶を。私がどれほど心配したと思っている！
涙ぐみながら姉に縋りつく。」

「済まないな。だが勝てると思ったから……………」

「何を馬鹿な……………。もういい。姉者、その怪我じゃこれ以上動くこ
とは駄目だ。衛生兵に診てもらわねば……………。それまで姉者、これを
……………」

そう言っつて胸元から蝶をかたどった眼帯をだし、付けてやる。

「秋蘭……………。華琳様になんと言おう。体を汚し張遼まで逃がした。
なんと詫びればいいんだ」

「ばかだな姉者は。華琳様のことだ、何のこともなく許してくださ
る。駄目だったら私も詫びよう。姉妹だろう？それぐらいさせてく

れ

肩を貸し自陣に帰る。その前に兵に告げる。

「曹操軍の精兵よ！これよりあとは楽進隊、李典隊、于禁隊が受け持つ！それまでここから一步も退くな！」

必要な言葉だけを言い足早に退却する。これから先は、将のいない隊と、三羽鳥の隊の結果の見た戦。もはや語るべきことはなかった。

袁紹軍本陣。各地で名を轟かせた名称猛将がたった一人に齒がたたない。顔良、文醜、張飛、趙雲。手加減をしているわけもなく全力で迎え撃つても足止めにならなかつた。裏をかえせば、足止めは出来ていた。その間に袁紹は奥深くへと雲隠れし姿を消していた。呂布は追いかけてくともそれをさせないこの弱将にいらだちを感じていた。

「……いい加減、しつこい！」

体重をかけてもならないような攻撃でも文醜と張飛が軽々吹き飛ばす。

「うわわっ！？」「にやにや！？」

できた隙を突こうとする呂布であったが、そうはさせんと顔良と趙雲が攻撃をしてくる。その繰り返しで事態は膠着していた。だがそれも終わりを告げる。

「恋！」

張文遠の登場である。

「恋。袁紹はどこや？」

「……………（フルフル）」

首を横に振る呂布。

「知らんか。……………んー、どないするかな」

そう言っただけで周りを見渡す。総大将の姿は見えず、おそらく探す時間も残されてはいないだろう。右翼は総崩れ寸前。すぐにも兵を向かわせねばならないだろう。先程までいた左翼は善戦、だが曹操の兵が大勢して向かっている。これはもう撤退しかないか。そう思ったとき、趙雲に声をかけられた。

「随分と周りを気にしておるな？……………ふむ。そうでしょうなあ、そちらの両翼はいずれ崩れる。そうになったら自らが帰る虎牢関が落ちてしまわれますなあ。その顔に書いていますぞ？」早く撤退したい」と。いやはや、甘く見られたものです。「

「我が方がそう簡単に逃がすとても？」

その言葉に周りの将も気づいたのである。目の光が変わっていた。押されていると思っていた状況が今やこのまま相手にしていれば勝てるという逆転。先程とは違う攻撃で呂布を退かしていた。対して張遼の方は焦っていた。考えを見透かされ対処ができない。いや、対処する方法はある。だがその方法を取ることを心情的にためらっていた。そこで思い出す。

『たとえ何があってもこの大陸の果てまで、なんやったら羅馬まで一緒や！約束やからな！』

月との約束。なにものよりも優先される誓い。もう迷いは消えていた。

「……張遼隊。すまんなあ……ここで死んでくれや。恨んでくれてもええで。命令や！ここに残ってこのバカども足止めをせえ！ウチと恋は撤退や！恋、準備ええか！？」

つらそうな声が響く。呂布も顔を下げ悲しそうである。このしみつたれた雰囲気吹き飛ばせるのは当人だけ。

「張遼様。あなたが将でよかったです。あなたの兵でよかったです。これほどの大役を任せてくれるなど、これほど幸せなことはありません！さあ！早く行ってください。ここで立派に果ててみせましょう」

確かな笑顔でそう言う。他の兵も同様の顔だ。

「……高順。ああ。ウチも幸せやったで。絶対忘れん。あんたらの最後をみれんのが悲しいがこれも運命かいな。……恋！行くで！」
四将と戦う呂布に言う。

「……ん。次はころす。はあああああつー！」

一度全力で方天画戟で薙ぎ払う。一閃して素早く引き張遼隊の持ち主がいなくなった馬に乗る。

「待てっ！」

誰の声であったか。もはや関係ない。張遼隊が押さえてくれる。その確信が張遼と呂布にはあり、一度も振り返らず虎牢関に撤退していった。が、そこも、今まで見ていた光景とは違っていた。

「……なんやこれはー！」

「……敵」

虎牢関の中に敵が入っている。よく見てみると火の手も上がっているようだ。撤退の銅鑼もならないと思ったら、まさかこんなことになぜだ。たしかに両翼も攻められていたとはいえ、まだ関の外であつたはず。

「恋殿ー！霞ー！ー！」

陳宮の声がある。周りを兵を囲んでいる陳宮に問いただす。

「ねね！どうしてこないなことになつとる！？たしかに曹操と袁紹

は押さえとつたで!？」

訳のわからない状況に強く肩を掴み聞く。

「お、隠密なのです!どこかの陣の隠密が忍び込んでいたのです!最初火の手が上がり、その火を消化していたときに関門にはもう何人も張り付いていたのです!関門はもう閉まらないのです!」

「な、なんやとお!!！」

衝撃的な事実。誰にも気付かれず事を運ばれた。完敗である。

「なら、ちゃっちゃと撤退するで!撤退の銅鑼はどこや!？」

「そ、それが城壁の上にあるのです……」

「なんでそんな面倒なところに……。行ってぶっ叩いてくるから先に撤退しとき!」

そう張遼が言ったときに、その肩を呂布が叩く。

「……… 必要ない」

「何が必要ないんや!?!早くせんと……」

そこまで言って黙る。呂布が落ちている槍を手に取り、腕を引く。

「おいおい、まさか」

苦笑させ事の顛末を見届ける。

「……フッ！」

凄まじい風圧とともに槍が銅鑼に向かう。狙いは正確に銅鑼の中心を叩き、槍は碎け、轟音がなった。

「……これでいい」

もはや開いた口がふさがらない。ただこれで銅鑼は鳴らせた。

「さ、さすがは恋殿なのです！」

そついう陳宮の顔も若干こわばっている。

これで撤退はできる。虎牢関を落とされあとは洛陽しかない。月の事だ。市街戦をすることはないだろう。この圧倒的兵力差で野戦をしなくてはならない。詠は無理せず撤退しろといったがこれで一体どう凌ぐのか。そう張遼は考えていたが、軍師様の頭脳に自身が及ぶはずもないと考え、まずは目先の仕事。撤退を急ぐのだった。

第十三話 れんごう！！！！！

「虎牢関が落ちたか……」

戦場から少し離れた所の流悟が言う。戦場から離れたとはいえ護衛はいる。その護衛の早苗が言う。

「虎牢関に曹操の旗が見えますね。落としたのは曹操ですか。あたしの目ではここからでは良く見えませんでした。別働隊でもいたのでしょうか？まだ張遼隊を抜けていないように見えたのですが……」

早苗がとなりのクーに視線を移して、聞く。クーは狙撃手であるから目がいい。

「ん、確かにクーの目でも抜けてないようには見えたがね。曹操じゃないんじゃないかい？クーには姿を見せずきな臭い動きをする奴を知ってるんだ。けど。誰だかわかるかにゃ？」

クーがおどけるように体をくねらせながら言う。早苗は、何を言ってるんだこいつといったふうだが、流悟は理解する。

「まさか、孫策か……。たまに襄陽にも偵察に来るな。何かをしているようだ。尻尾をつかませない。証拠もない。気づくのがクーだけという数は少ないが厄介な隠密がいる。」

幸いにもクーのおかげで被害はないようだ。そう付け加えて言う。そんな事初めて知ったと早苗が驚く。軍議で寝てるからである。

「しかし、もし孫策だとしたら、なぜ今虎牢関に曹操の旗が立って

いる？隠密の数が少なくとも、虎牢関に混乱なり策なりして、それに乗じて攻めいることができただろう。なぜそれが出来ていないんだ」

「そいつは主らしくないね。わかってるんでしょーに。孫策は所詮客将で糞餓鬼袁術に首根っこ抑えられてんぜ。袁術は孫策に辛く当たりんす。それは意図せずにも」

クーは主に対して嘲るように言うが、それこそ意図していないものなので流悟も気にしない。早苗は理解出来ないので飽きてしまつて、赤蹴球を使つて蹴鞠をする。ゴス、ゴス、といった物々しい音を立てていることにまるで気にしない。

「……孫策つて苦労してるんだな。糧食が尽きて兵が死に体。虎牢関に攻め入る力も残っていないか」

袁術が孫策に糧食を送ることをサボっているのであった。袁術は一番後ろにいて、前の方にいる孫策など頭の片隅にもないのである。

「でしょ〜ね。哀れなもんです。せつかく手柄を立てる機会だったのに。お〜無様無様」

手を額に当て首を横に振るクー。その顔は言葉にそぐわない、いい笑顔だ。

「まあいい。それよりクー。張遼と呂布は逃げたんだな？」

それを確認しないようでは落ち着けない。この者らがいないと何のための計画か。

「確かでありんす。あの見事な逃げっぷり、何処かにいると言われ
る賢狼ですら追いつけんとすら思いんす」

そう言つて、狼の鳴き真似をするクー。その特徴的な枯れた声では
とても似ているとは思えなかつた。

「それならいい。これよりは計画は我らのもの。舞台は整い演者も
揃つた。なるべく楽しく踊ろう、みんなも連れて、有無を言わさず」

そう言つて、笑う。仄暗い笑みを。

数日、虎牢関に籠り大休止をする。虎牢関の戦いは袁紹軍の被害が
大きく、その兵の手当にあつた。この間にも董卓が軍備を整える
と周りの諸侯が進軍を進言しても、総大将である袁紹は動かずじま
いであつた。しばらくしてようやく洛陽へ向かつた連合軍。すつか
り袁紹は呂布の突破力に怯えきつて後ろに下がつていた。その下が
り方は袁紹と袁術でどちらが最下位かを争つているようである。こ
れ幸いと地位の高さをひけらかし、最前に出る流悟。

「そろそろ洛陽か。まったくここまで来るのにどれほどの難所をく
ぐりぬけたんだ、俺達は？」

「そうブーたれないでください、ここからが本番ですよ。といつて
も茶番ですが」

ほら、さっさと斥候に出すよう言つてください、とどっちが上の立
場なのか蘭々が言う。

「こらこら、そういう言い方をするな。俺達は何も知らずここに来て大真面目に指示を出すんだ。もうここは舞台の上だ」

そう注意するが、その言い方がもはや真面目ではない。

「はいはい、もうこっちで指示しちゃいますからね」

緊張感のない蘭々であった。これから先は流悟の弁に全て委ねられているのだから。

「董卓軍がいない？」

軍議が開かれている天幕の中、斥候の結果の報告と今後の行動を決めるために話し合う。

「ああ。洛陽の前に董卓軍は布陣していない。伏兵か罠があるか調べてみたが、その痕跡は見られない。もしかすると洛陽に籠っているのかもしれない」

「洛陽の中は調べられませんでしたの？」

袁紹が問う。

「さすがに敵が籠っているかもしれないところへ俺の独断で行かせるとも悪いかと思ってな。洛陽への対応は軍議のあとでも間に合うと判断した」

「そうですね。それならば誰か洛陽に斥候を送りましょうか。どなたが行けるものはいますか？」

そう言つて、袁紹は周りの諸侯を見渡す。敵の絶対防衛線である洛陽、明らかに危険であるゆえに、しばらくは動きがなかったが、一人手を上げるものが現れた。

「あの、私に任せてもらつてもいいでしょうか!？」

劉備である。？水関虎牢関と大した見せ場を作れず手柄を欲していた。それ以上に早く洛陽を救いたいという気持ちは先行していた。

「あら、劉備さん。大丈夫ですか？敵が詰まつてるかもしれないのですよ?」

袁紹が心配でもないのに聞く。このような地味な作業、袁紹にとっては誰がやっても構わないのだが、失敗してはより華麗ではなくなるからである。。

「大丈夫です!私に任せてください!」

劉備がそう言うので、袁紹も、やらせてみるだけやらせればいいのかと思う。

「わかりましたわ!それじゃ劉備さん、斥候を出して洛陽の様子を探ってください!」

すっと指をさして劉備に命じる。

「はいっ、必ず成功させてみせます！」

「それでは、劉備さんの斥候が帰ってくるまで待機ですわ！」

軍議をまとめ、諸侯が解散する。流悟は出て行った劉備を追い、話しかける。

「劉備、斥候など大丈夫か？斥候はお前が思っている以上に危険な任務だぞ」

「劉表様。大丈夫です。今ここで動かないと、私たちが何のために戦ってきたのか分からなくなります。早く洛陽の人たちを解放してあげたいし、それに朱里ちゃんも言ってたし……」

最後の方はごにごによしていたが、決意は硬いようであった。劉備は今のところ成果を出せていない。義勇軍である以上給金を払う必要がある、このままではそれがなせない状況であった。それ以上に理想のために体が動いた。

「そうか、しかし、誰に行かせるつもりだ？洛陽は敵の最後の砦、並のものでは殺されるぞ」

「それは心配ありません。劉備様の義妹で我が軍の将、張翼徳に行つてきてもらいます」

劉備の横についている孔明が言う。張翼徳。劉備と桃園の誓いを結び付き従う、怪力無双の剛の者。虎牢関で顔良、文醜、趙雲とともに呂布を圧倒した姿を見た者の話では確かに強者であるということだった。

「なるほど、奴ならそうそうやられはしないだろう。だが、見たところまだ子供。斥候の経験はあるのか？」

さすがに劉備も顔を暗くする。張飛に斥候の経験などなく、また、斥候に向いてるはずもなかった。張飛が虎牢関戦でにやーにやーうるさいことも知られていた。

「……でも、それしか方法が……」

これ幸いと流悟が言う。

「……ならば我らも協力しよう。こちらからも斥候を出す。奴は斥候の経験もあるし、頭がいいし目も利く。奴ならば上手く張飛を導いてやれるだろう」

「そんな！よろしいんですか!？」

喜ぶ劉備であったが、孔明が小声で忠告する。

「待つてくだしやい！これは我らが危険な任を負って成果を出すことが重要なのです！劉表様まで斥候を出したとしたら、手柄は劉表様のものとなるでしょう！我らのような弱小勢力が劉表様を差し置いて成果を残すなど誰が信じるでしょうか。これは断るべきです！この策は今後の民一万を救うために必要なもの！鈴々ちゃんには酷ですが耐えてもらわねばなりません！」

孔明が必死の形相で言う。孔明も自陣の勢力の維持に必死であった。劉備の明るくなった顔がまた暗くなる。

「劉表様、申し出は嬉しいのですが……。やっぱり私たちだけでや

らせていただきたいのです。それが私たちに必要なことなのです。どうか気分を悪くなされないうでください」

流悟もその言葉に考える。

出来る限り我らが一番で洛陽に入り計画を遂行したい。だが、詠のことである。手抜きなどないであろう。それに斥候として一番乗りせずとも口八丁で洛陽に一番乗りすることは可能であろう。総大将といえど何の成果も出せずに後ろに引っ込んでいたものが一番乗りしたいなど言おうとも通らない。通らせない。さて、どうしようか。

しばらく考え、一つ妙案を出す。

「……劉備。貴様が成果を求めて名乗りでたのは分かっている。だが、その理由は洛陽の救済で高潔であることも知っている。その上で協力しようと言っているのだ。わからぬか？この劉表の名は出さない。ただ兵を貸して役立ててくれと言っているんだ。貴様は自身の兵を斥候に出し、成果をあげる、ただそれだけだ」

ただの良心からの行為であると言う。劉備は驚き、孔明は怪訝な顔をした。

「ええっ！そんな悪いですよ！劉表様の兵を使わせていただくなんて！」

「構わん。私にも利があつて言ってるんだ。貴様は成り上がる。いずれ成り上がると分かっているのであれば貸しを作っておきたいと考えるのは当然であろう？」

多くは語らず、すこしばかりの本音で煙にまく。とはいえ、軍師である孔明は疑ってかかる。

「どうしてただの義勇軍にそこまでしてくれるのです？」

「成り上がると分かっているからと言っているだろうか？優秀な将と軍師、それをまとめる王。ここまで揃って成り上がらぬわけがない。さらには同じ劉の姓。私とて人間よ。親近感を覚えるものさ。それに成り上がらぬのであればそれはそれで構わぬしな」

成り上がらぬなら無理やり成り上がらせて役に立たせてもいいな、とも考える。

「……我らと劉表様では理想が違いますが……」

「それがどうした？貴様らは理想の違うものは叩き潰してしまえと、そついう理想か」

その言葉にさすがに劉備が反論する。

「違います！私たちはもつと……みんなが手を取り合って……」

「ならば我らが手を取り合うことも可能なはずだ。貴様らの理想は、ぼんやりとされていて、まるで雲のようだ。だが、それ故に多様性がある。様々な道があり縛られることがない。そのことが道理に背くと批判するものもいるであろう。しかし、貴様には人徳がある。まとめ上げる力がある。理想だけ見て判断し、能力を見ないで断ずる者のなんと愚かなことよ。そのような者こそ叩き潰してしまえ。それすら道である。……私は貴様の理想を快く思っているぞ」

警戒心を解くように優しく言う。こちらは理解していると、味方である。

「……ありがとうございます！ありがとうございます、劉表様の兵、お借りします！」

感極まったかのように言う劉備。孔明もいろいろ考えているのだから、劉備がこう言ってしまった以上、手遅れである。

「そうか、なら紹介しよう。だが、その者。優秀なんだが名を伏せていてな、真名で呼んでくれ。その者も納得しているので気にせずな。……クー！」

流悟の影から湧くように姿を現すクー。

「お初にお目にかかりやす。クーでございんす。こんたびは劉備殿の斥候として動かさせていただきましたすう」

「こいつの腕は確かだ。張飛にこいつの言葉をよく聞くように言うておけ」

ポンと頭に手を乗せ言う。劉備がクーの顔を覗き込みながら言う

「んん、この子……？どこがで見た事あるような……。ま、いつか。よろしくねクーちゃん！」

そう言うて手を出す。流悟は横目でクーを見て目で会話する。

”クー、もしかして賊のとき、戦ったことがあるのか？”

”……そのようですねえ。クーは覚えちゃならんですが”

劉備を見ると気づいた様子はない。好都合なので何事もなかったようにして、クーは握手する。

これで洛陽には入れる。必要のない行為かもしれないが確認を怠ると不測の事態に対応できない。クーなら張飛を上手く操り、邪魔されずに動けるであろう。クーは無害そうな顔をして劉備と談笑していた。もはや劉備と話す必要などない。流悟は足早に自陣に向かった。

洛陽内部。張飛とクーはすでに忍び込むことに成功していた。

「……おかしいのだ。兵隊がないのだ。こんなんじゃただやられるだけなのだ」

「こりや変ですなえ。まあ、まずは本当に兵がないのか索敵しましょうかい。張飛殿は各門を調べてきておくんなまし。クーは街の中心の方を見てきやしよう。調べ終えたらまたこの場所に」

そう言って、さっさと散る。張飛が素直に散つたのを確認するとクーは城に移動し、見る。宦官は肅清済み。禁軍は何進と張讓、董卓軍の諍いで、もはやあってないようなもの。もとよりその場所は月が押さえており、楽々と侵入できた。

「さてさて、準備万端整ってますかつと」

とある人を確認する。

「おうおう、ブルブル震えて。生まれたてですかい？クーには関係ありませんが。さあさあ、仕事をしましょう。そうしましょう」

連合軍天幕。洛陽への斥候の結果報告を劉備が語る。

「洛陽には董卓軍の姿がありません。城にもです。民にも話を聞いたところ、董卓さんは七日ほど前から姿を消してしまつたと。このことから董卓さんは洛陽から逃げおおせているのでしよう」

おおっ、と周りから声上がる。それもそのはず。董卓軍がいないということももう戦はなく、連合の勝利ということなのだから。

「おーほっほっほっほ！董卓軍は私の威光に恐れをなして逃げてしまいましたのね！皆の衆！今ここに連合の勝利を宣言しますわー！」

今度こそ歓喜の音が響く。

「それでは早速、陛下を救いに洛陽に向かいますわよ！」

袁紹が言うが、流悟はそのまま流す。斥候として動いたクーがすべてを終えてくれていた。今さら誰が一番乗りしようかと構わなかった。もちろん全軍が洛陽に入るわけではなく諸侯とその親衛隊のみで、他の者は周囲の警戒をする。総大将の袁紹が入り、流悟、袁術、孫策、公孫？、馬超、曹操、劉備と順々に入っていた。

そうして諸侯が見たものである。洛陽は復興し、まさに天子のおわす都と呼ぶにふさわしい。董卓の暴政で荒れたとは、到底思えなかった。

流悟が言う。

「こつ、これは……！袁紹……！貴様、これはどういう事だ……！」

顔を赤らめ激昂する。袁紹もその剣幕に狼狽する。

「な、なにがですか？」

「なにがだと！？貴様、この都の状態を見ていつているのか！？檄文では董卓は暴政をし民は苦しんでいると、そうあったな……！」

「た、たしかにそう書きましたけど……！」

「ならば、この洛陽の姿はなんだ！どこに苦しんでいる民がいる！？誰が暴政をしていると！？まさか貴様、謀ったな……！」

そう言つて、殺気立つ。それは誤解だと袁紹が反論する。

「ち、違いますわ！確かに私は洛陽は荒れていると、そう聞きました

たの！」

「誰に聞いた！？本当に信用できる者であろうな！？」

そう聞かれ、袁紹が言う。確かに信用できる人物。その名を。

「それは……りゅ、劉協様ですよ！！」

劉協。靈帝の次子で劉弁に次ぐ皇帝候補。これ以上なく信用できる人物であった。

「劉協様から文が届きましたの！内容は『劉弁は死に、何進と張讓も殺された。余は董卓に囲われ洛陽は董卓に牛耳られている。四世三公の袁家になら頼める。余を救ってくれ』と、そう書かれていますわ！私はそれに従っただけですよ！」

たしかにそれが本当なら袁紹の言い分ももつともだ。

「……それは本当に劉協様のものか？捏造したのではあるまいな？」

「たしかに劉協様のものですわ。ここに文もあります。確認していただいても結構ですよ」

その文を手に取り、袁紹以外の諸侯がそれを見ようと集まる。袁紹の行った通りの内容に劉協様の名に印。勅を示す玉璽の印まで押してあった。

「たしかに信用できるものようだな。これは、どういふことだ？洛陽の様子を見ればわかるが董卓は暴政など敷いていない。である以上、董卓に囲われているというこの文もいささか不信である。劉

協様はなぜこのような文を……」

困惑する諸侯。ここにも何もわからないと流悟が提案する。

「……劉協様に直接聞くしかあるまいな。もとよりこの連合は劉協様のもの。劉協様の安全を確認するためにも劉協様に会わなければならん」

周りの諸侯を見る。袁紹はひとまず疑いが晴れたとほっとして、袁術はなにがなんだか分かってない。曹操は茶番に付き合わされたと渋い顔、それでいて面白いとニヤリと笑い覇気をむき出しにしている。孫策は目を閉じ無表情であった。公孫？は怒り顔。自身を利用し、劉協様を利用し、この絵図を書いた者に憤っている。この中でも劉備の顔が歪んでいた。洛陽を救おうと戦ってきて、その結果がこの有様。自身の無力さと不甲斐なさ、民への申し訳なさで目が潤んでいた。

公孫？が劉備に話しかける。

「桃香。大丈夫か？」

その言葉に反応を示さない。流悟も語りかける。

「劉備、我らはこれより城へ、劉協様に会いに行く。ここでぼーっとしていたならそうすればいい。後で何があったのか教えてやる。付いてきたいなら勝手にしろ。貴様の自由だ」

そう言って、背を向け、城への道に行く。振り返る必要などない。

「……行きます。ここで引き返すのなんて卑怯者です」

どついつ目をして言ったか。背を向けた流悟にはわからなかった。

劉協のいる城の中へ進む諸侯。どついつわけか厭に静かで、人の姿が見られなかった。

「……静かね。もしかして皇帝付きの者も董卓で、董卓と一緒に逃げ出してしまったのかしら」

曹操が言う。

「……禁軍を率いていた何進は張讓に殺され、張讓率いる宦官は董卓に殺されたというからね。もしかすると董卓以外の者がいなくなってしまったのかもしれないわね」

孫策が呟くように答える。

「清流派はどうしたんだ？あいつらはたしかまともな奴だったはずだぞ。あいつらが皇帝を見捨ててどっかに消えるものか？」

公孫？も続く。

「……もしかしたら、死んでるかもしれないわね」

曹操が公孫？に答える。

「ええっ！？いやいや、だれにだよ！董卓は善政を敷いてたんだぞ！なんでまた清流派を……」

「……」

それきり黙る曹操。曹操はこの澁んだ雰囲気、この状況を見て良からぬことがあると予想が付いているのかもしれない。それを受けて口を尖らせる公孫？。

「なんだよ。べつに私は曹操みたいに頭よくないけどさー、教えてくれたってさー」

ブツブツ文句を垂れる公孫？であった。

人もいない以上、虱潰しに劉協を探す。宮廷を許可無く漁るなど本来であるなら不敬であるが、皆劉協の安全を確保するという名目でそのことを意識的に忘れ、探していた。

数刻探して、ようやく袁紹が見つかる。とある一室。到底皇帝がいるべきところではない、外からよく見える場所。

「きゃあああああああ！！」

袁紹の悲鳴。何事かあったと諸侯がすぐさま袁紹のもとへ向かう。そこで見える。横たわり血を流す姿を。

「劉協様！……！」

先についた流悟が叫ぶ。

「誰もここを通るな！これは貴様らのようなものが見ていいものではない！！」

あとから来た他の諸侯を足止めする。流悟は腰を抜かした袁紹にゆっくり近づく。

「あ…ああ…。りゅ、劉表様、これは……」

顔が蒼褪め、震える袁紹。

「その様子を見ればわかる。お前がやったのではないのだな。安心しろ、劉協様は私が見る」

そう言つて優しく肩を抱き、ポンポンと頭を叩く。肩が液体で汚れるのがわかるが気にしない。落ち着くまでそうしてやって、劉協をみるために離す。そのときに袁紹が、ひっ、と小さく悲鳴を上げ流悟の服を掴んだが、流悟が頭を撫でるとゆっくり離していった。

「劉協様……。」

劉協をみる。心の臓に刃が突き立てられ、大量に血を流し、息をしていない。体は冷たく、少し青く痣のようになっていた。もう確認するまでもなく、劉協は死んでいた。

「曹操、貴様も確認しろ。袁紹はこの有様で役に立たん。私と貴様の二人で確認し、私が宣言しよう」

袁術は子供。孫策はただの客将。劉備と馬超、公孫？は官位が低い。そう思つて、西園八校尉の曹操が選ばれた。

「はっ」

部屋に入る曹操。すでにその死臭に気づいていたのであろうが、劉協という大物の死に驚きを隠せていない。

「……確かに亡くなっているかと。正確にはわかりませんが、目の濁り具合、体の硬直具合をみますとまだ死んで間もないと思われま
す」

「……そうか。ならばここに宣言しよう。霊帝劉宏様の次子、劉協様はここに亡くなられた」

死した劉協に対して膝を付き、頭を下げ、拱手をする。このときだけは袁紹も泣くことをやめ、静かに鎮魂に思いを乗せた。

劉協の亡骸を、皇室御用達の葬儀屋に任せる。これ以上、諸侯にできることなどなかった。今までのこと、今後のことを話すため、一度諸侯で集まることにする。さすがにこの大人数、洛陽に留まるわけにもいかず外に天幕を張り、そこで話す。

「……いったいどういう事なんだ？」

そこにいる流悟、曹操、孫策、劉備、公孫？、誰もが思っている疑問を口にする。袁紹はそのまま倒れ、袁術はその雰囲気になえられ

ずどこかに消えた。马超は涼州の馬騰に報告をすると言って旅立った。

「劉協様が勅を出し、連合を発足させた。その理由は暴政をなす董卓の討伐」

「実際は暴政などなく事実無根。なぜ勅が出された？」

「董卓が劉協様に指示をしたか？ありえない。そのようなことする必要がない」

「劉協様は死に、真実は闇に」

「董卓は自身と洛陽と劉協様を守るため、連合と衝突」

「圧倒的戦力差で、当然のことながら董卓は敗走。洛陽を戦場にしないためにもどこかへ消えた。劉協様を置いて」

「なぜ置いていった？連合が劉協様を救うためであると知っていたから」

「だが劉協様は死んでいた。一体誰が殺した？」

「劉協様は死んで間もなかった。つまり、董卓がいなくなって数日してから何者かに殺された」

「董卓ではない。あるとき洛陽にいた人物。民であろうか」

「民が殺したのであるならばその理由は？」

「自分たちを苦しめたという怨嗟ゆえ」

「その怨嗟、劉協様に向かうだろうか。劉宏様の時代に築いた怨念であろう？それに今はまさに復興していた。劉宏様が死んで劉弁様劉協様の時代に」

「民ではない。ならば誰が？」

そこまで誰が話したであろう。皆の無意識が自ずと口を開かせ、会話をさせた。

「あるとき、連合の前に忍び込んだ人物。それ以外いない」

ただ一人に視線が向く。

「劉備、貴様がやったか？」

諸侯の目が劉備を貫くようにしていた。劉備はその目に怯え、あちらこちらへ目をそらす。

「えっ……？えええっ！？ちち、違いますよ！私が劉協様を殺すだなんて……」

「なぜ、違うと言える？貴様が斥候を出し、誰よりも早く洛陽に入った。そのときに殺したのではないのか」

「そんな、そんなことするはずありません！！そんなの………そんなの絶対おかしいです！」

劉備が助けを求めるように流悟を見るが、問い詰めているのが流悟であり、その目は冷たかった。

「おかしいというなら抗弁してみせろ。できないというなら貴様は………」

そこまで言ったところで静止が入る。

「その辺りにしていただけませんか？私の友人を謂れなき罪で裁こうなど」

公孫賛伯珪。立ち上がり劉備をかばうように前に立つ。

「この陰謀の突端は劉協様の勅であります。劉協様に勅を出すよう促すなど、ただの義勇軍の劉備には不可能です。また、連合に参加した後、劉協様暗殺を思い至ったとして、わざわざ斥候を自分から志願しそのときに殺すなど、自身を疑えと言っているようなもの。なにより理由がありません。この劉備はただ民に報いる善の塊のような人物です。劉備が暗殺するなど、ありえません」

そう毅然と言う。目に力があり、一步も退かんという決意が感じられた。

「……………くっ、はっはっはっ！たしかにその通りであるな！私は劉備のことをよく知っているつもりであったが、公孫賛殿には負けま
すな」

笑って席に戻る流悟。その姿を見送ってから公孫？は劉備の頭に手を乗せ、撫ぜた。安心しろというように。

「もうこの話はやめにしよう。出てこない犯人を捜すなど不毛である。今後について話そうか」

周りの諸侯を見渡すが、反対もない。

「では、まず、董卓について。私はこの洛陽をみて善良な者であると悟った。しかし、いくら善政を為そうとも、このような事態を起こしたことは重大である故、罪はある。あるが、董卓もこの戦で十分な罰を受けたであろうさ。奴がどこに逃げたか知らんが、このまま放置で構わんであるう。つまり、反董卓連合はここで解散する、というのはどうであろうか？」

文句があろうと、この場の最高官位が言う以上なかなか抗弁できない。それに皆董卓などどうでも良かった。ある程度の戦果を上げ、ある程度の目的を為し、満足いつていた。

「では、褒賞について。これは漢の国庫から使わせてもらおう。官位は与えられんが、その分の金を出そう。どれくらいの金になるかは国庫に入っている量と袁紹にでも相談しろ」

流悟の漢の国庫から勝手に使うという荒唐無稽な話に劉備はたまらず声が出る。

「待ってください。いいんですか？そんなことして……」

「構わないさ。もう漢は滅亡したのだから」

そう、ぽつりと言う。何でもないように、平然と。

「……は？」

劉備はあまりの言葉に呆然としてしまう。曹操が呆れるように言う。

「何そんな顔してるのかしら。劉協様が亡くなって、他に後継もないのであればそれはもう漢の滅亡じゃなくて？」

「えっ、えっ？だ、だったら劉表様が益州の劉璋様は……？」

流悟が言う。

「俺は荊州で手一杯だし、やる気もない。劉璋など連合に参加もしていない。袁家以上の愚物よ。なにより、玉璽のない皇帝など誰も認めはしない」

「あれっ、玉璽って見つかってないんでしたっけ？」

劉備の言葉に、はあ〜と溜息をつく。

「まあいい。劉備のためにも改めて宣言でもしておこう」

「漢王朝は皇帝劉協を以て終わりを告げた！これよりは群雄割拠の乱世である！これよりは官位も家柄も関係なく、ただ力のみが自身の立脚地なり！この場にいる誰かがこの大陸を支配するものである！」

流悟がどこまでも通るような声で宣言する。その言葉を聞いて諸侯

の眼の色が変わった。

「ふふつ、嬉しいわ、劉表。もう私たちはそれぞれが個。もうあなたに吐き気が出そうな敬語なんて使わなくていいのね」

最初から使っていないだろうと思うも、それに答える。

「ああ、構わんぞ。私の官位、家柄はもはや無に帰した。仮にも太守と客将の間柄だが、まあいいだろう。だが、貴様のような弱者は口の聞き方に気をつけたほうがいいだろうさ」

双方笑いながら、殺気を剥き出しにする。曹操がそれを無視するよ
うに言う。

「勝手にやってて頂戴。そんなことよりこの洛陽はどういう扱いにするのよ。誰が統治するの？だれもないのなら私が統治するけど？」

「いやいや、待て待て！領地なんて一番美味しいところじゃんか！」

「そうだけど、適当な者がいないじゃない。洛陽のある司州に接しているのは私と劉表と麗羽だけよ。劉表は荊州があるし、麗羽は……あなた、あの様子の麗羽を劉協様の居たここに置いていけるの？
というか麗羽の統治じゃ洛陽が滅びるわよ。それともなに？公孫？
あなたがやる？。飛び地になるけど治められるのかしら？」

一息に言う曹操。公孫？も統治できる自信はなく、うぐつ、と奇妙な声を出した。

「あのっ！だったら私が！」

びよんぴよんと跳ねながら言う劉備。

「ただの義勇軍がいきなり太守なんて任せろわけ無いでしょ」

あっさり野望は潰えた。

漢王朝の滅亡。長きに渡って続いた王朝も権威をなくし、腐敗し、終りを迎えた。しかし、この滅亡が残したものは大きく、新たな時代を迎えさせた。次代を担う英傑が揃い、やんややんやと騒ぐ様に、暗い未来など想像できるはずはない。この乱世を乗り切る者こそ、この大陸を統べるにふさわしく、そしてそれが永劫続くと思えただった。

「おい、七乃。井戸に何か見えるんじゃないか」

第十三話 れんじゅう！！！！！（後書き）

これはひどい。呼んでくれてる皆さん、本当にごめんな…。ここおかしくね？っていう指摘ください。直せないとは思っけど次に繋げるようにする。活動報告で大反省会するか…眠いから明日

次回は董卓とか馬超の話。あと計画の話とか

もともと、やりたかったのは董卓勢力を残した上で協力関係にしたかったんだよ。これでなんとかなるかなあ

位置関係は馬超のいる涼州、董卓のいる雍州（恋姫ではここ涼州扱い？）、劉表のいる荊州と繋げて関係を…と

最後の語り、誰視点だよw

第十四話 れんごう!...!...! (前書き)

だれかサブタイトル考えて……

110626 : 第十五話と結合。なんか読みなおしてみると分割する必要のないような気がして……。ややこしいこととしてすみません。

110626 : 思ったら話数を削ることできないみたいですね……。また戻す簡単な作業。すみません。

第十四話 れんごう！！！！！！！

洛陽を離れ、長安へ向かう董卓軍一行。とうの昔に洛陽を後にしていた一行にとって、長安は間近であった。事前に決められていた道を十分な糧食を持って、余裕を持った行軍であった。とはいえ、その余裕は一部の限られた者だけで、兵たちは後ろを何度も振り返り追っ手が来ていないかを確認し、荒い呼吸をしていたのだった。それもそのはずである。董卓軍は負けた賊軍、それも朝敵である。これから安息の地などあるはずもない、どこまでも我らは追いかかれ、追い詰められる。そう兵が考えるのも当然であった。それでも脱落者も少なく行軍するのは、月と詠、そして将が余裕の表情であったからであった。その表情で心を折られずにいられた。

「月、大丈夫？」

詠が月に話しかける。月が気丈に馬に乗っていて平然としていても、詠はやはり心配であった。

「詠ちゃん、私は大丈夫だよ。そんなに駄目そうに見える？」

月が微笑みながら言う。付き合いの短い者ならば安心させるような微笑である。だが、詠には月の心情を理解していた。今後の不安、洛陽の民への心配、兵たちに対する申し訳なさ。確かに月は心の中で泣いていた。詠は自身の愚策のせいでそのような顔をさせてしまっていることに悲しんでいた。その一方、不謹慎であると分かっていたが、どうしても笑みを浮かべることを止められなかった。

「ううん、しっかりしてる。ボクの心配しすぎね」

（この一件で月は成長してる。今までなら不安気な表情なんて隠せるわけなかった。ううん、それどころか心労で倒れてたっておかしくない。それが今や兵に、将に安心感を与える笑顔を見せてる。…この子について来て良かった。この子を王にしたいと思って良かった。）

王才の発露。詠はたしかにそれを月に感じ取っていた。それ故に詠は余計に改めた。

（ボクが窮地に追いやった。何が英雄にしてやるよ、何が王にしてみせるよ。…何が謀略の徒よ…！ボクの無能さが月にそんな表情をさせているというのに何喜んでるのよ！…月が成長して、ボクがこのままなんて…いいわけ、）

「ないでしょーがー！」

詠が天に向かって叫ぶ。唐突の絶叫に月が目を丸くし、驚く。

「ど、どうしたの、詠ちゃん？」

上げた頭を、ぐりんっ、と月に向け高らかに宣言する。

「どうしたもこうしたもないわよ！月！安心しなさい！ボクが必ず月を王にしてみせるわ！この賈文和が！必ず！」

その言葉は洛陽に入る前と同じ言葉であったが、力が違った。月は詠の燃え上げる目と宣言に呆然としていたが、その力強さに背中が押されるように言った。

「うん。詠ちゃんならきつとできる。私も頑張る。でも、私は詠ち

やんをこの大陸最高の軍師にしたいな。詠ちゃんはどう思う?。」

その言葉に意表を突かれた詠であったが、その上昇志向の性格に火がついた。

「やってやるに決まってるでしょうに!! 最高の王に、最高の軍師が揃って国を作るのよ!。」

「へう……。最高の王なんて恥ずかしいよ。」

先程までの王の顔はどこに消えたか、顔を赤らめ頬に手を当てる月。その月の頭に手を乗せる者。

「ひどいな。この最高の将を置いて二人で国作ってしまうんか? 苦労してここまで付いてきた言うのに、捨てられてしまうんか。」

よよよ、とあからさまな嘘泣きをする霞である。

「へう……。霞さんも一緒ですよ。霞さんだけじゃないです。恋さんも華雄さんも、今ここにいる兵隊さんも。」

一度そこで区切り、また話す。

「最高の国には、最高の王、最高の軍師、最高の将、最高の兵、なにより最高の民が必要なんですから。誰一人だっで見捨てませんよ。」

月のその言葉は、決して大きな声ではなかったが、兵にまで確かに届いていた。詠はその月の姿に誇らしげに胸をそらした。驚いている霞に、将に、兵に。どうだ、これがボクの親友、董仲穎だと。こ

れが我らの王の姿だと、そう言っているようであった。

「……なあ詠」

「なによ」

「……ウチらは幸せもんやなって言いたくてな。こんなんがウチらの総大将やねんて。……兵の目を見てみい」

そう言われ詠が兵を見る。歯を噛み締め、目を充血させ、頬には濡れた一筋の跡。

「もうこいつらは大丈夫や。このあと脱落者なんて出るわけがない。もう月と一緒にいること以外頭にないんやろな。……もちろんウチもやで。今なら百万の軍勢すらウチ一人で叩きのめしたるわ」

将が、兵が、月の言葉で奮い立つ。詠もその一人であったが、月を初めから支えてきた者として、その感慨はひとしおだった。

そうして、その行軍は一人として脱落者を出さずに日没までに長安までたどり着いたのであった。

「はあ〜。よじやっつと一息つけるわ〜」

月の部屋に主だった将が集まり、話す。

「何言ってるのよ、襄陽まで先は長いわよ。休んでなんかいられないんだから」

詠の言葉に霞が答える。

「そつやなく。襄陽言ったら荊州の……って襄陽！？　なんでそんなところに行かなあかんの！？」

先ほどまでの屍の如くくたびれた姿勢から、はねるように姿勢を伸ばし詠に聞く。

「なんでつて……。今、天水に帰ったら馬騰に殺されるでしょうが連合にいたんでしょ？」

詠が、霞の驚きっぷりに身を引きつつ言うが、霞はそんなことはお構いなしに聞く。

「せやかて！　襄陽言ったら劉表の領地やで！　あんのアホ、月と仲良うしたい言うてたのに連合におった、いわば裏切りもんや！　そんな奴んところに行くなんて死に行くつもりつもりつかいな！」

霞の熱の込もった弁に、詠は月と顔を見合わせ相談する。

「ねえ、月？　もう話しても大丈夫かしら？」

「うん、大丈夫だと思う。追っ手も来てないし、私達ももうすぐ荊州に入れるから……」

「……そうね。ここまでついて来てくれたなら裏切りも無いだろうしね」

月と詠の二人だけの会話に、霞が割り込む。

「さつきから何話してんねん!? 劉表が華雄を殺したんやで! 劉表なんかより馬膾を頼った方がええって! あの妖怪なら話聞いてくれるって!」

興奮する霞を抑えるように、どうどう、と言って気を鎮めさせる。

「安心しなさい。劉表はボクたちの味方よ。……劉表って言うより流悟って言った方がいいわね」

霞は詠が劉表を味方と言ったことに、それ以上に劉表の真名を言ったことに驚いた。声にならぬ声を発したあと、一度気を落ち着けるために卓上の酒を呑む。勢い良く呑んだせいで咽てしまいが、それが功を奏したか落ち着いて話す。

「……劉表が味方ってどういうことやねん。ウチは? 水関であいつにやられてんで。ウチでもム力つく挑発して華雄は突っ込んで死んでもうた。あんなん言う奴が味方だなんて、とても信じられん」

「推測でしかないけど、それ途中から流悟が他の諸侯を割り込んで挑発してなかった? もしそうなら諸侯に殺されないように、過度なまでの挑発をしたのよ。そうして自分が相手をし、生け捕った。……華雄は遅かれ早かれ関から出て行くって霞は思わなかった?」

「……それは……そうやったけど……」

口を尖らせ、納得してない様の霞。詠はその様子を見て言う。

「納得できないようね。最初から話してあげる。まずは流悟が洛陽で……」

そこまで言ったところで部屋に慌てた伝令が飛び込んでくる。

「でっ、伝令！ こちらへ向かってくる軍勢あり！ 先陣に三百程度の小勢とその五里ほど後ろに砂塵が広がっております！ その砂塵の大きさから数は一万以上と推察されます！」

その伝令の内容に誰よりも驚く詠。

（そんなはずない！ なぜこんな早くに連合が来るの！？ ボクたちは虎牢関から兵が帰ってきてから一日だけ休んで、すぐ出立したのよ！？ ボクたちが長安に行くことは信頼できる将だけにしか知らせてないし、連合は負傷者の手当に洛陽への斥候、さらには劉協様の件がある！ ただでさえ大軍で動きが遅いのに、ボクたちに追いつけるはずが……）

「そんなはずない……」

（そつだ。そんなはずはないんだ。いくら流悟が失敗しても、ボクたちが洛陽から早く出て、連合が遅く洛陽に着いたのは間違いない。にもかかわらず、どうして、まるでボクたちが長安に行くとは知っているかのように、ここまで来れるの？ ……まさかボクたちは、切り捨てられた？）

「詠ちゃん」

その言葉に詠は目が覚める。月を見れば今は何をすべきか、わかる。

「伝令！ 鋒矢の陣を敷きなさい！ 一度全力でぶつかって然るべきときに撤退するわ！ 先鋒は恋、頼んだわよ！」

「はっ！」

その伝令に指示し、自身も部屋から出ようとしたりしたときにまた、伝令が来る。

「伝令であります！」

「なによ、次から次へと！」

苛々しながら詠が問う。

「報告します！ 軍勢の旗は馬！ 軍勢は一万ほどで、先陣の寡兵と距離を離して待機しております。使者が来ており、『涼州は董卓に敵意無し。董卓殿との謁見を。董卓殿には劉表の使いと言えはわかる』と」

「劉表の使い？」

詠が表情を変え、眉を寄せる。月が詠に迫る。

「もしかして、馬騰さんも味方になってくれたのかな」

「……どうかしらね。流悟が裏切ったのかも」

「ふふっ、きつとそうじゃないよ」

「どっつしてそう思うの？」

「だって、そう思うから……。詠ちゃんだって本当はわかってるんでしょ？」

「……軍師はいろいろ考えておく必要があるのよ」

月が微笑むが、詠は腕を組んで顔を逸らし、フンツ、と鼻を鳴らして仏頂面だ。

敵ならば、今更使者など必要ない。軍の大半と距離をとっていることから戦を望んでいないことがわかる。騙し討ちのためとも考えられるが、名声求める連合にそのような卑怯なこと出来るわけもなく、なにより、涼州の民がそれをするはずがなかった。それに、呂布のいる軍に寡兵をもって戦おうなどそれこそ愚の骨頂というものである。

月が

「会いましょう。陣も解いて後ろに下がり、準備だけしておいてください。恋さん霞さん、護衛を頼みます」

「ねねは陣を束ねておきなさい。いざとなったらあなたが指揮をとるのよ」

「ねねは恋殿と一緒にいるのですぞー！」

音々音が騒ぐのを恋が収める。

「……ちんきゅー、下がる」

ポクツ、と頭に拳を落とし黙らせる。

「うつつ……恋殿の頼みなら仕方ないのです……。詠は感謝するのですぞー！」

音々音が指を突きつけるが、詠は面倒くさそうに手を振って終わらせる。

「よしっ！ それじゃあこれから謁見に当たるわ！ しっかり準備なさい！」

詠がそう言っつて、将を散らせる。最後まで残った霞が聞く。

「……この謁見が終わったら、さっきの話聞かせてもらっかん」

「……言われなくても。今は謁見が無事に終わるように動きなさい」

霞は月と詠が仲間だと信じているが、疑うように聞いた。今まで死線をくぐり抜けてきた仲間ならすべて話してくれても良かったのに、なんで話してくれなかった。そういう思いで。自分が頼られなかったと、悔しそうな顔で。それでも笑いながら、詠の頭をくしゃつと撫でて言う。

「ったく、詠は余計なことばかり考えるなあ……。ウチかて月のために汚れる覚悟決めとるんやから、少しぐらい話してくれえな。詠もそのまんまじゃ、いつか潰れてまっつで」

そっぽを向いて、されるがままの詠。

「……わかってるわよ。……もうボクひとりじゃないんだって」

その耳は赤く、言う。

「……ありがとう」

その言葉に霞は、ニシシッ、と笑うのであった。

「私が董仲穎です。こちらが軍師賈文和。護衛は呂奉先と張文遠です」

各陣営から離れ、荒野に立つ僅かな人影。そこで会話する。

「会えて幸いだ。あたしが馬騰の娘、馬孟起。恥ずかしいことなんだけど軍師もいなくてな。護衛はあたしの親衛隊だ」

本当に恥ずかしそうに手を頭に寄せ言う。

「こうしてあたしが来たのは報告のためだ。あたしも計画に乗ったし、その計画は成功した。その報告とっ！」

馬超が後ろの護衛から一人捕虜を連れてくる。その捕虜の姿を見

て、霞が一番驚いた。

「か、華雄!？」

手足を縛られ、口には猿轡。憔悴しているものの、元気そうであった。

「こいつを送るように言われてな。襄陽に連れて行って待つより、董卓のもとに返したほうが少しは落ち着いて話もできるだろうって」

そう言って華雄を月へ渡す。月が猿轡を外し、霞が縄を切る。

「……んっ、ぷはあっ! と、董卓様! よくご無事で……」

「華雄さんもご無事で何よりです。本当に嬉しいです」

「このバカ、よう生きとったな」

霞が華雄の頭を飛龍偃月刀の柄で小突く。今まで縛られていた華雄は止めることもできず、そのまま受ける。

「うぐっ! 董! 卓! あがつ! 様! 本当にっ! 申し訳! んぎっ! ……この張遼! いつまで叩いているか!」

お、怖いと言って逃げた張遼を追う華雄。体がうまく動かず追いつけるようには見えなかった。二人がじゃれている間に話す。

「马超さん、本当にありがとうございます。こうして華雄さんを連れてきてくれたことで、あなたが私たちを討つ気がないのがよくわ

かりました」

「そう言ってもらえて嬉しいよ。あたしは天水で善政を為す董仲穎の話は聞いていたから、どうしても連合に納得できなくてさ。それでも漢への忠義を示さないわけにもいかず、連合に参加はしたけど……やっぱり、な。そんなときに劉表様が声をかけてくれたんだ」

「そうですか……。……計画の話はどこまで聞いてますか？」

「全て、さ。劉表様と董卓殿が仲間になったきっかけから、劉協様の死まで」

どうしてもそこで会話が途切れる。自身の不甲斐なさから皇帝までも利用してしまったことに、二人は気を落としてしまう。

「……流悟さんは私たちに言っていましたか？」

話題を変え、話を続ける月。ああつ、と言って馬超はこめかみを軽く叩いた。

「そうだそうだ。忘れるところだった。伝言があるよ。『これから天水に帰るのも襄陽で身を隠すのも自由だが、天水に帰る場合、いつでも構わんから華雄を連れて襄陽まで来い。会わせたい奴がいる』とのことだ」

「会わせたい人……。……ですか？ 誰でしょうか。まさかあの御方ではないでしょうし」

自分で言っつて、その内容に気を落とす。思い描いた人物が自身と会っはうがな。自身の無力さと保身のために、殺してしまったあ

の御方と。

「わかりました。流悟さんにここまで恩を受けて天水に帰れるはずがありません。私たちはこのまま襄陽に向かいます。馬超さんはこれからどうするんですか？」

「あたしか？ あたしは西涼に帰るよ。洛陽で褒賞の話とかしたかったけど、まあ、董卓殿が助かったんだからいいかなって！」

屈託なく笑う馬超。連合に参加して、糧食の損失も兵の損耗もあり、それに補填に金もかかるのだが、そこは脳筋馬超。あまり深く気にせずこの出来事を糧にすればいいと思っていた。もう少し頭が働けば劉表との繋がりが必要な財産になると、理解できていたのだが。

月は馬超の私欲なく自身を助けてくれたことに感銘を受けていた。一度も会ったことはなく、噂でしか知らない自分を救うために危険な橋を渡ってくれた。そのことにも感謝していたが、なにより、自身とは違うそのあっけらかんとした姿に魅力を感じていた。同じような性格の霞に似ていたせいかもしれない。同じようだった。

「馬超さん。私の真名は月です。どうか私の真名を受け取ってくださいませんか？」

その言葉に謙遜する馬超。仮にも太守の月の真名を、ただの将のあたしが受け取っていいのかと。

「ええっ！ あ、あたしはただ自分が救いたくて勝手にやったこと……。なにも真名まで……」

「そうじゃないんです。もちろん感謝の気持ちもありますけど、そ

れ以上にあなたのことが好きになりました。その好きになったあなたに受け取って欲しいんです」

その言葉に馬超のみならず、詠が驚く。というより、詠が一番驚いていた。

「ええええっ！！ いやいやいや！！ そんなこといわれてもっ！

あ、あたしは普通に男が好きだしっ！！」

「ちよつと月！ いきなりなんてこと言い出すのよ！？」

月の正面と横から同時に大きな声を響かせ、月に詰め寄る。

「へうへ、そういう意味じゃないよ。ただ、友人として好きだよってだけで……」

「あああつ、あ、良かった……」

三人とも誤解に真つ赤になって、お互いの顔を見合わせる。その熟れた林檎の顔に同時に吹き出し、笑った。それぞれ笑い方に個性があり、豪快に、慎ましく、恥ずかしがりながら。

「はあ。笑った笑った。あたしも気に入ったよ。あたしの真名は翠！ 受け取ってくれるよな月！」

「もちろんです、翠さん」

「ボクの真名は詠よ。よろしく翠。これから隣州同士、世話になるとおもつわ」

月が真名を交わしたことで、他の将も同様に真名を交換していく。

まだ太守の馬騰と面識はなくとも、たしかに西涼との繋がりをもった瞬間であった。

「翠さん、今日は長安に泊まっていてください。もう外も暗い。お話も聞きたいですし」

「そうだなあ。……うん、そうしようか。ここまで超特急で来てうちの兵も馬も疲れてるだろうし」

そう言って、兵の方を向く。

「おい皆！ 今日のもう遅いから長安に寄って休んでくぞ！ 明日には西涼に向けて出発するから体を休めておくんだぞ！」

そう言つと勇ましい声が返ってきたのであった。

「」「応っ！！」「」

戻って月の部屋。先程の顔ぶれに翠が加わっていた。

「計画というのはね、流悟が考えて、ボクたちと流悟の共同で実行した作戦、大罪のことよ。いつの間にか翠まで加わっているようだけれど」

詠が横目で翠を見る。何故か翠は照れていた。

「そんなことはわかっとなるわ！ その作戦の内容が知りたいねん！」

霞の言葉に他の将も頷く。詠は自身に集まる視線に気を良くし、饒舌に語る。

「慌てなくても最初から話してあげるわ。まず、流悟が洛陽に来てボクたちの危機を知ったところから、ううん、彼が危機を知り、それを打開するために劉協様に話をするところからね」

そう言って、詠は丁寧に思い返しながら話すのだった。

第十五話 れんごう！！！！！！！！！（前書き）

徹夜二話（と言っても分割しただけ）連投。最近遅れてたからなあ。
ああ、いつもどおり眠い

110626：董卓鬼畜分を加筆修正

修正箇所は『余計なことしゃべられちゃ困るからね』から下を数行
追加

第十五話 れんごう！！！！！！！！！

洛陽宮廷。その豪華絢爛壮大華麗なその一室に、皇帝劉協はいる。その部屋の周りには人払いがされ、護衛の姿はなくなっていた。通常ではいかなる場合にも皇帝に護衛は付くはずであるが、この時ばかりは違った。すでに宦官は肅清され、護衛は董卓軍のものが担っているからである。

その部屋に劉協が一人、部屋の扉の向こうに流悟がいた。

「劉協様。居られますか？」

流悟が声をかけるまでもなく、そこにいることは分かっていた。

劉協の悲痛な泣き声が届いていたからである。

「っ！ 誰じゃ！ 誰にも会いとうないし、話すことなどないと言ったであろう！」

扉に声が叩きつけられ、同時に扉が何かぶつかつたかのように震えた。

「劉協様。私は劉景升でございます。劉弁様のこと、大変御労しく、哀悼の意を表する次第であります」

「劉景升？ 景帝子孫の劉表であるか？……そうか。よく来てくれたの。姉様も喜んでおるであろう。だが、余は体調が悪くての、会うことは出来ん。またいつか来てたもれ」

劉協も自身の姉の死の弔問に来てくれた血族を蔑ろにすることはなく、それでも、会うことを拒んだ。

「……劉協様」

「……もう話すことはないといったぞ」

その言葉からしばらく黙り、意を決したように言う。

「……劉協様」

部屋から返答はなく、気にせず続ける。

「……劉弁様がお亡くなりになり、頼れるものは十常侍だけ。その中で有力者張讓に貴方様はとても懐いていたと聞いております。その張讓を、董卓が、殺した。そう聞き及んでおります」

劉協が宮廷に籠る核心に迫る。

「劉協様の心中、お察しします。さぞや悲しいでしょう。さぞお嘆きのことでしょう」

「……それがわかって！　なぜ貴様はそこにいる！　なぜ余を放っておいてくれんだ！！」

劉協の叫声が響く。その内容はともかく、一歩進んだと感じた。

「劉協様は皇帝なのです。この漢王朝を束ねる、民の希望なのです。漢の臣たる私が放っておけるわけがないでしょう」

「……なぜ余が皇帝なのじゃ……。皇帝などやりとつないというのに……。余にそのような能力などないというに……。なぜ余にはこ

のような試練ばかり……」

劉協はすっかり気落ちし、その心は伽藍堂であった。

「……劉協様……」

「……劉協様。なんて御勞しい……。私も決断しましょう。劉協様が皇帝の座から降りたいと言うのならば、不肖私が手を貸しましょう」

優しく、包むように、その冷めた心を温めるように言う。その真意がそれこそ冷めていても。

「姉を亡くし、信頼した宦官を亡くし、董卓に牛耳られ……。もう劉協様は十分努力為されたと思われませう。もう、休んでもいいときでございます。もう。」

「劉協様、頼る者ならば、私がいるではありませんか。私があなたの父となりませう。母となりませう。私があるの矛に、盾に、馬になつてみせませう。私が、この私が立ち塞がる障害を払ってみせませう」

「……」

「劉協様、少しでも信じていただけたなら扉を開けてはくれませんか？ もうこのときが劉協様とお会いできる最後となりませう。今が決断の時なのです」

最後、と行ってこの先にもう救済の機会は残っていないと仄めかし、判断を急かす。そして、しばらく時は経ち。

「……そなたが、余を、救ってくれるのか……？」

ぎいっと、音をたてて扉は開き、涙と鼻水でぐしゃぐしゃにした顔を拝むことができた。そうして、劉協の信頼を勝ちとったのであった。

「劉協様の信頼を得た流悟は袁紹に憎い憎い董卓のために反董卓連合の勅を出し、余計なことしゃべらせぬよう宦官を皆殺し、清流派もね。劉協様の護衛には、ボクたちの軍の兵を流悟の兵だと偽って務めさせたわ。ボクたちの兵じゃ信用されなかったからね」

「そうして流悟は連合に入り、内から操り、ボクたちは被害少なく今ここにいられるってことよ。華雄が生きていられるのも流悟のおかげってね」

そう言っつて華雄を見るがやはり納得していなかった。頭の出来が良くない上に、黄祖から謗りを受けているからであった。

「……劉表、いいひと？」

恋が首をかしげて聞く。

「良い人かどうかはわからないわ。けど、ボクたちの味方よ」

詠の答えに、いまいち納得できない様子の恋に、月が言う。

「恋さんは会ってみてどう思ったんですか？」

「……悪くない人」

「ふふっ、恋さんがそう思うんなら、そのままでもいいんですよ」

月の答えに得心いったとばかりに、目の前の点心を喰らう。

「ん〜。まあ、そこまではわかったわ。そっから先かてあるんやろ？ 大罪の内容だってようわからんし」

「大罪の内容はもう分かるでしょ？ 漢王朝崩壊、つまり、国家反逆罪ね。付け加えれば勅を悪用して宦官殺すわ、戦起こさせるわしたことかしらね」

「ああ〜。言われてみればそうなんやな」

「まったく、あんたは……。大したことなさそうに感じるのは、劉協様が協力してくれたからよ。協力してくれなかったら、劉協様を幽閉して、それこそ傀儡にしなきゃならなかった。どう？ これでも大したことないかしら？」

さすがの霞もその内容に、怖気が立つ。

「い、いいや。ウチらは危ない橋渡ったんやな」

「そうよ。それも含めて先話すわよ」

「流悟は洛陽に入るとき、なるべく一番先に入らなければならなかった。劉協様が他の諸侯に先に保護されたら、偽りの勅のことを話さなければならなくなるからね。劉協様の願いは皇帝など捨てて、市井の民になること。そのために劉協という名を捨てる必要があった。だから……」

「霞！ あなたボクと一緒に劉協様と背格好が似た人を探したわよね。アレは劉協様の身代わりとして死んでもらうために用意したのよ」

霞が、ああ、そついや監獄と奴隷商を見て回ったな、などと思いつく。

「そうよ。そのとき用意した子を劉協様の部屋の縛って置いておく。そして、一番乗りした劉表がその子の首を刈り、劉協様は保護。劉協様は死んだことにする。……ちなみに劉協様が協力してなかったら、そこで殺していたわ」

余計なことしゃべられちゃ困るからね、と詠。協力してくれてよかったね、と月。

「身代わりになった子は可哀想だったけど、ボクたちが生きるためには必要だった。あの子はボクたちの保身のために殺された。そのことがボクたちにとっての最大の大罪であり、絶対に忘れてはならないこと」

詠が周りを見て、戒めるように言う。月が前を向いて言う。

「……あの子のためにも、なんて言っちゃいけないよね。この罪を背負ったまま、私たちの理想に向けて走らなきゃいけない。走り続けなきゃいけない」

月の言葉に、周りの将も俯いていた顔をあげる。覚悟を決めるように。

詠が重くなつた雰囲気を変えるように、軽く言う。

「まあ、やったことは単純よね。流悟の話術で子供を騙し、操る。ボクたちはさっさと逃げて、流悟がボクたちのいない時間に死体を作る。こんなところだし」

「いや、劉表はんには感謝感謝やで」

まったく調子のいい、と詠が霞の手揉みを笑う。

「こうしてボクたちは流悟に返しきれないほどの借りを作ってしまったってことよ。でも」

詠の言葉に月が続く。

「天水に戻って再起できる、だね」

詠は頷いて言う。

「そうよ、もう天下なんて必要ない。ボクたちは涼州で力をつけて、最高の国を作るのよ！」

おおーっ！！ と周りが拍手。

「そこで提案があるんです」

月が拍手が治まってきたときに言う。

「翠さん。私たちと手を結びませんか？」

「えっ？」

翠が呆ける。手にしていたはずの点心は床を転がっていく。

「私たちは未だ弱小ですが、必ずの上がっていつてみせます。臙西から京兆までを私たちが治めてみせます」

「涼州は貧しく飢えているわ。それをなくすためには力をつけなきゃいけない。荊州から援助が来るかもしれないけど、いつまでもそれに頼ってはいられない。だから」

月と詠が揃えて言う。

「「涼州連合の発足」」

翠はそれを聞いて、少し震えた。それは決して恐れではなく。

「荊州と涼州がつながれば、荊州の智者も安全に渡ってこれる。もちろん農学者だって。そうして力をつけるのよ。ボクたちも、あなたたちも」

月が翠に手を出す。

「どうですか、翠さん。この手を握ってくれますか？」

しばらく翠はその小さな手を見つめ、言う。

「あたしは、ただの名代。こんな大それたことを決められる権限はない」

月がその言葉に頂垂れながら、手を引こうとする。

「けど！」

その腕を掴み、手を力強く握る。

「月の言ってることがおもしろいってことはわかる。だから、あなたが母様を説得してみせるよ」

「それは、つまり………?」

「へへっ、同盟成立ってことだよ！」

手を引っ張り月を浮かせ、そのまま抱きしめながら言う。

「へう！へ、へう〜！」

「あ〜！すっかりしてるのに可愛いな〜月は！ほら、ほっぺたすりすり〜！」

「へう〜〜〜！」

董仲穎と馬孟起。正式に同盟を結べてはいなくとも、二人にとってはすでに繋がりを持ち、友誼を結び、ともに生きることが覚悟しているのであった。

「流悟様、いいんですかい？ 計画では殺す必要はなかったんじゃないのかい？」

「いいのさ。もともと生かしておくというのは月の発案。罪悪感から逃れたいという弱き心が生み出した偽善。俺にとっては生かしておいても価値はなく、火種になるだけよ」

「そうですかい。ま、クーは流悟様がそういうんならかまわないんですがね」

クーがその場から離れ、流悟一人になる。

「哀れなものだ。肉親を失い、信頼できるものを失い、自身の責務を投げ出した。いくら子供とはいえ、その愚かさが身を滅ぼした。だが、救いだっただのは確かに皇帝の椅子から逃げ出すことに成功したことが」

「来世では荊州に生まれ、俺の統治のもとで暮らすんだな。愚帝劉協よ」

第十六話 けんこく！（前書き）

110816：イミフな部分を加筆修正。イミフすぎて自分でも修正に混乱す。

第十六話 けんこく！

反董卓連合から暫く経ち、流悟たちは襄陽に戻ってきている。

三万もいた兵は、戦により死亡する者、傷口から菌が入り病死する者、大怪我を負い兵として生きていくことができなくなった者。行軍についていけなくなった者。その者らの離脱により、動ける兵は二万八千といったところであろうか。？水関での戦にしては、十分満足のいく損耗率であると言える。連れていった兵の割に戦った兵が少なかったことは、袁術兵が思った以上に早くものになったことのおかげか。

だが、良いことばかりでもない。その大勢の兵を養うための糧食が多大になってしまった。想定よりも兵が残ったことで糧食を消費しすぎてしまった。兵が生き残ってもらうことが最も大事なことであるし、流悟が本気で反董卓連合に参加していると思わせるために多くの兵を引き連れる必要があったので、糧食は犠牲になると分かっていたのだが、こうして現実になるとどうしても惜しくなってしまうものであった。

流悟はそうして襄陽に戻っているのだが、そこに行きにはいなかった人物がついてきていた。いや、流悟がついてこさせたというべきである。その者の兵は劉表軍の糧食と医薬品をありがたく使わせてもらいながら、行軍に遅れまいと練度の低さ故に必死になっついてきていた。

それは劉備の軍であった。

劉備軍は戦で名を上げることできず、苦し紛れに洛陽の斥候をやったものの結果はもぬけの殻を確認しただけ。そのこと自体は評価すべきであるが、やはり、その成果は地味なものであったと言えた。つまり、褒賞もその地味なもの相応となってしまうのだった。

そのわずかばかりの褒賞も洛陽の民への施しに使ってしまった。孔明や鳳統は止めていたのだが、劉備にとってそれは到底認められないものであった。いくら月が善政していたとはいえ、洛陽は連合の終着地点。そのような危険なところに行商人が寄り付くはずもなく、食料や鉄鉱石、全ての産物が貧していたのだった。それを劉備は見過ごせなく、少しでも報えるよう動いたのであった。そのため、義勇軍の維持も困難な状況になってしまったのだった。

なぜ流悟がその窮地の劉備に誘ったのかというと、もちろん荊州のためであり、これから訪れるであろう乱世を乗り切るため、後顧の憂いを断つために劉備を使おうと画策した次第である。加えて劉備が他の諸侯の客将などになる前に手中に入れて、流悟の知らぬ間に強大な敵となるのを嫌ったのだった。

劉備は流悟の主義、理想、統治に納得してはいないが、それがすなわち打倒の対象ということにはなっていない。流悟の救えぬ民は自身が救えばいいと思っていたし、流悟にも説得していけばいずれは理解してもらえると希望を持っていた。その上、金銭物資まで援助してくれるというのだから劉備が流悟の誘いに飛びつくのも当然であった。そうした理由から劉備は流悟にくっついてきたのであった。

王座の間。

劉備たちをとりあえず客間に置き、文官に部屋の割り当てや城内の案内、城下町の案内の指揮をとらせ、流悟は軍議と留守を頼んだ者の労いにあたる。

「道蓮、俺が留守の間よく守ってくれたな。いつも通りの荊州の光景が見れて嬉しいぞ」

「私だけのおかげではないさ。荊州を愛するすべての民のおかげであるに」

道蓮が流悟の掲げた腕に交差させるようにして腕を出し、かち合わせる。両者ともフンツ、と不敵に笑いながら言う。

「それで、計画はうまくいったのか？ なにやら余所者が紛れ込んでいるが？」

「ああ、うまくいった、俺の望むままに。あの余所者は連合でともに戦った劉備という者だ。いまだ揺り籠の中といった風だが、だからこそ俺の色に染めることが出来る。逆らう事のないように大切に育て、俺の手の届かないところを担ってもらおうと思ってな」

流悟が顎に手を当てて、あくどく笑う。

「手の届かないところ？ ……ああ。益州のことか？」

益州。荊州の西方に位置しその州土は大陸のどの州よりも広大である。山岳で囲まれており、そのせいで益州に入るには険しい道程を辿らなければならず、隔絶されていた。故に交通の便が悪く、そこに行く行商の数も少なかった。

益州の地は肥沃であり、これまででは上手くやっていけていたのだが、黄巾党と飢饉という二つの脅威が同時に襲い、とたんに貧しくなった。それを劉璋が理解し対処すればよかったのだが、民にとって不幸だったのが劉璋が愚かであったことである。地方遠方の混乱を理解せず、少なくなつた税を補おうと増税を行った。その増税に民はますます貧窮していき、賊も倍々していった。劉璋はその増え続ける賊を恐れ、討伐するでもないのに徴兵し、自身の身を固める始末。益州はもはや破綻していたのだった。

「察しいいな。その益州を劉備に任せようと思つてな。俺はあんなところ相手にする気もない。ならば、俺に友好的な人間が治めておけばいいだろう?」

「なるほどね。たしかに最近益州からこちらに賊も紛れ込んできているからね。劉璋も進退極まつてこちらに助けを求めてくることだつて考えられるからねえ。迷惑なことに」

そんなことは真つ平御免だ、と頭を振つて言う。

「でも、劉備に脅威はないのかい? 連合に参加してあなたに目をつけられるぐらいだ。将来有望なんだろう?」

「だからこうして恩を売るのさ。劉備は甘いからな、それを忘れることは出来んよ。何かよつぽどのがない限り裏切らん。それに、裏切つても俺と董卓、同時に相手できるとは思えんね」

劉備は流悟が月と繋がっていることを知らない。反目し流悟を討とうとするならば、その背を月が穿つ。また、月が反目したならば、劉備とともに逆撃する。月はただの義勇軍であった劉備などのことを知らないだろうし、どちらも奇襲が可能であった。

両者の繋がりを明かし、他国への抑止力として使うのもいいかもしれない。だが、それにはまだ早い。どちらも力がなく、今、劉備が というより孔明と鳳統が 流悟と月の関係を知られて反董卓連合の謀略を悟られては面倒でもあった。劉備が流悟をもう少し信頼しなければ教えることはできなかつた。

だから、月が訪れる前に劉備を隠す必要がある、それを言う。

「お蘭、長安から襄陽までの道程を探って、あとどれほどでこちらに月が訪れるか調べておけ。そのときになったら劉備をどこか賊討伐とでも言つてどこかへ飛ばせばいいだろう」

「了解しました」

「道蓮、厩舎はどのような状況だ」

「五千ものの馬が入れる厩舎は完成。別の場所で大規模な厩舎の作成に入っている。この広大な荊州、いくら馬がいても足りないからな」

「よし、馬の受け入れ態勢は整つたな。月に言っておこう。お蘭。筑水、漢水、丹水などの川の治水工事の進捗はどうだ」

「思うようには進んでおりません。地盤が緩い地が広く続いており、その調査が膨大なことと、江賊が揚州から流れてきているようなのです。それを無視することもできずその都度作業が止まると」

苦い顔をするがすぐに指示する。

「出来るところからでいい。人海戦術でさっさと進めよう。川が氾濫すると長く禍根を残す。江賊についてはある程度我慢するしかない。いくら討伐してもやっつけてくるものだ」

もつとも、治水学の専門家の言うことをよく聞いてそれに従えよ、と付け加える。

流悟が王座から立ち上がり、臣を見下ろし言う。

「これより来たる乱世、それを乗り切るにはこの地が磐石でなければならぬ。強敵となるのは曹操、孫策の二人のみ」

孫策、という単語に肩を弾ませる道蓮。その心は親として情愛か、強者としてのいずれ来たる邂逅に打ち震える、僅かばかり残り燻る武人の魂か。その顔は妖しく笑っていた。

「俺の目的は天下統一ではない。覇道を為すわけでもない。ましてや民が皆仲良くななどという世迷言では決してない」

空気を張り詰めさせ、この場にいる臣の姿勢を正させる。視線が一層集まり、拱手の礼をとる臣。王からの決意が示される。それを感じ、臣は身体を火照らせた。

「我らの目的は荊州の安寧だけだ。自らを富ませ他を操作し、知らずのうちに戦を終わらす。我らの勝利で」

右拳を握り、腕に血管を浮き上がらせる。その腕を胸まで掲げる。

「この大陸に愚かな領主ばかりのこの世界ッ！ 己が欲望に取り憑かれ視野狭窄に陥った身の程知らず共をこの劉表が、荊州が！ いや！ この国が正す！」

自身の長刀を抜き、一つその場で薙ぐ。

「今ここに、劉景升を主とする『荊』の建国を宣言しよう！」

長刀がその刃に光を映す。臣は拱手した手に汗をにじませる。

「身の程知らず共に気付かせてやるのだ。自身の分がどの程度か、どれほどの器か」

「身の程知らず共に気付かせずに行うのだ。自身が傀儡だということ、我らがその位置に押し上げていることを」

腕を前にゆらりと突き出す。同じようにして手を開く。

「すでに有力な身の程知らずには毒を仕込んだ。一人を除いて」

突き出した手が一本指を残し、その場所を指す。

「曹孟徳」

金髪の覇気漂う少女。霸道を突き進む平和の礎を為す者。

「奴と戦うことは避けられん。ならば思い知らせよう。その道を往けるほど貴様は強くないと。貴様は万能ではないと。その道は途絶えた道であると」

途絶えた道を歩くことはできない。その道は足を踏み入れることのできぬ、空の道。羽でもなければ往くことは不可能だ。つまり、人では先へ往けぬ。

「哀れな霸王をこちらに振り向かそう。哀れな理想主義者に現実を見てもらおう」

そう言ったあとは力なく手を下ろし、張り詰めた糸を緩ませる。目を細め王座に座る。

「当面の課題は董卓との外交と劉備の益州侵略の補佐にあたる。幸い劉備には優秀な将がいる。戦は劉備に任せ、外交工作は我らが行う」

それだけ言って王座の肘掛けに肘をつき、顎を乗せる。

「これで軍議は終わりだ。今日は疲れた。日々の政務に加えて、俺が先ほど言ったことをやってあげ」

額に手を乗せ、顔を天に向ける。

臣たちは、王のいつもとは違う様子に戸惑いながらもその場を離れ、持ち場へと戻る。戦帰りですすがの王も疲れたのかもしれない。暫く休ませるべきだと思い、おとなしく引く。

王座の間に残った人物は荊州の大幹部のみ。

「よく働く王も今日はお疲れですかい？ クーが癒してしんぜましようか」

失礼、と下半身に忍び寄る。その頭を蘭々がどこから出したか、

竹簡で軽快に叩く。頭をさすりながら、ただの冗談ですのに……正妻はこれだから怖い、などと呟く。放っておいたら本当に脱がすのだが。

その言葉を見殺し、蘭々が言う。

「疲れましたか？」

「ああ、最高にな

「最後まで我慢できませんでしたか」

「……すまないな

「誰でもそうなるものです」

二人だけの世界。最大の理解者同士で、ともに理想を為す、為せると思った最初の人。だからこそ、この世界を創りだした。

「誰だって……」

言葉を区切り、言う。

「愚かな者を相手にするのは疲れますよ……」

荊州こそが最高で、流悟こそが最上。その自信があるから言った。

「……まったくその通りだな。なぜ馬鹿共は俺に構うのか。荊州に構うのか」

「曹操など最も腹立たしい。何が霸王だ、何が覇業だ、何が霸道だ。

そんなものは成し得ない。なぜいつまでも夢をみる？」

「……自分は優れている、自分は特別だ、自分は選ばれた人間だ、自分がこの大陸を平和に……！」

「……呆れてものも言えん。全身から力が抜ける。……お蘭よ、もしかしてこれは俺に対する攻撃のつもりかね？」

ほんの少し、愚痴を吐いて気を直す。

「だとしたら、大成功ですね。ありえませんが……。仕方ありませんよ。貴方は大人なのでから」

蘭々が朗らかに笑い、流悟が調子を取り戻しつつあることに安堵する。

「……子供の駄々に付き合って、それを正すのも大人の仕事……。か盛大な駄々だな」

ククツ、と笑う。そうですね、と釣られて笑う。

周りももう立ち直ったかと近づきながら笑う。

「心配かけたな。お蘭、藍道、道蓮、天里、クー……。？ 早苗はどうした？」

本来いてもいいはずの人間がない。流悟は早苗に心配されるほど信頼されていなかったのかと、愕然としながら聞く。

皆もそういえばとキョロキョロ周りを見渡す。が、駄目。早苗の姿がない。

そうして蘭々が気付く。

「あれっ、そういえばなんでクーさんがいるんですか？ 確か劉備さんの道案内をお願いしましたよね？」

当然のようにそこにいたので疑問に思わなかった蘭々だが、気付いて問う。

「いや、クーは火急の用事がそこかしこに散らばっているんで、ほっつき歩いてた文官捕まえて、その人をお願いしたんす。報告が遅れてさーせん」

蘭々が、駄目ですよお、劉備さんは一応客人なんですから護衛のためにも武官でないと、と言って注意する。クーもへへッ、などと言って反省した風を装っている。その脇で考える人物。

「あれっ、じゃあもしかして、その文官さんが早苗さんをお願いして劉備さんについているんじゃない……」

天里が言う。文官ならば頭を働かせて、自身ではなく武官のほうがいいのではないか、それも客人に失礼のないように地位の高い者が適当ではないか、そう考えるのでは、と天里は発言し、その発想は的を射ていた。つまり、その言葉に納得し驚嘆する、そういう言葉が出てきてもおかしくなかった。だが、そうはならなかった。

「何……だと……。早苗が……道案内……？」

一様に重たい表情。天里は自分が何かしでかしたのかと思い狼狽する。

「あっ、あの私、なにか悪いことしましたでしょうきゃ！？ たわ

わっ！」

裾を握り、頭を前に傾け、『私、叩かれる用意できてます！』と言わんばかり。その涙目の天里を慰めるように、膝をついて視線を合わせる。

「いや、違うんだ。天里は何も悪くない」

頭を撫でて笑みを作る。顔を上げたその目はうるうる、なんとも庇護欲を掻き立てられた。

「天里は知らなかったようだな。早苗はな」

一度そこで区切り、息を吸う。その思わせぶりな動作に天里は息を飲む。そして、言った。

「早苗はな……とんでもない方向音痴なんだ」

「……ひえ？」

思いもしない言葉に天里は口から空気を漏らした。

早苗に連れられて道案内される、いや、道無き道を案内される劉備諸君。襄陽城下町を案内されていたと思つたら、いつの間にか門を抜け襄陽を飛び出し、近くの森に突入しようとしていた。劉備たちには何がどうしてこうなっているのか、皆目見当つかなかった。

大量の汗を流しながら案内する早苗の「も、もうすぐ見えるのが

鍛冶町の区画です！……グスツ」という頼りない声に従ってきてこの仕打ち。劉備たちは頭がどうにかなりそうだった。目の前は森だというのに、この先は鍛冶町だという。鍛冶町というのは、街の中で鍛冶屋が連なる区域のことで、鍛冶屋の価格競争や技術向上を図るとともに、場所を特定することで容易に鍛冶屋を見つけることが出来るというものだ。そう劉備は早苗が来る前の文官に説明を受けていた。襄陽の中で。このような森の中にあるなどとは聞いてはいなかった。

「んー、愛紗愛紗。さつきからおかしいのだ。なんで鈴々たちはこんなところに案内されるのだ？」

張飛の言葉が聞こえたのか早苗の肩がびくんと跳ね上がる。

「黙って歩け、鈴々。早苗殿もなにか考えが合っつてここまで案内してくれているのだぞ。もう少し待っている」

むー、と口を尖らせる張飛。そう言っている関羽も若干不安を感じているのだが。

その会話に触発されたか、孔明が話す。

「いえ、鈴々ちゃんの言う通り先ほどからおかしいです……。まるで私たちが人気のないところに誘導しているようです……」

「ま、ましゃか……。畏だつたり……。して」

はわわあわわと不安を口にして肩を抱き合う。その姿に関羽が、私たちがいるのだからそのようなことは……。と否定するがこの状況に、つい、偃月刀を持つ手に力が入った。その会話を受けて、さすがの劉備もこれはおかしいと、前に行く早苗に聞こうと前に出て

早苗の顔を見ようとする。

「あの一、早苗さん？」

プイツ。

「あれっ、早苗さん早苗さん！」

プイツ。プイツ。

早苗は劉備に顔を見せまいと、横を向くのだった。その顔を追い劉備が反復横飛び。そのたびに顔を手で隠し、そっぽを向いた。

その様子に劉備が気付いた。これは何か失敗をして隠し事をしてる鈴々ちゃんと一緒だと。ならば、鈴々ちゃんと接するときと同じようにと、そう思った。

「早苗さん。ほらっ、私怒ってませんから。怒りませんから。素直に話してくれませんか？」

笑顔で軽く手を握り、ゆっくりとその手を下ろす。

そうして露になった顔を拝む。その顔は涙に濡れ、泣き声を出さぬよう口を噛み締めていた。それも劉備の顔を見て決壊した。

「……ふえ、ふえええん！ あたし、もおここがどこだか分かりませ〜ん！！」

大きな声を出して泣き出し、目から涙を溢れさせ虹を作った。びえええん、と泣くその姿に劉備は微笑ましく思い、優しく抱いた。

「大丈夫。大丈夫だから」

そう言って、ぼんぼんと背を叩く。それでも泣き止まない早苗であつたが、しっかりと劉備を抱いて、その胸に顔を埋めた。それを見ていた関羽たちも、杞憂だつたかと肩を撫で下ろし安心する。目の前に美しい光景に目の保養をする。

暫くして早苗が泣き止み、劉備から離れて言う。

「うつつ、ごめんなさい。あたし、方向音痴なんです……。もう襄陽に帰れませ〜ん」

自分で言つて、その言葉にまた落ち込み涙声になつていく。

「？ 大丈夫だよ、早苗ちゃん。後ろ、観てみて」

劉備がそう言つて、後ろが見えるように早苗を誘導する。早苗も素直に後ろを見た。

「……どこかの街があります……。ああっ！ あそこで襄陽の場所を聞くんですね！」

ぱつと花咲くように早苗が言うが、その言葉に驚き、笑い出す劉備たち。その様子に説明してほしそうな早苗である。

「ぷつ、ふふつ。早苗ちゃん、あれが襄陽だよ。私たちがそこから来たの」

穏やかな顔をして言う劉備。その言葉に早苗は目を丸くする。

「えつ。……えええええつ！ あれが襄陽ですか!？」

コクリと一つ頷いて肯定する。

「はあく。あれが襄陽ですか……。言われてみるとそんな感じがします」

自分の街をそんなふうにつ早苗。とんと腑に落ちない様子であった。劉備は薄く笑って言う。

「うん。じゃあ帰ろっか」

劉備がそう言って手を差し出す。早苗もその意を汲みとって手を出し握る。その手の熱を感じ、伝わるように胸が暖かくなった。

襄陽に向かい歩く姿を夕日が照らし、影を作る。その影は人数分あれど、皆の手が繋がって、ひとつの影となっているのだった。

幽州界橋。そこで行われていた戦、幽州の公孫？、冀州の袁紹の戦が終りを迎える。

「伝令であります。公孫？は撤退し、牙門旗は我が軍勢によって落とされました。現在は文醜將軍が追撃に当たっておりますが、なにせ相手は白馬將軍。公孫？は落ち延びることになるかと。しかし、すでに再起するほどの軍勢もなく、この戦、我が軍の勝利であると言っても過言ではありません。幽州は我らのものです」

伝令が些か興奮気味に言う。それを受けて満足そうに笑う袁紹。

「おーほっほっほっほ！ わかりましたわ！ ご苦労様、もう下がってもかまいませんことよ」

はっ、と言つて袁紹の天幕を後にする。その天幕から袁紹一人が残り、妖しく呟く。

「……白蓮さんもおとなしく私に下つてくださればこのような事にはならなかつたのですのに。……残念ですわ」

「でも、仕方ありませんわよね。私があのお方と釣り合うためには、もっと華麗に、優雅で、勇ましく、強大でなければいけませんもの」

「ああっ、お待ちになつていてくださいませ！ お次は華琳さんを倒して、会いに行きましょう。そうしてようやく釣り合える！」

「……そうすれば、また、優しく抱いてくださる。もしかしたら……婚儀だつて」

「もうすぐ、もうすぐですよ。お待ちになつていくださいませね」

「……劉表様」

第十六話 けんこく！（後書き）

題名の割にその演説内容にがっかり。語彙力の無さである。厨二批判してる流悟が厨二である。

建国は感想であつたから書いてみた。

建国の理由は建国することで地盤の強化とか、これからの益州攻めで劉備が落としたんじゃないやなくて流悟が落としたんだよって、分かりやすく思わせるため、つまり、益州の流悟の影響力を高めるため、かな？

最近思うんだけどこうしてあとがきで反省するのって、見てる方としては冷めるよね。次から活動報告とかで反省するか……。

第十七話 かんとう！

袁紹は公孫？を下し、幽州を支配下においた。これで袁紹は河北四州、冀州、并州、青州、幽州を束ねる一大勢力へと踊り出た。

袁紹の野心は留まることを知らず、袁紹軍は幽州を下して間もおかず、曹操の領土である？州、司州、豫州を落とすべくその州境線へと歩を進めたのだった。

そしてその州境線の近くの城、そこに可愛らしく聡明な少女が二人。

その内の一人、頭に人形を乗せた金髪の寝ぼけ眼が言う。

「三万の大軍勢……。いなしきれなければ間違いなくこちらの最後……」

城壁の上で地平線を見渡し言うその人は、姓は程、名は？、字は仲徳である。程？に向かってコツコツと足を踏み鳴らし進む眼鏡の吊り目。

「曹操様から返事が来たわよ。増援は送らない代わりに後で城に来てって」

そう程？に伝えるは姓は郭、名は嘉、字は奉孝。

「はい。わかりましたー」

間延びした声で何でもなく答える程？。こちらに向かう袁紹軍は三万。対してこちらは七百。どうあがいてもひっくり返せないその戦力差を感じていないかのようである。

その程？を心配そうな目でみる郭嘉であったが、程？のその表情

をみるとついついため息が漏れた。

「まったく、その顔を見てみると心配するのが馬鹿らしく思えてくるわ……。本当に大丈夫なの？」

「可能性は高いと稟ちゃんも言ったではないですかー。勝ち目ならありますよー」

ぺろぺろと棒付き砂糖菓子を舐める程？。

「……理屈で説明できない勝ち目に賭けることを、運試しと言つての」

額に手を当て、眉間に皺を寄せる郭嘉。その言葉に特に反論もない程？は立ったまま目を閉じ、浅く眠りに入るのだった。

「……ぐう」

「寝るな！」

「……おおっ？」

「まったく……。それじゃ私は退くからね。必ず生きて帰りなさい」

程？と違い勝ち目のない策のために捨鉢にはなれない郭嘉。保険の策を提言しそれを程？に授けた。自身が責任を負うべきだといったのだが、程？が「稟ちゃんは曹操様のもとにいるのがお似合いですからー」などと固辞し、その役は程？のものとなった。

第一の策。袁紹の性格を考えて、七百の兵の城を大軍をもって陥落せしめることはないであろうという打算。第二の策。そうならな

かったときのための姦計。

主君を見つける旅でみた袁紹像からすれば第一の策で十分である、二人はそう結論したが、そこは軍師の直感か。何故かそれに現実感がなかった。故に二人は必ず第二の策が必要だと感じ、それを確信した。

「曹操様によろしくお願いします！。助けに来てくださいねー」

なんでもないように言う程？。すでに第一の策など考慮に入れてなかった。それでいて第二の策の危険性を無視した。

袁紹軍軍議用天幕。その場では袁紹と軍師、将の自由闊達な議論が交わされていた。その声はというと高笑いとか苦々しげなうめき声。その音はというと卓を強く叩きつける音。自由闊達といえは聞こえはいいが、その実は荒れていた。

「姫様！　どうかご進言をお聞き届けくだされ！　今はまだ戦のときではございませぬ！」

そう言う人は、歳の割に豊富な白の毛髪、立派な白鬚を蓄えた好々爺、田豊である。袁紹が子どもの時分から長く袁紹に付き、支え続けた忠臣である。田豊が袁紹に進言する。

「我らはまだ幽州を落とせばかり！　今為すべきことは幽州の制圧、統治であります！　すなわち内政！　曹孟徳は敵であれど恐るるに足らずであります！　我らの地を磐石にし、大勢の兵を成せば

彼奴など路傍の石でありましょう！」

数は力なり。

田豊にとつては数を揃えることこそが戦での必須勝利条件であった。いかに一騎当千といえど一万の兵を用意し、一人に当てれば倒せぬ道理はない。そう考えている。その考えに袁紹も華麗であるからと呼応し、兵を多く集めていたが、その考えは呂布と接して大きく変わっていた。

いかに兵を揃えようと覆せぬ者がいる。そのことを袁紹は学んでいた。そしてそれは呂布だけに限った話ではなく、曹操軍にも呂布に迫る者がいると思っていた。

ちなみに袁紹すら考えを改めたにもかかわらず、田豊がそうではない理由は反董卓連合に参加していなかったためである。圧倒的に兵を集めることに成功し勝敗が見えていたため、軍師役と袁紹のお目付け役を顔良に任せ、？にて帰還を待っていたのだ。

呂布の武勇を耳にすれど、その目に映したことなく。袁紹から呂布の武の恐怖を聞けど、いかんせん信憑性がなかった。

そういう意味では田豊は軍師としての才覚はなかった。だが、袁紹についてくるような奇特な軍師はいなかったので田豊がやっていた。

「駄目ですわね。華琳さんに時間を与えれば与えるほど、私たちは苦境に立たされることでしょう。今必要なものは、兵でも力でもありませんこと」

今までの驕り高ぶった目ではなく、袁紹は言う。

「私たちに必要なのは、速さですわ」

兵は拙速を尊ぶ。

袁紹が見出した考えがそれであった。敵に考える隙を与えることなく、速やかに殲滅する。敵に準備をさせる暇を与えることなく、蹂躪する。

兵を集めて呂布にいいようにやられた。力を得ようにも、そう簡単に豪傑が現れるわけでもない。ならばとその考えに至った。

もちろん私情が、恋慕が多分に入っているがゆえの結論であるのだが。

「その証拠に白蓮さんをその速さでもって下すことができましたのよ？　それが事実でありますわ」

幽州での戦、公孫？の甘さが白馬義従を凌駕する速さを袁紹に与えた。

反董卓連合が終わった矢先、都に帰ってきたばかりなのは袁紹と同じ。洛陽での一件で袁紹が落ち込み、寝込んでいたことも公孫？は知っている。まさか、攻めこんでくるわけがない。何かの間違いで少し話をすれば誤解だと笑い話になるだろう。そう公孫？は友人の袁紹を信じた。

その期待は裏切られ、袁紹は次々と幽州の城を落とす、白馬義従が活躍する野戦などする機会も失われ籠城し、その戦争の幕を閉じたのだった。

田豊が袁紹の言葉に反論する。

「その幽州侵略戦も大軍あつてのこと！　大軍があつたがゆえに強行軍に至れたのですぞ！」

「それも分かっておりますわ田豊老。けれども今は徴兵する時間すら惜しいのですわ。私たちがそうしている以上に、華琳さんは力をつけましょう。勝つには今しかありませんわ」

ぬぐぐ、と喉の蛙を鳴かせる田豊。

取り付く島もないと田豊は残念に思う。もうすでに決意しそれに邁進するのみと、袁紹の目が語っていた。

「……もう話すことはないようですね」

袁紹がそう言って立ち上げる。もう軍議は終わりだとその背が告げる。

臣も主が天幕から出たことで、しぶしぶといったように席から立ち、天幕から消える。残されたのは文醜、顔良、田豊の三人。

「田豊様よー。あんまり麗羽様怒らせないでくださいってのにー。アタイらがとばっちりくらうんですよー」

文醜が考えなしに言う。そのおかげで暗くなった雰囲気も少しは明るくなる。文醜の長所であり短所でもあるが、今回はそれが良く働いた。

「うむ、すまないな。つい姫様を思うあまり口うるさくなってしまふ。歳のせいかな」

田豊も文醜にあわせ口髭を撫ぜんがら、軽く言う。

顔良が苦笑するも、ここ最近の袁紹の変化に不安を口にする。

「最近麗羽様、変なんですよね。いつもだったら高笑いして好き勝手言うのに……」

顔良が普段袁紹に思っていることの片鱗を見せたことを無視して田豊が言う。

「姫様も成長なされたということじゃろう。姫様の言う事にも一理ある。もともと地力のある御方じゃ。なにか考えがあり、その夢を実現させたいのじゃろうな」

田豊が薄い目を少し垂れさせ、優しげに言う。

「……もう儂も隠居のときが来たのかもしれんの……」

袁紹が自身の膝にも満たないときから面倒をみてきた。常に袁紹のそばにいて、支え続けた。

袁紹が転んで泣けば、抱きかかえてあやした。袁紹が笑えば、自然と口角が持ち上がって、その感情を共有した。袁紹が怒れば、話を聞き理路整然と諭した。

袁紹のことで自身が知らぬことなど一つもない。自分が一番袁紹を見続けてきた。袁紹が家柄を鼻にかけるようになって、教育を間違ったかと一人落ち込んだときもあったが、今回の軍議でその考えも変わった。

なにか理想をもち、それを叶えようと努力している。その理想がなんなのか自身には分からないが、それが以前の袁紹と比べて輝きを増させていた。着飾ったような外見の金ではなく、内面からの光。自身の手から離れた。未熟なれどしっかりと成長し、花開かせようとしている。今支えようとするのは、その花を手折るが如き行い。そう思い決意した。

もう花に水をやるのはもうやめよう。自身のやることは害虫駆除。袁紹の教育係は終わりにして軍師として敵を討つのだ。そう田豊は思った。

だが、悲しきこと哉。当事者に分かる事柄は外部には伝わらぬものである。

今までの袁紹の暗愚さ。田豊の人格。軍議での両社の対立。それを知る者はこの戦に不安を覚え、将来の暗い未来を想像した。想像するだけならばよかったのだ。だが愚者は得てして周りを巻き込む。

進軍した袁紹軍は寡兵にも容赦なく攻撃し、次々と城を陥落していく。その陥落した城のなかには程？のいた城も例外ではなかったのだった。

司州官渡。

そこでは袁紹と曹操との舌戦が行われようとしていた。両者は自陣から飛び出し、言葉を交わす。

「おーっほっほっほっほ！ 相も変わらずおチビちゃんですわね、華琳さん！ そんな貧相な身体ではこちらの勝ちが決まったも同然ですわ！」

「そんな頭の出来だから身体に栄養が回るのかしら？ 良かったわ、あなたのような猿にも劣る脳を持っていなくて」

「おーっほっほっほっほ！ 猿に似た体つきの華琳さんらしい物言いですこと！ 頭ならこれからでも鍛えられますわ！ あなたの身体は将来性ないようですけども！」

「……！ 言ってくれるわね。もうあなたの戯言に付き合うのは御免だわ。これよりは武をもって語りましょう。あなたを打ち倒して河北四州をまるごと頂きましょう。私の覇道の礎となりなさい！」

「本性を現しましたね、性悪小娘さん！ でも残念ながら霸道に目をくらませるお馬鹿さんではこの愛の狩人、袁本初は超えられませんかよ！」

「……」

「……」

「……愛の、狩人……？」

「おーっほっほっほっほ！ 猪々子さん、斗詩さん！ 櫓を用意！ 弓兵に一斉射撃をお命じになりなさい！」

「あらほらさっさー！」

「あらほらさっさー……」

舌戦が終わり、袁紹曹操両者が帰陣する。なにやら妙な発言もあったが、そこは袁紹の脳が織りなす不可思議現象と思い、曹操は忘れた。

袁紹軍五万に曹操軍二万五千。

司州官渡が戦場、地の利は曹操にあり。練度十分、人の和は曹操にあり。だが、天の時は袁紹にあった。袁紹による電撃戦。それが功を奏し、櫓を潰す事のできる兵器、投石機がまだ完成に至っていないかった。

曹操が士気を高めるために檄を飛ばす。

「皆の者！ 敵の数は圧倒的なれど、向こうは連携も取れない烏合の衆！」

「血と涙に彩られたあの調練を思い出せ！ あの団結、あの連携を以てすれば、この程度の相手に負ける理由などありはしない！ それが大言壮語でないことは、この私が保証してあげましょう！」

オオオオオツッ！

兵がその言葉に血を滾らせ、恐怖を払うように声を出す。その熱気に満足そうにする曹操である。

袁紹が無能といえどその財力と兵数は侮れない。幽州を落とす士気も高い。対して曹操は戦の準備も十分でない。糧食もかき集めたものも長期戦になれば足りなくなるかもしれない。

短期決戦しかない。どちらが先に総大将の首を挙げるか。そう考える曹操だったが、実はそれは袁紹とて同じ。幽州の統治はまだ完全ではない。公孫？を討ち後顧の憂いを断つたつもりだったが、その残滓はまだ燻っている。いつ反乱を起こされるかわかったものではない。兵数が多い分、糧食も心配だ。幽州侵略時に相当数消費していることもある。

奇しくも両陣営とも求められるものは速さであった。

両陣営が望んだものは短期決戦であったのにも関わらず、戦は長引いた。

袁紹軍の櫓から放たれる矢を、楽進がその全てを防いだ。楽進の氣の最大の特徴であり利点はその総量である。

櫓の進行方向に粘度の高い氣を付着させ動きを封じる。それでも飛んでくる矢は硬度の高い氣の壁によって防がれる。楽進は櫓に対して防戦一方なれど被害を最小限にしていた。そうして上手く櫓を受け流して、ついに完成する。

投石機である。

投石機によつて櫓は破壊され、いよいよ人对人の真つ向勝負。

両陣営とも突撃し、その命を散らせる。精兵であり、将も豊富な曹操軍は、袁紹軍を散々に打ち負かしたが、兵も人間。疲労がたまり段々と精彩を欠く。兵数に勝る袁紹軍に徐々に押し戻され、その数を減らしていった。

この戦、互角の攻防であつた。

そう、互角であつたはずである。にもかかわらず、その人物は動いた。その原因は忠誠心の無さ、その原因は以前の主の知能の無さ。

一人天幕に籠るその人物。頭を抱え、訪れる恐怖に慄いている。

「……このままでは駄目だ……。袁紹様は乱心し、田豊殿はもう見限つて口八丁で陣から消えた。もうこの戦は負けだ……」

袁紹軍参謀、許攸である。

許攸は袁紹の変貌を成長ではなく乱心と、軍議での諍いから田豊の逆心を感じていた。袁紹の乱心はともかく、田豊は影の王。袁紹が興味のない内政を一手に担い、軍事は文醜、顔良の袁紹への進言を調整する。その人物が裏切りなどされては袁紹軍など吹けば飛ぶ。

(……馬鹿共は分かつてないようだが、もはやここは沈みゆく船。さっさと逃げ出さねばならない。だが一体どこに逃げる？ 幽州に逃げるか？ 何を馬鹿な。いずれ曹操のものとなる幽州に逃げて何とする。ならばどこへ？ 曹操を避けて袁術を頼るか？ 大きく迂回し青州から徐州を通り、揚州へ……。無理だ。そのような時間的余裕などない。それに袁術が助けてくれるかどうかもわからない。常に影に隠れて謀略していたせいか、頼れる知り合いなどいない……)

謀略で生きてきた男。それ以外に生きていく術を知らず、いまさら民として生きていくなどできない。

はあ、と一つため息をつく。それは進退窮まった事からでたものだが、そのおかげで開き直れた。

(曹操に降伏しよう。手土産を持って赴けば助かるかもしれない。)

仮にも参謀であった許攸は多くの情報を持っている。その情報を渡せば生き延びられるかもしれぬと行動しようとする。椅子から立ちとす。そうして中腰のまま、また考える。

(……この戦は曹操の勝利であろう。ならば今更情報が必要か？いや、情報があればその分優位に立てる。あつて損はないだろう。だが、それが信用できるものかどうか分からない。ただ情報だけでは不足かも知れぬ。……ならば、あ奴を使おうか)

今後こそ立ち上がり、天幕から出て行き先を見据える。

その目の先は、捕虜の収容施設。

「ようやく出番ですかー。縛られてあちこち痛いすねー、宝慧。この策を思いついた稟ちゃんをいっしょに恨みましょうー」

曹操軍天幕。

軍議中のその天幕に報が届く。

「伝令！　こちらに袁紹軍の許攸という者が訪れておいでです。我らに降りたいと言っております」

その言葉に、場がざわめき立つ。そのざわめきは、何故降ったのか、罨ではないか、といった疑念ではなかった。

ならばそれはなんなのか。

本当のことであつた、狂言甘言などではなかつた、という一人の人物に対しての驚嘆のざわめきである。そして、その賞賛の声をあげる人物は何でもなさそうに眼鏡をくいつと挙げた。喜悅の笑みを見せながら。

「稟ちゃん。帰ってきましたよー」

「風！」

感動の再会、というわけではなく程？は縛られたまま、許攸に抱えられていた。許攸からしてみればここからが本番。交渉が決裂したとき、むやみに野放しにしているは人質にできない。もちろん不信感を抱かれないよう丁寧に扱った。

そしてその結果である。

「なるほどね。袁紹を見限つて私に降るか。そのための手土産として程？と烏巢の兵糧庫の情報ね……。いい情報だね。許攸。私はあなたを歓迎しましょう」

なんとか取り入ることができた。これで自分は安泰。そう許攸は安心した。

「なら、許攸に最初の任を与えるわ。我が軍の夏侯惇とともに烏巢

へ行きなさい。嘘であったなら、夏侯惇があなたを殺すわ」

「……真であったならば、私を末席に加えていただきたい」

「いいでしょう。この霸王の名にかけて、誓おう」

言質は得たとニタリと笑う。

「文官に馬を用意させるわ。その文官についていきなさい」

そう言って曹操は天幕から許攸を追い出す。曹操は夏侯惇の方を見て言う。

「春蘭。烏巢の近くに川があるから、そこで許攸を殺して流しなさい」

えっ、と驚きを示す夏侯惇。その夏侯惇に笑って言う。

「私は犬との誓いを守るほど暇ではないわ」

烏巢を襲撃され、もはや大勢は決した。

袁紹は兵を維持できなくなり、兵は脱走、士気はどん底まで下がった。

天の時も袁紹のもとから逃げ出した。田豊が冀州へ戻り兵をかき集めて戦場へとまた戻ってきた丁度そのとき、烏巢の兵糧庫から火の手があがった。

田豊は袁紹の言葉通り速さを重視し、糧食は烏巢の兵糧庫を当て

にして最低限しか持ってきていなかった。

八千の兵を連れてきたはいいが、それを養う糧食がない。虎の子となるはずの増援が裏目に出た。

練度の低い兵は僅かばかりの糧食をもって脱走。争い。軍の体をなしていなかった。

そうした中で曹操軍の最後の突撃は当然受け止められるわけがなかった。

もはやこれまで。

そう田豊は感じ、決断する。

「姫様、この戦は我らの敗北であります。我らが全力をもって、曹操軍を押しとどめてみせます。その際にお逃げください。」

田豊が袁紹に進言する。

「そんな！ 私はまだ負けてなどいませんわ！ こんなところで負けるなどと……そのようなことあるはずがありません！」

しかし、袁紹にとってこれは退けぬ戦い。到底認められない。

田豊は無視して言う。

「姫様。この爺は姫様の成長を嬉しく思っていましたぞ。姫様の成長に間違いはなく、この戦で華々しく咲き誇った。その勇姿、この爺はとくと焼き付けました」

「田豊老……。一体何を言っておられるのです？」

「姫様の軍を率いる姿を見て思ったのではありませんぞ？ 姫様の、夢に向かって一直線なその姿を焼き付けたのです」

「……」

「残念ながら王才は曹操に軍配があがった。なれど、その姿は陰ることなし！ 姫様は可能性の宝庫であります！ 姫様の夢には軍は必要ないと、この戦ではつきりしたのです！ 姫様の夢へと至るその道はまだ続いている！ その輝く姿がその証拠！」

「……」

「……誠に残念なことはその姿をもう拝めないことが……」

うつむいて聞いていた袁紹も、その言葉には口をはさむ。

「っ！ なぜです、田豊老！ 私とともに逃げれば……」

袁紹の可愛らしい口到人差し指をあて、首を横に振る。

「……戦の責任を取らねばなりません。そうしなければ収まらないのです」

「……そんな……」

袁紹の悲しみにくれる顔を見て、田豊は安心させるように破顔させる。

「ご安心なされ。これでも爺は軍師ですぞ。この太腕で曹操を叩きのめしてもいいのじゃが、そこは軍師らしく、口を使って生き延びましょう」

ぐつ、と腕をまくり力こぶを見せようとする。その少したるんだ腕に僅かばかりの筋肉が膨らんだ。

「……わかりましたわ。田豊老の心意気に応えないわけにいきませんもの。……私も生き残りますから、田豊老も亡くなっではいけませんわよ……」

一度目を拭い、顔を上げて言う。
その姿に田豊も安心する。

「顔良殿、文醜殿。姫様をお頼み申す」

大切な一人娘。みつともなくとも、自身よりはるかに年下の少女二人にしっかりと頭を下げた。

「田豊様……」

「へへっ、アタイたちがちゃんとしてやるって！」

顔良は心配そうに、文醜は明るく答えた。

田豊もそのらしい姿に笑みを浮かべる。

もう時間はない。間近まで剣戟が聞こえる。最後になるかもしれない別れともに迫ってきた。

「それでは行って参りますぞ」

田豊は袁紹をみる。いつも通りの姿を装つてもその目は潤んでいる。

「しっかり役目を果たすのですよ」

どこかそっけないその言葉。いつも通りを演じるために、むしろ不自然になっていた。

だから田豊は言った。大きな声で。歳にそぐわぬ童の顔で、

「姫様！ 爺を送ってください！ いつもの高笑いです！」

目を丸くする袁紹であったが、田豊のその気遣いに応えぬ恥はできない。それは袁家としてではなく、人として。

だからこそ、高らかに響いた。

「おーっほっほっほっほ！ おーっほっほっほっほ！」

河北の雄袁紹と、霸王曹操の戦いは曹操が勝利を収めた。その戦いは凄まじく、激戦の一言。

袁紹軍は三万八千の死者を出し、曹操軍は一万五千の死者が出た。曹操軍は被害甚大なれど袁紹軍を吸収した。だが、それでも被害を補えるものではなく、袁紹討伐の後、涼州を攻めようと計画していた曹操の覇道は一度足を止めねばならぬほどに至った。

だが、曹操にも思わぬ収穫があった。優秀な軍師の獲得。万の兵に代えられぬ宝を得た。

曹操にとって、袁紹は自身の心を震わせることのできぬ輩だと思っていたが、違っていた。確かにそれぞれの命を燃やしての誇り高き戦。この戦を創り上げた袁紹に敬意を表したのだった。そういう意味でも、この官渡の戦いは実に有意義なものとなったのだった。

なお、総大将である袁紹、二大看板の文醜、顔良の生死は不明である。

第十八話 ぎよくじ!

揚州寿春。

袁術が領主のその都で軍議が行われていた。袁術が無茶を言い、張勳がその無茶を言う袁術を褒め称える。結果、他の文官や武官が迷惑を被るといふ、いつも通りの軍議。

しかし、半董卓連合から後の軍議では、その様相は変わってきていた。その理由というのは、とある武官の台頭である。

その武官は袁術軍に似つかわしくないほど精強であり兵からの信頼も厚い。軍事ではもはや大將軍の張勳よりこの者の意見に従えと言われるほどの実力者である。また、それを張勳は「軍事は貴方にお任せしますので」と容認している始末である。

さらには驚くべきことは、この武官は連合以前まではただの一兵卒であったことか。一兵卒から成り上がり、将まで務めるその姿に兵は畏敬の念を禁じえない。

その武官がただいま行われている軍議を騒がせていた。

「袁術様! 馬鹿なことをおっしゃられてはなりません! そのようなことをすれば反董卓連合ならぬ反袁術連合が結成されるでしょう! 自ら破滅を招いてはなりません!」

その武官は、姓は紀、名は靈。反董卓連合で劉表に預けられ鍛えられた内の一人であった。

「し、しかしの……。せっかく玉璽があるというのに皇帝を名乗らんというのは、勿体無いというかなんというかの……。な、七乃はどう思うか?」

「う、うん。私はお嬢様の好きなようにしていただくのがいいと思うんですけど……。でも紀霊さんって怖いんですね。劉表様が乗り移ってるみたいで」

袁術は他の諸侯が金勘定をしているときに、洛陽にふらふらと出向いて偶然井戸の中から光り輝く玉璽を見つけ出していった。

玉璽とは、秦の始皇帝の時代から続く皇帝専用の印章。皇帝のみが持つことを許された権威あるものである。その権威から使う者によつては毒とも薬ともなり、その者は泥船渡河を強いられる。

そして、袁術は玉璽を使うに値しない人物であると言わざるをえない。

民の暮らしに何の興味もない袁術が統治する揚州は苦しんでいた。高官が贅沢するための増税に、作物の不作のためか食料品の価格高騰。危機的、とまではいかないでも、揚州は決して楽に過ごせる土地ではなかった。もちろんその様子では袁術の統治に疑問反感を抱く人もいる。それも大勢いる。その圧政は広く知れ渡っている。このような状況で皇帝を名乗るなど、自殺志願者が脳が虫に食われているかどちらかといったところである。

故に紀霊は玉璽を使うことに反対した。

紀霊は袁術を守るために反対したのではない。もとより忠誠を誓った御方は荊州劉表その人である。袁術がこつぴどくくたばつても一向にかまわないと思っっている。むしろこのような愚物はそうなるべきだとすら思っていた。

ならば、なぜ玉璽を使うことを反対したのか。

それは連合での劉表から授かった言葉に由来する。

『私は孫策が嫌いだ殺したいわけではない』

紀霊はこの言葉をこの言葉を受け取つてどういう意味だと思つたか。袁術のそばに付き、張勳から話を聞いて、孫策が袁術軍にいる

経緯を調べて、結論を得た。その結論とはつまり。

『孫策はいずれ私のものとする』

孫策、いや、孫堅は劉表に敗れ、弱体化したことから袁術に庇護されている。孫策は親の孫堅を劉表が殺したことを恨んでいる。劉表は孫策が敵意を向けていることに不愉快であると感じているが、利用価値のある人物であると思っている。劉表が孫策にどのような価値を見出しているのかはわからない。知るべきことでもない。劉表がそう感じているであろうということが重要である。ならば、孫策が袁術の愚策で潰されてしまうことは望むものではない。紀霊はそう結論づけた。

だからこそ、玉璽を使って皇帝を名乗ろうなどという破滅は断じて許せるものではなかった。

「いいんじゃない？ 皇帝を名乗れば人もたくさん揚州にやってくるわよ。そうなれば税も入ってきて蜂蜜飲み放題よ。」

そう言う孫策。ニコニコしながら甘言を言う孫策に紀霊は苛立つ。何を馬鹿なことを言うのか。その人とは他国の兵のことではないのか。一体誰が袁術を皇帝だと認めるといのか。なぜここには破滅したがる人間ばかり集うのだ。

紀霊は孫策を守るために袁術を止めようとしているにもかかわらず、孫策は台無しにするようなこの発言、この頭の悪さである。ほとほと胃が痛くなった。

袁術を見ると孫策の言に目をきらめかせている。今度は頭が痛くなつた。

「何を言うのです、孫策殿。ただ玉璽を持っているだけで皇帝になれるわけがありませんでしょうに。偽帝として討伐されるだけです。」

「そうかしら？ 漢はもう滅んでいるのよ？ 皇帝不在の状況なら誰が皇帝を名乗っても構わないでしょ？ そして皇帝を名乗るのに大事なことは自身が漢の後継である、皇帝であるという証拠よ。その証拠である玉璽がある。これはもう天が袁術ちゃんを選んだのかと思えないわね」

「何を馬鹿なことを……。その言が正しくても、それを為せる土壤がないではありませんか！ この民の有様で皇帝を名乗るなど民が認めないでしょう！ それにその玉璽が本物であるか他国は一見してはわからないのです！ その玉璽が偽物だと言われては、他国に攻める口実を与えることになりかねません！」

「だからこそ、皇帝を名乗るのよ」 皇帝を名乗って民を集めるのよ。そうして少しずついい街にしていけばいいじゃない そうなれば裕福になって兵だってもっと募れるじゃない。ほらっ、他国に攻められても大丈夫」

もう紀霊は絶句するしかない。会話が通じない。順序が分かっている。今は名より力が必要だというのに、名を裏付けする力が袁術軍にあるというのか。孫策は袁術軍にどれほどの力があると過信しているのか。詭弁に詭弁を弄し、皇帝を名乗らせようとしている。もともと紀霊も頭は良くない。所詮ただの武官で弁の立つ者ではない、それでも孫策の言っていることが間違っていると理解できた。

袁術が孫策と紀霊の弁舌を聞いて、唸りながら言う。

「うん。ようわからんが皇帝を名乗るのは一長一短ということか
のう、七乃？」

「えっ？ ああつ、そうかもしれないですね。紀霊さんは皇帝になることの欠点、孫策さんはなることの利点といったところですかね。私は内政官として言わせてもらえば民が増えてくれるのなら助かりますね。もとより乱世ですので、いつかは攻められるわけですし強くなっておくのはいいんじゃないですか？」

張勳は消極的だが孫策に賛成である。紀霊は齒ぎしりせずにはいられない。

いつかは攻められるといっても、一国相手にするのは反袁術連合を相手にするのではわけが違つてあろうに。

このままでは孫策の意見が通る。もうこの論争は終わりだ。このまま黙つていても事態は好転しない。もっと別の角度から、話を進めよう、そう紀霊は思った。

「袁術様は皇帝になって何をなさりたいのですか？」

袁術が何を思って皇帝になろうと思ったのか、その答えが皇帝にならずとも為せることならば、そこから切り崩していこう。そう思つて聞いた。

「……妾は皇帝になつたらな……」

一度言葉を区切り、溜める。袁術のくせになにを迫力を出しているのか。

「……皇帝になつたら、偉そうにした劉表をこてんぱんにして目に見せてやるのじゃー!!」

空気を殺す言葉の刃が部屋中に飛んだ。

「妾は劉表が気に入らないのじゃ！ 妾を虚仮にして恥をかかせるなど、断じて許してはおけんのじゃ！」

連合での劉表との争いを思い出し、癩癩を起こす袁術である。

「あら、袁術ちゃんてば、劉表のこと嫌いだったの？」

その争いを知らない孫策が問う。

「孫策さんは知りませんでしたか？ 連合でちよこつといじめられちゃったんですよ。そのせいで劉表様のことをそれはそれは怖がって。だから最近は毎日欠かさずおねしよを……」

「な、七乃ー！！ そのことは内密にしておけとー！」

あら失礼、と舌を出して口を閉ざす。時既に遅しだが。

「と、ともかくなのじゃ！ 妾は劉表を叩きのめさんと夜も眠れんのじゃ！」

おねしよがバレて若干顔を赤らめて言う袁術。

それはともかく、劉表を倒したいことは分かったが、それが皇帝になる理由になっていないことに気がついていないのか。その部分を張勳が補足する。

「お嬢様は劉表様に劣等感を抱いているんですね。景帝の血族である劉表様に先んじて皇帝になることで優位に立つと、そういう事です」

その内容に紀霊は溜息をつかざるをえない。なんとくだらない理

由か。いや、太守にとって他より優れていると示すことは重要な
であろうか。それでも紀霊にとっては取るに足りないことと思えた。
ただ、目的が劉表に勝つということは紀霊にとって一大事である。
劉表に被害を出すことはとても容認できない。

「そのようなことで戦端を開かないで頂きたくあります。袁術様の
一言が多くくの兵の命を散らせることになるのだとご理解ください」

「うぐぐ……、それでも許せんのが……。駄目かの？紀霊？」

「駄目です」

「うぐう……」

この袁術、劉表の教育を受けてからすっかり臆病になってしまっ
ていた。いつもの傍若無人ぶりは影を潜め、ある程度は話を聞くよ
うになっていた。それも紀霊に対しては特にその様子を見せた。

「……わかったのじゃ……。皇帝を名乗るのはやめにするのじゃ……」

意気消沈する袁術。対して紀霊は一安心である。孫策はというと
無然とした様子。

「英断です、袁術様。時が経てばまた機会が来るでしょう」

「……うむ……」

袁術が玉座から立ち、自室へと帰る。その袁術に続いて張勳が軍
議の終わりを告げてから後を追う。

荒れた軍議が終わって一つ息を付く紀霊。

ただの問題の先送りかもしれないが、なんとか破滅は防げた。劉表様に対する義も尽くせた。あとはこれを劉表様が袁術か孫策を下すまで続ければいい。そうすれば私の任務は完遂だ。紀霊はそう思った。

玉座の間から出てのしのしと歩く桃髪褐色の長身の美女。城から離れた宿で断金と言われた関係の黒髪褐色の知的眼鏡と合流する。

「あゝ、ムカつくわね、あのチンピラッ！ 大して強いわけでもないのかい顔して！」

そう愚痴る孫策。

このチンピラというのは紀霊のことであるが、紀霊は別に賊上りの人間というわけではない。普通の農民の子である。にもかかわらずチンピラ呼ばわりされるのは、ただ顔が強面であるからである。椅子に座って本を読んでいた周瑜はその言葉に顔を上げて苦笑する。

「紀霊のことか。いいじゃないか、民から成り上がってきた苦労人なんて。贅の限りを尽くすわけでもなく、なにか不正を働くわけでもなく、それどころか袁術をたしなめることも出来る。なかなかいい人材だぞ」

「それはそう思っけどね。でも、私たちの独立には厄介な存在じゃない」

孫策は野望を持っている。袁術から掠め取られてた江東の地を孫家を取り戻し、独立を果たすというものである。そのためには袁術は邪魔、排除する対象である。

「袁術ちゃんがね、玉璽を手に入れたのよ」

孫策のその言葉に周瑜が驚愕する。本の頁をめくる手がピタリと止んだ。

「それで袁術ちゃん、皇帝になるんだって言い出したからこれは利用出来ると思っつて、おだてただけど……。紀霊に邪魔されちゃった」

久しぶりに頭使ったんだけどな、と舌を出す孫策。その孫策を無視して思考にふける周瑜。

「……袁術が皇帝に、か。それはまずいな。そうなったらこの地は他の諸侯に蹂躪されて江東を取り戻るなど不可能になる。それ以前に独立の前に我らは死ぬな。……ん？ おい、雪蓮。さっきおだてたとか言っただが、まさか皇帝になるように進言したんじゃないやあるまいな？」

目を丸くしている孫策に、その眼鏡を光らせて尋ねる。

「えっ！？ いや、だって、袁術ちゃんが皇帝になれば反感持つ人も多くなって、独立だって早くなるんじゃないの？……あれっ、違っただ？」

汗を流し頭をかく孫策に、解りやすく溜息をつく。

「はあ。雪蓮、その反感を持つ人っていうのは誰のことを言うてるんだ？」

少し考えて孫策が答える。

「……それは民でしょ。あんなのが皇帝だなんて認めないでしょ。あとは……皇帝になりたかった諸侯とか、名声が欲しい諸侯とか……」

「民が反感持つて何をするというのだ。井戸端や飯店で愚痴をこぼすだけだ。皇帝になりたい者が偽帝を討って自身が偽帝になるか？馬鹿な事を言うな。名声が欲しい者がこちらの味方になるとも思ったか？ 私たちは仮にも袁術軍なのだぞ。」

漢がまだあれば話は違うのだがな、と付け加える周瑜。周瑜の返答にあわわと、どこその軍師のように顔を青くする孫策。

「……紀霊は反袁術連合が出来て大変だつて言つてたけど？」

「それは……違うな。反董卓連合が何故結成できたかわかるか？反董卓連合は皇帝を助けだすという大義と、褒賞が期待できるといふ打算があったからこそ集えたのさ。名声だけでは生きていけない、金がなくてはな。そして所詮一諸侯の袁術を倒してもその金は反董卓連合での褒賞に及ぶはずもないのだ。だが遅かれ早かれ曹操が劉表に攻められることにはなるだろうがな」

「ふん。……それじゃあ、紀霊に助けられたってこと？」

「私は紀霊の言葉を聞いてはいないからなんとも言えんな。だが、奴が皇帝になるのを止めるよう言ったのならば、その通りだ」

「……下手に頭を使わないほうが良いみたいね、私」

くたつと身体をしならせ、机に身体を任せる孫策。その孫策に周瑜は片目を閉じて呆れたように言う。

「まったく、そう言って頭を使う政務を放り出すのはやめて欲しいわね」

孫策はそれには答えず、机に任せた身体をどろりと溶かせるようにして、机の下に潜った。

周瑜は孫策のその様子を見て、少し口角を上げ笑みを漏らしてから手元の本に目を移して考える。

皇帝の宣言。少し状況が変わっていれば独立が可能であったかもしれない。

袁術が皇帝を名乗ることで、揚州の攻められることを恐れた豪族が我が身可愛さに反旗を翻すかもしれない。その豪族を取り入って金銭面の援助と私兵を使い、各地で一揆を起こしたように偽装し、袁術軍を分散させる。さらに一揆の規模を盾に旧臣を呼び寄せ戦力を増す。そしてその孫策軍が一気呵成に袁術を捕らえる。

そういつ未来が待っていたかもしれない。だが現実はそううまくはいかない。

一揆を起こした農民、実際は兵隊だが、それを鎮圧するための袁術軍の練度が高くなってきているからだ。今の袁術軍では一揆は早い時間で鎮圧され、孫策軍の背後を突かれる事態になりかねない。いや、高い確率でそうなるだろう。

それでは孫家の独立は泡沫と化す。

一手足りない。袁術軍を弱体化させるか、我らが大きな戦力を付けるか、別に協力者を迎えるか。なんにせよ、まだまだ独立は先になる。

本をひらりと一枚めくる。まだ頁は中程といったところで、それが孫家の理想の実現への道を示しているかのようだった。

軍議を終えて自室に戻った袁術。

張勳の膝を椅子にして、気に入らないようにブーたれる。机の上の蜂蜜水は喉を潤す程度に口をつけただけで、さほど減ってはいなかったことをみると先程の軍議の結果が余程堪えたようだった。

張勳が袁術の頭に手を乗せ、髪を梳くように撫でる。

長い間袁術のそばについている張勳ですら、袁術がなぜそこまで落ち込むのか分からなかった。自分の意見が通らなかった経験は今までいくらかもある。基本的に袁術にやりたい放題させる張勳といえど、あまりにも荒唐無稽な要求は取り下げさせていた。例えば、蜂蜜の遊泳場などである。

それは、ともかく。

そのときの袁術は癩癩を起こし孫策に無理難題を言うことはあれ、今回のように落ち込んで黙りこむことはなかったのである。

張勳はその袁術の態度を心配し、優しく声をかける。

「どうしたんですか、そんなに落ち込んで。紀霊さんに怒られたの

が怖かったですか？」

袁術は口をきゅつとつぐみ、力強く横に頭を振った。

「それなら、そんなに皇帝になりたかったんですか？ 私にはそんな風には見えなかったんですけどー。皇帝になるのが目的じゃないんじゃないですか？」

袁術は驚いて振り向く。その顔が、なぜわかると語っていた。張勳はフツと笑って言う。

「私を甘く見てはいけませんよ！。美羽様愛好家の最初にして最後の人ですからね。他の人は認めません。私だけの称号です」

プイツと袁術はそっぽを向いてしまったが、その耳は赤くなっていた。

「……私にも言えませんか？ これでも美羽様の母親代行を担ってきたつもりなんですけど。悲しいですねー、この心の傷を癒すためにお暇をいただきましょうか。美羽様と一緒に」

張勳は軽口を叩き、少しは心をひらいてくれた袁術の気を引く。

その軽口には反応せずに袁術が言う。

「母親か……そうじゃな……。七乃には言わねばならないかの……」

呟くように言って、張勳の膝から離れ背を向けて窓の外をみる。

「妾は、なにも皇帝になりたかったわけじゃないのじゃ。……ただその姿を見せて劉表の鼻を明かしたいのじゃ」

何も特別なことでもない。いつもの袁術の我儘を同じような理由であった。それでも何か思うところがあるから、こつも袁術は気を落としていた。

それを聞くために張勳は問う。

「……………どうして、鼻を明かしたいのですか？」

袁術は少し身体をもじもじとよじり恥ずかしげにしてから、語る。

「……………笑うでないぞ？ ……妾は幼きときから寿春の地に送られた。妾はこれでも名門袁家の袁逢の子。本来ならば漢の都にほど近く、栄えている冀州を治めるはずじゃった。それが実際は田舎の揚州にいる。なぜか分かるかの？ 麗羽姉様が父上に可愛がられていたからじゃ。麗羽姉様のほうが年も上で、見かけもいい。その性格も袁家に相応しいと、袁家皆に好かれておった。皆が麗羽姉様を袁家の後継だと言っておった。だから冀州は麗羽姉様のものになった」

「……………妾のことなど、誰も気にしてなどいなかったのじゃ。忘れておった」

袁術の鼻をすすする音が部屋に響く。

「別に妾は冀州を治められなかったことが辛いのではない。袁家を継ぐことが出来なくなることが悔しいのではないのじゃ。」

「ただ……………。ただ、麗羽姉様の頭に置かれた父上の掌の温もりが欲しかったのじゃ……………」

顔を天井に上げて、涙がこぼれないようにする。

「だが、妾はもうそんなことは思っていないぞ？ 妾は子供ではないからな！」

歯を見せて、二カツと笑う袁術であったが、張勳からはそれは泣き顔に見えた。

「妾は連合で劉表に叱りつけられたとき、一度父上に叱られたときを思い出したのじゃ！ あれは父上が乗り移っていたとしか思えん
のじゃ！」

そのときのことを思い出し、袁術は頬をふくらませて抗議する。

「まったく！ 死してなお妾をいじめるとは不屈きな奴なのじゃ！
劉表を通して父上を叩きのめさんと気がすまんのじゃ！」

「皇帝になって奴より立場を上にするのじゃ！ 這いつくばらせて、
妾が立派になったことを知らしめてやるのじゃ！」

プリプリと手を振り、憤慨の意を示す袁術。

張勳は袁術の強がりを理解し、その思いを尊重する。

本当は父からの愛に飢えているくせに、本当は父親の面影がある
劉表様に「立派になった」と認めてもらいたいくせに。

張勳は袁術の可愛らしい成長をみて、鼻をすすって、涙をぬぐい、
薄く笑う。

「フフツ、さすがは美羽様ですね。それに付き合わされる劉表様がお気の毒ですね。よっ、大陸一の我儘娘！」

「わははーっ！ そうであるうそうであるう！ ……んっ？ それはほめておるのか？」

「当たり前じゃないですかー、このすつとごどっこい」

「わははーっ！ そうかのそうかの！ 妾も調子が戻ってきたのじや！ んぐつんぐつ、ぷはー！ 七乃、蜂蜜水を持ってきてくりやれー！」

「はーい、ただいまー」

張勳が部屋から出て、蜂蜜のある調理室へ向かう。その道を往く張勳の顔は袁術に接するときのものは、まるで別物。

主が泣いて父の愛が欲しいと言っている。その願いを叶わずにおくことなど出来るものか。いや、出来ない。今までさんざん我儘を言われてきたが、これだけは叶えなければいけない。今までの我儘は寂しさの裏返し、この我儘こそが本当の意味の願いだ。

今こそ主に報いるとき、いや、これは主従関係などという軽いものではない。

袁術の母親代わりとして、父親を叱責しよう。そうして、やり直すのだ。親子の関係を築いて袁術に愛を注ぐのだ。そう張勳は決意した。

「……あつ、それじゃあ私と劉表様は夫婦に？……ふふっ」

第十九話 きよくじー!! (前書き)

もっ……NAISEIは書かん……。

第十九話 ぎよくじ！！

草木も寝静まった夜更け。寿春城内のとある一室。鬼気迫る表情で竹簡に字を刻む張勳がそこにいた。

目を充血させ、額と髪にはうつすらと脂を浮かせ、手を動かす。その手を緩めることなく動かしながら張勳はぶつぶつと呟く。

「……………美羽様が、皇帝になるためにはっ……………」

張勳は袁術が皇帝になるための下準備をしていた。皇帝になるためには紀霊の言っていた皇帝になったときの不利益と懸念を振り払っておかなければならない。紀霊の言っていた内容は、民と豪族などの反感、諸侯に攻められる可能性である。それらを改善するために、こうして制度や政策を見直し修正していた。

張勳の行動原理の全ては袁術である。故に、当然この夜更けに―睡もせずに政務にあたることも袁術のためである。そして、今回の件は張勳にとって身を滅ぼしてでも成し遂げなければならない最大の仕事。だからこそ、張勳は寝る間を惜しんで働いていた。

とはいえ、なぜ張勳はわざわざこの夜更けを選び政務をしているか。

それは、袁術が皇帝になることの意味、袁術の希望を聞いたためと袁術の堪忍袋の緒は糸の絹ほどであると知っているからである。袁術は皇帝となった自身を、自身の成長を父に見てもらいたいと思っている。それならば、袁術が真面目に政務を為して揚州を統治し、皇帝を名乗るに相応しい存在であると下々に思わせた上で皇帝になるのが望ましい。だが、現実問題としてそれは不可能であると言わざるをえない。

袁術はまだ子供。この幼女に荒れた揚州を復興させるほどの能力

はない。その才覚もない。また自覚もない。ならばと張勳は思った。

(美羽様にできないなら、この私が代わりにそれを為そう)

張勳は袁術が皇帝となるため、その道の障害を払おうと動いたのだった。だが、それでは袁術の目的を果たせない。

(美羽様が自身の力で皇帝になったと思わせてやりたい。そのためには私が苦労している姿を見せてはいけない。美羽様がお休みになつているときに私が準備しておかなきゃ……)

忠臣張勳は主君のためを思って、母親七乃は愛娘のためを思って、体に無理を言つて政務を為した。袁術を甘やかしすぎているのかもしれない、そういう自覚はあつても今更変えることは出来なかつた。母は子を愛で包むものなのだから。

「叱責するのは父親の役目ですよ……」

そう呟いて、あとは袁術の判をもらつただけの竹簡を作り上げ続けた。

「……じゅんくん……むにゃむにゃ……。……ん？」

袁術の寢室。すやすや涎を垂らしながら眠っていた幼女がいる。その姿は黄色の蜂の絵柄がある寝巻き。熊の耳付き頭巾も付いている袁術のお気に入り寝間着だ。それを着るともう寝るといふのに気分が高揚し、なかなか寝付けなくなるという迷惑な代物である。窓から差す日の眩しさに、うつらうつらとしながらも目を覚ます。

「ん、うん。……はあ、良く寝たの。七乃、朝一の蜂蜜水を持ってきてたもれ」

袁術の一日は蜂蜜水を飲むことから始まる。蜂蜜という栄養価の高い物と睡眠時に失われた水分を同時に摂取し、これからの政務に励むことの出来るようにと、そうして蜂蜜水を飲んで……いるわけもなく、ただ好きだから飲んでいたのである。

だが、その日課も今日は続かなかった。

「……？ 七乃？ 蜂蜜水ー！」

袁術が張勳を呼んでも返ってくるのは自身の声だけ。いつもは呼べば飛んで来るかのような張勳が待てど暮らせど来ない。

よくよく考えればおかしい事だ。今までこのようなことはなかった。今までは大抵袁術が起きる前に張勳が肩を揺らし、蜂蜜水を持って優しく起こしてくれたものだ。それが今日に限っては袁術は自力で起きている。まあ、袁術がいつ勝手に起きようとたいした話ではない。袁術自身もそれは特に気にしてはいない。だが、袁術にとって切っても切れない大切な物がないなど、言語道断である。

袁術の一日は最初からつまづいたのであった。当然、袁術の機嫌は悪くなった。

「ぐぬぬ。七乃め、妾が呼んでも蜂蜜水を持って来ないとは、さては寝坊じゃな！ 妾が起きているにも関わらず他が寝ていると

は許せんのだじゃ！」

袁術は、日が昇るまでに臣は起きなければならぬと発布しようかなどと考えながら、柔らかな天蓋付きの寝台から跳ねるように下りて、隣の張勳の部屋に鼻息荒く向かう。

張勳の部屋に入ってみると、そこはいつも通りに整頓された部屋である。部屋の手前には本棚に綺麗に並べられた本に身だしなみを整える鏡台。奥には政務のための机がある。机は物が一切無く使われている様子はないように見えたが、埃が積もっているわけでもなかった。

そのいつも通りの風景で違う部分があった。

それは、寝台の人型の膨らみと机の前の少し斜めにずれた椅子である。

袁術は椅子には目もくれずに寝台に向かい、毛布を勢い良く剥ぎ取った。

「こらっ、七乃！ もう朝じゃぞ！ 妾が起きているのだじゃぞ！」

「ふわっ！ ああっ、ちよ！ な、なにっ!？」

寝ているときに突然の襲撃。張勳は状況をつかめず混乱し、片腕で目を覆い日光を遮るとともに、手足をばたつかせて襲撃者から身を守ろうとした。その結果。

「ぐむう！」

張勳の足が袁術の腹に突き刺さった。袁術の身体はくの字に折れ曲がり涙目、苦悶の表情を浮かべた。

張勳もその声に襲撃者の正体をつかみ、動きをピタリと止めて恐る恐る、膝をつき腹を押さえて俯いている人物の後頭部を見る。熊

の耳付き頭巾が見えた。

「……み、美羽様？ 今日もいい天気ですね？」

「……」

反応が帰ってこない。が、屍ではないようだ。

袁術はゆっくりと顔を上げて膝を起こした。正座で待っていた張勳が見ると、その顔は一時的な呼吸不全と怒りによって紅潮していた。

袁術は数度深呼吸し、また、大きく空気を吸い込んでから吠えた。

「七乃おおおおー！！！」

つばを飛ばしながら咆哮する袁術を、張勳は甘んじて受け入れたのだった。

袁術の部屋。既に着替えは済んでいつも通りの格好である。そこにいる困り顔と怒り顔の少女二人。

「機嫌直してくださいよ、美羽様」

袁術の肩を揉み、媚びへつらう張勳。蜂蜜水を自棄になりながら

飲む袁術は、そう簡単に態度を変えることはなかった。朝からつまづきっぱなしで今日は最悪の日だと負の感情に取り憑かれていた。

袁術はぶくうっと頬を膨らませて怒りの意を示す。

その姿を見て張勳は、これは並大抵のことでは機嫌は直らないなと苦笑して、膨らんだ頬を突付く。

さて、どうしようか。そう張勳が考えたが、さほど時間を掛けずに解決策を思いつく。袁術にとって最高の贈り物となるはずのもの。

「あゝあ、美羽様が機嫌を直してくれたら皇帝になることも夢じゃないのにな」

ピクツと聞き耳をたてる。

「……妾の機嫌と皇帝と、何の関係もないのじゃ。……誑かそうとしてもそうはいかんのじゃ」

不信感故に、単純な袁術でも疑ってかかる。

「機嫌を直してくれたら、私が皇帝になるための策を教えてあげますよ。あゝ、でも今のままじゃ駄目ですよ。だって機嫌の悪い美羽様なんて私嫌いですから」

「……」

「信じられませんか？ ほらっ、紀霊さんの言葉を思い出してくださいよ。紀霊さんは民が反感を持つことと、諸侯に攻められることがまずいから反対していたんですよ。その問題を解決すれば、皇帝になるのに障害なんてないじゃないですか」

「……その問題を解決したのかえ？」

袁術は肩を揉んでいる張勳に首だけ振り返り、上目遣いで聞く。張勳の嗜虐心が実にくすぐられた。

「うふふつ。ふふふつ、ふふふふつ」

「な、七乃っ？」

不気味に笑う張勳に怯える袁術。張勳が機敏な動きで妙な構えをとりつつ言う。

「ふふふつ、愚問ですよ美羽様！ フウーハハハッ！ この狂気の蜂蜜幼女付内政官に不可能はありません！」

「おおおっ！ 良く分からんが格好良いぞ！」

「フウーハハハッ！ 美羽様！ 今日から私のことは蜂蜜院「そんなことより、一体どうすれば皇帝になれるのじゃ！」……………」

妙な構えをだらりと解いて、一つ溜息をつく張勳。

「……………美羽様、まずはお約束というものを学んでくださいよ」

「お、お約束？……………良く分からんがすまなかつた」

それはともかく、と場をとりなすように咳払いを一つ。

「美羽様、皇帝になりたいですか？」

珍しく真面目な顔で、袁術の目線に合わせて膝を屈めた。袁術は

張勳の態度に圧倒されながらも目を見て頷いた。

「う、うむ。なりたいのじゃ」

誤魔化しは許さぬとじーっと目から発する。袁術も大きな目をそらす事無く、じーっと見た。というか、じーっと声に出していた。そのまま重ねて聞く。

「機嫌、直してくれますか？」

「ん？ 別に最初から怒ってなどいないのじゃ」

「……」

何を言っているのかという袁術の表情に張勳の目が泳ぎかけたが、これが美羽様だと思ふことでなんとか立て直した。改めて。

「皇帝になったら、きつと諸侯たちが命を狙ってきますよ。死ぬ覚悟はありますか？」

「妾が死ぬわけがないのじゃ！ 死ぬ覚悟など持つ必要などない！」

死への恐怖の克服を求める。命を狙われる立場にあると自覚してもらいたいからだ。

「蜂蜜の量が減りますけど我慢できますか？」

「……もちろろんなのじゃ！ 朝と昼と夕と夜にさえあれば耐えてみせるのじゃ！……ちなみに落ち着いたら蜂蜜は元の量になるのじゃよな？な？」

欲望の制御。子供とはいえ、もう少し我慢を覚えてほしいからだ。もちろん、金銭面の意識も少しは考えてもらいたかった。

「紀霊さんに怒られると思いますけど、ちゃんと怖がらないでいられますか？」

「は、蜂蜜は……。いや、紀霊なんて妾の部下なのじゃ！ 部下を怖がる訳ないのじゃ！」

上の立場にあると自覚して欲しい。この点にはさほど心配してはいなかったが、相對する人物によって態度が変わることは好ましくなかった。

「政務もこれまで以上に多くなりますよ。仕事に拘束される時間が増えても大丈夫ですか？」

「妾がやらねばならないのなら、仕方ないのじゃ。それに、七乃も手伝ってくれるのじゃろ？ なら、大丈夫なのじゃ！」

これは幼い袁術には酷かもしれない。だが、やってもらわなければならぬことだ。政務に年齢は関係ない。

今はまだ実務能力はないが、いずれは一人でも政務を為せるようになってもらいたい。

いずれの問いにも袁術は目を逸らすことなく、自信満々に答えた。それは、もしかするとその場限りの論かもしれない。自身の願いを叶えるために都合のいい言葉を並べているのかもしれない。

例えるなら、豪族の一人息子が親に仔馬をねだり、「僕が世話をするから！」と言って、結局飽きて放置することであろうか。その

ときの親はどう思って子に買ひ与えるのであろうか。それは、親子煩悩であることもあるだろう。だが、それだけではないはずだ。つまり、子を信じて任せてみたかった。生物の世話をすることの大変さを学んで欲しかった。もし、自身の言を違えても、その記憶は刻まれて、またひとつ成長するだろうという期待があるのだ。

張勳はその親と同じような気持ちでいた。だからこそ、笑って言う。

「仕方ないですねー。そこまで言うのなら、特別にっ！ 教えて差し上げますっ」

「おおっ！ さすがは七乃なのじゃー！」

小躍りする袁術。既に気分は皇帝になったといったものだ。

張勳はその様子を見て、皇帝を名乗るのはまだ先なのになあなどと思いつつ笑みを浮かべる。

「では、教えて差し上げます！ とくにご覧なさいませ！」

そう言つて、張勳の部屋から竹筒を持ってくる。それをドンツと袁術の前の机に置く。その時の衝撃で数個、竹筒の山から崩れた。

竹筒の山を見て袁術の先程までの機嫌はどこへ行ったのか、顔が青ざめていた。

「さあ、美羽様！ この竹筒の山を成敗したとき、美羽様は皇帝とすることができるでしょう！ さあさあ！ 筆を持って！」

いい笑顔で袁術に迫る張勳。張勳にとって努力の結晶である竹筒その成果を見せつける。

この竹筒、量はあれど既に袁術の判を押すだけで問題ないもので

張勳が創り上げたその政策は数十、数百と膨大な数であったが、その中でも注目すべき政策は主に三つである。

一つは減税。

今までの重税では農民も商人も負担が大きすぎる。負担を軽減させ反乱、一揆を起こさせないようにする狙いだ。所詮もともと取り過ぎていた税金だ。少々税金が減ったところで今までの蓄えがあるというより減税してもまだ高いくらいだ。だから、張勳は問題はないと判断した。たとえ少額の減税であったとしても、民の反感を抑える効果さえあればそれでいいのだ。

一つは豪族の弱体化。

豪族が今まで袁術に従っていたのは、袁家のもつ中央との繋がりを利用しようとしていたからである。だが、王朝は倒れその目論見は頓挫した。今豪族はこのまま袁術に従うか、反目し独立するか別の人物に寄り添うか、選択を迫られている。そしてそれは、反目する方向に考えを変えているだろう。それは仕方ない。豪族は袁術の無能さを知っているのだから。いずれ反旗を翻す豪族を野放しにするなど愚策である。そこで袁術の愚昧さが役に立つ。豪族は袁術の愚昧さをいいことに私欲を満たし、税の着服をしていた。張勳はその証拠も掴んでいる。それを理由に汚職豪族を肅清するとともに、豪族の金も手に入れられて減税で起きる税収減にも対応できる。ただ、どの豪族を肅清するかは慎重に選ぶ必要がある。あまりに有力な豪族だとそれこそ反感が大きい。弱小豪族だと豪族に与える影響が小さい。袁術が乱世に名乗りをあげると知らしめて地盤を磐石にするためにも、豪族共にこちらの本気度を見せる必要があった。

一つは市中警備隊の創設。

いくら有効な政策をしたところで、今までされた仕打ちに納得できない者などいくらでもいる。また、民を煽動し国家転覆を目論む人物だつて現れるかもしれない。そのような輩が跋扈しないように各地に兵の詰所を作り、民を監視することが仕事である。もちろん、そのような存在は民に反感を買うので、表向きは市中を警備し犯罪者を迅速に捕らえる組織、民の安全を守る善なる組織であるとしておく。

これらの政策が初お披露目となつたときは、かの周公瑾も目を丸くしたものだ。

減税は馬鹿でも思いつけるが、その税込減を豪族から徴収することで問題を解決したと同時に袁術の権威を高めることに感心した。だが、それ以上に驚くべきは市中警備隊である。

豪族は多くの私兵や小作人を雇っているが、肅清によつてそれらの民があぶれてしまうことを市中警備隊に配属することで難民となることを防いでいる。また、今まで豪族の子飼いからは税を徴収することが出来なかつたが、その問題も解決する。

市中警備隊は人民統制と難民保護と税込増と、それら全てを賄う政策であつた。

これらの政策は紛れもなく効果を上げる政策であると周瑜は驚嘆するとともに、独立した際には、特に市中警備隊に関しては、我らも設立、存続させようと考えたほどだ。

周瑜は政策を発表したときの張勳の顔を思い出す。

袁術の脇に立ち、「どや？ すごいやろ？」といったふうの手を腰に当て、ふんぞり返る姿に苦笑するが、その姿もあながち間違ひではなかつたのだと思う。今まで張勳が揚州を切り盛りしてきたのだ。張勳は有能ではあるのだ。

だが、惜しむらくはこの政策は失敗に終わってしまうことだろう。

政策一つ一つは正しきもの。これらをその通り実行していれば、まさしく効果を上げるだろう。しかし、張勳は性急すぎた。

周瑜はなぜ張勳が急に働き始めたのかわからない、いや、袁術専属の甘やかせ大将としての側面を知っているので、袁術を皇帝にするためなんだろうとは分かっていたが、その唐突さが分からなかった。また、その性急さを残念に思った。もつとも、独立を目指す周瑜にとってそれは好都合なことであるのだが、一軍師としては有効な政策が機能しないと分かることは、どうしても気を落とさせた。

「残念だな……。張勳は政策の効果だけを見て、人を見る目がなかった」

第十九話 きよくじ!! (後書き)

web拍手置いてみました。ちょこちょこ他作品で見かけたので自分もやってみよう。

感想に書くまでもないこととか、なにかどうでもいいこととか、そんなことに使ってみてください。気軽にどうぞー。

第二十話 こうてい！

政策が施行されて幾日が経ったか。張勳は忙しい日々を送っていた。

その忙しさは政策立案時に予想していた心地良い忙しさではなく、焦燥感漂う不快な忙しさである。

張勳はこんなはずではなかったと忙殺されるほどの竹簡を呪う。どうしてこんなことに、そう思うが考えるまでもなく自身の甘い考えのせいだと頭を抱える。

そんなときに荒々しく扉を叩き入ってくる袁術。その表情は一目見ただけでわかる。目を吊り上げへの字口。分かりやすく怒っていた。

「どういうことなのじゃ、七乃！ そなた、妾がああ政務を為せば皇帝になれると言ったのじゃ！ それがどうしてこんなことになっておるのじゃ！」

その発言から読み取れるように、袁術はまだ皇帝にはなれてはいなかった。それがなぜかと問われると。

「ふええ、そ、それはですね、ちょっとした焦らし「そんなことはどうでもいいのじゃ！ いつになったら皇帝になれるのじゃ！」行為というか……って聞いてませんね」

「い・つ・に・なったら皇帝になれるのじゃ！」

「それはもうちょっと待っていたただかないと……。政策の問題点を修正しないと……」

政策が思うように機能していない。三つの柱の政策のうち、効果を出したのは紀霊が主導した豪族の肅清だけである。

政策は確かに施行されたが、それが民の恩恵に繋がっていない。減税など民と密着した問題であるにも関わらずである。市中警備隊は存在し、今も警戒しているにも関わらずである。

それが何故か張勳には理解出来ていなかった。

「その問題点とやらは分かったおるのかや！」

分かっていなかった。

減税は確かに為されている。市中警備隊は機能はしている。だが、どういうわけか民から反感を買っているようであった。その理由が掴めていない。

その理由の真相は、張勳の政策に問題があつたわけではなく、その政策に携わる人物の忠誠心、練度にある。

減税が為されているにも関わらず民は反感を持っている。減税が為されていると判断したのは袁術に上がってくる税が減収したからである。だが、実態は民の負担は変わらずに遠方の県令が今まで通りの重税を敷いていて、県令から州に上げる税金と徴収した税金の差額分を着服していたのだ。張勳は上げられてくる税金が命じた税の分であつたので、気がついていなかった。

市中警備隊は確かに組織されているが、その人員が問題であつた。人員は豪族からあぶれた者と民からの士官希望者、隊長として袁術軍の兵少数の派遣者で構成されている。それ故に練度の低い人物が多く、簡単にいえば不真面目であつた。とはいえ、隊長は袁術軍の兵。ある程度は警備に勤しみ民からも好感を得ていたのだが、それは悪評に掻き消されていった。一部の警備隊の者が街の侠の者と繋がりが、悪漢を野放しにしていた。侠の者が警備隊に賄賂を渡し、警備隊は悪事を見逃す。その姿を民にはばかることなく晒していた。

これらの理由によって民から今までの以上の反感を買っていたのだった。

ともかく、張勳はそれらの理由が分かっていたいなかった。故に袁術の質問に素直に答える。

「いや、それがさっぱり分からなかったりします！」

「何を自信満々に言っておるかっ！」

張勳のあまりに着飾らぬ答えにたまらず袁術は肩をビシッと叩く。

「そう言われましても……。民に媚びうる為の政策だったのに逆の結果になるだなんて想像してませんでしたもん」

「うぬぬ。あんなに政務をしたのは記憶にないのじゃぞ……。アレが無駄になるなんて許さんのじゃー！」

袁術の憤りの表情に張勳は怯えつつ言う。張勳ももちろん袁術に對して約束を違えて申し訳ないという感情はあるのだ。

「もうちょっと待ってくださいよ。もうちょっとしたら原因もわかりますって。そしたら皇帝ですよ！ 権威の塊みたいなものですよ！」

「なるべく早くするのじゃぞ！ 妾たちがもそもそしている間に麗羽姉様は幽州を落としたそうじゃからな！ あの妾の子には負けられんのじゃ！」

そう言って扉を壊す勢いで部屋から出て行く袁術。

原因を正すといった張勳も、さてどうしましょうといったふうだ。袁術は袁紹に対抗意識を燃やしているのは明らかである。このままぐずぐずしては袁術の我慢の限界はあつという間に超えるだろう。

でも、とりあえずはと張勳は蜂蜜水を入れるために調理室に向かったのだった。

そして、袁術の我慢の限界は張勳の思っていたよりも早くやってきた。

「麗羽姉様が曹操と戦っておるじゃと！」

袁紹と曹操の戦の幕開けである。

幽州を落とした袁紹は間を置かずに曹操領土に侵略し多数の城を落としている情報が入ってきた。

その報告をしたのは孫策である。もともと諜報に通じた者たちである。有力諸侯には総じて諜報活動を欠かしていなかった。

「そうなのよ。どうやら袁紹が曹操に侵略しているみたいね。結構大きな戦になりそうよ」

現状は小さな城を落としているだけだが、それに留まることがないのは明らかであるため、そう孫策は言った。

「でもまあ、十中八九袁紹が曹操に勝て「ぐぬぬ」、妾の子の分際で偉そうなのじゃー！」るわけが……って最後まで言わせなさいよ

……このガキ」

孫策の読みでは袁紹が曹操に勝つことはない。連合での両者の立ち振る舞いを見ていたら、そう判断できた。だが、お得意の勘はチリチリと警鐘を鳴らしていた。その予想を覆すものではないが、曹操が楽に勝つことはないと勘が告げていた。

それはともかく、袁術である。

袁術は大層イライラしていた。

それは自身が真面目に政務をしたにも関わらず皇帝になれないことに、張勳に命じた政策問題点の分析もうまくいっていないことに、袁紹の幽州侵略に。

そして、報告された袁紹の曹操攻め。袁術の我慢は限界を迎えた。

「もう我慢できんのじゃ！ これ以上麗羽姉様を調子に乗らせたくないのじゃ！」

玉座から勢い良く立ち上がりすぎて前のめりになりつつ言う。

「今ここに宣言するのじゃ！ 今よりこの地は『仲』として、妾が皇帝となるのじゃ！」

皇帝の宣言。懐から玉璽を取り出して光り輝くそれを天に掲げる。周りの臣も玉璽の神々しさに思わず嘆声を漏らした。だが、袁術の予期せぬ暴挙に声を上げる者がいる。拳を床に振り下ろし言う。

「……つ気でも違えましたか！ 袁術様！ 今はそのような戯言を垂れている場合ではないのです！ 我らが為すことはこの地の統治を……」

「うるさいのじゃ紀靈！ 妾はもう宣言したのじゃ！ これ以上妾

に逆らうつもりなら、七乃！ 此奴を牢に入れるのじゃ！」

「……………」

袁術が勇ましく言って紀霊の口を塞ぐ。だが、それは蛮勇であるう。

紀霊の言う通り、今は我慢のときである。袁術はなぜその選択をしなかったか。

それは、袁術が幼く理性を効かせることのできる歳ではないこともあるだろう。そして、袁紹への劣等感ももちろんあった。だが、それ以上にこの時の袁術の頭にあったこと。

『紀霊さんに怒られると思いますけど、ちゃんと怖がらないでいられますか？』

張勳との約束。

袁術はこれを違える気はなかった。その事自体は立派なもので、聞いていた張勳も体を震わせ胸を熱くするほどである。

残念なのはこの成長がもう少し早く訪れていれば結果が変わっていたであろうことか。

人の言を跳ね返す胆力を身につけるまでにはなったが、人の言を理解し呑み込む器が育っていなかった。

張勳はこの皇帝宣言でこの先困難な道を進むことになるだろうとは思ったが、それを悲観する気は毛ほどもない。

本来であれば、張勳の政策で皇帝になる土壌を創り上げることが出来ていたはずなのだ。もともと皇帝になることは決まっていたこと。それが少し早まったただけの話だ。出来ることなら、民の信頼を得て内憂を除いておきたかったが、もう詮なきこと。こうなってしまうとは徹底的に暗君としてこの地に君臨するのも面白い。

そのためにも軍事の強化は急務。

「紀霊さん、皇帝になる以上はそれ相応の兵力が必要です。徴兵と練兵、お願いできますね？」

「……私は袁術様の下僕。命令と有らば、成し遂げてみせましょう」

紀霊は頭を垂れて張勳の命に従う素振りを見せる。その濁んだ眼を見せまいと。

紀霊の言葉にホツとしたように笑うと、体の向きを変え別の人物にも言う。言うてしまう。

「孫策さん、旧臣を呼び寄せてください。あの人たちがいるなら、私たちに刃向かう賊なんてちよちよいのちよいですよねー」

張勳はその一言を何気なく言ったが、その言葉を孫策はどれほど待ち望んだ言葉だったか。

孫策は笑いを堪えることなど出来るはずがなかった。

「うふっ、それは嬉しいわね。久しぶりに会えるのね。そうね。確かに私たちに刃向かう奴を軽くひねってやれるわ」

孫策の言う『私たち』には誰が入っているのか。少なくとも袁術と張勳は入っていないかった。

「それじゃ、早速呼び寄せたいのだけど、もう行っていいかしら？」

「どうぞー 早ければ早いほど良いですからねー」

孫策は張勳の言葉を受けて妖しく笑って王座の間から出て行く。また、紀霊も孫策に続くように出て行く。

張勳は気がついていない。

袁術軍の二本柱が既に崩れていることを。今まさに飢えた狼と虎が放たれたことを。自ら破滅の道を転げ落ちていくことを。

張勳は想像もしていないだろう。せいぜいが劉表に攻められるだろう、袁紹か曹操に攻められるだろう、はたまた別の諸侯に攻められるだろう、その程度のものだ。自身が強大であれば民も豪族も恐るるに足らず。終りが来るまで暗君として生きるのだ。そう思っている。

それは今までの驕りであったと気付きもしない。自身の行いを省みることが出来なかった。今までそうだったのだからこれからも、そう思ってしまった。

だからこそ、紀霊と孫策の裏切りに気が付けなかったのだった。

周瑜のいる部屋に向かう孫策。その歩みは軽やかでなんとも上機嫌である。

部屋の前に立ち扉を破るように押し入る。そのときにはもちろん「じゃじゃーん！」という効果音付きだ。

「めーりん　良い報告と悪い報告と勘、どれから聞きたい？」

孫策の登場に驚くわけでもなく、そのまま本を読む周瑜。孫策の言葉に嘆息し答える。

「その目が良い報告を聞けって言ってるわよ。それで？ どうしたの？」

「さっすが冥琳 愛してるわっ」

キヤーツと周瑜を抱きつきにかかる孫策だが、周瑜に腕をつっぱられ「はいはい」と引き剥がされる。

ぶーぶー言っていた孫策だが、それでも冥琳分を補給し終えたのか、本題に入る。

「小蓮が帰ってくるわよ」

「っ！ 旧臣を呼び寄せられるのか！」

話が早いと微笑む孫策。

歡喜と喫驚の感情を表に出し、頭では思考を巡らす周瑜。まずは孫策から話を聞こうと先を促す。

「どうして急にそうなったんだ。いったい軍議で何があった。」

「それは悪い報告を聞けばわかるわ。袁術が皇帝になる覚悟を決めたわ」

先程と比ぶべくもないような驚きである。また、苦虫を噛んだように顔を歪ませる。

「……袁術は死にたいのか……。このままでは我らも巻き添えだぞ。いずれ曹操か劉表に殺される。……いや、待て。旧臣が戻ったら何処かへ逃げるか？ 人質もいなくなつたのだから可能なはずだ。劉表……は駄目か。曹操に庇護してもらえば……。そうだ、我らの代では独立はならずとも、曹操亡き後なら蓮華様か小蓮様の代で独立どころか、そのまま曹操の領土を乗っ取ることだってできるやも……。曹操と雪蓮が組めば大陸だって統べることが出来るんだ。そうすれば江東だって……」

そこまで考えて孫策に制止される。

「こらこら、私を放っておいて考え事？ 冥琳の悪い癖よ。冥琳は常に私を見てないと駄目なんだから」

調子のいい孫策にじろりと鋭くみる周瑜。

「……あなたが考え無しなせいで、その分考えてるのよ……。まあいい。その余裕は一体なんなんだ。これは我らにとっても最大の危機よ」

「ふっふーん。聞いて驚きなさい。勘よ！」

根拠のない勘を自信満々に言われても、そう思うが孫策の勘は人外離れしているのでその不満は脇に置く。なお人外離れはその言葉通り、人に非ずものをさらに超越しているという意味である。ようは、百発百中である。

「天才は困っちゃうわね。頭で考えるんじゃないで、別のもので答えを出すのね。こう、キューピン！ って分かっちゃうのよ。大丈夫だって」

(子宮か？ 子宮で考えるのか？ 頭に何も入ってないからなのか？)

「冥琳が心配してるのは諸侯に攻められることでしょうか？ でも攻められる前に袁術を潰せばいいじゃない」

「何を馬鹿な。いくら旧臣が戻ったとは言え、戦力差は歴然だ。民を巻き込むわけにもいくまいし、そんな時間はない」

「その戦力差が埋まるとしたら、どう？」

馬鹿な想定だ、そう思う周瑜だったが、思い浮かべる。

袁術軍は約六万、主戦力になるのは紀霊隊二万五千といったところか。対して孫策軍は、旧臣が戻り兵をかき集めたとしても、せいぜいが一万だろう。それも装備も心もとない兵だ。

六万と一万。いくら、袁術軍が有象無象でもさすがに厳しいと言わざるをえない。せめて、紀霊の兵一万でも消えてくれれば違うであらうに、そう考えて孫策に詰問する。

「まさか、紀霊が袁術を裏切るというのか？ 紀霊は十分袁術に重用され、実力に見合った地位にも付いている。袁術に対する恩だつてあるはずだ。今回は確かに紀霊の言は無駄になつたが、だからといって裏切りとは考えにくいな。紀霊の不安通、反袁術連合ができたとしても、兵を徹底的に鍛え上げれば勝敗は分からんしな」

反袁術連合は出来るはずもないとは思っているが、紀霊の思考をなぞる周瑜。

周瑜は知る由もないのだから仕方ない。紀霊は反袁術連合に勝つてもいけないし、負けてもいけないのだ。勝ってしまったら、それ

こそ劉表に面目立たない。負けて、孫策が生きていたとしても劉表の元には行かないだろう。死んでしまったら、それは考える必要もない。反袁術連合を成立させることが既に負けと同義なのだ。

「理屈じゃそうかもねー。だけど、紀霊は謀反するわ。ま、その真相は本人から聞きましょう」

孫策は短刀を一つ取り出し、それを扉に投げ突き刺した。

それが合図であったかのように扉が開き、そこには人相の悪い将の姿。紀霊があった。

「貴様、いつからそこにいた」

周瑜が剣呑な表情で詰問する。それを孫策が制しつつ言う。

「安心して、いま来たばかりよ。そんなに焦らないでよ。別に聞かれても困るものでもないでしょ」

ねっ、と笑いかける孫策。それに周瑜は自身の思考が止まっていたことに気付き、一つ深く呼吸する。会話を細作に聞かれるようなへまをすることなどないのだ。焦る必要はない。

軍師というものは不意を突かれると脆いものだなと思うとともに、反射的に正解を選ぶ孫策を心強く思った。

「……そうだな。失礼した、紀霊將軍。しかし、申し合わせもなく女性の部屋に訪れるなど礼を失していると言われても仕方ないことですよ」

「いや、こちらこそ失礼した。少々気を急いでしまったようだ。孫策殿に話があつてな、お借りしてもよろしいかな？」

紀霊は笑顔を浮かべながら、周瑜はその薄っぺらな笑顔を看破しながら、言う。

「それは孫策次第かと」

「では孫策殿、如何かな？」

「ここで話すなら、構わないけど？」

「……内密の話ですが、まあ、断金の交わりの周瑜殿ならいいですよ」

紀霊は孫策の要求を飲んで話をすすめる。もともと孫策に言うということは周瑜に言うことと同義のようなものだ。さらに、孫策の頭は明晰とは言い難いので、周瑜が間に入ることは、むしろ都合がいいように思えた。

「では早速。孫策殿、袁術様が皇帝になることをどうお考えか」

「さあてね。彼女が決めたんなら私がどうこう言うことでもないでしょう？ただ、これから苦勞するなあ、とは思っけどね」

「……未だに袁術様が皇帝を名乗ることに賛成か否か」

「一言はないわ」

厄介なことだ、と紀霊は思う。

この者が否と云ってくれるなら話は簡単だった。手を貸すから一緒に袁術を倒して欲しいと、そう願ひ出れば、孫策はたやすく乗っただろう。

紀霊隊だけでは袁術を降すことなど出来ないし、王となる存在も統治の知識もない。紀霊は孫策が王となることで、この危機を脱しようとして試みていた。孫策は勇猛果敢で民からの信も厚い。また、家臣には優秀な人材が溢れている。我らの中で王となるのは孫策が最も適任と紀霊は考えていた。

加えて、孫策が王となれば、さすがの戦闘狂孫伯符といえど自重もして、滅多なことでは死ぬことはない。それこそ、劉表のような英傑相手でない限り。

紀霊がいくら恨み節を吐いても、孫策以外当てはない。

孫策の気を変えるよう甘言する。

「今、民は袁術様の統治に苦しんでおられる。それを正すつもりはないだろうか」

「もちろん民を救いたいという思いはあるわ。だからこうしてあの子のもとで働いているんじゃない」

「そうですか、なるほど。あなたは袁術様より劣っていることを認められるのですね」

「……」

紀霊は部屋の雰囲気が一気に重くなるのを感じた。

孫策から浴びせられる殺気が、紀霊に汗を吹き出させた。それでも続けなければならぬ。

「そうでしょうか？ あのお方より無能であることを理解しているから、自らが立つことを諦めているのでは？」

「……………」

「言わせていただきます。江東の民も亡くなられた孫堅殿も嘆いておりましょう。どうしてこのような駄作が虎から生まれたのかとね」

「紀霊將軍っ！」

その声を荒らげた周瑜。紀霊の暴言に本当ならば斬り殺したいほどの怒りであったが、それを律し、声を張るだけに留める。

とはいえ、その切れ長の目は氷のように冷たかった。

その周瑜の表情を紀霊は目の端に捉えるも、言葉を続ける。

「なればこそ！ なればこそ、私は残念なのです。孫策殿はまさしく王の器！ この揚州を治めるに相応しい大器であると確信しております！ 私はなぜ孫策殿が袁術の客将などに収まっているのか不思議でならない！」

紀霊の孫策に対する高い評価。

周瑜も怒りを鎮めて話を聞く。さらに、袁術に『様』を付けなかったことも聞き漏らしていない。

「……………それで？ あなた何が言いたいのかしら？」

孫策が悠々と問う。

「孫策様！ 今こそ袁術を討つときであります！ そのときにはこの紀霊、一万の兵を率いて孫策軍として参戦する次第！」

紀霊からの明確な叛意である。

孫策たちはしばらくの静寂の後、話す。

「ねえ、冥琳。どう思うかしら？」

「ふむ、まずは雪蓮がそんなに評価されるとは思っていなかったな」

「ひどあい、ぶうーぶうー」

「紀霊將軍、それは大きな危険が伴う行為だと知っておられるのかな。そして、その見返りが見合うものかどうかということも」

「もちろんであります。謀反が成功した暁には我らは孫策軍に入りましょう。如何様にも使うとよろしい。汚れ仕事でも何でも申し付け下さい。地位も名誉も金もお好きになさってください。私には不要であります」

紀霊の殊勝な態度。その態度が周瑜に疑念を抱かせる。

「分かりませんか。それではあなたに何の得があるかと？ 我らに加わり扱き使われたいと？ あなたの目的が見えないのです。とても信用できませんな」

当然の疑問である。紀霊が孫策を誑かし、失脚させ軍の中の権力を集約させようとしているのかもしれない。また、ただ単に孫策が気に入らないから、という理由かもしれない。

なににせよ、信用が置けない。

「そう思われるのも仕方ない。ならば私のもとに刺客を放っていた
だきたい。ここでいくら言葉を重ねても意味はないでしょう」

死を賭して、孫策らの信用を託す紀霊。その言葉に周瑜もある程
度は信用した。孫策はというと、すでに紀霊を信用している。この
者の言に嘘はないと。

孫策と周瑜を目を交わし、頷く。

「紀霊、私はとうにあなたを信用しているわ。そして、あなたの言
に心動かされている」

おおつと紀霊が声を挙げる。期待をふくらませた顔だ。

「冥琳、もういいでしょう?」

「……お前がそう言うなら、な」

ニコツと笑って、紀霊に向かい手を差し出し言う。

「紀霊、ともに戦ってくれる?」

その姿は、さすがは王の器、劉表様の眼に狂いはなかったと、紀
霊が思わず心を震わせるほどの神々しさがあった。それはもう少し
会つのが早ければ、この者に心底仕えていたと思うほどである。

紀霊は手を力強く握り、ともに袁術を討つことを誓った。

紀霊と謀反の手順とそれぞれの役割を話し合う。それが終わると、

紀霊が部屋から去り部屋には孫策と周瑜の二人。

紀霊の姿は窓越しに見えている。安心して二人は顔を見合わせる。そして、どちらがともなく笑い出す。

「あつはつはつは！ き、紀霊の必死な顔、思い出ただけで笑える〜！」

「くくくつ、怪我の功名だ。雪蓮の馬鹿な発言で奴は、我らが謀反に乗り気じゃないと思ってくれていた」

孫策は腹を抱え、足をばたつかせながら転がって笑う。周瑜はあくどくせせら笑う。

「奴め、我らの機嫌を伺って出せるもの全てを差し出したな。足元を見ようと思ったが、ここまでとは。くくつ」

周瑜はこのことを『怪我の功名』といったが、それは孫策の勳を甘く見ているとしか言えない。

孫策の勳は、まさに天上人の祝福。その行動は天上人に導かれたものである。孫策の言う勳に間違いなど起きるはずもないし、孫策が意識せずとも、孫策は正解を選ぶ。孫策は意識して勳から外れる選択をしなければ常に正解を選ぶのだ。

それが、今回の出来事である。

この出来事、孫策の皇帝を肯定していなければ起きなかったことである。あのとき、孫策は頭を使ったといったが、真実は無意識に勳を働かせたのだった。

といっても、この件がなくとも周瑜は紀霊を口八丁で操り、協力関係を引き出し、独立を為せるくらいはできたであろうが。

周瑜は笑い転げる孫策に言う。

「しかし、本当に紀霊は信用できるんだろつな。これが奴の策で反乱分子のあぶり出しとかだったら我らは終わりだぞ」

「ダイジョーブダイジョーブ、私の勘が言ってるんだから」

既に確定事項のように言う孫策に、周瑜は嘆息して、「こつこつ奴だと諦める。」

これで独立への道標はできた。孫策の言つとおり紀霊が動いてくれたら、さほど苦労なく独立はなる。

周瑜はどうしようもなく心に湧き上がるものを感じていた。

第二十一話 じつてい！！

孫策の旧臣が戻り、もはや憂いなく。

紀霊は張勳に孫策軍への武器の融通を利かせた。張勳は減税のせいで資金が減っているので渋ってはいたのだが、皇帝宣言で各地に喧嘩を売る事になることから、結局はそれは為った。

そして、そのときは訪れた。

紀霊の出した誤情報、数万の所属不明の軍の侵略。それを抑えるために孫策軍が駆り出された。

孫策軍は反転し、袁術への謀反とその正当性を主張する。そして破竹の勢いで攻撃。

それもそのはずである。袁術軍の内部から反旗を翻す者、その数一万。あの紀霊將軍までもが裏切ったのである。

そのときの袁術軍の絶望と言えばどれほどのものであろうか。少なくとも戦意をなくし散り散りに逃げるほどであった。

そして、そのときの張勳の絶望といえばどれほどのものであろうか。

伝令が飛び交っている。やれ孫策の謀叛だのやれ紀霊の裏切りだの、やれ袁術軍の壊滅的被害だのやれもうすぐそこまで迫っているのだ。

張勳はその報告を耳から耳へ通すことしか出来ない。

もう終わりだ。そのことだけ判断し袁術に向かう。袁術は足に縋りついて愛らしい姿を見せてくれた。

「美羽様、逃げますよー！」

手を取って隠し通路へと急ぐ。

「ふあ！ あつ、な、七乃！ や、やめっ！」

気を使っている暇はない。もう反乱軍は迫っている。一刻も早くここから逃げなければいけない。

このような結末は許さない。まだ何も出来ていない。袁術はこんなにも成長したのに、それを見せることが出来ずにここで死ぬなど断じて容認できないことだった。

「七乃っ、も、もう、妾はっ！ っくううん！」

苦しげに悶える袁術。それを意に介さずひたすら進む張勳。

隠し通路はもうすぐ抜ける。そこには馬が用意してある。張勳はあまり馬術は得意ではないが、そんなことは言っている場合ではない。袁術と二人乗りで逃げるほかない。いまはただ、遠くへ。

そして、隠し通路を抜けた先には。

「っ！」

馬がない。それが厩務員の不手際か、反乱軍によるものなのか考えている暇はない。

周りを見渡すと、とりあえず周囲には反乱軍の姿はないようだった。そのことで張勳はほんの少しだが心に余裕を持つことができた。張勳は厩舎の柵にかかるボロ布を見つけ、それを外套にして二人の素性を隠す。

人の走る速度と馬の速度、城から最も近い村落までの距離、そこまでに見つからずに辿りつける可能性、その村落に反乱軍が張っている可能性、全てを考えることを放棄して走らなければならない。

そのようなことを考えたら、絶望で足が動かなくなってしまうのだから。

張勳は振り返って袁術の顔を見る。犬のように舌を出し、体の熱気を出そうと息を吐き出している。額には玉のような汗だ。

張勳の愛すべき存在。袁術を見ると、ふっと体の無駄な力が取れるのを感じた。

張勳は膝をついて言う。

「美羽様、ほら、おぶってあげますよ」

袁術はその背中を見てしばらく逡巡していたが、疲労した体に嘘はつけず大人しく張勳に体を預けた。

「す、すまないの七乃」

構わないというように張勳は笑って、歩を進めた。

そのときである。足元に矢が突き刺さったのは。

「悪いわね。あなたたちをそのまま逃がすわけには行かないのよ」

右脇から声をかけるは孫伯符である。

張勳はどこに隠れていたのかと思うより先に、孫策の持つ南海霸王に目がいく。そう、弓ではない。

矢の射角から位置を探っても弓兵の姿は見えない。

袁術たちは既に姿の見えない兵に命を握られているのを理解した。

「……私たち、ちょっとお花を摘みに行きたいのですけど……。通してくれませんかねー？」

「うん、それ無理」

「……ですよねー」

張勳はひとしきり乾いた笑いを出した後、背中の袁術を下ろし向き合った。

「美羽様、短い時間でしたが、おんぶはもう終わりです。私は孫策さんとお話がありますので」

「……な、七乃……」

袁術も張勳のこれから起きることに薄々気がついている。だからこそ張勳は袁術の顔を見ないようにして孫策の前に立つ。顔を見てもしまつたら覚悟が揺らいでしまいそうだから。

「孫策さん、少し提案があるのですがよろしいですか？」

「言ってみなさい」

それでは遠慮無く、と張勳は腰の剣を手にとって言う。

「いまここで一騎討ちを望みます」

「……意味が分かって言ってるのかしら？」

孫策は青眼に構える張勳をみる。

足は揃い内股の上、腰が引けている。剣先はその細腕では支えきれず所在なかげに揺らぐ。

「もちろん分かっています。その上でお願いします。私が勝つたら、

いえ、一騎討ちの間だけでも美羽様に手を出さないと約束して欲しいんです」

張勳は自身の武が孫策の武に遠く及ばないことをよく知っている。それでも一騎討ちを望んだ。

死を恐怖しすぐにでも逃げ出したい気持ちを深くに押し込め、一縷の望みに賭けた。

孫策は張勳の申し出を受けるか思案する。

この戦は既に孫策の勝利である。勝敗の決まった戦で少しでも大将を危険に晒すことは避けるべきである。さらに、一騎討ちをしたところで孫策に利点などないのである。

考えるまでもなく、この一騎討ちは受けるべきではなかった。そう、本来ならば考えるまでもないのである。にもかかわらず孫策は思案した。

「……分かったわ。約束しましょう。万が一勝ってみせたら、馬車に食料まで付けてあなたたちを送ってあげるわ」

孫策は一騎討ちを受けた。

その理由は張勳の目。まともに戦っては勝ち目のない勝負を前に、震える体とは裏腹にその目は輝いていた。

その目だけを見れば孫策軍の将にも劣らぬ凄みのようなものがあった。だが、殺気ではない。覇気ではない。勇気でも闘気でもない。孫策は自身に発せぬ気に興味を惹かれた。

アレはなんだろうか。いつだったか見たことのあるような……。それは戦ってみれば感じられるだろうか。

そんな思考を辿り、孫策は一騎討ちを受けた。

張勳はその言葉を聞いて安堵する。これが断れては捕まって晒し

首だ。とりあえずは命を拾えた。

さて、これからどうしようか。

最初は一騎討ちを長引かせて袁術を逃げる時間を作ろうかと思っただが、孫策を見ると、どういいうわけか殺る気満々に見える。この様子では遊んでくれそうももなく、時間を稼ぐこともなく、死にかねない。

（はあ、気が重いですけど……。やってみますか）

もう決まったことは仕方ないと、張勳はどこか自暴自棄になりながら溜息をつく。

「ありがとうございます。……それじゃ早速やりますか」

「そうね」

孫策は片手を上げて弓兵へ弓を下ろすよう合図する。いつまでも背に狙いをつけるのは老体には酷だ。

孫策は南海霸王を右手に構えを取るでもなく、だらりと垂れさせる。張勳相手には構えなど取る必要もないからだ。

張勳はその態度を不快に思うわけもなく、感謝していた。侮ってくれることならいくらでも侮ってくれて構わない。その分だけ勝利の可能性が増えるのだから。もっともそれはお猫様の額ほどであるうが。

しばらく睨み合って、ようやく動きがある。緊張に耐えられなくなった張勳が動く。

「美羽様！ 早く逃げてください！」

そう言つのと同時に孫策に向かって足を踏み込んで大上段に振り下ろす。

孫策は片手で事も無げに弾き、返す刀で張勳と同じように振り下ろした。張勳は弾かれたことよって体勢が崩れている。受けることを諦めて横つ飛びし、転がって回避する。

南海霸王は地に着く前にビタリと停止し、土埃を舞い上がらせる。その土埃を切り裂くように張勳に滑るようにして向かつてくる。

(回避できない……！)

衝撃音。それは肉を裂くときのもではなく、硬質な金属のぶつかったときの音。

南海霸王を持つ手に重みを感じる。運良く受け止めることができたかと、孫策は右腕に一層力を加える。張勳程度、孫策の膂力ならそのまま押し切れるからだ。

だが、予想に反して刃が今以上に進まない。なぜかと思議に思い、孫策は一度剣を引いて土埃を払うように鋭く腕を右から左へ。そして、見えてくる。

「……ふえ、ふふ。なんとか生きてますよ。も、もう私の勝ちが決まったようなものですね。諦めてくれませんか？ 今なら許してあげますよ？」

地に剣を突き刺し、両腕と膝を刃に食い込ませるようにして支えていた。

当然、剣は両刃である。張勳はその刃に食い込ませた両腕と膝はえぐられて、血だらけだ。

張勳は傷口からこれまで感じたことのない痛烈な熱を感じ、脂汗を流した。

孫策は張勳の姿に素直に感心する。今まで袁術を甘やかすだけの

無能と思っていたが、自身の剣閃をわずかも耐えることが出来るとは思っていなかった。それもその目の持つ力なのか。

「……袁術を逃がしていいなんて言っただつもりはないわよ」

「今、美羽様ははじめてのおつかい中なのです。帰ってくるまでここで待つているといいですよ？」

「そう。それなら護衛が必要じゃない。仮にも皇帝なのだか、らっ！」

そう言つて、風のように素早く張勳の懐に飛び込む。その低い体勢のまま剣を振り上げる。

「ひうっ！」

やつこのことで受け止める張勳。衝撃で体が持ち上がる。

孫策は張勳の反応を待つことなく次の攻撃へと繋げていく。張勳はそれも凌いでみせるが、もうそれは孫策によるなぶり殺しの体をなしていた。

そうはいつても孫策はそんなつもりはない。ただ、その目の力は一体はどこから来ているのか理解したいだけだ。理解の仕方が人より不器用なだけなのだ。

「ほらほらっ！ もっと本気になりなさい！ そんなのだと死ぬわよ！」

そんなことを言われても張勳はこれ以上本気になりようがない。というか、なぜまだ生きていられるのか不思議にすら思っていた。孫策からの一方的な剣戟を受け続けてもう体は傷だらけだ。

退かされて、転がされて、弾き飛ばされて。

もう限界だ。美羽様は今どの辺りにいるだろうか。時間の感覚などとうになくなった。どうか、ここから姿の見えないところまでには逃げていて欲しい。そう張勳が戦意を失い、愛する袁術を思ったときに孫策が言った。

「はい、到着っ」

「はっ？」

孫策の不可解な言葉に、息を切らしていた張勳も思わず声を出す。霞んだ目を孫策に向けてもニコニコ笑顔を浮かべているだけ。何のことだろうかと疑問に思ったが、どうせ死ぬのだ、まあいいかと思考を止める。

今はただただ苦しい。呼吸を整えようと肩で息をしていたが、そこで気付く。

自分以外に荒い呼吸音が聞こえる。

孫策ではない。彼女がこの程度の戦闘で息を切らすことはない。張勳も孫策の涼しい顔を見ている。

張勳は自分の最悪の想像を否定しながら、周りを見渡した。

まずは呼吸音から逆の右。ただの荒野だ。誰もいない。次に左。右を見るとときよりもゆっくり顔を動かす。先程と同じような荒野の中に、一人いた。

そんなはずはない。あつていいはずがない。私も目が悪くなったものだ。

ここに 美羽様がいるなんて、あるはずがない。

「ごめんなさいね、そんな姿を子どもに見せるのも悪いと思ったんだけどね。必要だと思ったから」

孫策は本当に申し訳なさそうに言う。それが望まぬことであるとを示していた。

「……そう思うなら、やめて欲しいです」

「悪いわね、私はあなたたちより私が好きなの。それにさっきも言ったけど、これがいいと思ったのよ」

「……孫策さんは鬼畜です。悪鬼です。悪蔵です」

悪蔵つて何よ、などと吹き出しながら張勳に近寄る。

張勳はついに終わりかと、どこか人事のように感じる。さんざん文句を言ったが、孫策にどうしても言っておかなければならないことがある。

「……孫策さん」

「……何よ」

張勳は左の袁術をみる。未だに息の整わなず、手を膝について荒い息だ。顔は張勳の方に向け、目は涙が今にもこぼれ落ちそうにしていた。傷だらけの張勳を見ての恐怖心もある。そして、予感したことが現実起きるのだと絶望の表情を浮かべていた。

そんな袁術の表情を見ても、張勳が最初に思ったことは。

「……最後に、美羽様に会わせていただいて、ありがとうございます」

どうしようもない多幸感。

袁術を逃がすことも出来なかった申し訳なさよりも、そのこと自身の不甲斐なさよりも、袁術の顔を見れたことが負の感情も傷の痛みも全て吹き飛ばしてくれた。

張勳はこれ以上ない笑顔を浮かべて、袁術の顔を目に焼き付けた。その張勳の目。孫策が今まで見てきた張勳の目の何倍も輝いているように見えた。

そして、その目の力に気付いた。いや、思い出した。その目は子供の頃に見ていたものだ。

「……こちらこそ感謝するわ。忘れていたことを思い出させてくれたわ。ありがとう」

そう言って、孫策は首を刎ねるために近づく。これは一騎討ち。勝敗を付けずに終りにすることは出来ない。

一歩一歩近づく孫策を見て、張勳は眼を閉じて潔く待つ。もとよりも動く力もない。張勳は死を受け入れた。

そうしていたのに、袁術はそれを受け入れられなかった。

「っはあ、はあふ、七乃に、近づく、んじゃ、ないのじゃ」

張勳を小さな体で包むようにして庇う袁術。息も絶え絶え、ボロボロ涙をこぼして孫策に訴える。

孫策もその袁術の姿に思うことがないわけでもない。だが、それ以上に誇りある一騎討ちを汚されたような気がして激昂した。

「袁術！ 貴様も王ならば、誇り高き忠臣の魂を見送ってみせよ！」

「う、うとう、嫌なのじゃ、嫌なのじゃあー！」

「っ、この愚物がっ！」

のしのしと近づき、張勳にしがみつくと袁術を引き剥がす。

「貴様は、この者の死を看取るに相応しくないつ！」

そう言つて袁術を投げ飛ばす。ひぐつ、などと言つて転がる袁術。孫策はこの忠臣を惜しんでいた。このような者が袁術などに付き従うなど不幸以外の何物でもないように思えた。

無駄であるうと薄々感じてはいたが、一度こちらに降らないかと誘おうとしたとき、張勳の目がパツと開いた。

遠くで袁術もガバツと起き上がりこちらに来るのが見えた。

「七乃」

「美羽様」

なにやら近寄り難い雰囲気互いに声を交わす。孫策はその推移を見守るうと戸惑いながら待つ。

「勝つたな」

「はい」

しばらくの静寂の後。

「はああああああ!?」

孫策の困惑の叫声が響いた。

「いやいやいやいや! どこが勝ちよ! どこが! って、さっきまで死に掛けてたのに何ケロツとしてんのよ!」

「いやそういう感じにしたほうがいいかなーって。雰囲氣的に」

「雰囲氣! かあーっ! むしろ台無しよ、かあーっ!」

烈火のごとく怒る孫策を意に介さず張勳は要求する。

「そんなことより私たちが勝ったんですから、さっさと馬車と食料と当面のお金と州境までの護衛を用意してくださいよ」

「ああ、そうだったわね。それじゃ早速……って馬鹿馬鹿! おちよくってんじゃないわよ! 殺すわよ!」

顔を赤くして頭から湯気を発する孫策。さりげなく要求を過分に
する張勳に怒気を容赦なくぶつける。

南海霸王の切っ先を喉元に突き付けられて、ひいい、と情けない
声を出す張勳が抗弁する。

「そ、そんな事言われても孫策さんから言ったことじゃないですか
!」

「だから! 私が勝ってるでしょうが! 勝ったでしょうが! あ

あなたが負けるんでしょうに！ 負けたんでしょうに！」

ムキーツと地団駄踏む孫策を、きよとんとした表情で見る袁術と張勳。

ああと得心するように張勳が一つポンと掌を打つ。

「もしかして孫策さん、何で負けって言われてるかわかってらっしゃらないですか？」

「そうよ！ 当たり前でしょ！」

「……妾でも分かったのか……？」

袁術が孫策に哀れみの視線を浴びせる。「ああ、この子つては残念な子なのね」とでも言いたげな顔である。

孫策はというと、そう言われても分からないものは分からないのである。

なんだか袁術にそんな顔をされては、分からない自分が可哀想な子なのではないかと申し訳なくなってきた怒りも覚めてくる。代わりに浮上してくる羞恥の感情が孫策を満たしてきた。

「……本当に分からないんだけど……教えてくれる？」

やれやれだぜ、と張勳が前に出した左足の踵を持ち上げ後方に反ったまま右手で孫策を指さして言う。孫策はその動きにイラツとした。

「仕方ありませんね……。……聞きたいですか？ 本当に聞きたい？」

「いや！ 聞かなくてもいい！ やはりすぐ殺すことにするわ！」

張勳の腹立たしい振る舞いにキレる孫策。先程までの怒りが倍増した。南海霸王を振りかぶる。

「はあああつ！」

「ひゃあああああ！ 待って、待ってくださいいい！ 言います！ 言いますから怒りを鎮めたまえええ〜！」

さすがの張勳も孫策の憤りに仰天し、引き伸ばしすぎたかと反省する。

剣はその言葉を受けてか、張勳の首筋に軽く触れる程度で止まった。

「血が出てます、血が」

「いいから言いなさい」

「はい」

殊勝な態度に満足すると孫策は南海霸王を下ろす。気を変えては困ると張勳が早速説明する。

「孫策さん、一騎討ちの前に私が言ったこと忘れてませんか？」

「一騎討ちの前〜？ 忘れてないわよ、可哀想な子扱いしないでよね。確か〜……。ちよっと私の口から言うのも何だからあなたから言いなさい」

「えっ……。いや、えっ。もしかして孫策さん、忘れて、いえ、何

でもないです。話します」

張勳がまさに孫策が言った通りの子扱いしようとしたところで態度を変える。決して南海霸王が向けられているわけではない。

「私、こう言ったんですよ。『一騎討ちの間だけでも美羽様に手を出さない』と約束して欲しい』って」

「……だから何よ」

「手出したじゃないですか」

「出してなっ！……あっ」

「出しましたよね、卑怯にも約束を破って。外道のように。吐瀉物以下の匂いをプンプンさせて」

出した。確かに孫策は袁術に手を出していた。

張勳を庇うようにしていた袁術を引き剥がして、投げ飛ばしていた。

張勳はそのことを指して約束を破ったから孫策の負けであると言っていた。

「で、でもそれはっ！」

「負けてないなんて言いませんよね、クズじゃあるまいし。約束を破っておいて自分の勝ちを主張するなんてありえませんか、孫策さんは誇りある人物ですから。そんな事する人なんて賊以下ですよ、獣にも劣りますね」

「……」

「生きてる価値なんてないですよ。死んだほうがいいです、そんな人は。生きてるだけで迷惑です。死んだって誰も悲しみません。むしろ喜びます。お祭り騒ぎです。記念日ですよ。国をあげて、いえ、大陸をあげてのどんちゃん騒ぎをしましょう。それぐらいのことです」

「……ぐすっ」

何故だろうか、孫策は自身の首にかける縄を探してしまった。孫策だって『一騎討ちを邪魔したのはそっちだ』などといえれば少しは反論もできたのだが、そこはアホの子。そのようなことに頭は回らない。ましてやそれが血を沸かせる戦場ならば尚更だ。

「と、そういうわけですので、負けを認めてくださいますよね」

「……あーっ！ 仕方ないわね！ 私の負けよ、負け！ 潔く認めるわよ！」

孫策は心のわだかまりを吐き出して、負けを認めた。孫策が一騎討ちで負けたことなど、孫堅以外になかった。

孫策を負かした二番手がただの文官などと一体誰が信じるか。

「はあ〜。終わりましたか。本当に、疲れましたね、美羽様」

いつもと違って静かな袁術に話しかける。静かなのも当然だ。袁術は張勳の胸に顔を押し付け力強く抱いているのだから。

その胸がしつとりと濡れていることには触れるのは無粋というものだ。

張勳は傷だらけの腕をなんとか持ち上げ袁術の頭に乗せ、撫でる。ようやく生きている実感を得られた気がした。

そんな和やかな雰囲気の中で周瑜と黄蓋が孫策に近寄ってくる。

「ハツハツハツ！ まさか策殿が負けるとはの！ こんな面白いことはないわ！」

銀髪爆乳褐色の妙齡、姓は黄、名は蓋、字は公覆が愉快愉快と笑う。

「雪蓮が負けるなど……ありえん」

絶句して現実から目を逸らすは周瑜である。無理もないが。

「こんなの初めてよ。はーあ、やってらんないわ」

そう孫策は言うが、その顔は黄蓋と一緒に晴れ晴れとしていた。

「冥琳、あの子たちに部屋を用意してあげて。怪我が治るまで面倒をみるわ。そのあとは追い出すけどね」

「……奴は仮にも敵総大将だぞ、民から恨みも一身に買っている。奴を匿うなどどんな憂いがあるか……と言っても聞かないんだろうな、お前は」

「さすが冥琳」

快活に笑う孫策を周瑜は、また面倒事を持ってきて、とこめかみを押さえる。

それにしても、と前置いて黄蓋が孫策に疑問を呈する。

「どうしてこんなに長引かせたのじゃ？ 策殿なら最初の一撃で殺すことはできたじゃろうに」

黄蓋が非難めいた顔をして孫策を見る。誇り高き宿将は孫策が弱者をなぶり殺す姿に良い感情は抱かなく、故にそう聞いた。

「まあ、できなくもないけどねー。でも、あの一撃を止めたことは本当に驚いたわ。甘く見ていたのもあつたけどね」

「ということはアレが血を昂らせたということかの？」

「んー、ちよつと違うわね。あの子から学べそうなのがある気がするね。それを見極めたかったの」

「あやつから、のー」

むう、とよく分からないと黄蓋は張勳の方を見る。

張勳は地に横たわり、左腕で袁術を抱えるようにして、右腕で袁術の柔らかかなほつぺたをつまんでいた。

やはり分からね、と黄蓋は首を捻る。

「まあいいじゃない。冥琳、城はどうなったの？」

「完全に我らが占拠した。街の皆も我らに協力的だ。この戦は終わったと思っただろう」

「私たちが勝つたのね……。ようやく悲願が叶ったわ」

感慨もひとしおに孫策が言う。周瑜と黄蓋も胸が熱くなるが、湿っぽいのは嫌いだと黄蓋が言う。

「我らは勝っても、策殿は負けましたがな！ 八八ハッ！」

「ぶうーぶうー！ 好きで負けたんじゃないわよ！」

からかう黄蓋に心外だと不満を表す孫策。それを見て周瑜が片目を閉じて嘆息する。

「まったく。それより雪蓮にはやってもらうことがあるんだから、さっさと張勳を運ぶわよ」

周瑜が張勳を指差し、孫策と黄蓋がそれを見ると、張勳と袁術はすやすやと眠っていた。

もう肉体的にも精神的にも疲労の限界を超えていた。

「あらあら、お子ちゃまね」

孫策がそう言って袁術の頬をぐりぐりと人差し指で抉り込む。袁術の眉間に皺が寄るのを見てニヤニヤ笑った。

「ふふっ、可愛らしいものじゃないか。……しかし、このとぼけた寝顔を見ていると雪蓮に勝ったのが信じられんな」

孫策が袁術の靴に砂を入れようとしているのを周瑜は手刀で止めながら言う。

「そつかしら？ 私は納得したけどね」

「どつして納得できる？」

だって、と袁術と張勳の姿を見る。

袁術は張勳の服を握りしめ、張勳は背中に手を回し抱き寄せている。その姿はまるで。

「『母は強し』、だからよ」

祝勝会が終わり仲間や部下と別れ、一人、中庭に佇む男。

いまはなき袁術軍の将、紀霊である。

月夜に照らされキラキラと瞬く池の水面を眺める。

(当初の予定とは変わってしまったが、問題はない。劉表様は袁術については何も言われてない。孫策さえ生きていればいい)

紀霊は自分の謀が上手く行っていることをほくそ笑む。

(あと俺がやることは孫策軍で重要な地位につくことか。そうして影響力を高め、劉表様の戦のときに大勢で寝返る。そうすれば劉表様の望み通り、孫策は劉表のものとなる)

紀霊はつい吹き出すように笑声をあげた。人のいないところを選

んだとはいえ、まずいと思って口を覆う。
そのときだ。後ろから声をかけられる。

「紀霊將軍」

低い声だ。今までに紀霊が聞いたことのない人物の声。

『將軍』というからには下位のものだろうか、紀霊は振り返り、誰だ、と口を開いたところで上顎から先が体から離れた。

体から血が湧き水のように沸々と吹き出て、仰向けに倒れる。宙を舞った頭は池へとポチャンと落ちた。

「声はかけた。故に闇討ちではないと納得していただきたい。卑怯とは申されるな。私はただ我が主の命により討たせてもらっただけである」

血で汚れた曲刀を鋭く振って血を飛ばす。

「これも一つの闘争であると思つて遺恨なく黄泉路を行け」

そう言つて、刺客は闇へと消える。鈴の音の澄んだ音だけを残して。

この日、紀霊の他に数十名が暗殺された。その者は皆将来有望の若者で、劉表の師事を受けた者であった。

第二十二話 せいとっ！（前書き）

Q なにこの序盤の駄文……。

A、夏だからだよあはははははは

第二十二話 せいとっ！

益州成都。

州都であるはずのこの街は飢饉と黄巾党という二つの災厄によって変わってしまった。それまでの貧しくも活気ある商人と街人とのやり取りは影に潜み、今では商人が虚しく呼びこみをする声だけが響いている。

街に人がいなくなってしまった。人が街に出るときは必要最低限のものだけを買ひ、そそくさと家へと帰る。景気が悪くなった、ということもあるだろうが、それ以上に大きな理由がある。

それは劉璋軍の兵隊である。

増え続ける賊に対応するため兵を増員する。そのこと自体は何らおかしくない。だが、その増員速度はあまりにも急であった。大勢の兵を規律正しく調練することが劉璋軍の将には出来なかったのだ。その結果、忠誠心も薄く軍規を守ることができない愚かな兵が誕生した。

愚かな兵は本来守るべき民を見下し狼藉を働いた。金を払わず物を掻っ払い、気に入らぬ輩がいるならば殺し、麗しい女子がいるなら犯した。民はそれに怯え街を歩くのをやめ家にこもってしまった。当然、愚行を働く兵を黙って見過ごすわけではなかったがあまりの数の多さに処刑が追いつかなかった。それでも、軍規違反者を晒し首にし、その家族もまた殺し、出身の村に罰金を科するという苛烈な手段を用いてひとまずは落ち着いた。

だが、民は決してその恐怖を忘れることはない。

いまでこそ落ち着いているものの、いずれ奴らは喰らいにくる。そついう意識が民の心に深く根付いた。

その澀んだ雰囲気を感じ、悲しく思う妙齡の女性が成都の城にいる。姓は黄、名は忠、字は漢升である。

腰まで伸びた艶やかな紫の髪、耳には羽飾り。女性としては比較的長身で、すらりと長い足を惜しげもなく晒す腰まで切れ込みの入った扇情的な服を着ている。その御御足は健康な成人男性が見れば反射的に頬ずりしたくなるか踏んでもらいたくなるほどの極上の逸品。だがしかし、黄忠にはその美脚に匹敵するほどの武器を備えていることを忘れてはならない。

その武器とはなにか。

それは全てを許してくれそうな優しい顔か。いや違う。

ならば、瑞々しく潤み、触れば張りを持って跳ね返してきそうな淡い唇か。それも美点である。舐めたくなる気持ちもわかるがそれではない。

ならば、ぷつくりと膨らみ、薄手の衣装に軽く張り付いて煩悩をかき乱す安産型の臀部か。それも感涙させるほどのものだ。だが一歩及ばないと言わざるを得ない。

その武器とは、乳である。

なんだ乳かと侮ってはいけない。確かに女性であれば乳は誰にもあるものである。その汎用性の高さから乳は女性の武器として頂点をひた走る存在である。個々の嗜好によって差異はあろうが、真つ先に武器としての地位を確立したものは乳であることに異論をさめるものは皆無であると断ぜざるをえない。

それは余談として。いや、余談の余談だ。

乳は女性の武器であることは人類は百も承知である。だがこのとき一つの疑問、いや、文句が湧いてくるはずだ。

「その乳が黄忠の最大の武器だと？ はっ、なんとも俗なことだ」

一見その通りのように思える。

思春期を迎えた青年はまず乳を夢想する。次に局部を、尻を、口を、足を、手を、腋を、膝裏を、頬を、鼻を、眼球を、臍を。

そういうものである。色事に興味を持ち始めた、いわば素人は乳を第一義に考える。それでは玄人には程遠い。色欲には果てしない高みがある。その高みにいる玄人にとっては乳など凡百の代物だ。溜息を付くことになんのためらいもない。

だが先程述べたとおり、色欲には果てしない高みがある。

玄人は素人を馬鹿にするがその姿こそ滑稽であると断ぜなければなれない。いまだ、色欲は頂きの見えぬ雲を貫く山のようなもの。後ろを振り返りあとを歩く若人を指を差し笑うなど、色欲は決して微笑まない。色欲は前だけ見る者にしか微笑まない。

先程の文句を頭の片隅にでも浮かべてしまった者はもう山から転げ落ちていく。もう登る資格は与えられない。転げ落ちた先で羨ましげに頂きを見上げることしか許されない。

頂きに進む勇者はどれほどの色欲の持ち主となっているのか。

もしかすると、馬に張り型を付けてその上に女子を乗せ鑑賞することができたかもしれない。

もしかすると、自律的に脈動する触手が女子の体に粘液を吐き出し、ぬるぬると体を這いずり回る世界が待っているのかもしれない。もしかすると、完墮ちした女子が指を二本立てて舌を出している姿を拝めたのかもしれない。

もしかすると、頂きに至った猛者が思い思いの嗜好に合わせた艶本を大きな会場で売り捌く樂園が待っていたのかもしれない。

だが、それも転げ落ちた者は拝めることはない。

そして、黄忠の乳にも同じことが言える。

黄忠の乳、それはこの大陸を思わせるほどの巨乳である。もちろん比喩である。比喩でなかったならば奇乳であり需要は極めて少なくなる。

巨乳。それは決して珍しくはない。街の娘を見れば数は少なけれど確かに散見できるものである。

だがしかし、巨乳であり、美乳であるとしたらどうだろうか。それはまさに奇跡である。何年も祈祷しても生きて拝めることは稀である。

黄忠はその持ち主である。

豊満なその乳は均整がとれた二つの熟れた果実。熟れたからと言って形が崩れたわけでは決して無い。衣装の上から凝視して変態扱いされてようやく分かる諸刃の剣。衣装からかすかに膨らんだ乳頭、それは確かに上をツンと向いていた。垂れてない。

こんな幸せなことがあるだろうか。

この時代、栄養状態は良いものとは言えない。老いるのも早く、成長が止まってしまうこともある。乳が膨らまず子どものような体軀をした女子もいる。なんとも嘆かわしいことだ。

そのような時代にこれほどの逸品がある。たとえ見ることが出来なくても、同じ時代に生まれたことを感謝することに不思議は感じない。

そんな魅力的な女性黄忠であるが、今はその麗しい顔に影を落としていた。

黄忠は劉璋に呼び出され、劉璋の私室にいる。劉璋は愚かな王、とは言えない。災厄が巻き起こるまではそれなりに益州はやっていていた。税も抑え、民を虐げるといったことはなかった。だがそれ

が劉璋が優れていたかというかと否定される。

つまり、運が良かった。だが、その運も飢饉と賊には敵わずに途端に凋落した。そして劉璋は凋落した自身を受け入れることはできなかった。

こんなはずではない、なぜ余に試練を与えるのか、余はもう嫌だ。そういつた意識から劉璋は耐え切れず、心の病を患った。その気の弱さは歳のせいもあつたのかもしれない。

その病んだ劉璋に黄忠はもう何度も夜な夜な呼び出され相手をさせられている。黄忠は吐き気がするほどの嫌悪感を覚えたが、自身の主である劉璋に逆らえるわけもなく、また、劉璋を哀れに思う気持ちも持ち合わせていたゆえに我慢した。

「ん、ちゅ……あう、ちうう……」

「……り、劉璋様……。落ち、着かれました、かつ！ ひう、噛まないでっ、ください……！」

劉璋の口にはすっぱりと若い肌をした魅惑的な突端が収まっている。ときに舌でちろちろと先端をつつき、ときにそのものを包むように絡める。

味を匂いを漏らすまいと勢い良く吸い付いてみると、期待に反して求めたものは返ってこない。その失意からか不満を表すように甘噛みを繰り返す。ふにふにと、ころころと弄ぶ。それでも欲しい物は得られない。

そんな物足りぬものであったが、それでも劉璋は一定の満足感を得たのか、吸いつきながらニタリと笑みを浮かべる。

黄忠はその笑みを見て、背筋に冷たいものが走るのを感じたが必死に堪え、時が過ぎるのをじっと待った。

そうして僅かばかり時が経ったとき、黄忠へ声がかかった。

「……お母さん。劉璋のおじちゃん、寝ちゃったよ」

黄忠の娘、璃々である。

黄忠はようやく終わってくれたかとほっと一息入れて璃々に声をかける。

「……こらっ、おじちゃんじゃないでしょう。……璃々、大丈夫？
痛くない？」

「ん〜？ 別になんともないよ！ でもほらっ！ 指がふやけちゃった」

にへらと笑みを浮かべて、劉璋に舐められていた人差し指を黄忠へ見せる。

その指を見て、どう反応していいのかわからない黄忠は茶を濁すように苦笑し、手ぬぐいを取って璃々の指を丁寧に拭く。

黄忠は劉璋が穏やかに寝ていることを確認し、璃々を伴って劉璋の寢室から音を立てずに出ていった。扉の前に立つ護衛に会釈をして自室へと帰る。

その道中、黄忠は璃々に聞く。

「璃々、本当に大丈夫？ 劉璋様にそんな事されて嫌でしょう？」

「……いやだけど、おじちゃん、昔は璃々と遊んでくれたの。おじちゃんが、その、することで少しでも楽になるなら協力したいもん」

「……だからってあんなこと……」

「だっておじちゃん、璃々じゃなきゃだって暴れるから……。お

じちゃん、赤ちゃんみたいになっちゃって……」

幼児退行。

劉璋は耐え切れぬ心的重圧に逃れるために選んだ答えがそれだった。五十後半の劉璋が言葉にならぬ声を発し、年齢一桁台の璃々に甘える。それは誰が見てもおぞましく、恐怖するものであった。

にもかかわらず、璃々は劉璋と過ごした温かな記憶から、持ち前の優しい性格もあつたのかもしれない。ともかく、璃々は劉璋を積極的に相手をしてあげ、劉璋も璃々に懐いていた。それは母親に甘えるように。

その結果、璃々は劉璋によく呼ばれるようになった。

黄忠が劉璋の寢室に居たのはまだ幼い璃々の身の安全確保、また案内をするためである。

「おじちゃん……どうしちゃったんだろ？　ねえお母さん、おじちゃんの病気って治るかなあ……」

「……そうね、治ってくれるように、たくさんお祈りしなくちゃね」

治る、とは言えない黄忠である。

どうしてこんなことになってしまったのかと嘆息する。

せめて劉璋が病んで暫くしての軍議に参加できていれば、状況も変わっていたかもしれないのと懸想する。

文官が病んだ劉璋を隠居させ跡継ぎを任命するように言ったときに私か桔梗がいれば、その文官は劉璋に切り殺されずにいられたであろうに。

あの事件のせいでもう誰も劉璋に逆らえなくなっていました。私も璃々を人質に取られたようなもの。身動きがとれない。

そこまで考えてぶんぶんと顔を左右に振る。

終わったことを考えても仕方がない。今はこの状況を打開する術

を探そう。そして、時を待とう。風の噂で漢が倒れたという話を掴んでいる。それはつまり、乱世の訪れ。

黄忠は一人、天に輝く月に目を向け祈った。

誰か、自身が仕えるに値する諸侯が劉璋のみならず、大陸を救ってくれることを。

幾日かして、成都王座の間にて軍議中、劉璋にとっては凶報、黄忠にとっては吉報が飛び込んでくる。

「伝令でございます！ 我が領土フリョウ諷陵を侵攻する大軍あり！ その数およそ三万！ 荊州よりやってきたものと思われます！」

その報に途端にざわめく王座の間。

荊州より来たということは相手は劉表。劉表といえば益州と同等の領土を統べ、その戦力は大陸随一であると聞く。

その劉表が攻めてきた。

文官はその事実に絶望する。勝てるわけがない。我が軍の将といえば黄忠、嚴顔、魏延の三人だけだ。他は有象無象と言っている。そして、兵。数は多けれど弱卒だ。劉表軍の精兵と渡り合えるはずもない。それどころか逃げ出すさまを鮮明に思い浮かべることが出来る。

文官がうなだれているなか、黄忠と嚴顔は視線を交わした。

時が来たのやもしれない。

劉璋を救えるかどうか、そんなことは天のみぞ知ることだ。劉表

であろうと誰であろうと関係ない。

ただ、同じ劉家であれば可能性は僅かでも上がる。劉表が情にほだされ、劉璋を病が治るように面倒をみることだっただってあるかもしれない。

劉璋のことを別にしても、劉表は誇り高い仁君だ。益州の民を救ってくれることは間違い無いだろう。黄忠と嚴顔は民のことを第一に考え、この身を劉表に捧げることを半ば決意した。璃々が泣いてしまつかもしれない、そう悲しむ。それは、劉表が劉璋を殺す可能性のほうに余程高いことを知っているからだ。

そう決意した黄忠と嚴顔であったが、伝令の次の言葉にその決意が揺らいだ。

「まだ、報告は終わってません！ その軍に”劉”の旗あれど、劉表の旗にあらず！ おそらくは劉表の手のものではございません！」

またざわつく。そのざわつきは困惑を表すもの。

「……どういうことかしら、桔梗。劉璋様と劉表様以外で劉の字を持つものがいたかしら。それも三万の軍をもって」

そう黄忠は横にいる自身の友人に聞く。

「さあて、儂にはほとんど心当たりはないなあ。もしやするとこの乱世に名乗りをあげたどこぞの諸侯やもしれんな」

そう答える姓は嚴、名は顔である。銀色の髪にかんざしを差した長髪、大きく開いた胸元は黄忠と同等の大きさの乳を周囲に憚らず見せつけている。最大の特徴は左の肩当てにある”酔”の一字だ。

黄忠は嚴顔の言葉に思考する。

それは敵が誰なのか、ということよりも信用に値する人物であるのかということ。

劉表であれば簡単であったのに、と嘆く。そして、劉表でないのならばどういふ人物か見定めなければならぬ。

「敵軍は既にこちらに侵攻しているでしょう。……劉璋様、私が彼奴らを迎え討ちます。……桔梗、焰耶に璃々のことを任せると伝えてくれる？」

「あいわかった。……しっかし、一番槍とは。儂の分を残しておいてくれるんじやろうなあ？」

「ふふつ、相変わらずね。もし私が抑えられなくなったら巴郡に引くわ。そこで待ってれば戦ができるかもしれないわね」

「くくつ、ならば儂はそこで待とうか。賊共相手の喧嘩はもう飽いたわ。血が沸く戦を期待しようぞ」

こうして黄忠と厳顔は成都までの道を作った。敵軍が信頼に足る存在であるとするならば、大人しく敵に降り、成都までの道を通そう。そうでなければ、賊と変わらない対応をする。その程度の輩に負けるつもりはなかった。

懸案事項なのは璃々だが、それは焰耶に任せろ。

焰耶は厳顔の弟子で、姓は魏、名は延、字は文長のことである。

まだまだ未熟といえど子を一人守ることは十分にできた。

とりあえずはこれで対応は決まった。黄忠は璃々を心配に思うが、今はこれが最善だと思い前を向く。

千載一遇の好機なのだ。逃す訳にはいかない。

この好機をもたらしてくれた敵軍が善人であって欲しいと願いな

がら、黄忠は王座の間から飛び出した。

第二十三話 ぶりょう！（前書き）

黄忠が守る城の名前は楽成城としました。無印時代に黄忠が守っていた城です。名無しの城じゃイカンでしょってことで名前を借りました。

第二十三話 ぶりよう！

益州と荊州の州境付近に諷陵はある。

その諷陵に入城した劉備たちは今後の益州攻略の戦略を思案する。そういう真面目な話なのだがその雰囲気はまったりとしたものであった。

「とりあえず諷陵に入ることが出来てよかったね」

そう口火を切るのは桃香。彼女が醸しだす緩やかな空気がこの軍議を穏やかなものにさせていた。

「それだけ劉璋さんの統治に失望しているのでしょうか。私たちのような風来坊を迎えるなんて普通では考えられません……」

劉の姓があつてよかったねーと桃香。逆に反感を持っている者もいましたけれどねと朱里。

「そこは桃香様の仁徳あつてこそだ。桃香様に会って話してみれば清廉であることがよくわかる」

ふんつと誇らしく言う愛紗。

「あわわっ、それだけに民は今我らを見定めている状況であると思われま……。街を歩くところらを伺っているのがわかって恐い……しゅ……」

「なんと、だから私の警邏に付いてくるのか……。『しえ、星さんはよく警邏をほっばかすので私が見張りをしましゅ！』などと……」

ておきながら半べそかいて裾を握ってくるから、私のことを誘っているのかと……」

「あわわっ、星さん！」

性欲をもてあます、などと言ってニヤリと笑う星に抗議するように顔を赤くした雛里が手をばたつかせる。この星、反董卓連合のあと、公孫？のもとを離れ劉備に付き従っている。それは客将という関係ではなく、真名を交わした主従の関係である。

なんでも『伯珪殿はからかうのは面白いが私が仕えるに値する器とは思えない。では誰に仕えようかと頭に有力な諸侯を並べたときに真っ先に浮かんだ人物が、劉玄德であった。智も武もない人物であったのになぜであるうな。だがそれが天命なのだと理解した。故にここに参上仕った』とのことである。

雛里を軽くあしらいつつ星が言葉を紡げる。

「そういえばあのとき雛里は『あっちの本屋が怪しいでしゅ！』と本屋に向かわせたかと思うと、こそそと本を買っていたな。ちらと覗かしてもらったが、その題名というのがなんと興味をそそるもので『現実志向！ 屹立する男の……』……」

「あわわーっ！ それは朱里ちゃんに頼まれたものでー！」

「はわーっ！ しよ、そんなこと頼んでないでしゅ！ 雛里ちゃんの買ですー！」

あわわはわわと姦しく混乱する二人の軍師をくくつと意地悪く笑う星である。これも乙なものだとかなんとか言っている。

くだけ過ぎたこの場を諫めるように手を二度三度叩いて注目させる美髪公愛紗。

「こらこら、今は益州攻略の軍議中だぞ。朱里の本の趣味の話は後にしろ」

えっ、と目を丸くする朱里と対照的にほっと一安心の雛里。朱里がそれは違つと否定しようと口を開こうとするが、それを遮るように雛里が言う。

「ま、まったく朱里ちゃんの趣味には私も困っているのです……。それはともかく、益州を攻略する際にこの益州と荊州をつなぐ諷陵が警石でないことは大変な不安要素です……。我らは荊州からの物資で行軍しているのですから……。諷陵に何かあれば後方支援なしに戦わないといけなくなります……」

朱里に口をはさむ隙を与えぬように言う雛里。もう本の話は終わった。残った事実は朱里がいかかわしい本を買っているということだけである。朱里は絶望しつつも、もうこれを機に私、はっちやけちやおうかなとか考えていた。自暴自棄である。しくしくと心のなかで泣きながら朱里が雛里の言葉に続く。

「ひぐつ……、うう、我らはまだ善か悪か民に示すことが出来てません。今諷陵の統治を蔑ろにすることは民に大きな失望を与えましょう。それは今後我らを苦しめましょう。噂は恐ろしく早く広がるものです。諷陵に押し入った劉備という輩はとんでもない奴だ、民を虐げ自身の欲望のままに動く……。もしそのような噂が広まってしまえば、この先の行軍、いえ、国を手にしたあとにも禍根を残すでしょう」

二人の軍師はともに諷陵という拠点の重要さを説く。

雛里は益州攻略のための戦術からみた意見を、朱里は国や大陸を

見越した今後の戦略からみた意見。

桃香は頼りになる伏竜鳳雛の合致した考えに異を唱えるはずもなく、それ以上に自身の思想に達える訳にはいかないと力強く頷いた。

「うん、諷陵の皆を置いて攻めるわけになんていかないもんね。それじゃ意味ないもんね」

弱き民を全員救ってみせる。

桃香が言った言葉はその理想を想起させ、桃香に付いてきた将は皆心を熱くし震えさせた。

この人こそ大陸を統べるに相応しい、この人を王にしてあげたい、この人を支えたい。

将は桃香に付いてきたことを改めて誇りに思うとともに、理想を実現させるのだと決意を新たにした。

「……で、結局どうすればいいのかな。ねえ朱里ちゃん雛里ちゃん、教えて？」

だからこそ、情けなく頭を下げる主の姿にずっとこけた。

「まずは諷陵の統治をすること。このことには皆さん納得していただけましたのでその方法を説明させて頂きます。民の信頼を得るためには民の不満を解消する必要があります。その不満とは何か。はい、桃香様」

一人立ち上がり、白い羽の団扇を桃香に向け答えさせる朱里。頭の出来のよろしくない桃香を少しでも改善しようという朱里の思いやりである。また大人への憧れから教師ぶりたいたいということもあった。

「ん〜、お腹いっぱい食べられないことかな？」

不安気に言う桃香を安心させるように笑顔で頷く。

「はい、その通りです。正解です」

正解したのでご褒美を上げます、そう言って朱里は菓子を渡す。やった、と言って素直に喜ぶ桃香。渡された菓子をはぐはぐと頬張る。

「民は飢饉によって飢えています。さらに諷陵は州都成都から遠くはなれています。もともと少ない食料は人も多くお金持ちの多い成都の方に流れてしまいます。つまり、諷陵は僅かばかりの食料を競うように奪い合っているのです。需要と供給の説明は必要ですか？結果を言うのなら、食料の値段は高騰しているのです。食料を欲しがる人はいくらでもいるので高い値段でも買ってしまうのです。そうして高くなった食料は貧しい人には買えなくなり、飢える。それは犯罪の増加、餓死者の増加、生産力の低下を意味します。このことを民は大変不満に思っています。その状況を改善しなければ、民は桃香様を認めることはないでしょう」

正解してほつとしていた桃香も朱里の飢えの脅威の話に神妙な顔をして聞く。

桃香の理想の敵は人だけではない。化物のような経済であったり自然の脅威であったりして、それに立ち向かうことも必要なのだ。

桃香はそれを理解して、眼の光を強くして朱里を見つめた。

朱里は眼光鋭くなつた桃香に驚くようにして、それからにこやかに笑った。

「不満の一つ、飢え。では愛紗さん、他に何かありますか？」

「簡単なことだ。それは「待つて待つて！ 鈴々に、鈴々に答えさせて！」……まったく、少しは落ち着かんか」

「鈴々に答えさせて！」

「……お前、菓子が目当てだろう。本当に分かるんだろうな」

「分かる分かるのだ！ だから答えさせて欲しいのだ！」

「……間違つたらげんこつだからな」

自然に飴と鞭にする愛紗。

鈴々と呼ばれた姓は張、名は飛、字は翼徳は赤い髪に虎の髪飾りをした見た目子どものものであるが、その武力は愛紗に匹敵するほどの猛将である。

その猛将が菓子をもらうために「はいっ、はいっ！」と手を上げて主張する。

「ふふっ、じゃあ鈴々ちゃん、なんだと思う？」

微笑ましく思った朱里が鈴々に問う。愛紗は呆れたような顔を装いながらやはり朱里と同じ顔である。

「それは賊なのだ！ 悪い人がいると安心してられないのだ！」

勢い良く答える鈴々。朱里が桃香のときの同じように笑って頷く。

「はい、正解です。」褒美ですよ」

「やたつ。にひひつ」

菓子を食べる鈴々。

「賊がいれば民は怯えます。その恐怖から救って欲しいと思うことは当然です。そして賊の脅威は生命の危機というものだけではないのです。たとえば町と町を結ぶ道に賊が蔓延っているとしたらどうでしょうか。行商はその道を通ろうと思うでしょうか。決して思いません。その道を通らず別の町で商売をしようと思うでしょうか。そうだったら本来行商が商売をするはずであった町はどうでしょうか。その行商からなにも買うことも出来ませんし、なにも売ること出来ません。収入源が断たれてしまうのです。賊は経済活動も阻害するのです。経済というものはなにかが影響するのにかまわたくわりません。もしかしたら蝶の羽ばたきですら経済を動かしてしまうかもしれません。そういうものです」

「……恐ろしいものだな、経済とは」

しみじみと愛紗が言う。武官とはいえ経済の驚異を推し量るには十分な情報であった。

「そうですね、経済は恐ろしく強大な力です。……ですけど、その力を利用することも可能ですよ」

もっとも今回の件には関係ありませんので割愛です、そう言って

朱里は団扇をピシヤリと叩く。

「さて、これで二つの不満が出てきました。飢えと賊です。これを解消するには……」

そこまで言って鈴々の手の突き上げ運動を見る。

答えさせる食わせる答えさせる食わせる答えさせる食わせる。

そんな鼻息荒い声が聞こえるようであった。だがそこは問題にしない朱里。

「解消するには簡単です。幸い我らには荊州からの豊富な食料がある。それを民に配りましょう。根本的な解決にはなりません。桃香様の評価という点ではこれで問題ありません。また、今まで益州に捧げてきた税が免ぜられるわけですので生活は少しは楽になるはずです。食料の問題はこれで解決です。では賊に対しては……」

「ちょっと朱里ちゃん朱里ちゃん！」

「んもつ、なんですか桃香様。せつかく気分よく話していたのに。お菓子あげませんよ？」

「それは困る……じゃなくて！」

「こそこそつと桃香が朱里に近づき耳元へ、小声で言つ。」

「そんなことしていいの？ ……うう、劉表様の文官さんたちが見てるよお……」

桃香には劉表の文官が付き、桃香の補佐をしている。それは今まで桃香が義勇軍で街を治めたこともないことから宛てがわれた。劉

表の文官が桃香の中樞に据えられることに朱里や雛里は危機感を持つていたのだが、養われている立場から拒否することも出来ず、こうした状況になった。

文官は桃香の補佐の任のみならず、桃香の監視の役割も担っていると幼女軍師は気付いていた。

「大丈夫です。これは益州攻略のための必要なのです。無駄に使っているわけではないのですし、なにも言っただこないということは問題ないということです。……分かりましたのなら、話を続けますよ」

コホンと一つ咳払いをして話を戻す。

「では賊に対してですが、我らには優秀な将がいます。愛紗さん、鈴々ちゃん、星さん。しっかり働いてもらいますよ」

「合点なのだ！」

「ふん、腕が鳴るな星」

「さて、鳴るほどの腕を持った輩がいればいいがな」

余裕綽々といったように笑う将三人。賊程度に一騎当千の強者が当たるのだ。三人が笑うのも無理は無い。

「では飢えと賊。二つの問題が解かれたわけですが……」

そこまで言っただ溜める朱里。それを緊張感をもって聞く。

「実はまだ、問題が残されているのです。誰かそれが分かるものはいますか？」

朱里は先程までの質問とは違い、回答者を指名せずに皆に聞く。それは問題が難しいと知っているからである。

しばらく手を挙げるものが出なかつたが、ついに挙げる人物が現れる。

「ふむ、食と命が保たれたのならば次は仕事ではないかな？ 民も与えられるだけでは満たされぬだろう」

星である。

その答えになるほどと納得する者も出るが、朱里は首を振る。

「違います。確かに仕事は人の心を満たし充実感を与え健やかな精神を育みます。それは重要なことですが、まだ先のことでしょう。もう一度よく考えてください。今、この状況で、私たちが出来ること、私たちの目的、私たちの限界。全て繋がっています。……星さん、メンマはありません」

ちつ、と舌打ちをする星。ぶつぶつと、メンマは菓子には入らないのか、と不貞腐れる。

朱里の言葉に皆は相談しながら答えを探す。しばらくは活発に議論していたのだが、次第に黙りこんでしまうようになった。

「わかりませんか？ もっと単純なことなのですが……。分かりました。雛里ちゃん、答えはなんだと思う？」

指名されてピクンと驚きながら、とんがり帽子で顔を隠して言う。

「それは……安心、だと思っ……」

「安心？」

皆が雛里の答えに疑問を持つ。朱里は雛里の前に立ち、そつと雛里の帽子を外し頭を人撫でし、掌に菓子を置いた。

「さすが雛里ちゃんです。正解ですよ」

おおつ、と感嘆の声があがる。さすがは伏竜鳳雛。凡人には分からぬことを見通すものだ。

「民の心は今荒んでいます。食料もなければ賊から命を狙われてもいる。そして、守ってくれる人もいなくなってしまったのです。民とは弱いものです。集団で生きても最後に頼れるのは権力者なのです。ですが、いまはその権力者が暴政を働いている。民はなにも寄りかかれるものがなく、まるで自分が一人きりであるような錯覚さえ覚えてしまうのです。民は今自身の立脚点は一体どこにあるのかわからなくなっているのです。そして、悔しいことに我らでは立脚点足り得ないのです。我らには地位も権力もなく力もない。他の諸侯からすれば吹けば飛ぶような存在です。それが我らの限界です。今は無理です。ですが、将来は違います。私たちが違わなくして見せます。……当面の目標は我らはこれから民とよく会話し信頼を得ることです。私たちが出来ることがそれです。立脚点となれなくても、ここに味方がいると示すのです。我らではただそこにいるだけで信頼を得ることはできないのです。それは劉の姓であっても。」

「民は施されるだけでは決して信頼しません。その人物がどのような人間なのか。それを正確にみています。そして我らの理想はそういう民から信頼されることが最も重要であるのです。それが救うということなのです。……幸福なことに我らはそういうことに長けた人物を知っています。そういう人物を我らは選んだのですから」

長々とした説明をし、朱里は一人の人物を見つめる。皆が一人の人物を見つめる。

「桃香様」

「お姉ちゃん」

その人物の名を皆で言う。皆意見は一致していた。ただ、その人物はというと。

「ふえ、ええっ！ 私はそんな大層なことできないよ！」

まったく自覚はなかった。

「なにを言っておられるのです！ 桃香様が出来なければ誰が出来るといのです！」

「にははは、全然ダメダメなのだ」

「ふふっ、当人はまったくそのようなこと意識しておらぬからな。人たらしとはかくも恐ろしい」

好き勝手言うが、その発言のどれもが桃香を認めていた。そんなダメダメな桃香を勇気づけるように朱里が励ます。

「大丈夫ですよ桃香様。桃香様は自然に民に接すればいいのです。それが一番民を安心させます。難しく考えず、いつも通りに」

「う、うん。……そうかな。それなら簡単だけど……」

「にやは、別に難しいことをしろと言ってもお姉ちゃんはできないのだ」

「鈴々！」

騒ぐ愛紗と鈴々を桃香は横目で見て苦笑いしつつ、鈴々の言っておりかと落ち込みながらも得心する。

「あははっ……。鈴々ちゃんの言うとおりだよ。私は私ができることをしなきゃね」

よしっ、と拳を突き上げ立ち上がる劉備。

「それじゃあ皆！これから諷陵の皆を助けに行くよっ！」

「はっ！」

力強く応えてくれる自身の仲間から力をもらい、指示を出す。

「まず、朱里ちゃんと雛里ちゃん！民の皆に食料を配給するよ！民の人数と食料の数、配給の場所とかその他諸々お願い！」

「「御意です！」」

「次に鈴々ちゃんと星ちゃん！賊をやっつけちゃうのお願い！降服してきたらその人達は傷つけちゃ駄目だよ！」

「合点なのだ！」

「ふふっ、鈴々よ、どちらが多く賊を潰せるか勝負といこうか」

「次、愛紗ちゃん！ 愛紗ちゃんは私の護衛をお願いね！ 街に行くよー！」

「御意！ ……して、桃香様。街に行つて何をされるのです？」

愛紗はてつきり自分も賊の討伐に向かうのかと思つていたのだが、予想と反したことを言われて戸惑いながら質問する。

桃香が自信を持ってその答えを言う。

「うん！ 私たちは街に行つてご飯を食べてきます！」

「なるほど！ ……つてなに馬鹿なことを言つておられるのです！ 警邏のように常識的に考えて！ 我らが街を歩いて誰が王か示すのでしょうか！」

アホな桃香の答えに烈火の如く怒り出す愛紗。民が自身を守る者がどういふ人物か知らしめるには、まずは顔を覚えてもらわなければならぬのだ。

「うつつう……。分かつてるなら質問しなくても……。警邏の合間にご飯を食べたつていいじゃない……」

「なら、そう言つてください！」

「……はい」

情け無くぷうーつとする桃香。それを見た鈴々がぷつと吹き出したところで穏やかな空気が流れ、その場にいた人物が誰からともなく笑い出す。それは怒つていた愛紗のみならず、劉表に派遣された文官も同様であった。

桃香の皆を笑顔に変えてしまつ、不思議な魅力がその場を包んでいた。

それからしばらくして。

その桃香の不思議な魅力は諷陵全体を包んでいた。

民は貧しくも皆笑顔となり明日へと力強く立ち向かう活力を取り戻していた。賊は鈴々と星の力によつて多くは討伐され周囲に賊の影はなくなっていた。そしてそれを成し遂げた劉玄德という人物の名は次第に益州に広まり、桃香の声望は高まつていった。

ただ一つ、朱里の誤算があつた。それは我らは立脚点足り得ないというものである。

諷陵、周囲の町、村。それらは桃香に心酔し、桃香ともにいたいと願い出てきたのである。桃香の魅力は劉姓や官位以上の効力を発揮したのだ。

桃香は立脚点足り得た。

朱里はそのことを驚くとともに、それこそが大陸を統べるに相応しいと、漢王朝以上に民を幸福に出来る証明であると桃香を誇りに思つたのだつた。

これにて諷陵の地は磐石。あとは成都まで進むだけだ。それまで数十の城があるがそれも乗り越えてみせる。

第一の難所は弓の名手と名高い黄漢升が守る楽成城だ。そこまで一心不乱に押し進む。それが桃香の理想の実現となるのだから。

第二十四話 たいけつ！（前書き）

徹夜テンションあばば

110828：まさかのキャラ名を間違えるというミス……。じつ
そりと修正

第二十四話 たいけつ！

益州楽成城。その城の前で睨み合う両軍。黄忠軍三万、劉備軍四万。

黄忠は街に被害を与えるわけにはいかぬと籠城を選ばずに野戦を選んだ。

黄忠は劉備の行なった諷陵での民を第一に考えた善政と、それを喜ばしく思う民の感情を既に耳にしていた故に、降伏することも視野に入れてはいた。

だが、黄忠の知る劉備の話はあくまで噂程度のもの。自身の目で自身の弓で、自身の心で劉備の人となりを感じなければ降伏など大それたことは出来ない。この戦は黄忠にとつて一世一代の大博打になるかもしれないのだ。璃々の成都に置いたまま、素性の分からぬ者にこの身を委ねる。それは、愛する愛娘を敵地に残すことを意味し、今まで仕えた主を裏切ることを意味していた。

慎重に見極めなければならぬ。

この身を捧げるに値し、民を救う力を持ち、出来ることならば璃々と劉璋を助けだしてくれる慈愛深き人物であるのか。

黄忠の兵も黄忠の考えに賛同し、理に叶わぬ野戦に付き合ってくれた。その兵は黄忠への信頼や敬意、また城を、ひいては民を守るという矜持を持った勇士であるからだった。

「ごめんなさいね。私の我儘であなたたちに不要な傷をつけることになってしまった……。私のことを恨んでくれても構わないと思っているわ……」

黄忠は楽成城の守備隊長である雷銅ライドウに負い目を感じ、俯きがちに言う。雷銅は本当に心苦しいと思わせるような顔をする黄忠に毅然と答えた。

「いえ！ 我らは楽成城守備隊でありますゆえ！ 黄忠將軍の命に
誉れこそ感じれど、恨むことなど断じてありえませぬ！ 微力では
ございますが、どうぞお使いください！」

雷銅の発した言葉は意味だけみれば、將の命に従う、という優秀
な兵であれば流れるように言うことの出来るようなもので、それは
砂を噛むような空虚さを感じるかもしれない。

だが、黄忠が受け取ったものはそうではない。雷銅が優秀である
ことは既に重々承知であることは理解していたにもかかわらずであ
る。それは黄忠が雷銅と面と向かっていたからに他ならない。

鍛えあげられた者が背を一本通すように真つすぐ伸ばし、肺から
空気を残さず押し出すように力強く張った声。勇ましく攻撃的な目
で黄忠を見る目は来たる戦に何の不安もなく、それどころか待ちき
れぬと言っているようであった。

だが、それが意味することをそのまま受け取ってはいけない。そ
れは中の下だ。上の上の正解は雷銅がなぜそれほどまでに強大に見
せたかを考えなければならぬ。

黄忠はこの戦に対して乗り気ではなかった。それは黄忠の言葉通
りに兵を犠牲に我を通す事があるからだ。黄忠は自身の我儘で兵が
犠牲になることにどうしようもなく心を痛めていた。

雷銅はそれを否定するために虚勢を張った。

（俺を見損なうな、俺にだって守護隊としての誇りがある、侵略し
てくる賊を打倒してこそ誇り足りえるんだ、この俺を、楽成城守備
隊を見くびるな。……だから、そんな顔をするんじゃない！ 黄漢
升！）

黄忠はその飢えた狼のような目に気圧されるように吃驚したが、
雷銅が意図するものに気付くと感謝するように黄忠は一つ頭を下げ

た。これで迷いは吹っ切れた。黄忠は清々とした表情で陣から一人離れ劉備軍に向かう。

「……雷銅隊長、將軍は気付いてくれましたかね？」

「さあな、そんなことはどうでもいいさ。俺たちはこれから誇りをかけた戦いに望むんだ。それで十分さ」

「また隊長のカッコつけが始まったっ。ふふっ、あーんなことしたのは將軍に死んで欲しくなかったからなんじゃないですか？」

「ばっ、当たり前のことを言うな！ 將軍に生きていてもらいたいと思うのは部下として当然だろ！」

「ほおお〜。たしか隊長ってば、黄忠將軍に憧れて益州に士官したんじゃないかな？ ん？ 顔が赤いぞ？」

「っ、この、馬鹿がっ！」

「聞きなさい！ 愚かにも益州を侵略する賊たちよ！ 私の名は黄漢升！ この樂成城を守る将である！ あなたたちは我が主劉璋様の領土を土足で踏み荒らし、そのみならず、私の城まで攻めいらんとしている！ これは言わずとも分かるように大罪でありましょ

う！　あなたたちは大罪を以てして何を欲するか、答えてみせなさい！」

これに答えんと劉備が前に出て黄忠に向きあう。少し後ろに關羽が護衛に付く。

「黄忠さん！　私は劉玄德です！　黄忠さん！　私は益州に来て民から黄忠さんの話をよく聞かされました！　皆黄忠さんはいい人だつて、優しい人だつて口を揃えて言っていました！　それなのに！　どうしてあなたは劉璋さんなんかに従っているのです！　私はあなたと戦いたくありません！　降伏してください！」

「私は劉璋様の将！　劉璋様に従う理由などそれで十分です！　将としてこの城を守るように言われ、私はそれに誇りを持っています！　誇りを傷付けてまで命を拾おうなどという不義をいたすつもりは毛頭ございませんわ！　それをしるというのであれば！　あなたがそれをさせるに値する大器であることを示してご覧なさい！」

「っ！　黄忠さんなら！　劉璋さんが民を苦しめていることはもう分かつているんじゃないんですか！　劉璋さんの将であることが、誇りを守ることが、民を守ること以上に大切なことだなんて……、私にはとても思えません！」

劉備が悲痛な表情を見せて黄忠へ降伏するよう諭す。その姿を黄忠は頭の前から爪先までなめるように見て品定めをした。

腰に剣を携えて入るものの、その剣は宝石が散らばめられていてとても実用的とは思えない。また、その細腕に細脚では剣を持って向かってきたとしても一兵卒どころかそこらの農民にも負けてしまひそうな貧弱さである。

武をもって民を率いる者ではない。

ならば、智をもつてここまでの勢力を獲得したのか。

会話から察するにそうではない。自身に仰々しい論を説くわけではなく、劉備は感情の奔流のままに民に対する思いをぶつけてきた。賢しい人物はこうはならない。賢しい人物であれば正当性を朗々と叫び理路整然と諭す。劉備にはそうした小細工を用いてこなかったゆえに、黄忠は劉備は智者とは言えないと判断した。とはいえ、こう判断することを計算に入れるほどの智者であるのだが、そこは黄忠はそのときは自身の見る目のなさを呪うしかないわけである。

武でも智でもない人物が一体どうして民の信頼を得て、四万の兵を率いることができたのか。

もはやそれも舌戦によつて明らかとなった。今までつらつらと劉備を分析していたが、そんなことは些細な事である。最も重要であるその人物の心が知れた。黄忠自身の心がそう訴えていた。

「……ふふっ」

黄忠は劉備の言葉に、堪えきれないといったふうには穏やかな笑みをこぼした。それを見て劉備が苛立ったように言う。

「な、なにがおかしいんです！ こんな私が民を思うことがそんな面白いですか！」

「ふふっ、違うのよ、ごめんなさい。あなたがあんまりにも真つ直ぐだから……。くふふっ」

そうやって口元を隠して笑い続ける黄忠。

劉備はその姿に困惑して無意味に辺りをうかがう。そうして眼のあった関羽に「私、何か面白い事言った？」と小声で聞く。関羽はパタパタと手を振って否定の意を表す。二人はほとほと分からぬと顎に手をやって眉を寄せた。

しばらくして笑いの収まった黄忠が劉備に非礼を詫びるために話しかける。その目には笑いによるものなのかそれとも別の理由か、うつすらと涙が浮かんでいた。

「劉備殿、申し訳ございません。こうした場でこのようなことを…。無礼を謝罪致します」

深々と腰を曲げて頭を下げる黄忠に劉備は頬をかいて照れくさそうにする。照れるところは全くないのだが。

ゆっくりと頭を持ち上げ、先程の穏やかな顔で黄忠が言う。

「あなたの考えはよくわかりました。それはもう十分に」

「それならっ！」

劉備が幼気な顔を綻ばせ掌をぱっと顔の前で合わせる。降伏に感じてくれた、劉備はそう思って期待した。

だが、黄忠は穏やかな顔を一変させ険しい顔になり、期待を裏切った。

「けれども!」

大気を震わす大音声を一喝。ビクンと肩を震わせた劉備を尻目に黄忠は続けた。

「この大陸は広く! 民は多く! 敵は強大でありましょう!」

「私程度に臆する様を晒して! 何が民を救うでありましょうか! その程度では決して民は救えない!」

「力を！ もつと力を！ 言葉ではこの地を治めるに足りませんわ！」

外套をふわりと翻して自陣に向かって檄を飛ばす。

「高潔なる楽成の兵たちよ！ この戦は我らの誇りをかけた戦となるでしょう！ 我らの背には楽成城がある！ 民がいる！ それらを守ってきた自負がある！ 我らに大義なけれど光り輝く矜持あり！ その矜持を彼女らにみせつけてやりましょう！」

《オオオオオオツ！》

兵は檄に応え地鳴りのような声を響かせ、発奮する。三万の黄忠軍の士気は最高潮に達した。

「劉備殿、お話はもはやこれまででありますわ。これよりは武をもつて語り合いましょう」

そう言って黄忠は自陣へと帰っていく。その歩みに一切の後悔はなかった。

黄忠の背を呆けたように見続ける劉備に、関羽が近寄り声をかける。

「残念でしたね。自分に大義がないと知っていてなお、劉璋の将としての責任と矜持から降ることを選ばなかった。なんと気高い人物か……」

「……うん……」

生返事を返す劉備に嘆息して、自陣へと引き返そうと腕を引く。

それに引きずられるようにして、とたとたと拙く歩く劉備。

関羽はその姿を見て、ああ、これは私が兵に檄を飛ばさなければならぬかなと呆れていた。

そう関羽に思われていることなどいざ知らず、劉備は考えていた。劉備は降伏勧告が失敗したことに落胆していたわけでもなく、戦で血が流れることを嘆いていたわけでもなく、思考が渦巻いていたがゆえに呆けていた。

その思考とは。

「……黄忠さんは、私を応援している……？」

黄忠軍三万対劉備軍四万。

関羽・張飛・趙雲が率いる攻撃的陣形、鋒矢の陣を受け止めんと黄忠は鶴翼の陣を敷いた。それは迎撃的な陣で突っ込んできた敵軍を包囲しながら攻撃を加える陣であるが、鶴翼の陣は敵方よりこちらが多勢であることが必須の陣形であった。

ならばなぜ黄忠は小勢でありながら鶴翼の陣を敷いたのかといえば、それが黄忠軍で最も得意で最も戦果を上げ、最も誇りを感じる陣形であったからである。

最も得意な陣形であったからといってそれが勝利につながるわけではない。黄忠軍は劉備軍の苛烈な攻撃に耐えかね死者を積み上げていったのだが、劉備軍も想定した以上の被害であった。

それは黄忠軍の異常なまでの士気の高さであり、尊大なまでの矜持であり、それに後押しされた武であり、黄忠の的確な指示であった。

黄忠は矢を一つ矢筒から取り出し、それを構える。その矢には銀糸が編みこまれ、細かく波打つように歪んだ鋼板がぶら下がり、陽光に照らされると煌びやかに輝いた。

放たれた矢は右翼前方の大地に突き刺さり、黄忠の矢を知る者にはそれが何であるのかよく分かった。

「黄忠様よりの伝令だ！」 耳”！ 準備しろ！」

そう言われて色弱の兵・片目の兵、盲目の兵が聞き漏らすまいと一斉に耳に手を当てる。

そうして時経たぬうちにもう一本矢が放たれる。

その矢は一直線に銀糸の矢に向かい、鉄板を擦るようにして不協和音を奏でた。

その音を聞いて三人の兵は堰を切ったように言った。

「弓隊は二度矢を掃射した後！」

「全隊で進撃！」

「我らの居た場所には黄忠隊本隊が滑り込み我等を援護射撃する！」

「左翼の孤軍奮闘に花をもたせよ！」

その伝令を聞いて銅鑼を鳴らし、了解の意を表す。

「はっ、華がない連中のくせに先に死に花咲かせようとしやがって！」

右翼を率いる人物が一人二人と斬り殺し、槍を掲げて指示を出す。

「まあさかお前ら、素直に花をもたせるつもりはねえよなあ！？」

《笑止！ 笑止！！ 笑止！！！！》

「それでこそお前らだ！ 奴らのお株を奪ってやろう！ ここで一発どでかい花火を上げようか！」

「味方の矢なぞ気にするな！ 貴様には背があるだろう！」

「前方の敵なぞカカシにすぎん！ 両の腕で叩き落せ！」

「一直線に突き抜けて、馬鹿な左翼の死体を拜んでやろう！ 全隊突撃いいーっ！」

「……なーんてことを阿呆右翼は言ってるでしょうね」

「まったく、脳筋連中はこれだから困るのです。孤軍奮闘って言うたつて突撃するわけじゃないのです」

「脳筋はやーねー、などと言って姦しく、周囲の少数の男は所在無さげに。」

「けれど、ね」

「勝手に黄忠親衛隊”としては、なのです」

「辛いね〜」

「これも淑女への道なのです」

「はてさて」

「さてさて」

「男に花をもたせましょうか」

戟を片手にぶん回し、水面に落ちる雫のような声を発す。つまりそれは波紋を広げた。

「さあさあ顔面岩石の不細工共！ さあこれから飢えたケダモノが涎垂らして迫ってくるぞ！」

《きゃあああ〜、こわ〜いつ！》

「まったくその通りだが、暴発寸前の汚い雄を前にして我ら淑女が何をしなければいけないか分かるか！」

《そんなの恥ずかしくて言えな〜いつ！》

「ならば教えてやろう！ 淑女たるもの、いかなるときでも男を受け入れるべし！ つまり！」

「股をかつ開いて！ 名器である蜜壺を潤わせ！ 男ども待つことだ！」

《きゃあああ〜！！！》

「恥ずべきことでは全くない！　我らは憤ましく誘いを待つだけであるからだ！」

「よって！」

「我らはここに方陣を敷き、雄を待つこととする！　顔面かさぶたにはこういつときでないと男を得られないだろう！」

《隊長ひどおーいっ！》

「しかし！　顔面生きてるのが不思議といえど男を選ぶ権利はあるであろう！」

《そのとーりい！》

「さあ蜜壺に聞けえ！　益州を侵略する愚かな輩と、右翼の猿と！　どちらとまぐわいたい！」

《猿！　猿！！　猿！！！！》

「このド変態どもが！　だが私も完全に同意だ！　あえて言おう！　我らは誇り高きド変態である！」

「やることは一つである！　劉備軍の浅ましい男どもを蹴飛ばし、猿が集ってくるまでここで耐え忍ぶぞ！　男を釘付けにしてやればあとは黄忠將軍が全てやってくれ！」

「だから！」

「死ぬんじゃないよ！！！」

そんなことを喚く淑女たちの戦いが始まった。

「雛里ちゃん！ 挟撃されてるよ！」

焦った様子で軍師鳳統に状況を言う劉備。鳳統はそんなことよりも、と忙しなく伝令を出す。

「左翼に迎撃態勢を！ 星さんに左翼を支えるように伝令を出してください！ 右翼は鈴々ちゃんに援軍をお願いします！ 愛紗さんは桃香様の護衛を！」

動きが考えられないほど早い。いくら訓練されていたとしてもこの速度はありえない。こんな速度は伝令を通じてではできないことではない。この速度が黄忠の強みか、鳳統はそう考えたが頬を張ってかき混ぜられた思考を正す……が。

「申し上げます！ 左翼破られます！ 彼奴ら死兵となりて目を合わすもの全て敵だと言わんばかり！ 我が軍に動揺が広がっております！」

（まずい……。早く伝令さん……！ 星さんに援軍を向かわせて……！）

祈るような気持ちで手を握る。

左翼が抜かれたら劉備の入る本陣に一直線だ。護衛は特別精強な人物を選んだとはいえ危険に合わすことは出来ない。

将と兵の数で慢心してしまった。数が少ないのにもかかわらず鶴翼の陣を敷いたことも相手を甘く見てしまった一因だ。

黄忠が歴戦の強豪であることは知っていたのに。鳳統は自身の不甲斐なさに唇を噛んだ。

それに追い打ちをかける事実が飛び込んでくる。

「申し上げます！ ちょ、趙雲將軍に伝令が届きません！ も、もしかすると……討死の可能性もございます……っ！」

最悪の知らせであった。

「そ、そんなっ！ 星ちゃんが……そんなはずないよっ！」

劉備がその伝令官に食って掛かる。伝令官はじつと俯き黙った。それは鳳統にも衝撃を与えていたが、それ以上にやることがあった。

「……左翼は？ 左翼はどうなっているのです」

「雛里ちゃんっ！ 今は星ちゃんが……」

「桃香様っ！ お願いします、今はお静かに……」

そう強く言って劉備を黙らし、伝令官を促す。

「……左翼は現在関羽將軍が抑えております。護衛の伝令は伝えましたが、右翼が現在小康状態であることから、張飛將軍と共同で左

翼をある程度鎮圧した後向かうと……」

顎に手を当て、考えこむ。戦場であるがゆえに興奮からかいつも以上に脳は高速に回転する。

「……左翼は愛紗さんと鈴々ちゃんて抑えるならば大丈夫……。右翼は撒き餌。また左翼の興奮物質。右翼を叩くことで左翼の勢いを削ぐことも……。いえ、それは火に油を注ぐか……」

「いえ、それよりも先に……」

ぶつぶつと何事かつぶやく鳳統にしびれを切らし劉備が声をかけようとしたそのとき、鳳統が叫ぶ。

「伝令さん！ 左翼はじわじわと後退するか右翼への道を開けるように！ 右翼は決して逃さぬように！ 桃香様！」

「ひゃいっ！」

普段と違う鬼気迫る表情に劉備は怯えながらも鳳統の目を見る。その目は僅かに恐怖と、覚悟を秘めていた。

「我らはこれより大きく迂回し！」

「黄忠本隊を叩きます！」

最前線の血で血を洗う凄惨な現場から少々離れて　といつても
そこも戦場である　雨のごとく絶えず矢を降らす黄忠は当惑して
いた。

前線から聞こえてくる絶命する兵の金切り声の断末魔、自身の鼓
舞する咆哮、狂気を帯びた相手を罵倒する怒号。

大混戦の様相の戦場に少しでも救いになるようにと矢を射続ける。
だが、それは状況を変えるものではなかった。

「なぜ……っ！　なぜ、伝令が届かないのです！　突出しすぎです
！」

黄忠の矢による伝令が届かない。戦場の音で聞こえていないのか
”耳”が死んでしまったのか、はたまた意図的に無視しているのか。
理由はともかく、突出した右翼を諫める伝令は届いていなかった。
もう敵地奥深く踏み込み陣が無茶苦茶であった。

「黄忠將軍！　もはやあの者共は帰ってやこれません！　これが奴
らの本望なのです！　どうか！」

「どうか奴らの命を、使ってやってくださいええ！」

周りの兵が涙混じりに進言する。

前線の者共がどういう人物がよく知っているのだろう。もしかす
ると同郷の出身かもしれない。

「……」

進言された黄忠もその心意気は汲んでやりたいとは思いが、戦に
戦術というものがある。

黄忠としては挟撃は劉備軍の進攻を止めるためであり、挟撃の心

的圧力で士気を削るためであった。その間に黄忠軍自慢の弓隊で敵数を減らす心算であったのだ。

現状でも右翼左翼に別れ劉備軍を挟撃していることに変わりはないが、右翼は明らかに暴走していた。

こうなってしまうっては作戦はおじゃんだ。右翼は矢が放たれたのごとく一直線に左翼に向かって駆けて、敵味方も分からぬほど入り乱れた大混戦。数に劣る黄忠軍の負けが見えていた。

(……違つ……)

黄忠はこの状況に追い込まれてもまだ勝利を諦めてはいなかった。この状況を一変し勝利をもたらす起死回生の策。

それは破れかぶれのような、だからこそ、力が入った。

(……兵数で負けていても！ 将さえいなくなれば！)

眼光鋭く黄忠は戦場を見渡す。兵の顔を一人として見逃さぬと鷹のように獲物を探した。入り乱れた戦場の中から将を見つけるのは至難の業であったが黄忠はそれを成し遂げた。

(見つけた……)

美しい女が威勢よく黄忠軍の兵の首をかつ裂いて、口を大きく開けて自軍の兵に指示をしているであろう姿がよく見えた。

黄忠は弓を構え弦を引き絞る。弦はぎりぎり引かれることに反発する音を立てながら曲線を描く。

いつも以上にゆっくりと、いつも以上に指に力を込め、将に狙いを定める。

緊張などしていても狙いがずれることはない。それだけの鍛錬を重ねてきた。ぴたりと照準を合わせ、機が来るのを待つ。

激しく武を奮う將の動きを予測し、周囲の兵が射線に入らぬよう状況を見定め、風の向きと強さを肌で感じ、呼吸を落ち着ける。耳に入る情報の一切を遮断し、眼の視界はその將の周囲だけに狭まる。

これ以上ないというほどの集中力。

生涯最高の射撃になるであろうことを確信して、黄忠は絞られた弦を開放した。

「疾ッ！」

放たれた矢は風を切り裂き、音を置き去りにしてまっしぐらに目標に向かう。

全力をもって射られた矢。当たらぬわけがないと黄忠は矢の行く末を見届けずに次の標的を探す。

その最中。

《ぐああっ！》

左方から断末魔が響く。黄忠は何事かと思い目を凝らして騒ぎ方向を見る。

血の飛沫と苦悶の首、一気呵成に刃を奮う敵の姿。急襲だ。

「一体いつの間につ……！」

すぐに指示を出さんと矢を番える黄忠に、伝令の一報。

「申し上げます！ 我が軍の左方から突如敵部隊が現れました！旗から察するに、劉備軍本隊かと思われます！」

「なんですって！」

左方の敵だけにとどまらず右方から、それも劉備軍本隊の攻撃。本来こちらが仕掛けようとしていた挟撃であった。

左方の敵の数はここからでは分からない。劉備軍は報告によると五千ほどのことだが、こちらは弓兵主体の部隊。その上、挟撃。敗色濃厚、というより、それは決定的であった。こうなってしまうとは。

「我が名は趙子龍！ 劉玄徳に仕える常山の槍である！ 黄漢升よ！ もはや大勢は決した！ これ以上無駄な血を流す必要もなからう！ 武器を捨て投降せい！」

左方よりの将、趙雲に槍を突き付けられては。

「……随分とお早いよね」

「我が槍は無双ゆえ。とはいえ貴様の兵もなかなか手強かったぞ？」

「それは褒め言葉かしら？」

「無論」

「それは良かったわ」

槍を突き付けられての会話。その様子は怒声響く戦場から切り離されたかのようで緩やかに時間が動いていた。

「いつの間に私たちの右方に来たのかしら？」

「なに、攻めこまれたときは両陣営とも混乱していたようなのでな。少数の兵であれば気付かず忍び寄れるだろうと思った。成功してよかったと今は安心しているわ」

「……随分と無茶を……」

「その無茶を通すことが出来ると思ったからやったのだ。我らの軍師なら出来るように舞台を整えてくれると確信していたゆえ。貴様は不思議に思わなかったか？ この大混戦、この広がった戦場、動きの取れない貴様の軍に」

「……全てあなたたちの掌の上の出来事というわけね……」

「さて、どこからどこまで軍師様の策なのか……」

趙雲は検討つかぬと片目を閉じて不敵に笑う。そうしていても槍は寸分も動かさず。

「して、返答や如何に？」

趙雲はこれ以上の問答は不要と鋭く目を尖らし、黄忠に降服するか否かを答えさせる。

黄忠はゆっくりと黄忠に向かい、その奥の蹂躪する趙雲隊と死にゆく自軍の兵を眺める。黄忠を守ろうと剣を振り回し何事か呼びかけているが、その言葉はなぜか耳に入っていかなかった。

逃げるように進言しているのか、まだ勝機はあると激励しているのか。少なくとも恨み節ではないことは確信していた。そのようなことを考えることすら、彼らに礼を失した行いであった。

黄忠は彼らに笑みを返して、趙雲に言う。

「ここまで兵の命を貰っておきながら、将が無傷のまま降伏なんて出来るわけがないでしょう?」

この言葉と共に一陣の風。

趙雲は目を細め誠に惜しいことだと嘆いた。

「……将には無駄な犠牲を防ぐ義務もあると私は考えている。それを為すつもりはないか?」

「くだいですよ。舌戦でのとき、今このときに降服する機会があったのです。二度突っぱねて生きていられると思つほど愚かではありません」

さあ首を刎ねてみせると、黄忠は顎を持ち上げ目を閉じた。

「……兵は誇りに殉じ、自らもそれに応えてみせた。それには心から尊敬を覚えるが……。民に慕われるそなたならば、やはり降伏すべきであつたと思うぞ。それが民も兵も、そなた自身すらも喜ばしいことであつたはずだ……」

「……それができない事情があつたから、こうなつたのよ……」

「ほづ、その事情とは?」

「……」

「……話す気はない、か……。まあいい、これから死にゆく者に無理に問いただすのも無粋であるう」

趙雲は槍を引いて柄をしかと握る。

ようやくこの死が溢れる戦場も終わりだ。この趙雲の攻撃で終わりを告げる。

趙雲は息を大きく吸って、言う。

「黄忠軍大将、黄漢升の首！ 劉備軍が将、趙子龍が貰い受ける！」

ビュツと鋭く風を切り首を薙ぐようにと右から左へ趙雲の槍、龍牙を払う。

まさにそのとき。

「星ちゃん、待ってえええええっ！！！」

はっと反射的にその声に従い、先程筋肉に下した命令を変更し槍を制御する。

今更止められることはできない。ならばと手首をくるりと返し、足を一寸踏み込む。

結果、槍の柄の部分が肩に衝突するにとどまった。

「づぐっ！」

衝撃につめき声を上げながら大地を転がる黄忠。いくら制御したとはいえ肩骨にヒビが入るのは免れない。

弓兵である黄忠にとっては肩の傷は致命的であった。つまり、黄忠はもはや戦闘不能。勝負あった。

「桃香様、どうしてここに？ いや、それよりもここは危険です」

自身を静止する声を出した張本人、劉玄徳。戦場にのこのこ現れるなどと、趙雲が劉備に苦言する。

「ごめんね。でも、もう終わったから……」

ふむ、と怪訝に思うと同時に周囲の喧騒が収まっていることに気付く。みると黄忠軍の兵の大半は地に伏せ項垂れている。その理由が敗戦の絶望か負傷によるものか、絶命によるものかは不明であったが、危険がないのは確かそうだった。

といつても総大将劉備が敵地でふらふらすることは望むものではない。趙雲は劉備の横に付いて護衛する。

劉備が悲痛な表情でとことと黄忠の元へと歩く。荒く息をする黄忠は仰向けになって、劉備を待った。

「……黄忠さん、大丈夫ですか？」

そう言つて劉備は負傷した肩に優しく触れた。それでも痺れが走つたようにして痛みを表す黄忠。

「……辛そうですね。今、衛生兵に診せますからねっ！」

笑顔で頑張れとぐつと黄忠の手を握る。その表情に嘘はなく、本当に心から心配しているようであった。

「……なぜ、ですか……っ！ 私、は……敵の総大将ですよっ！
衛生兵なんて……」

苦しそつにしながらも聞かなければならないと、力を振り絞つて声を出す。

「……だって、総大将だからって、殺す必要はないじゃないですか」
劉備は変わらず笑顔のまま、そう言った。

「何を馬鹿なことを……！ 私はあなたの兵を殺したのですよっ！
その私を……、くう！」

痛みが走るのか途切れ途切れに言葉を紡げる黄忠。

「それなら私だって黄忠さんの兵を殺しました。おあいこ、つてのは違いますけど……。殺したから殺し返すってというのは違うと思います」

「私を恨んでいる人だって、いるでしょう……！ その恨みはどうなるのです……」

「恨んでなんていません。いても私が説得します」

黄忠が劉備の目を見ると火が灯ったように燃えている。この問答は意味が無いと思った。

「……私を、どうするのです……」

「降伏、してもらえますか？」

「……舌戦で一度、趙雲殿に一度……。二度も断った私に降伏しろと……？」

「コクリと頷いて返答する。」

「二度も、無礼を働いても……っ。情けをかけるというのですか……？」

「無礼だなんて思ってませんよ。それに、民を思う黄忠さんと一緒にいたいと思うのがそんなに不思議なことですか？」

「……本当に民を思っていれば、もう降伏しているとは思いませんか？」

「本当に民を思っていたから、こうして戦ったんじゃないですか？ 黄忠さん、言いましたよね。『この大陸は広く！ 民は多く！ 敵は強大でありましょう！ 私程度に臆する様を晒して！ 何が民を救うでありますようか！ その程度では決して民は救えない！ 力を！ もつと力を！ 言葉ではこの地を治めるに足りませんわ！』……って」

黄忠は目を閉じて、右手で顔を覆う。まだ、表情を見せてはならなかった。

「この言葉、私では駄目だって意味じゃなくて、私への叱咤だったんじゃないですか？ 口だけの理想じゃなく実行できる力を持つようにと、理想に対立する人物とときには戦うことを迷わぬようにと、そういうことだったんじゃないですか？」

黄忠は顔を覆うだけにとどまらず、顔を背けた。

あの言葉の真意を正確に読み取ってくれた。そして、それを十分すぎるほど示してくれた。こんな嬉しいことはない。

「ありがとうございます、黄忠さん。あなたのおかげで私は成長できました。あなたと大切な兵のおかげで自分の甘さに気付きました。

……私を導いてくれたあなたと一緒にいたいと思うのがそんなに不思議なことですか？」

劉備の誘いのなんと心地の良いことか。

黄忠は既に劉備の慈愛の心に触れ、それに取り込まれていた。それでもなお。

「……私はあなたの兵を殺しました」

「大丈夫です。私が何とかしてみせます」

「……私はあなたの成長のために自身の兵を犠牲にしました」

「……それは私の罪だと思います……。けど、本当に兵は”犠牲”と思ってるでしょうか？ 戦った私たち自身がよく知っていると思います」

「……私はあなたの慈悲を蔑ろにしました」

「構いません。なんとも思ってませんから」

「……私は最後にはあなたがそう言うってくれるだろうと思っていました。私を助けてくれるだろうと、兵は死んでも私は生かされるのだらうと……。安全なところから兵を殺したのです。そんな卑怯な私に降伏しろと……？」

「……そうです。それが、民のために必要なのですから」

それから黄忠はじっと黙りこみ口を開かなかった。口を開いてしまえば、それが声を出しているのかむせび泣いているのか分からない

いに違いないと思ったからだ。

それでもやらなければならぬことがある。義務感よりむしろ運命に突き動かされるように体が動いた。

「……弓を……」

短く言って、指を差す。趙雲は黄忠の状態から戦意はないと判断し、地に落ちた黄忠の弓を拾って、渡した。

小さく、ありがとう、と言って萎えた体に鞭を入れて体を起こす。肩から痛みがじくじくと走るがそんなことは知ったことか。痛みなど忘れてしまえ。そう思って体を動かし、劉備の前で膝立ちになつて言った。

「姓は黄、名は忠、字は漢升。真名は紫苑でございます。今このときより、死するときまで！ 劉玄德様に忠誠を誓います！ どうかこの弓を受け取ってくださいませ！」

耐えられぬとぼろぼろと涙をこぼし、弓を捧げる黄忠。劉備は本当に嬉しそうになつてこり笑った。

「姓は劉、名は備、字は玄德。真名は桃香だよ。これからよろしくね！ 紫苑さん！」

弓を劉備にしては厳かに受け取って、黄忠の手を握った。

それは事実上の降伏宣言。その光景を目にしたものはにわかに奮い立ち声をあげた。

黄忠は益州はおろか大陸を救うことになるであろう人物との邂逅に感謝し、その人物に仕えることになつた奇跡に号泣し、劉備は大泣きする黄忠を抱きしめ、あやすように背をポンポンと叩く……のだが黄忠の涙に釣られて一緒に泣いている。

趙雲はこれでは収拾付かんと、仕方なく戦の締めをする。

「今ここに、黄漢升は我が軍門に下った！ 双方武器を置き戦をやめよ！ これ以上の血は必要ない！」

「我らはこうして争えど！ 民を思う気持ちは皆同じ！」

「劉玄德は大義を示し、黄漢升は矜持を示した！ 双方目的は達し、敗者などあるうはずがない！」

「共に勝者であるならば！ 双方、勝鬨をあげよおおおー！！！」

趙雲の大音声に応えるように、劉備軍黄忠軍ともに高らかに声をあげた。大気が震え、鼓膜を破ろうかという轟音が響く。

汗にまみれ、血を浴び、涙で彩った精悍な顔で思い思いに叫ぶ。

誇りの証明、生あることへの感謝、死した者への鎮魂。それぞれを乗せて、兵は勝鬨をあげた。

益州攻略戦の第一幕。

劉備軍は八千の死者と四千の負傷兵を出し、黄忠軍は一万五千の死者に、五千の負傷者を出した。

互いに失ったものもあつたが、それ以上に得たものが大きかった。劉備は自身の理想が持つ矛盾に気付き、それを押し通す胆力を身につけた。黄忠は真に仕える主君に巡り会うことができた。

黄忠を仲間にして、益州攻略は俄然進む。次に向かうは嚴顔の待つ巴郡。劉備たちは軍備を整え、巴郡へと行軍したのだった。

第二十四話 たいけつ！（後書き）

感想くれるとホント嬉しいです。クレクレである。
どんとこい批判。

- ・どこそこが意味不明
- ・会話が不自然、唐突
- ・なにしてるか分からない
- ・いい話にしようとして失敗してる。キャラのバックグラウンドがないから感情移入できない

などなど募集しております。

自身の文才のなさの慟哭を活動報告で垂れ流したりしてます。そこみれば、「ああ、これはこういう意図でやったのか」と思えるかもしれない。……もっともその意図が本文に表れてなければ駄目なわけですが……はあ。

第二十五話 けんかつ！（前書き）

剣戟難しい。ななわりさんぶ先輩パネーっす！

第二十五話 けんかつ！

楽成城をあとにする劉備軍一行。劉備軍は黄忠軍を吸収するとともに、紫苑が下ったことで今まで桃香に懐疑的であった者たちも桃香を信用し義勇兵が増加した。また、成都から離れた劉璋の影響力の少ない地域の軍が次々に桃香に下り、軍は加速度的に拡大した。その数、八万。連携は十分とは言えないが、劉璋軍に対抗するに不足はなかった。

劉備軍は成都に行くのに三つの進路があった。巴郡、江陽、巴東の三つである。その中で巴郡を選んだのは紫苑の進言があったからである。

紫苑は劉璋の病状と娘の璃々の事を話し彼らを救って欲しいと告げたとともに、巴郡の嚴顔は自身と懇意にしている人物で説得に当たれば必ず桃香に下ると進言した。その進言に従い、桃香たちは巴郡へと進んだ。

桃香は確かに紫苑に言うとおり、巴郡へと進み嚴顔に説得をしたはずであった。

悪いようにはしないと、黄忠もこうして生きていると、民のために最善を尽くすと、その声を張り上げて自身の心のままに訴えかけたはずであった。

それがどうしてこうなったのか。

「はあああああー！ー！」

「うりやりやりやりやあー！ー！」

瞬き一つ許さぬ嚴顔と鈴々の武闘。嚴顔の持つ豪天砲から射出される鉄杭を鈴々の丈八蛇矛で受け流すように弾く。

足を滑らすようにして素早く間合いを詰める鈴々。

「うりやりやああー！」

敵顔の右腹へ蛇矛を轟音と共に突き上げる。当たれば風穴をあける一撃必殺の攻撃を後退しながら豪天砲付属の剣でもって薙ぎ払う。

「はっ……！ 重いつ！」

膂力では及ばないと払いそこねた蛇矛を体をよじらすことでようやく避ける。敵顔のひらひらとした衣装を少々引き裂く程度で済む。だが、その引き裂かれた衣装が細切れになる様を見て掠るだけでも大怪我は免れないと敵顔は息を飲んだ。

敵顔がそうしている間は鈴々にとつては隙。その隙を逃すまいと突き上げた蛇矛を引き戻し、もう一度前進。次は敵顔の胸に向かつて左薙ぎ。鈴々は先程の攻防で敵顔は鈴々の攻撃を払うことができないと踏んで体の中心に狙いを定めた。

避けることもできない、払うこともできない。ならば受け止めるしかない。

鈴々は本能的に相手の戦闘力を分析していった。この齡にしてこの武、恐るべき天稟であった。

だが、鈴々が本能の武をみせるのならば、敵顔は経験の武だ。

追い込まれてもなお余裕を見せる敵顔。自身より力が強い者などいくらでもいた。自身より才ある者などいくらでもいた。だが、その度に奴らを下してきた。

敵顔は不敵な笑みを見せて、自ら間合いを詰めた。その勢いのまま

「うにゃ！？」

頭突きを食らわせた。人体の最も重い部位での全力の突きは鈴々

の鼻面へ命中し、鈴々はたたたらを踏む。その幼い顔の小さな鼻から一筋の血が流れた。

敵顔は蛇矛の勢いを殺して、軽々と掴みこちらに引きこむ。「にやにや!？」とつんのめるように前進する鈴々に前蹴りを放ち吹き飛ばす。

片腕を使いやつとのこととで防御した鈴々であったが、蹴りを吸収できずに鞠のように地を跳ね転がった。

《……》

息もつかせぬ攻防につばを飲み込む周囲で二人の一騎討ちを見守る両軍。しかし、転がる鈴々を見て次第に様相が変わる。

《オオオオオツツツ!》

《敵顔將軍万歳ツツ!》

《勝って一緒に酒飲ませてくださーいツツ!》

敵顔陣営からの大歓声。敵顔を讃える声と熱が辺りを包む。

それに応えるように敵顔は力強く拳を掲げ鈴々を見下ろした。その勇ましい姿を見て一層歓声があがった。

対して劉備軍。押される自慢の將軍を見て悔しそを「ぐぬぬ」と歯を食いしばる。

鈴々が鼻血をふんつと吹き出し尻についた土をパツパツと払う姿を見れば、まだまだ気力十分。これならまだ大丈夫だと見守る劉備軍であったが、その静寂を破り一声が入る。

「鈴々ちゃん! 頑張つて! !」

劉備軍総大将劉玄徳である。

不安気な目をして精一杯喉を震わせる劉備に押されるように、兵

たちも声を出す。

《張飛將軍っ！ 張飛將軍っ！！ 張飛將軍っ！！》

《燕人張翼徳様ツッ！！》

《肉まん食べさせてえええっつ！！》

敵顔軍に負けじと声援し、鈴々を後押しする。鈴々は声援に嬉しそうにして手をブンブンと振る。

「ありがとうなのだー！ さつさとおばさん倒して肉まん食べるのだ！」

にししと笑って言う鈴々。

だが敵顔はその言葉に黙ってはいられない。瘴気をあげて鈴々に対する。実は劉備軍にも瘴気をあげる者がいたのは内緒だ。

「チビめ……。目上の者に対する礼を知らんのか」

「事実を口にしただけなのだ」

「ふっ、ぬかしおる。……しかしな張飛よ、老いたりといえどこの武は些かも衰えはせんぞ」

「そんなことはわかってるのだ。でもそんなの関係ないのだ！ 鈴々が勝つのだ！」

「……押されている状況でもそう言っか。……良い鍛えられているが……。わしはまだまだ強くなるぞ？」

「関係ないのだ！ 鈴々は負けないのだ！」

「ならば参ろう、張翼徳！ この喧嘩、せいぜい楽しませてくれようぞー！」

「はああああああ！！」

「にやにやにやにやああああ！！」

「ふふふつ、あとで鈴々ちゃんにはお仕置きが必要のようですね…」

「はわわつ、紫苑さんが黒いです……」

「朱里ちゃん、紫苑さんくらいになると色々思うところがあるんだからそつとしとかなきゃ駄目だよ？」

「……桃香様？ 今なにか不穏当な発言があつたような……」

「ないです！ ないです！」

ブンブンと顔を左右に振って否定する。あまりの勢いに柔らかな頬の肉がプルプルと震える。そのプルプルの肌を見て余計黒くなる紫苑である。ああ、妬ましい。

この話題は死を招くと慌ただしく別の話題を提供する朱里。

「そつ、それにしても、敵顔さんが一騎討ちを望むとは思いませんでしたね！」

子ども軍師が精一杯空気を読んで出した話題に躊躇いもなく全乗っかりする桃香。

「そうだねっ！ 兵が傷つかずに済んでよかったけど、二人とも大丈夫かな？」

心配だな、と一騎討ちをする二人を見る桃香。紫苑も先程の不快な話を意識的に排除し会話に加わる。

「桔梗は死合いと試合の区別ができるお人です。それでも一騎討ちを望んだのは我らの力が見たいからなのでしょう。軍としての力は私が計らせてもらいましたが、桔梗は個の力を知りたいといったところでしょうか」

個人的な趣味もあるのでしようが、と言って締める紫苑。

「だったら鈴々ちゃんは適当な人物でしたね。今我が軍の中で個人の武において最も強いのは鈴々ちゃんでしょうから」

「愛紗ちゃんは怪我しちゃったしね」

そう言って三人は愛紗の方を見る。一騎討ちがよく見える一番の特等席で声を張り上げて鈴々を応援している。

肩と脇腹に包帯を巻き、それでもなお大声を出す姿に桃香と朱里は微笑ましく思う。

「お姉ちゃんだね」

「なんだかんだ言っても鈴々ちゃんが心配なんですな」

応援に熱が入りすぎて、イライラと青龍偃月刀を振るう愛紗を周りの兵が数人掛かりで抑えていた。

紫苑は愛紗を見て若干申し訳なさそうに目を伏せる。戦でのこととはいえ自身の矢で怪我を負うことになった愛紗に引け目を感じていた。もちろん、愛紗は気にすることは無いと言っていたのだが。

喉と心の臓腑を狙った黄忠の矢に愛紗は当たる寸前で気付き、喉に向かう矢は肩で、心の臓腑に向かう矢は偃月刀の柄で矢をそらすことで九死に一生を得たのだった。

「ねえ、紫苑さん。鈴々ちゃんは勝てると思う?」

天真爛漫な顔で紫苑に問う桃香。その無邪気な顔に紫苑は後ろ向きに思考を止め、これが桃香様の力なのだと、自らの主桃香に感謝しながら答える。

「鈴々ちゃんのこととは私は分かりかねますが……。桔梗は歴戦の勇士。鈴々ちゃんより経験豊富ですので余程のことではなければ心は折れません。戦を愛し、戦場を味方にし、怪我することすら愉悦の一言。豪天砲は遠距離にて無双の威力でありますし、近距離では体術の心得があります。桔梗を下すのは困難であります……。弱点が一つ」

「弱点?」

「はい、桔梗の持つ豪天砲は弾数が少ないのです。弾がなくなってしまうえば豪天砲はただの重くて短い、切れ味の悪い剣といったところでしょうか。そうなってしまうえば、鈴々ちゃんの圧倒的有利かと……」

それなら、とぱつと笑みを咲かせて鈴々をみる桃香。重低音の射

出音を響かせる豪天砲から放たれた高速の矢を鈴々はことごとく回避していた。

「じゃあ、この調子なら鈴々ちゃんが勝つよね！」

「ふふつ、確かに鈴々ちゃんは豪天砲を見切っているようですが、桔梗も伊達に経験を積んでませんよ。見てください」

促されて鈴々をみる。

「鈴々ちゃんは頭突きに前蹴りと攻撃を受けていますが、桔梗はまだ一度も攻撃をもらっていません。桔梗もまた、鈴々ちゃんの攻撃を見切っております。さらに桔梗は弾が少なくなってもまだ笑みを絶やしていません」

「もしかして、鈴々ちゃんを倒す策があるってことかな？」

「さあそれはどうでしょうか……」

それきり黙りこみ一騎討ちを眺める紫苑。それをみて釣られるように桃香も鈴々を見る。

せめて怪我少なく無事に帰ってきて欲しいと思いを込めて。

「はあああああああ！！」

豪天砲の連続した射出音。鈴々は右に左に陽炎のようにゆらめき躲す。既に矢の速さにも慣れて脅威にも感じなくなっていた。飛ん

で来る場所と到達する時間が分かれば苦ではなかった。

「へへん、もうそんなの怖くないのだ！」

「孺子が調子に乗りおつて！」

一層矢を放つ敵顔であったが、鈴々は余裕綽々といったふうに分いながら避ける。

「くっ、弾切れか！」

「にししっ、降参するかー？」

「笑わせるわっ！ 喧嘩に生き喧嘩に死する喧嘩師敵顔に降参の二文字はなかるうて！」

敵顔は自ら間合いを詰め豪天砲を振るう。それを撃ち落とすように蛇矛を振り下ろす。

鈍い金属音が耳を打ち、体躯を雷に打たれたかのようにしびれさせる。筋肉が限界まで引き伸ばされミチミチと嫌な音を奏でた。

それでもなお、互いに笑う。鏑競り合いで顔を突き合わせて会話する。

「強い、強いなあ！ 張飛よ！ 貴様の豪撃が芯まで響くぞ！」

「敵顔もなかなかやるのだ！ けど、こんなところで止まってなんていられないのだ！」

「うりゃりゃりゃりゃあああー！……！」

そう言うつと敵顔を押しつけ矢継ぎ早に突きを放つ。

それを巧みな足さばきをみせ絶えず場所を変え躲す敵顔。少しでも集中を乱し蛇矛の目測を誤れば一突きでやられるであろう突きを恐れずに少しずつ前へ、前へ。

いつしか、攻めている鈴々が後ろに下がりがり敵顔が間合いを詰めるという様を見せていた。どちらもある集中の乱れが足を掬うことになると理解し、突きに回避に神経を尖らせた。

だが、その集中も長い間続くものではない。どちらが先に音を上げるか。

それは経験の差だ。

「ぐぬっ!?!」

かすかに太腿にかすった蛇矛に走った痛覚に敵顔が背を丸める。それを見逃す鈴々ではない。

「ここなのだー!!」

明らかかな隙を見せた敵顔に決定打を与えようと突きを放つ。その突きは先程のものとは違い、無駄な力の入った、武勇の誉れ高き者がみればそれは大きな隙であった。

「鈴々の馬鹿者が! どう見てもそれは誘いだろっが!」

愛紗の声を意に介さず蛇矛は進む。暗い笑みを咲かす敵顔に向かつて。

案の定、敵顔はすつくと身を起こすと”酔”の肩当てを盾に前進。蛇矛を火花を散らせながらも受け流し、鈴々の眼前に迫った。

につ、と口角を吊り上げる顔に自信はありありと、闘気はむんむんと立ち昇らせ鈴々をみる。

敵顔は超接近戦と言った距離まで辿り着くと豪天砲を地に捨て、鈴々の隙だらけの脇腹に右拳を叩き込む。

「にやぐっ!」

くの字に曲がる体を捕まえ、更に追撃。

「ハッツ!」

顔面に軽く掌打を放ち視界を遮断、その掌を滑らすようにして後頭部を掴む。抱き込むように引き寄せ、顎を膝でかち上げる。打ち上がった顎に直突き。

血にまみれた顔を晒し仰向けに倒れようとする鈴々を叩きつけるように打ち下ろしの右。地を弾むように体をしたたかに打ってから大の字に倒れた。

そのまま動かない鈴々を見下ろし、一言。

「ふん、あつけない。……この程度では到底満たされぬわ」

その言葉と共に、敵顔軍の大音声。あまりの声の大きさに耳は歓声以外の音を掻き消し、敵顔の深呼吸の音は誰にも届かなかった。

敵顔は鈴々を背に地に投げた豪天砲を手に取る。止めを 差すわけではなく、銃口を劉備軍に向けて声を発す。

「劉備軍が将、張翼徳は既に倒れたぞ! さあさあ! 次の喧嘩相手を差し出せえい!」

葬儀のように押し黙る劉備軍に活を入れるように発破をかける。それでも手を挙げる者がいない惨状に呆れたように溜息をつく、仕方なしこちらから指名する。

「ほれ、その貴様！ 黒髪の偃月刀の貴様のことよ！ なかなかのやり手と見える！ 一戦、交えてみんか？」

黒髪の偃月刀 関羽のことである は、敵顔をキツと睨みながらも自制心を持って言う。

「確かに我が妹の敵を私が、と思わなくもないのだがな。……それでは妹に怒られそうだ」

ゆらりと指が一点を差し、言葉をつなげる。

「まだ終わってないそうだぞ？ ……関雲長の妹を舐めないでいただきたい！」

愛紗の指す方を見ると、プルプルと腕を震わせながらも上半身を起き上がらせる鈴々の姿があった。血の混じったつばを吐き出し、丈八蛇矛を杖替わりに立ち上がる。その目にはまだまだ闘気が詰まっていた。

「……そう、なのだ……。まだまだやれるのだ……。っ！ この程度でっ！ 止まってなんかいらんのだーっ！」

ついには支えなしに威風堂々立ち、身の丈に合わぬ蛇矛を頭上で一回転二回転、そうして切っ先を真っ直ぐ敵顔に突きつけた。息は荒く、満身創痍といったふうであったが、だからこそ。

(……侮れぬ)

そして、そうした人物であればあるほど敵顔は燃える。関羽への

興味をすっかりなくし、豪天砲を肩に担ぎ鈴々に問う。

「……分からぬな……。なぜそこまでして戦う？ 貴様がここで倒れてもいくらでも代わりの兵はいる。わしとて体力は無尽蔵ではないぞ。いずれ負かされるだろうさ。にもかかわらず何故貴様は立つ？」

肩で息をしている鈴々であったが、ゴクリとつばを呑み込み喉の渴きを癒してから答える。

「代わりになんて、させないのだ……。鈴々は決めたのだ。この痛みも、辛さも！ 全部ひっくるめて鈴々が背負うのだ！」

「力のない人間を力のある人間が守る！ そんな当たり前のことができない奴が多いから鈴々たちがみんなを背負って戦うのだ！」

「ずっと死ぬまで……。鈴々はみんなのために戦うのだ！ それが鈴々の生き様なのだ！」

鳴り響いていた歓声もいつしか消え去り、鈴々の言葉が波紋のように伝播する。乾いた砂が水を取り込むように鈴々の言葉は敵顔軍のみならず劉備軍にも染み渡った。

「重いな……。貴様の生き様は」

「重くないのだ。軽いと思えば簡単に背負えるほど軽いのだ。……逆にそれが逆に悲しいけど……。でも、鈴々は背負っていくのだ！ ずっとずっと！ 死ぬまで！」

静寂の中で鈴々の言葉に思うところがある桃香が感心する。

思えば鈴々が戦う理由というものをちゃんと聞いたことがなかったような気がした。鈴々の固い決意に驚くとともに、そんな妹を誇りに思った。それはまた愛紗も同じであった。

「……大した孺子よ。その齡でその域に達するか……」

吃驚する敵顔。護身に過ぎたる武の使いどころを弁え、民のために邁進する姿を見て感嘆を禁じえない。

自身の幼い頃はどうであったかなと思いついてみれば、鼻を垂らして村の小僧に喧嘩を吹っかけていたような記憶がなく、どこか郷愁と羞恥の念を感じた。あの頃の自身に比べて張飛は随分と先に行っているような気が来た。

「……くくつ、はっはっはっはっ！」

一度笑いが溢れてしまえばもう止まらない。盛大に高笑いをあげる敵顔。

何故笑っているのか分からない鈴々は困惑するが、付き合いの長い紫苑は違う。敵顔の意図を理解し、一騎討ちの場に躍り出る。

「桔梗、もう気は済んだかしら？」

「はっはっはっ！ 紫苑！ 貴様なかなか面白い奴らを連れてきたな！」

「そうですね？ この子より少しばかり年を経た私たちが情けなく思えてこないかしら？」

「まさしくその通りだな。此奴等を見ているとわしがいかに立ち止まっていたのか気付かされたぞ。……我が魂を刈り取られたわ」

呵呵と笑う敵顔に微笑を返して紫苑は鈴々に向かう。
蛇矛を持つ鈴々の手を包むように言う。

「鈴々ちゃん。桔梗はもう戦う気はないって」

そう言われても事態が掴めず、きよとんとする鈴々。敵顔に視線を移し問う。

「……ホントに？」

「もののふに二言はない。そなたらに降伏しよう。わしの負けだ」

「……降参の二文字はないんじゃないかなのだ？」

首をかしげて言う鈴々に、人を喰ったような笑いで返す。

「喧嘩は勝ったであろう？　だが、魂で負けた。一勝一敗は引き分けであろう。それで納得できんか？」

んー、と眉を寄せる鈴々に含み笑いをみせる。

「大人の言うことはよく分からないのだ……。けど、もう戦わないんだなー？」

敵顔は深く頷くと、鈴々は蛇矛を降ろして、ふいふいと空気漏れのような深呼吸をして、ぺたりと座り込む。

「……おばさん、強いのだ……」

「この餓鬼……。わしの真名は桔梗よ。貴様の主に授ける前にお前に言うのはどうかとは思いますが……。まあ喧嘩仲間としてなら構わんだらうて」

鈴々の前にどかりと座り、腰に下げた徳利を啜えこむ。口端から零れた上質の酒を舌で一舐めして、鈴々に差し出す。

さあ呑めと半ば押し付けるように盃を交わす。疲れてるから嫌なのだーという言葉は無視だ。

こくこくと、喉がなるのを確認すると、敵顔は豪天砲を天に向かって放つ。

どんと轟く音を祝砲としてこの一騎討ちを終いとする。そのことに気付かぬ敵顔の精兵ではない。

《わあああああ！！！》

この名勝負に自身も少しでも加わろうと声を張り上げる。

この一騎討ちを見届けたのは俺だ、俺もこの場に居ただ、私もこの勝負を作った一因なのだ。

耳を張り裂きそうな咆哮に満足気にする敵顔。今度は自身の欲を満たすために酒を喰らう。”酔”の肩当は伊達ではない。

「……桔梗」

ポツリと敵顔を呼ぶ鈴々。その目は恨みがましく敵顔をみる。

「……弾切れなんて、嘘だったのだー!？」

ビシッと非難するように指を立てる鈴々に、反省の色なしに言う。

「まだまだ餓鬼じゃな。敵の言をそっくり信じるなど愚の骨頂だろ

うて」

「卑怯なのだ！ ずるなのだ！ ずっこいのだ！」

「おうおう、負け犬の言葉が心地よいわい。敵を貶すよりもまずは自身の無能を呪ったほうがいいぞ？ お前は素直過ぎる。腹芸を覚えろとは言わんが相手の腹芸を見切ることは必要だろうて」

「んにゃー！ 偉そうにしてむかつくのだー！」

鈴々の子供じみた悪口を右から左へ聞き流し、紫苑に視線を向ける。

紫苑の微笑は劉璋のもとにいた頃のものと違うように見えて、同性でも魅力的に見えた。それだけ劉備軍を気に入っているのだと快活に笑う。

それも当然だ。これが笑わずにいられるか。

これから自身も愉快そうな劉備軍に身を置くことになるのだから。酒を浴びるように喰らい、一言。

「今日の酒は特別美味いわ……」

第二十五話 けんかつ！（後書き）

愛紗が背中を預けられる人物は星、もしくは霞。
鈴々が背中を預けられる人物は翠、もしくは桔梗。

第二十六話 おたすけ！（前書き）

分割して投稿。

難産すぎて、頭茹だって書いてますのでおかしなところも多々あるかも。さーせん。

第二十六話 おたすけ！

劉備軍の猛攻に劉璋軍の奮戦虚しく、成都の固く閉じられていたはずの城門はくぱあつと口を開けた。それもそのはずで劉璋軍は二大將軍の黄忠と嚴顔が敵方に寝返り戦力を大きく低下させ、それによつて兵の士気はこれ以上下がるところもないというほど低下した。その士気のままでは劉璋軍軍師、張任ちやうじんといえど軍を保つことは出来ず、数日籠城したのちに劉備軍の圧力に屈し恐慌に陥つた兵が城門を開け放つたのだ。

その機に乗じ城内に流れ込む劉備軍。もはやその勢いを止めることは不可能であつた。

兵としての務めを為そうとする者、泣きながらたどたどしく向かい討つ者、乱心し民に暴行を働こうとする者。

その一切合切を劉備軍は切り伏せ、ただひたすらに前進する。

「押せ押せ！ 勝利は目の前だぞ！ 向かつてくる者は斬れ！ 武器を捨て投降する者は無視しろ！ 我らは劉璋の首を抑えるぞ！」

戦えるまでに回復した愛紗の声に、隊の兵が意気軒昂に応える。

愛紗はその声に満足そうに頷くと前を向き青龍偃月刀を振るいながら突き進んだ。

後続には鈴々と桔梗が付き従う。桔梗は璃々を救出次第、玉座の間に向かい愛紗と鈴々に合流、劉璋の顔を拝む。そういつた算段だ。桃香、朱里、紫苑は成都の民の安全確保と侵略した正当性の主張を喧伝する役を担うことになった。紫苑は一刻も早く璃々の顔が見たいと桔梗の役と交代することを主張したのだが、璃々のこととなると周りが見えなくなる紫苑ではいらぬ怪我を負うことになりかねんという桔梗の主張が通つた形になった。もつとも、紫苑は自身の任が終わつたならば城に駆け出すつもりであつたのだが。

各々任務を遂行しながら、この益州攻略が終わりに向かっていくのを感じた。

成都城内の一室。耳に切羽詰まった喧騒を収めながらも、じっと佇む一人の武官がいる。黒髪の一部を白くし禍々しい手甲を身につけ、自慢の武器である金棒の鈍砕骨を脇に時を待つ。

ともに居る璃々は戦の雰囲気を感じて萎縮し、安心を求め焔耶の服の裾の掴んだ。

「焔耶おねーちゃん、こわい……」

そう不安を口にする璃々を安心させるように頭をがしがしと撫でる。「んぎゅ」と潰れたような声を出す璃々に薄く微笑んで扉の前の気配を伺う。

慌ただしく廊下を走る音が響く。それは次第に大きさを増し、部屋の前で止まった。足音から察するに人数は十から十五人、遠くにまだ聞こえる足音もあるのでまだまだ増えるだろうと焔耶は予測を立てる。

奴らの目的など知れているが話だけは聞いてやらなくもないと部屋の中から声を立てる。

「扉の前で突っ立ってないで入ってきたらどうだ!」

一瞬の静寂の後に意を決して扉を開ける者たち。劉璋軍の兵であった。

「魏延將軍！ 恐れながら申し上げますが、何故打って出られないのですか！ 城門は既に破られて、我らは窮地に追いやられておりますぞ！」

「ワタシが言いつけられた任は璃々を守ることだ。それ以外はできん」

「その任は黄忠將軍と嚴顏將軍に申し付けられたものでございましょう！ 今將軍らは劉備に下られているのですぞ！ そのような者の命令など……」

そう口にしたものは最後まで話しきらずに口を閉じた。正確には振り下ろされた鈍砕骨によってその者は地に潰れ肉を散らせた。そうなってしまうは話すことなど到底不可能だ。

片腕で鈍砕骨を振り、もう一方で璃々の目を塞ぐ。掌からかすかに震える璃々を感じ、魏延はもう少し穩便に殺すこともできたかと反省する。

死体を見せるのは忍びないと、璃々に目をつぶるように言って再び鈍砕骨を振り落とし床に穴を開ける。その穴から血とともに肉片もズルズルと流れ落ちる。

これでいいかと一仕事終えたように額の汗を拭う。恐怖に怯えた劉璋兵を気にも止めない。

「桔梗様と紫苑様はワタシの尊敬する方だ。舐めた口を聞いたら殺す」

そう牙をむき出しにして威嚇する。その気迫に青ざめる兵であったが、とても退けない。なんとか事態を好転させようと震える声で言う。

「……魏延將軍は劉璋軍の配下でありましょう。將軍からの任が重要であることは重々理解しましたが今は劉璋様をお守りするためにも戦場に出ていただきたいのです」

「気持ちはわかるが、それは貴様が言うことか？ 劉璋様が張任に話を通せ」

兵の嘆願を突っぱねる魏延。兵は苦虫を噛み潰したような表情を見せ拳を固く握る。

「……どうしても、でしょうか」

「そうだ。わざわざ聞くな馬鹿者」

魏延のその言葉を聞いたと同時に抜刀する。

「魏延將軍は寝返った！ 全員でこいつを殺せ！！」

恐怖心を払うように大声を出して特攻する。魏延はその兵を鼻で笑って迎え撃つ。

「小細工などせず最初からそうしている！」

鈍砕骨を振り回す魏延。その鉄塊は劉璋兵の武器を粉碎し、人を舞い上げるように吹き飛ばす。壁を突き抜け、天井を破り肉塊が踊る。

あまりの惨状に恐慌となりながら大振りで迫る兵。その姿を見て魏延が思つ。

(……訓練を受けていないならず者か……)

兵としての気構えもなく武器の扱いも知らない愚かな兵たち。
おそらくは劉備に下つてもそれまでの行いが露見し処刑されるだ
ろうと考えたのだらう。それならば少しでも劉備の機嫌をとろうと
ワタシの首を土産にしようと思つたのか。もしくは璃々を人質に
もしてここから退こうと思つたのか。

まあ、どちらにしても。

「下衆が！」

この者共を血祭りにあげることには変わりはない。

しばらく血を浴び続けて目の前も真っ赤になつたころ、魏延の耳
に聞きなれた重低音の射出音が聞こえてくる。

この乱痴気騒ぎも終わりかと笑みを浮かべる魏延。前方の兵は体
のあちこちに風穴を空け崩れるように倒れていった。

「焰耶っ！」

「桔梗様っ！」

互いに声をかけ無事を確認する。

桔梗は血まみれの魏延を見て顔をしかめ、手拭いで顔を拭うつい
でに体を改める。怪我がないことが分かるとうつ頷く。

ならば次は璃々の安否確認だ。部屋の隅で縮こまる璃々を見て、
とりあえずは安心する。

「ようやったぞ焰耶。しかし、もう少し綺麗に片付けることは出来んのかお前は。死臭で鼻が曲がりそうじゃ」

「お嫌いですか？」

「血が滾ると言つに！」

くくつ、と口角を上げ、焰耶の額を小突く。それを嫌がらずに受け入れ小っ恥ずかしそうにする魏延。

桔梗は魏延を脇に置き璃々に向かう。

「璃々や、よう頑張ったぞ。さあ紫苑が待っておる」

そう言つて璃々の手を引いて胸に抱く。凄惨な現場を見てしまつたせいか、気の抜けたようにぐにやりと体がゆらぎ、桔梗に従う。

「桔梗様、このあとはどうするのです？」

「璃々を紫苑に任せてからは劉璋のもとに行く。奴の最後を拜んでおきたいからな」

「それでしたらワタシもお伴します」

「当然だろうて。遅れずについて来い」

「はいっ！」

嬉しそつに破顔する魏延を見て、話はまとまつたと璃々を抱き直すといざ劉備のもとへ、というより紫苑のもとへ足を進める。そうしようとしたとき、間近からかかる声。

「……桔梗さん、おじちゃん死んじゃうの？」

ピタリと足を止め、自身の豊かな胸に顔をうずめてくぐもった声を出す璃々をみる。

後頭部からでは璃々の表情をうかがい知れることは出来なかったが、声の質から璃々の感情は感じ取れた。

「……さて、な。劉璋のボウズが降伏するのであれば生かしておくこともあるかもしれんが……。今の奴にそのような判断ができるとは思えん。だからこそこの状況であるしの。それに……いや、言う必要もなかるう」

頭を振って口を閉ざす桔梗。魏延はらしくない桔梗を見て首を傾げた。

劉璋と付き合いの長い桔梗のことだ。きっと自身の知らぬ劉璋の姿を知っているのだろうと魏延は釈然としない思いのまま無理やり納得させる。

璃々は桔梗の言葉に劉璋の死を予見し一瞬思考を止め真っ白になるが、それでも決意し言う。

「桔梗さん、璃々、おじちゃんのところについて駄目……？」

劉璋軍の兵を押しつけ押しのけ、ついに玉座の間へと辿り着く愛紗と鈴々。扉に手をかけゆっくりと開ける。扉のきしむ音に不快に感じながら慎重に進む。

その玉座の間の一段高いところに鎮座する劉璋。劉璋の一步後ろ

にいるのは忠臣張任だ。

「益州牧劉璋殿とお見受けするが、如何か？」

愛紗の問いが聞こえなかったかのように身動きしない劉璋。

愛紗も先ほどの問いはただの確認のつもりであったので、答えよ
うとなかるうと構わなかった。玉座にいらつということは、劉璋その
人であることを証明しているのだから。

「貴殿の將軍であつた黄漢升から話は聞いている。貴殿の体の状態
を知つて我らの王である劉玄德は貴殿に同情的だ。我らは貴殿が望
むのならば、貴殿を迎える準備がある。そう、貴殿が望むのならば、
だ」

桃香としては劉璋が望む望まないにかかわらず、病を理由に扶養
し隠居させてやりたかつた。

劉璋の民から伝え聞く風評と紫苑から与えられた生の情報は、僅
かばかり差異があつた。民からは暗愚、うつけ、凡愚といひ噂を聞
かなかつたが、それは益州が荒れてから生まれたものであつた。

劉璋はもともと気弱な性格の持ち主である。やることは先人の真
似事や文官から進言される政策で、なにか自分から新しいことをや
るといつたことが出来なかつた。それはなぜかといえば自身の能力
の不足を承知しているからである。優秀な文官から与えられる政策
を為すことが自身の責務だと思つていた。上げられる書簡に了の判
を押す簡単な仕事を劉璋は休まず続けた。情けないその姿は自身で
も理解していたから、あまり外には出なかつた。自身を見る民の目
を恐れた。余談ではあるが、反董卓連合に参加しなかつたのはそ
うした理由もあつた。

それはともかく、このような理由から劉璋は民から姿が見えず、
民にとつて劉璋は安心を与えてくれるような存在ではなかつた。民

にとつて劉璋は、よく分らない人に過ぎなかつたのだ。よく分らない人から凡愚へと変わってしまったのは、言わずもがな、益州が荒れたからである。信頼を得られていない君主の評価はあつという間に変わってしまったものであつた。

そういう民からの評判も後押しして劉備は益州を攻略していたのだが、紫苑から聞く劉璋像は桃香に少なからず迷いを与えた。

紫苑いわく、民が憶えた劉璋像は益州が荒れるまでは概ね正しいが、そこから先は心を病んだことを知らないがゆえであると。劉璋は知識の及ばぬまでも飢饉や賊に対して対策を講じようとしていたと。それが上手くいったとは言わないが、民を蔑ろにする人物ではないと。

政治は結果が全てとは言うが、それが情けに値しないかと言つたら違つたろう。

「劉璋様、こちらを。……あ奴は我らの怨敵。どうかそのお力で救つてくださいませ」

紫苑に負けず劣らずの豊満な体の金髪張任が厳かに剣を渡す。柄に宝石が散りばめられ、それでも十分に実践に耐えうる物である。

劉璋は玉座から幽鬼のように立ち上がり、口からだらりと涎が垂れさせながら宝剣を掴む。

愛紗はその姿から退くつもりはないのだと悟つた。それでも己が王のため、もう一度問う。

「劉璋殿！ もはや戦は終わった！ これ以上の血は必要ない！ 剣を置き、我が方へ下れ！」

愛紗の言葉は届いていないかのように、おぼつかない足取りで歩く劉璋。

この者では話しにならないと矛先を変える。

「張任！ 貴様なぜ剣を渡した！ 貴様が余計なことを言わなければ……！」

愛紗の殺気だった視線を、張任は害虫でもみるような目で蔑む。

「私めは劉璋様の望むままを行うのが役目。貴公には分からないでしょうが、忠誠とはそういうものなのでしょう。……それよりも、目の前ですよ？」

張任の言葉にはっとしたように劉璋をみる。ゆらりと宝剣を振りかぶりゆっくりとした速さで首元目掛けて振り下ろす姿。

それに脅威は感じない。星の閃光のような速度もなく、鈴々の馬鹿力も入っていない。

楽々青龍偃月刀の柄で受け止める。

そのあとは軽く押し倒し拘束して終わりにしようかと、愛紗は考えていた。だが

「ぐうっ!？」

床の木の板を踏み抜き、押しつぶされそうになる愛紗。鏢競り合いのすえ肩まで押し込まれる。愛紗はこれ以上は許さぬと全身の筋肉を使って、劉璋の刃に対抗する。それでもなお

「うううっ！ 何だこやつは!？ この私が押し返せぬだと!？」

まさしく、愛紗は全力をもって劉璋に相対している。とうに全盛期も過ぎたであろう体に意識も定かでない老人に対して劉備軍一の将が相手をしている。だが、押し負けている。

これは普通では無いと、愛紗は劉璋の頭の具合とは関係なく思う。何か理由があるはずだ。

愛紗はそう考え、劉璋を観察する。

宝剣を握る手は花を摘むことも出来ぬような弱々しさ。骨と皮のような腕を見れば木の棒のように真っ直ぐだ。筋肉の膨らみなど感じられない。

劉璋に力が入っていない。そう結論付けるが、だとすればなぜ力比べで負けるのか説明がつかない。

もしや紫苑から受けた矢傷のせいか。そう頭をよぎるが、否定する。ここまで来るのに何の影響も感じなかった。仮に影響があったとしても、劉璋のような老人に負ける道理を感じなかった。

「愛紗から離れるのだー！」

鈴々の声に反応し、その声の方向を見る劉璋。猛然と襲いかかる鈴々に虚ろな頭でも危険を感じたのか、愛紗から一步離れ、鈴々の攻撃を払う様子を見せる。その動きも愛紗への攻撃のように緩慢だ。その速度なら蛇矛を受け流すことなど間にあうはずがない。殺すことは避けたかったが、そのようなことを言っている状況ではなくなった。劉璋は武において脅威。手加減などしている余裕はなかった。蛇矛が劉璋を貫く未来を想像し、愛紗はどこか安心する。

だが、愛紗はその安心が裏切られることを知らない。

響く甲高い金属音。

劉璋の体を避けるように進む丈八蛇矛。それは劉璋の剣が蛇矛を受け流すことを成功させたことを示していた。

（ありえない！）

愛紗は今度こそ劉璋を油断なく見る。宝剣は鈴々の攻撃を受けることもできていない。まったく間に合わず宝剣は見当違いの方を向

いている。

にもかかわらず、蛇矛は劉璋を逸れた。

蛇矛に触れずして、避ける術は何か。

愛紗はその正体を知識で知っていた。それを体得するには、身を
苛め抜く修行と生まれながらの才能を必要とするもの。

「鈴々！ こいつは氣を使うぞ！」

第二十七話 かあさま！

「鈴々！ こいつは氣を使うぞ！」

目を凝らし蛇矛が本来進んだ場所をみれば、塵氣楼のように空間を歪める何物かがあった。その正体を氣であると断定し、鈴々に注意を喚起する。

鈴々は劉璋から離れるように後退し、愛紗のそばへ近づく。

「アレが氣なのかー？ 何も無いと思ったのに逸れていったのだー……」

「おそろくそうだ。蛇矛を逸らしたのは氣にぶつかったためだろう。私がかいつを押し返すことが出来なかったのは氣によって強化していたためだろうか……。とにかく、こいつの氣は危険だ」

愛紗は想定外の強敵にゴクリとつばを呑み込み、偃月刀を持つ手に力を込める。いまだかつて氣の使い手と戦ったことはない。初めての相手を前に、今までの戦の経験が行動を選択する。というよりも選択させた。

「鈴々！ 私は左から突く！ お前は右から奴を穿て！」

死中に活を求める。出たところ勝負だ。

そんな破れかぶれな考えであったが、それでも愛紗は氣に対して警戒心を持っていた。そんな思いから両側面からの同時攻撃を選んだ。

劉璋は目線だけ素早く二人をみると、声にならぬ声を呻きながら愛紗には宝剣を持つ右手を、鈴々には左手をかざす。それだけで十

分だというようにそのまま動きを止めた。

「片手とはナメられたものだ、なああああー！」

「いたadakiなのだあああー！」

衝突に合わせ響く金属音。

劉璋の宝剣が舞い上がるわけでもなく、腕が切り落とされるわけでもなく、劉璋はその場に佇む。

(二人の同時攻撃でも駄目か……！)

愛紗は気が愛紗と鈴々とに分散されてもなお、二人の剛撃を止めるほどの力を持つことを知る。

ただ、おかしなことは鈴々の方だ。鈴々に対しては手をかざしただけだ。にも関わらず響いた音は剣戟のもの。

氣は宝剣をかたどっているのか。

そう愛紗が考えていたときに劉璋からの攻撃にあう。

何の構えもなく、ただの振り上げ。力のこもっていない攻撃であったが愛紗は油断なく受ける。回避することもできたが、まだまだ劉璋の力を感じたかった。

小さく響く宝剣の音に反して、愛紗の体は持ち上がった。必死に抑えこもつと下に下にと力を込めるがまったく意味をなさなかった。そんな状況でも愛紗は冷静だった。

ひらりと体を反転させ劉璋の剣を流す。

「……力では勝てんな」

愛紗が青龍偃月刀を木の床にこつりと当てて呟く。

鈴々は愛紗一人満足気な表情をみて不満気な顔で言う。

「なー愛紗ー。もう倒しちゃっていいかー？」

「もう我慢できんのかお前は。少しは氣に対する探究心というものは持たんのか」

「そんなことしてる場合じゃないと思うのだ。それになんだか悪趣味なのだ」

「む……」

そう言われて愛紗はこの状況を客観視する。一人の年老いた狂人を相手に二人がかりで闘る。如何に相手が強者といえども外聞が悪い。それに自らの誇りに反するように思えた。

愛紗は一つため息をつくると鈴々に頷いた。やってしまえと、その意味を込めて。

鈴々と虎の髪飾りが齒を見せて笑い、劉璋に向きあう。

「そんなわけで覚悟するのだ、りゅーしょー！」

ピツと短い指を勇ましく劉璋に差し言う。

「お前の氣の正体は、全部まるっとお見通しなのだ！」

むふーっとな息荒く言う鈴々。顔の上気っぷりからワクワクと興奮し、額はテカテカと汗で光っていた。その姿を見て額に手を当てつつむく愛紗。

「そんなことはどうでもいいからさっさと攻撃しろ！」

「んにゃ、愛紗は”お約束”がわからないのだ……」

にへらと笑い頬をかく鈴々だったが、その顔をすぐに整え劉璋へ向かう。

「行くなのだ！　うりやりやりやあー！」

鈴々は弾丸のように走り目にも留まらぬ連撃を放つ。突き払い斬りを上段中段下段と問わずに蛇矛を荒れ狂わせる。そのいずれも劉璋の氣によって防がれるが、まるで気にせず次々と攻撃する。

鈴々は次第に攻撃の速度を上げ、暴風のようにして劉璋を襲う。始めは単発に響いた金属音は鈴々の攻撃速度に合わせ連続して途切れなく、耳にうるさく残響した。

劉璋は鈴々の攻撃に宝剣を合わせるようにして氣によって弾いていたが、鈴々の速度についていけずに腕をだらりと垂らし、眼で蛇矛を追うだけにして打突部位を確認すると、その場所に氣を張るだけに集中する。

ひたすら蛇矛を視界に捉え、守る。黒目が縦横無尽に蠢き、捉える。右目は右を、左目は左をバラバラにぐるぐると走る。

白目であった部分は赤黒く変色し、まぶたは痙攣するように震える。歯を力チ力チと鳴らし、体の限界を告げていた。

愛紗は常軌を逸した劉璋の姿に死を予感したが、猛った鈴々の声ではつとずる。

ついに劉璋はまばたきしたのだ。

「ここなのだー！！」

鈴々は劉璋のまばたきに合わせ、蛇矛を　投げ捨てた。

同時に劉璋の懐に入り、跳躍。その勢いを生かし鈴々の足は振り上がり、踵が劉璋の顎に吸い込まれた。

血の霧を吹き、崩れ落ちる劉璋の肩に逆立ちするように手を乗せ

る鈴々。体のバネを生かし劉璋の顔面にダメ押し of 膝蹴りを放ち、くるりと反転し蛇矛のそばまで戻った。指を二本突き立て笑顔で。

「……死んでない……よな？」

「ただ蹴っただけなのだ」

いや、蹴りっつていう水準じゃねーぞと愛紗は憤りたい。そこは抑えて問う。

「……なんで、蛇矛を捨てたんだ？」

「殺しちゃうかもしれないし、りゅーしょーは鈴々の蛇矛を見てたからなのだ」

「蛇矛を見てた？」

「そうなのだ。鈴々は二度も同じ間違いはしないのだ！」

腰に手を当て胸を張る鈴々を愛紗は訝しげに見て言葉の意図を記憶から辿る。

桔梗との一戦。引き分け、という形で終わっていたが実質アレは鈴々の負けであった。

桔梗の仕掛けた誘いにまんまと乗り、鈴々は致命打を受けた。桔梗の騙りを真に受けた。

あの失敗を鈴々は心胆に刻みつけていた。

鈴々が劉璋がまばたきした瞬間、脳裏によぎったのはその一戦。

今まばたきしたのは罠ではないか？ 罠でなくとも奴が絶えず見続けた蛇矛で攻撃することは正解であろうか？

鈴々の脳ではそんな思考が回転した。そして、第六感に従って蛇

矛を放り我が身を武器とした。

鈴々は先の一戦をしつかりと血肉として吸収していた。成長していた。

そんな鈴々をみて愛紗は誇らしげにかすかに笑い、くしゃりと頭を撫でた。くすぐったそうに鈴々にまた微笑む。

そうした情感溢れる場に水を差す輩。

顎の骨が割られ、鼻はあらぬ方向へとそっぽを向く。その濁った眼はもう実像を結ぶこともできない。満身創痍の劉璋である。

どろりと血を吐き出し、呻き声しか口にしなかった劉璋は感情を吐露する。

「……………えぐっ、ひぐっ……………うっ」

涙だった。大の字になって倒れた劉璋は雫のような涙を垂らし、喉をひくつかせる。一度流れでた感情の奔流は次第に勢いを増し、滝にも似た涙にそれを表し、赤子のごとく喚いた。

愛紗と鈴々は先の凍りついたような劉璋の表情からはとても想像し得ぬ態度に困惑する。

この者は先程まで我等二人を相手にしていた者と同一であろうか。泣き散らす姿からはとても武をもっているようには見えない。まるで人が変わったような……………。

愛紗はあまりの衝撃に一瞬我を忘れたように立ちすくんだが、すぐ立ち直り、これは好機だと決意を持って笑みを浮かべる。

紫苑から聞かされていた言では、劉璋は幼子のときと文官を一刀のもとに叩つ斬る猟奇的な面を見せるときがある。戦闘時は劉璋は後者であったのだろう。だが、通用しない攻撃に鈴々の与えた怪我が重なり、精神が保てなくなった。猟奇的な人格は引つ込み、幼児の人格が表に出た。

そして、愛紗は知っている。紫苑から聞かされている。

紫苑の子璃々に一度でも危害を加えたことはない。この状態の劉

璋に危険はない。この劉璋相手なら説得も出来るかもしれない。

子どもに対してに苦手意識を持っている愛紗であったが、やる価値はあると感じた。こうした場面はどうしても思ってしまう。

ああ、こんなときあの方なら。

「愛紗ちゃん！ 鈴々ちゃん！ 劉璋さん！」

玉座の間に甘く通る声。ここまで走ってきたのであろう、薄く顔を赤らめて細かく呼吸する桃香の姿。その姿を見て丸くする愛紗に桃香はにへらと笑みを返す。

愛紗は、この人は必要なときには必ずそこにいるのだなと心を温める。同時に、これで戦は終わりだと確信した。この御方は多くの人の心を掴んできたのだ。劉璋も例外でないだろう。それでも言うべきことはある。

「桃香様！ 護衛も無しにどうしてこちらに来られたのです！」

「護衛ならちゃんというよ。とつても頼りになる護衛が！」

そう言つて後ろを振り返る桃香。

「頼ってくれるのは光栄ですが、もう少し慎重に動いていただきたいものです」

額の汗を軽く拭き、苦笑する紫苑がそこにいた。穏やかな表情をしつつも、眼を光らし部屋の隅から隅まで見て状況を把握する。

劉璋は泣き喚き、張任は未だ動きなし。そしてなにより璃々の存在の確認。ここに璃々がいないことを残念に思ったが、もう城内は掌握していることからとりあえずは大丈夫だろうと安心する。劉璋に捕らえられているという可能性はなくなったのだから。

「それで劉璋さんは……？」

「あの有様です。……子どもをあやすのは私では力不足です。桃香様、頼みますよ」

「うん、そのためにここまで来たんだからね」

拳を胸の前に掲げ決意の表情で愛紗を伴に劉璋に向かう。劉璋から四歩五歩離れた、仮に一足飛びに襲いかかってきたとしても処理できる程度の距離を保ち、劉璋に話しかける。

「劉璋さん、私は劉玄德と言います。……わかります？ お姉さんとお話できるかな？」

膝を曲げ視線を落とし、すすすと泣く劉璋に笑顔を向ける。なおも泣き止まない劉璋に仕方ないと苦笑し、桃香はしゃがんだままひよこひよここと劉璋に近づく。愛紗の注意も無視だ。

劉璋の血と涙に塗れた顔を優しく拭き、なるたけ傷が痛まぬように頭を持ち上げ自身の太腿に乗せる。そつと頬を撫で語りかける。

「……辛かったね……。そんなになるまで戦ったんだもんね。ここを守りたくて、戦ったんだよね。……自分より大切だったんだね……。よく頑張ったね」

鼻をすすり、劉備は一層老け込んだように見える劉璋の境遇に思いを馳せる。

劉璋の母劉焉は大層優秀な人物であった。

劉焉は当時未開の地同然の益州に自ら望んで統治にあたった。険しい地形と朝廷との遠い距離をいいことにやりたい放題の官人を取

締め、益州に秩序をもたらした大人物である。

人の上に立つ存在として無上であったが、劉璋の母としてはどうであったか。

政務に追われても僅かな時間を見つけて劉焉は子に愛情を注いだ。あまりかまってやれないことを申し訳なく思う気持ちの方がより一層子に優しく接しさせた。

だが、それは劉璋にとっては正の効果を出す事にはならなかったといえるだろう。劉璋が自分を出せない気弱な性格になったのはそれが大きな原因であったからだ。

母に甘え庇護され続けた者が王になったのは民に不幸なことであったであろうか。劉璋が王となったのは劉焉の指名によるものである。

なぜか。凡人ではあったが誰よりも益州を愛していたからに他ならない。劉焉の愛した益州を守る気持ちは人一倍であった。

母を愛し、益州を愛し、それでもなお災害や賊から守ることもできない。

自身の能力ではとても治めきれぬ問題を抱えた劉璋の苦悩はいかほどのものであろうか。

それは母への愛が幼児退行させ、益州への愛が氣を発露させ武を創りだすほどのもの。

もちろん、桃香にそのような事情はうかがい知れぬことである。

それでも桃香が先の言葉を出したのは単純に劉璋の惨状をみて、なにか理由があるんだろうなあ、とその程度のものであった。

「もう、私たちに任せて休んでもいいんじゃないかな？」

それだけで劉璋には十分だった。

「うああ、ひぐっ……かあさまあ……」

「えっ？」

顔を伏せ太腿を涙で濡らす劉璋の出した言葉にきよんとする桃香だったが、劉璋がそれを求めるのなら少しでも代わりになるうと母に成りきって頭を撫でる。

そのどこか神々しい二人の姿にその場にいた誰もがこれで戦は終わりだと思ったのだ。劉璋の処罰をどうするのかはさておき桃香は劉璋を保護し、益州は晴れて桃香のもの。桃香にとってはそれが最高の結末であった。

だが、それは桃香にとつてのものに過ぎず、別の結末を望んだ者は敵味方両方にいた。ゆえにこれでは終われなかった。終わらなかつた。

結末を曲げたのは。

「璃々！」

紫苑の声に皆が声の指す方向に目を向けた。

桔梗が一番前に、桔梗の足にしがみつこうように璃々が、後ろに下がって魏延が立つ。

紫苑が璃々に駆け寄り抱きしめる姿を微笑ましくみる桃香だったが、やがて気付く。劉璋の涙が止まっていることに。

劉璋の視線は一直線に一点に向かっていた。像を結べぬ目であったが、後遺症というのか成果というのか、人に宿る氣がはつきりが見えていた。大きな氣に包まれる小さな氣。その氣がなんなのか劉璋は理解していた。

だからこそ劉璋の思考は破綻した。”かあさま”は二人もいないのだ。

思い起こされる記憶。璃々とのままごと、文官の処断、自身の無能さへの苦悩、家族にも似た張任紫苑桔梗の三将との関係、そして愛する母劉焉の死。

否応なく突き付けられる大量の情報に劉璋は潰されることはなかった。母でなくとも桃香の温もりはどうしようもなく力付けられた。目の前の現実に向かうときが来たのだ。

「きゃ！」

桃香を突き飛ばし足早に玉座へ。張任の顔を一瞬見て並び立つ。覚悟などとうに決めた顔であった。ならばもう言葉は必要ない。胸から短剣を取り出し、迷うことなく自身の腹に突き刺した。

「ぐがつ……！」

万が一にでも助かることはないようにぐるりと決るように短剣を廻し臓物を掻き乱す。そうして口から血と泡を吐いたところで短剣を抜き取り張任に渡す。

血に濡れた短剣を恭しく受け取ると、迷わず細首に沿わした。

「主が先に逝くなど認められるわけないでしょう。黄泉路で待ってますよ」

手早く短剣を引き、頸動脈を断ち切った。吹き出る血で周囲を彩り膝をつく。

両者どちらも助かる見込みのない怪我だった。

劉璋は冷たくなった手で張任の頭を抱き寄せると、その耳元で問うた。

「……余、余は、ぬしらの主であれたか……？」

張任の事切れた顔は何も浮かべなかったが、劉璋にはどこか微笑んでいるように見えた。

「目など、見えないのだが……」

その言葉を最後に体を弛緩させ、張任の肩に頭を乗せ寄り添うように死んだ。

桃香たちがあっけに取られた僅かな間にそれは行われた。当然理解できるわけがなかった。

「……なんで死んじゃったの？」

桃香がそういうのも仕方がなかった。理解できるのは劉璋とともにいた益州の者だけだ。

桃香が悲嘆にくれるなか、少しでも救われたのは璃々の言葉である。

「……だいじょうぶだよ。おじちゃん、最後に、璃々にありがとうって……い、言ってたもん。おじちゃん、璃々に笑って……ひぐっ……」

益州侵略戦は幕を閉じたが、どこか釈然としない勝利であった。

祝勝会。盛大に飲み食い騒ぎ、兵隊を慰撫する。身も心も解き放ち、生あることに感謝する。

そのどんちゃん騒ぎから少し離れ桔梗が一人で呑んでいるところ

に、紫苑が来る。

「おお紫苑。璃々は寝たのか？」

「ええ。驚くことに随分落ち着いているわ」

「くははっ、それは紫苑。貴様の血が通っている証拠よ。子どもとはいえ、よう分かってるわ」

「ふふっ、そうかも知れないわね」

紫苑は桔梗の横に腰を落とし、一献傾ける。

祝勝会の中心で桃香と愛紗と焰耶がいるのが見える。血色良く桃香に迫る焰耶を愛紗が容赦なく蹴散らしている。

桃香はニコニコと笑っているが内心どう思っているのだろうか。

「……ねえ桔梗？ 劉璋様の最期、どう思う？」

「そうさなあ……。紫苑はどうだ？ 貴様の方が思うところはあるだろう、よく璃々と遊んでおったであろう」

紫苑は桔梗に聞き返され、夜空を見上げる。雲のかかる月も乙なものだと感じる。

「……そうね、私は良かったと思っているわ。あの方は最期に正気を取り戻しておられた。あの方は一人の狂人としてでなく劉季玉として逝かれた。侵略者の手にかかることなく誇りを持って自刃したのは劉家としての最期の意地だったのでしょね……。できれば生きていて欲しかったのだけれど」

「んくつ、んくつ、ぷはあ……。死ぬことは逃げであるとは考えんのか？」

「そういう考え方もあるでしょうね。でも私は思うのよ。……桔梗？　なぜ劉璋様は割腹なさったのかしら？」

「ん？　それは紫苑が先に言ったであろうが。誇りと意地のためであろう」

「そうじゃないわよ……。あれはきつと自身が死んだ後晒し首にせよと言ってたんじゃないのになって」

「……わからんな。晒し首にされたいなら自身で首を断つたほうがいいだろうが。……んぐう、自分でいってて余計分からんようになった。晒し首になりたいとはどんな心境なのだ」

眉を寄せる桔梗に薄く笑みを返して紫苑は答える。

「劉璋様じゃ自分で首を断つなんてできっこないわよ。でもそういうことじゃなくて、桃香様に首を断って欲しかったんじゃないかなって思うの。……劉璋様は確かに桃香様と心を通わせていた。劉璋様には桃香様の甘さが見えていたんじゃないかしら？　だから益州に任せるに足るか、劉璋様は疑問を抱いた。とはいえもう劉璋様は死に体。残せるものは自身の首しかなかった。……一種の呪いかしらね」

「……それで？　貴様はそれを桃香殿に言っつもりか？　わしは想像したくないのう。桃香殿が首を片手にいつもの笑顔を見せているのは。……おうおう寒気がしたわ」

「ふふつ、言うわけないわ。私の勝手な想像だもの。桃香様があの経験をどう活かすか私は楽しみにしてるわ。きっと期待に応えてくれる」

桃香があの経験を糧とするか毒とするか、桃香次第だ。

自身が起こした戦の結果、死ななければ救われない人間もいる。死こそが務めであると考えるものもいる。ならば殺さねばならないだろう。

「……それより桔梗は劉璋様のことどう思ったのか聞かせなさいよ」

「愛紗が言っておつたが氣を使ったそうじゃの。……氣使いと一度喧嘩してみたかったのう……。これで足りぬか？」

「ふふつ、十分よ。桔梗らしいわ」

何も出来ぬ孺子扱いしていた桔梗にそう言わせたのだ。これ以上聞く必要もない。

「……張任はどうであつたかの……」

「あの方が文句あるわけないわよ。愛する主とともに逝けたのだから」

そう言つて紫苑は立ち上がる。桔梗からでは紫苑がどのような表情をしているのかは見えなかった。

「それより、ほら。新参者の私たちが傍観してたら駄目よ。この宴会は私たちの歓迎でもあるのだから」

「ははっ、ならば精々荒らさせてもらおう。酒は足りるかな？」

「酔いつぶれるまで呑みましょう」

「いつになるやら」

「それにしても久々の旅は心地よいものだ。このままどこかへ行つてしまおうか」

「あわわ、困ります……。星さんはこれが特別任務であることがわかってないようです……。辞世の句の準備が必要でしゅ……」

「それでは、おさらば！」

「待つてくだしゃい！」

雛里と星が益州攻めから離れ、この場所に来たのには理由があった。益州攻略の大役を犠牲にしても、今このときに動かねばならなかった。

だがそれには邪魔な存在がいた。劉表配下の文官である。益州を放つておいて独自に動くなど許すわけがなかった。

そのため、策を実行に移すために朱里とともに芝居を打った。

西方から五胡の侵略あり。

この報を受けて雛里と星は少数の兵を連れて出陣した。益州を攻略するうえで益州の民の信頼は必要である。侵略者を放置することは信頼を損なう行為であると主張し、出陣を認めさせた。

もちろん虚報であるので即座に目的地を変更し、こうしてこの地にやってきた。

涼州州都武威。

「よく来てくれたな趙雲に鳳統」

そう言うのは涼州領主馬孟起。玉座に座り二人を歓迎する。

「ほ、本日は謁見に応じて頂き、きょうえつしゅごきゅでうじやいまう」

「……そうか、恐悦至極、か。……くくっ、恐悦至極だな……くふふ」

「ハーツハハハハツ！！」

堪えきれぬと馬超と星が笑いを重ねる。盛大に噛んだ雛里はただでさえ小さい体をきゅっ縮め羞恥に耐えていた。

「雛里よ、耳が赤いぞ」

さっとなんがり帽子を隠し、恨めしげな顔で星を上目づかいする。くくつと視線を受け流し人を食ったような笑みをする星。雛里は心の復讐帳に『趙子龍、許すまじ！』と書き込み、その場は収める。馬超はというと、ようやく笑いが収まったのか、目の端の涙を一拭きし一度肺に空気をため込み言葉を出す。

「いやー、面白いやつだな！ まったく、少しは私も領主らしく振舞わせてくれてもいいだろうに。仮面を剥ぎ取るのが上手いなあ」

「そ、そんなつもりは……。あう……」

「くくつ、それより今日はどんな用で来たんだ？ ああ、堅苦しい敬語は勘弁な。反董卓連合からの縁なんだ。必要ないだろ」

さすがに本題に入るときには一人の劉備軍軍師として真面目な顔になる雛里。

「はい、当然馬超さんもご存知だと思いますが、我ら劉備軍はただ今益州を攻略しています」

「そう情報が上がっているな。正直助かってるよ、益州からこつちに賊が来て困ってたんだ。お前らが益州を攻め始めてから賊も静かになってな。ありがたい限りだ」

「それはよかったです。もし益州攻略を良く思ってたならどうしようかと……」

「ん？ 別に邪魔するつもりはないぞ。私には涼州で手一杯だしなあっ！ それとも物資を融通してもらおうなんて考えてるんじゃないだろうな！ 駄目だぞ！ 義勇軍からの成り上がりで大変だからって、こつちだって大変なんだからな！ ……うう、涼州の馬が……。あんなに良い仔たちだったのに……」

しくしくと泣く馬超。鬼の乗り移った眼鏡のボクっ娘軍師と、その背後にいる男の影を人知れず恨む。軍師兼文官を受け持つ代わりにボクと契約しようなどと甘言に乗ったのが間違いだっただ。

それはそれとして。

「い、いえ！ そうじゃないんです！ 私たちは今劉表様のもとにいて物資については心配ないんです！ そうじゃなくて私たちはできれば涼州と同盟を……」

そこまで言ったところで馬超がずいっと顔を近づけ興奮気味に言葉を遮った。雒里はその剣幕に「ひうっ！」と怯えていた。

「今、劉表って言ったのか！？ 荊州の劉表と！」

「ふみい……、言いましたあ……」

「そうか！ 劉表様に仕えているのか！ そつかー……。あー、じやあ聞いてもいいのかな……。？ いやでも……。やっぱまずいのかな……。けど気になるしな……」

小声でブツブツと呟く馬超を訝しげな顔で首を傾げる雒里。声をかけようかとしたところで馬超が動いた。

「……あー、一つ聞きたいんだが、劉備はいつから劉表様のもとに？」

「……反董卓連合から、ですけど……」

雒里の返答は正しくその通りである。嘘などない。だからこそ馬超に勘違いさせた。馬超にとっては不運であった。もう少し具体的に質問していればよかったのだ。

馬超はすっかり劉備も自身と同じだと思ってしまった。

「そうかそうか！ あのとときからか！ いやーよかった！ それなら遠慮なく聞けるな！」

馬超は雛里の耳元まで口を寄せ囁いた。囁いてしまった。

「……劉協様は元気にしておられるだろうか？」

「雛里よ、良かったのか？ 当初の計画では馬超殿と同盟ないしは不戦協定を結ぶ提案をするか、桃香様と会う機会を作るための挨拶ではなかったのか？ 何も出来ておらんではないか」

「あの様子では馬超さんから攻めてくることはないでしょう。この大陸の覇権争いには興味がないようです。ただ涼州の民が守れる程度の力があればそれでいいと思っただけでしょう。それならそれでいいのです。そんなことより面白い情報を得ました。これがこの遠征の最大の成果です。この情報は私一人の手に余ります。早急に帰って対策をまとめますよ」

上手く事を運べば劉表の喉元を噛み千切れる天恵とも思える情報。

雛里は昂ぶる感情を抑えきれず、犬歯を剥き出しに笑った。

その表情を見た星は徳利の酒を傾け、思うのだ。

浮き足立った者は必ず足を掬われる。願わくばその前に鳳の翼で飛び立っていてほしいものだ。

「このバカ馬！ 何ニヤニヤしながら政務サボってるのよ！ ただでさえ頭の出来悪いんだからサボる時間なんて無いのよ！ ボクがいつまでもここに居ると思わないでよね！」

「おわっ！ 詠！ 別に私はサボってるわけじゃないぞ！？ とうか詠！ そんなことより吉報だぞ！ 劉協様元気でやってるそうだぞ！」

「はあ？ なにバカなこと言ってるのよ。そんなの分かるわけじゃない。国の最重要機密事項よあんなの。どこのバカに誑かされたの」

「バカバカうるさいなあ詠は！ 聞いて驚け、劉備からだ！ いや正確には劉備の仲間の鳳統からだが……。劉備の奴、今は劉表に仕えているらしくてな。そこからの情報だ」

「劉備って、確か連合のときの……。へえ、なかなか面白いわね。その情報の確度ともかく、私は流悟からそんなこと聞いたことないことと、劉備が仕えていることも知らなかったという意味だね。

……ふふふふふっ、ホント面白い」

主要人物（前書き）

最近は劉表陣営についての話がなかったので、忘れてしまった人のため兼私のために、ここで一つ主な登場人物を紹介。
ネタバレ回避もあって一番上にすることもなく、ここに置く。

主要人物

姓名：字／真名（読み）

劉表：景升／流悟りゅうご

主人公。20歳後半から30歳前半くらいのイメージ。特に外見は考えてない。各々自由に想像してください。武器は長刀……長刀つて薙刀と同じ意味なんですって。私のイメージでは佐々木小次郎の物干し竿的な長い刀のつもり。太刀つて言ったほうが良かったか……。今更修正めんどい。

蔡瑁：徳珪／蘭々（らんらん）

ロリ。茶髪にお団子頭。文官。実はそこそこいい年齢。おっぱいミニマムサイズ。特に外見は考えてない。

黄祖：孟博／藍道あいどう

男。基本バカ。武官。特に外見は考えてない。武器は何でも使う。年に一度訪れるという『賢人の日』がある、という死に設定がある。劉表に対してプライベートでは呼び捨て、というふうに私がやりやすいうよう改変。

孫堅：文台／道蓮たおれん

孫策の母ということ年齢はお察し。黄祖の妻。一線から退いている。特に外見は考えてない。まあ孫策とかに似てるんじゃないだろうか。おっぱいがいっぱいだろう。

徐庶：元直／天里あまり

薄桃髪、垂れ眉、頭身低い。おっぱい標準サイズ。シルクハットに燕尾服。マジシャンスタイル可愛いです。軍師。水鏡塾名物の口癖

は「たわわ」。

馬：元義 / 早苗さなえ

黄巾党から仕官し出世。劉表の護衛。武官。黒髪縮れ毛を目を隠すようにする髪型。ロリ巨乳。方向音痴。鉄球を蹴っ飛ばして攻撃する。通称「赤蹴球」。登場シーンは凜々しかったのに……。

張：曼成 / 空乱くうらん

黄巾党から仕官し出世。劉表の護衛。武官。通称クー。黄土色の髪を無造作にはねさせた髪型。例に漏れずロリである。おっぱいはまな板。武器は吹き矢。通称「鉄筒砲」。色々出来る便利屋さん。困ったときのクーさんやで。口調は安定しない。

本作はロリを多く取り揃えております。どうしてこうなった。

第二十八話 きよてん！

『この世に求められし天の御遣い、眩き閃光に抱かれその身を顕現す。そのとき戦乱の世は終わるだろう』

そんな管輅の予言から幾数年。

全くといっていいほど御遣いが現れる様子はなく、民はすっかりその予言を忘却の彼方へと追いやっていた。

未だ来ぬ天の御遣いに助けを求めるより身近な王に期待すること覚え、各々信じる王のもとに身を寄せた。

魏王曹操。呉王孫策。蜀王劉備。涼州連合馬超。荊王劉表。

五国の王の庇護のもと民はつかの間の平穩を手に入れていた。この平穩が末永く続いてくれれば……。そう多くの民は思っていた。

また同時にこの平穩はいずれ破られるのだとも思い確信していた。それでも今はこの平穩を享受しようと思つて日々を過ごす。明日この平穩が破られようと心を押し潰されることの無いよう、精一杯。

人は生まれながらにして強者にあらず。

いかに恵まれた体躯を持つとも、その才に甘え努力を怠つたならば武は錆び付いてしまう。武というものは結局は自らの身をどれほど武に捧げたかで決まるのであろう。その時間、中身によって自身の武力は定まる。

しかして、規格外の呂奉先は別である。人間の規格に収まらぬ輩と比べても無駄というものだ。武を体得するのではなく、それそのものが武なのだ。

かと言ってそこで諦めてしまえば武の価値を貶める。それでは武は愛してはくれない。要は常に上を向き精進しろということなのだろう。

だから、劉表軍武官も修行を欠かすことはない。

城内にある開けた庭は將軍の鍛錬の場として定番になっていた。將軍ともあるうものが一般兵と同じ修練場を使うことはない。その理由は格の違いというのは正確ではない。力の違いといったほうがいい。將軍ほどの力になると修練場が一度で使えなくなるのだ。好き放題暴れ回りその度に修繕するのも面倒だしその費用も馬鹿にならない。

また、將軍というものは兵の上に立つ憧れの対象でもある。その將軍が軽くあしらわれる姿を見せるものでもないだろう。

流悟は庭から少し離れた場所の東屋に座り、蘭々と天里、道蓮とで茶を飲みながら鍛錬を観察する。

藍道一人に対し早苗とクーの二人で立ち向かう。

藍道は手甲鉤を装備し、早苗とクーはいつもの赤蹴球に鉄筒砲だ。涼しい顔の藍道に対し、二人は顔を赤くさせ荒く息をつく。藍道といえは劉表軍筆頭將軍。まだまだ幼い二人の少女が敵うわけもなくながむしやりに攻め立てるしか術がない。

そしてその度に服を引き裂かれ肌を露出されるのだ。顔を赤くしているのは羞恥によってであった。

人の頭大の鉄球を蹴り飛ばすと同時に前進し、這うように低姿勢のまま足払い。藍道は垂直跳びでそれを躲すと空中で回転。早苗のから空きの背に鉤爪を立て腰からうなじまで切り裂いた。

「きゃわあああああつ!?! 胸が!?! お胸が露わに!?!」

その発言に貧乳党代表蘭々と軽くイラツとするが、同じ貧乳のクーが仇(?)を討ってくれるだろうと茶を飲んで観察する。

そんな風に思われているとはいざ知らず、貧乳に誇りを見出しているクーが宙に浮いた隙だらけの藍道に吹き矢を放つ。音もなく忍び寄る矢は真っ直ぐ喉元に向かう。もうすぐ突き刺さる、といったところでの的はずれた。

「空中だからって制動できないと思っちゃ駄目よ。手甲鉤を忘れちゃいかんのだぜ？」

地に鉤爪を刺し体を矢の射線から逃していた。無理な筋肉の操作に鍛え上げられた体は悲鳴を挙げずに付いてきた。

クーは驚くことも僅かに次弾を放つ用意をするが、それを許す藍道ではない。

「ふひひ、ほらほら引き裂くぞ〜」

恐怖心を与えるように鉤爪を使い蜘蛛の如く走り寄る。

シャカシャカ、カサカサ。そんな擬音が似合う。

「ク、クーのおっぱいを見ても楽しくないと思っんす。早苗のおっぱいは柔らかかできさあ」

そんなふうは無情に早苗を生贄に捧げるクーも、さすがに顔がひきつっていた。

クーの言葉に藍道は黙考する。

確かにクーの乳はみすばらしい。あの乳をみて喜ぶものは余程の変質者であろう。この乳は露出させるに値するだろうか？ 否。断じて否。ならば早苗に目標を変え上着を完全に剥ぎとってしまうか、と考えるのは早計だ。つまり。

「乳がないなら下のお口があるじゃない」

「もう師匠の顔も見たくないです。不潔です。かあく、ぺつ。それでも食ってから死んでください。」

「手遅れだと!? 俺は痰程度の人間なの!? 痰以下なの!?!」

藍道は地に落ちた液体と早苗の汚物でも見るような目を忙しなく見る。確実に蔑んでいる。

手遅れなのか……。いや、まだだ。この状況はまだ挽回できる。

刃物は突き付けられてないのだから。良い舟(nice boat)の用意はされていない。

「よし、お兄ちゃん。いいこと教えちゃうぞ〜」

そう早苗から目を逸らしながら言って鉄球を手取る。なるだけ悪印象を与えぬように丁寧に扱う。クーはいえば、早苗に「男の人の言う『いいこと』って大抵が卑猥なことでございます。……早苗の貞操は犠牲になったのだ……」などと教えていた。もう悪印象しかなかった。

「師匠、私の鉄球に触らないでください。ベトベトのヌルヌルのカピカピになります」

「お前は俺の手を何だと思ってるの……?」

仕方なく池の水で手を洗う。それにしてもこの藍道、素直である。今は辛抱のとき。乙女の柔肌を晒したのは変わりないのだ。名誉挽回を誓い、一転真面目な顔で言う。

「早苗! お前は全っ然この鉄球を使いこなせていない!」

「なっ！ そんな事ありません！ 私が一番鉄球をうまく使えるんです！」

「ならなんで負けたんだよ？ どうして負けた？ その理由を考えずにいるからいつまでたつても弱っちいガキなんだよ」

反論できずに唇をかむ早苗。いつになく厳しい師の目が早苗を俯かせる。

藍道はとりあえず早苗の自信を砕いてから手を差し伸べるといふ算段をつけ、好感度上昇策を実行に移しているに過ぎなかった。それが結果的に成長を促すのだから馬鹿にできないというものだ。

「……ったく。よく見てる馬鹿」

そうやって距離をとって鉄球を持つ。早苗に鉄球の使い方を教えるためだ。

「あ……、脚甲を……」

「いらねえよ、んなもん。鉄球の威力と当たる場所、その時。みんなわかって俺の体がついてこれないわけないだろうーが」

鉄球を足でトントンと跳ねさせ、そのまま話す。

「お前はせっかくの鉄球を蹴っ飛ばして後は体術しかない。そんなもんが鉄球使いを名乗るか？ 笑わせるぜ。鉄球を常に手元に置いてこそ、鉄球使いだろうが」

その言葉と同時に鉄球を力強く蹴り上げる。跳ね上がる鉄球を迎

えるようにもう片方の足で今度は下に蹴り、また片方の足で右へ、左へ、上へ下へ。ときに逆立ちして、手を支えに横になって、宙に浮いて。

ぐるぐると縦横無尽に足が回り、高速で鉄球を迎え続けるその姿に前後左右どこにも死角はなく、球のような支配圏をつくりだした。

「……すい……」

思わず口に出た感嘆の声。今まで鉄球は蹴つ飛ばすのみであった早苗には驚天動地の思いであった。蹴った鉄球は飛んでいって自身から解き放たれる、そんな常識が壊された。

もちろん早苗も飛んでいった鉄球が戻ってこない可能性も考えて予備の鉄球をいくつか持っている。これまで鉄球が手元にならないなどという状況は作ってこなかった。その危険性を知っていたから。だが、それは今までの相手が強者でなくて。ただ運が良かっただけで藍道が見せた鉄球の使い方は早苗に強烈に刻まれた。

今まで”面”での攻撃としてしか使ってこなかった鉄球が、今では別物に見えていた。

「クー！ お前にこの”鉄球円陣”が破れるか！ このまま向かっていったら防ぐことは出来るか！」

「……そいつぁ無理な相談で……」

「ならばそのまま死ぬか！ お前に足りないのは接近戦での対処方法だ！ 射手が接近された時点で負けと思ってもいいが、そこから逃げる事が出来るのが隠密の仕事だろうが！ 射手と隠密の両方を兼ねたお前が！ 逃走の算段をつけられずにどうするよ！」

それはすっこい、と思うが反論はしない。藍道は『防ぐことは出

来るか』と聞いたのだ。それは相手を倒す術を聞いているわけでないのは予想できたことなのだ。また、クーは自身の近接戦闘の弱さに気付いてもいた。

二人の弟子の問題点の指摘。完膚なきまで自信を叩き折り、藍道にとつて第一目標は達した。あとは師匠として甘くとろける優しさを見せつけ、威厳完全復活大勝利。そんなふうを考え、鉄球の速度を弱め円陣を解く。

ふう、とさすがに慣れない武器で動くのは辛いと一息入れる。武器愛好家の藍道は大抵の武器を扱えるが向き不向きがあるのは当然だ。それに強がって平然としているがその実、足が悲鳴を上げている。さつさと終わらせてしまおうと痛む足に喝を入れ、弟子二人を見る。

「この即興で作ったが鉄球円陣から何か感じるものもあるだろ？ つつてもただこれを真似するんじゃ駄目だ。阿呆みたいに体力使っし、目が回って仕方ない。正直吐きそうです……。それに敵も近づけないが味方も同じだしな。改善点はたくさんある。そんな不完全なものだったが、少しは鉄球の新たな可能性に気付けたんじゃないか？」

そう言われた早苗の目は藍道の演武までのものでなく、鉄球を通して先を見ていた。鉄球を自在の操る自身を想像し、一歩進んだ武を未来に作る。

「俺と同程度のものを身につけようと思うなよ。お前には脚甲があり、飾りでない鉄球があるはずなんだからな。……俺を驚かせてみせろ」

明確に早苗の目に火をつけた。不敵な笑みを見せる藍道に気圧されることなく覚悟を持って見つめ返す。

「……はいっ！ 必ず驚かせてみせます！」

グツと拳を胸の谷間に掲げ、決意する。

その姿に安心する藍道。早苗の単純さに助かった。もはや変態的な師匠のことは覚えてもいないだろう。心のなかでほくそ笑みもつ一人の弟子に相對する。

「クーはどうだ？ 何か感じるものはあつたか？」

「それは……。けど、吹き矢に近接戦闘はさせられんす……」

「それはそうだな。だったら近づけさせるな。今の吹き矢は隠密、暗殺に優れているが、戦場では使いにくいだろ？ 一直線上の人間しか殺せないうえ、威力が低い。急所に当たらなければ致命傷じゃないからな」

分かつていたことだ。だから早苗とクーは二人で一人だった。早苗の大雑把な暴風を補佐する助手としてクーはいた。ピタリ背にくつつき隙を断つていたのだ。だからこそ、一対一は弱い。

そして、一対一が弱いことはクーは改善しようがない点であった。体がついてこないのだ。

「んー……。俺より流悟に聞いてみる。流悟もお前と似たようなもんだ。奴ならお前にぴったりの力をくれるよ」

「……あい」

東屋にて行われる劉表軍象棋頂上決戦。

蘭々と天里との決勝戦であり一回戦を呑気に眺める流悟。むむむと長考に入ることが多くなった蘭々としたり顔で茶を嗜む天里を見て、勝敗は見えたと言悟も天里に釣られるように茶を飲む。困った顔の蘭々を肴にするのは実にいいものだった。

だがそれも次第に飽きはくる。蘭々の長考のせいで手が進まない。盤上の駒は反撃の刻はまだかと主の指示を従順に待っているというのに、残念なことにふがいない主は決断力がなかった。ある意味文官の蘭々らしい振る舞いであった。

流悟はそんな勝負に痺れを切らし庭を見る。藍道が早苗とクーに弄られているのが見えた。

位も歳も藍道のほうが上なのだが、あしらわれている姿はとてもそれを感じさせない。

歳といえば、というのも失礼だが、流悟は隣に座り道蓮を見る。道蓮は藍道を優しげな目で眺め、一人酒を飲んでいた。

孫文台、真名を道蓮。藍道に敗れた後は藍道の妻として迎えられた者。献身的に夫に尽くす姿は劉表軍皆微笑ましく思った。本当に藍道を愛しているのだなと思わされた。

その愛する夫は、弟子の服を切り刻み下卑た笑みをする。その愛する夫は、弟子の機嫌を伺い下手に出る。

なんと情けないことか。

不憫な人を見る目で道蓮を伺っていると、道蓮が見つめられていることに気付く。流悟のその目に何が言いたいのか悟ったのか、けたけたと笑い足を組み換え流悟に向き直る。

「そんな目で見るな、流悟。酒が旨くなる」

「それは大変だな。お前の進む酒のせいで財政を圧迫したら困る」

「ふんっ！ 私の酒程度で圧迫される財政なら潰れたほうがいいなあ。藍道と逃避行の準備をしておくべきかな？」

「なら訂正しよう。民のために使える金が減るから困る」

「……卑怯者め。それなら何も言えんわ」

ぶすつと不平を漏らしながらもどこか嬉しそうな道蓮に、笑みを返し言う。

「それよりいいのさ。藍道が恥を晒しているが？」

「何を言うか、可愛いだろう？ 弛んだ顔も情けない顔も」

「……そう言うならいいがな」

言外にそうは思えないと込める。ただ感情を真っ直ぐに伝えるあの表情は藍道の良いところなのだと思う。

王として常に表情筋に力を入れて威厳を見せなければならぬ流悟にとつて、その制約のない藍道のころころ変わる顔は微笑ましいような殴りたくなるような、そんな思いだった。

また、道蓮もその表情に惚れ直しているのだろうと感じる。道蓮の顔が緩んでいるからだ。

その緩んだ顔の先にいる竜巻のように演武する藍道を呆けながら見る。正確には竜巻をつくりだしている何か、だ。流悟には視認出来なかったが、あんな化け物じみたことをするのは藍道だろうと確信して言う。

「……藍道はますます人外になっていくな」

「ますますとは何だ。私の夫だぞ。これではとても足りんわ」

「これでも足りないか。江東の虎だけある。既に人にあらず」

「私ならあの暴風の中で手と手を取りあって踊れる……というのは冗談だが、南海霸王があれば鉄球などものともせん。斬り碎いてくれよう」

「……呂布といい藍道といいお前といい、この世界には化け物が多すぎる」

「お前にだつて破れるだろう？」

そう意地悪そうな顔で問う道蓮に流悟は顔を逸らし藍道を見る。

あの暴風の中に入っていくのは無理だ。それならば遠くから、と思っても大抵の攻撃は防がれるだろう。火なら掻き消されて、風なら取り込まれて、水なら弾かれて。流悟に残されたのは土。土は万能だ。常に近くにあるし人は地面から離れられない。

「できるな。足場を崩せば人は何も出来ない」

「ほれみろ。化け物の世界へようこそ」

そうおどける道蓮に素直に反応することは出来なかった。流悟はどこまでいっても人の中で在りたかったからだ。化け物たちを馬鹿にしているわけではない。化け物たちに守られて流悟はこの場所に立っていると理解している。

周囲は化け物でいい。だが自分だけは人間でなければいけない。善悪損得関係なくそう感じていた。

「考えるのもいいが、まずは目の前のことに集中したほうがいいぞ」

道蓮に肩を叩かれハツとしてまばたきし意識を戻す。ニツと笑う道蓮は何事か呟いて席を立ってしまった。

そうして今度こそ目の前に集中する。そこには一人の女の子が立っていた。

「先生……強くなりたいです……」

諦めたら人生終了してしまいそうな顔をしたクーの姿がそこにあった。そのとき流悟は道蓮が呟いた言葉はこのことだったのだと悟り、流悟はクーの頭を力強く抱きしめ言った。

「……まずは下着履こうな」

道蓮が持ってきた服を着こんだクーに講義する。ダボついた服のクーの姿にときめくものを感じた流悟は脳内にその映像をしっかりと保存する。

講義の内容は多岐に渡った。流悟自身の氣について、自身だったらどう対処するか、自身が必要とする他の力、当たり前障りのない雑談。

長時間に渡る講義に流悟は思いつくままいろいろな話をしたが、クーにその話の何が琴線に触れたのかは分からない。だが、クーは解を見つけ出したようであった。

クーは流悟に一言礼を言ったあと、頬に口つけて走り去ってしまった。流悟は口つけられた側の頬を撫で付けつつ、クーの悩み解消に貢献できたようで満足感に浸る。

そんな流悟だが既にもう一つ問題を抱え込んでいた。その問題は流悟のせいでもあり、それを止められなかった当事者のせいでもある。

「……お蘭、泣くな。相手が悪かったんだ」

丁度五の黒星がついた瞬間であった。盤上は惨憺たる有様である。多くの場合決定打を与える兵駒は全て討ち取られ駒り殺しの様相。

すぐにでも詰みに出来るにもかかわらず、蘭々の将駒が動いたら詰みになるよう仕組んで動いているのが分かった。

そんな鬼畜の所業をした天里はホクホク顔だ。プルプル肩を震わせる蘭々に気付きもせず盤の解説をする。つらつらと舌が回る天里であるが、蘭々にそれが聞こえるわけもなく。

さすがにこれは不憫かと思ひ、蘭々の助け舟を出す。

「敵をとってやろう、選手交代だ。天里、俺と勝負だ」

解説をやめ、にぱっと笑みを浮かべる天里。象棋が好きなのが一目でわかるような笑みだった。

「そ、それじゃあ用意させてもらいますね！」

そう言って駒を定位置に戻す天里に待ったをかける。勝負はもう始まっているのだ。

「ただで勝負するつもりはない。勝負してほしくば」

何を要求されるのかと戦々恐々といったふうの天里。何か思いついたのかもじもじと体を揺らす。顔を赤らめ「たわわ……、私もみんなの前で脱がされちゃうのかな……」などと呟く。無論流悟はそのつもりはないのだが。というか藍道のように脱がしてなどいないのになぜそうした発想になると不可解に思う。流悟はいつだったかの噂は忘却の彼方であった。

「勝負してほしくば、車駒抜きだ」

「ふえ？」

車駒。象棋の攻撃の主役としてあり、勝敗はこの駒によって左右されるといふ重要な駒である。また、この駒を三手打つまでに敵陣地に出さないと負けるといふのが定石となっているものである。

その駒を天里だけ抜きにして活路を開くというのが流悟の考えた策であった。

「恐いか？ それはそうだろう。攻めの主力がいなくなってしまうのだ。ふはははっ！ 天里の常勝伝説もこれにて終焉よ！」

高笑いする流悟。それを見て天里と蘭々は思っただ。

「流悟様、格好悪い」

「はい、これで詰みでしゅ」

既視感のある盤上。違うのは顔をうつむかせているのが加齢臭を心配するおっさんであったことだけだろう。

「ふっつ……悪い夢をみた」

「現実逃避はやめてください」

無情にも現実に向き合わせる蘭々。それでもなお片目で現実を疑いながら見る流悟である。

「そうは言つがな、お蘭。……こいつを見てくれ、どう思う?」

「すぐく……惨敗です」

「たわわ、蘭々さんよりは勝つの大変でしたよ……?」

慰めになっていない。というかとどめを挿している。

流悟に対しては車駒抜きにもかかわらず疑問符のつく言葉に、蘭々は単純に弱いと告げられて、両者肩を落とした。

この強さ、さすがは軍師だと幼い少女を二人は見直して評価を上方修正するが、それで自身の自尊心が保たれるわけは当然無く。

「お蘭、もう帰ろう……」

「はい、どこまでも一緒に……」

蘭々の腰に手を回しぐつと引き寄せる。

遠い目をしてどこともなく眺める二人を引き戻そうと服を引つ張る天里だったが、その体格差ゆえ何の効力も発揮していなかった。ぐぬぬと唸る天里。そのとき天里に天啓ひらめく。

押して駄目なら引いてみる。それは逆説的にいえば、引いて駄目なら押してみる。

頭の帽子を外し、流悟と蘭々の中に脳天から差し込む。

「むぎゅぎゅぎゅぎゅうううううう!! ……ぶぱっ!」

頭だけ間に割り込み、その空間を広げるようにねじ入る。

ぶーっと唇を尖らせ不満を露わにする。

「駄目なのです……。せつかく私が勝ったんですから、今日は私が流悟様のお相手を務めさせてもらうのですよ」

朱に染めた頬を見せぬよう俯きながらもそう宣言する。その言葉に流悟と蘭々はくすつと笑う。

「おませさんですね天里は。ふふっ、今日は三人で、というのもいいでしょう」

「……ま、跡継ぎは早く欲しいからな」

そう言って三人は流悟の自室に向かって歩いていった。

なお象棋盤は道蓮が片付けた。

第二十九話 ぐんぎっ！

玉座の間にて今後の方針を話し合う。

玉座の脇には以前にはなかった荊国牙門旗が添えられている。火を意味する緋色、水を意味するはなだいろ縹色、土を意味する暗灰色、風を意味する銀色。それらの布地の上に金字の荊の文字。荊国の象徴となる旗である。

このよく言って色彩豊かな、悪く言ってごちゃごちゃな旗であるが、そのような旗であるがゆえに当然この旗に決めるときは実に議論は紛糾した。

もつと統一感のある色に。せめて金の荊の字を引き立たせるように明るい銀の色はやめたほうがいいのではないか。汚い。可愛くない。おいイ？ 萌の字が見当たらないんだが？

多様な意見が寄せられたが結局それらの意見は棄却された。流悟が自身の氣を意味する色を入れることに妥協がなかったことと、それに反して旗にさほど興味がなかったので反対意見を受け入れる必要性を感じなかったことも要因であったが、藍道が甚く気に入ってしまったからだ。この馬鹿を抑えることは誰も出来なかった。

そして藍道の言った「乱麻旗の荊国」という言葉が独り歩きし、いつの間にか民の間で正式名称となったことで決定的となった。

その名に決まったとき蘭々と天里は頭を抱えたという。

「乱麻……。まるで世を乱れさせているのが私たちみたい……」

それはともかくとして、今後の方針の話である。

荊国の内政については不安な点はない。民に不満なく衣食住の自由はない。農作物の収穫量も増加の一途を辿っているし、そこからの税もまた同じだ。安定している。

では軍備はどうか。広大な荊州を守るに相応しい軍事力をもっているのか。

それはこれまではもっていなかったというのが正しい。今は違う。涼州より送られた騎馬がいるからだ。”神速”張文遠によって鍛えられた騎馬隊は大きな戦力となりうるだろう。

縦横無尽に戦場を掻き乱し遊撃する騎兵、整然と並び眼前に立ち塞がる敵を押し潰す歩兵。荊国はその領土に見合う国力を備え、専守防衛するに十分な武力を揃えている。ならば他にやることは決まっている。

「劉備が劉璋を下したそうだな」

「はい、彼女らは内政と軍備の増強を進めております。そして早急の課題として、まず南方の南蛮の制圧。次に西方の五胡への牽制に当たる必要があるとのこと。へまをすることはないでしょう。益州は一安心といったところですね」

「強大な国ができようとしているというのに一安心か？ 私に破滅願望は無いがね」

「もうちょっとじっとしてもらえば幸いですね！。いずれ我慢できなくなるときが来ますよ、あの方は」

「劉備は確実に直情型だからな。いつか俺についてこれずに反旗を翻すだろう。まあ人の上に立つものならばそれぐらいの馬鹿でなくては困る」

蘭々が「それならあなたも馬鹿ですね」と目だけで伝えるのを、流悟はまぶたを閉じ受け流す。愚かであること。そんなことは両者とも百も承知であった。今更言われずとも良い。満場一致で馬鹿の

烙印を押されようとやりたいことがあった。見たい光景があった。それを為すためならどんな誇りも受け入れる程度の覚悟など既に心に刻んでいる。

そしてそれは各々の王も同じであろうと流悟は理解していた。だからこそ劉備は裏切ると確信していた。劉備の理想は流悟と相容れない。

流悟は裏切りの未来を想像し、暗い笑みを浮かべる。それこそが流悟にとって望むものであったからだ。

「そのときがすぐ来ても困るのですよ……。でもまだ劉備は心配いらないでしょう。ゼーんぜん脅威となりえませんが」

だがその未来はまだ先の話だ。

劉備は益州の統治が、孫策は揚州の統治が完了していない。訪れるであろうという憶測の未来と訪れるに違いないという確定の未来と、優先すべきは後者だ。つまりは魏王曹操との戦である。

「今考えるべきは魏についてです。袁家を滅ぼし河北を吸収した曹孟徳。それ以前から野心強く精力的に侵略し領土を拡張してきた者です。官渡の戦いで傷を癒し更に強大になった今、彼女はまた動くはずですよ」

「曹操の目的は大陸統一だからな。彼女の目が雄弁にそう告げているわ。動かないわけない。ならばそこで問題なのは、『いつ動くか』ではない。『どこを攻めるか』だ」

曹操ならば攻めるときにこう言うはずだ。「これから行くから首を洗って待っていないさ」と。

「曹操がとる選択肢は三つだ。まず一つ、孫策を攻める。二つ、馬

超を……、いや馬騰と思っているのか。まあともかく涼州を攻める。三つ、我ら荊国を攻める」

流悟は三つ指を立てて言う。

「お蘭、曹操の状況について説明しろ」

「はっ、曹操は袁紹との戦いに勝利した結果河北四州を手に入れました。それは袁紹の持っていた財産すべてを貰い受けたということでございます。もちろんそこから民に還元されたものは多いでしょうが、それでもなお残りましょう。残ったそれを無駄にすることは決して無いはずですよ。その証拠に諜報からの報告があります。資源や職人の数が跳ね上がっております。税の優遇なのかなんなのかわかりませんが、何某かの政策の成果でありましょう。そして注目すべきは兵数。我らを抜いていますよ？ おそらく大陸一でしょうね。よくもまあ統制できるものです」

報告の資料を頭の立つものは悩ましげに、脳足りんは目を滑らせながら話を聞く。

真面目な顔して聞く脳足りんもいる。理解できぬのに一生懸命だからつい苛めたくなるのも仕方ないというものだ。そんなわけで早苗に問う。

「早苗、曹魏の情報は理解できたな？ こうした状況の中で曹操はいったいどこを狙うと思う？」

ほ？、などという早苗の腑抜けた返答を構わず問う。ここは軍議の場。王に問われたことについて無回答など許されない。それがたとえ脳筋であっても。

「はあ、曹操は結構強いことはわかりました。だったら勝てる相手から潰していくのが上策ではないかと……。です。で未だ揚州内部を掌握しきれない孫策でしょうか。魏に面した盧江、淮南、呉……は孫策の地元なので無理でしょうがその二つなら魏に取り込みたりするんじゃないですか？」

それに乗じてズドンっと。そうまとめる早苗。

最後は限りなく雑であったが、早苗の的外れとは言えぬ答えに驚きながら感心する流悟。

「なるほど。孫策は現在豫章、会稽、盧陵といった南部を制圧していて背後はがら空き。その隙を突くというのは有効であろう。もう一つ言うならば孫策と我等がとも友好的とは言えないことも理由に挙げられる。孫策は北は曹操に、西は我等に包囲されていて助けを求めることも出来ないわけだ。さらに我らが領土欲が薄いことも曹操は看破している。曹操が落とした直後に我らが攻めてくる危険性は無いと踏んでいるはず。つまり、曹操はだれにも邪魔されることなく孫策を討てるということだな」

安心したように息をつく早苗。的はずれな事を言ったら後で師に馬鹿にされることは確定的に明らかであったからだ。

「まあ、それは間違いなわけだが」

だから流悟の言葉にビクンと飛び上がった。

「どどどどどうしてですか！ 今の流れから言って「大正解！ さすがは余の腹心馬元義よ！」とか言って褒美が出るところでしょう！」

身振り手振り体を動かして自身の主張の正当性を説く。口でなく体

である辺りがもう駄目だ。脳筋の面目躍如と言ったところか。とりあえず流悟の物真似は失笑ものだった。

「お前は曹操を知らなすぎる。奴はそんな狡いことはしない。正々堂々と、誉れある戦いを、出来ることならば強者と。奴の考えはそんなところよ。背後から刃を突き立てて霸王を名乗ることも滑稽であろう。そして最大の理由に 孫呉は弱者じゃない」

「んへ？ 先程と言ってることが違うじゃないですか。隙だらけの孫策っていった後に、曹操は強者と戦いたくて、でも孫策は弱者でない、なのに孫策と戦うことは正解でない……。さっぱりわかりませんです!」

「何が分からないことがある。簡単な話だ。曹操は隙だらけであっても強者だと孫策を認めているのさ。さらに孫呉の状態が整っていないことから誇りをかけて戦うことの出来ないこと。それでは戦いはならない。ゆえに孫呉ではない」

「んー……、まあ孫策が標的にならないことは分かりました。……ホントはよくわかりませんが……。じゃあ一体どこを攻めるつもりだと?」

釈然としない様子で質問する早苗であったが、これ以上聞いても不正解が覆ることもないだろうと頭を切り替え流悟に問う。

そのときに見たのだ。流悟の仄暗い笑みを。

ずっと体を巡る血が凍りついたかと思わせる怖気。その寒気に反して皮膚からは沸々と汗が染み出してくる。

流悟の身に纏った雰囲気は煤煙のように舞い上がり、避けようもなく体を包み込まれるのを臣は感じた。その体は筋肉が弛緩したように、硬直したようで。

もともと流悟は独特の雰囲気を持っている。それは生来のものなのか、劉家のしきたりに育てられたものなのか定かではないが、確かにある。それは下々の者を無意識に平伏させるような絶対的な強者を思わせるもの。ただそれは決して不快なものでなく、喻えるならば群れの王に守られているような感覚であって、今受けている邪気を孕んだ息の詰まるようなものでなかった。

この雰囲気の中で動けるものは流悟と同等の強者か、感じることを忘れた乱人。もしくは、その雰囲気の中で生きる者だけか。

「流悟様、気を鎮め給ええ。あんまり怯えさせるものではありませんよ？」

軽々しく流悟を抑えるはただの一文官に過ぎぬはずの蘭々。流悟は蘭々の言葉に深く息を吐いて無理矢理にでも体を落ち着かせる。

そうして凍りついた場を元に戻し、その場にいた皆もいつの間にか止めていた息を吐く。

「…………どこを攻めるつもりか。面白い質問だ。私は先に言ったな、『どこを攻めるか、それが問題だ』と。だがもはや問題であって問題でないのだよ」

玉座からすつくと立ち上がり下座の臣を見下ろす。

「孫呉を攻めるのでなければ、荊国か涼州の二つ。涼州は我らの同盟相手なのだ。どちらを攻められようともここにいる者ならば到底容認しがたい所業であると感じてくれるだろう。曹操がどちらを選択しようとも腸が煮えくり返る思いであると共有してくれるだろう。だが、私がそれだけで理性をなくして猛ると思ったか？ この身を烈火と変えたと本当に思ったか？」

玉座に響くのは流悟の静かな怒りと足音だけ。

「この怒りがわからないだろうか。曹操は孫策に戦うことが出来ずに我らに楯突くのだ。これが何を示唆しているか考えてみよ。……孫策までの繋ぎにされたのよ、我らは」

孫策までの繋ぎ。その言葉を臣は耳には入れたが理解するのに一呼吸必要であった。脳の中で反芻させその言葉の指す意味を探す、というのは少々違う。それが指す意味は分かっていたが、あまりの侮辱に脳が言葉と意味を連結させることを拒んだのだ。

「曹操の眼中に映ってもいないのだよ、我らは」

だが流悟のその言葉に否応なく突き付けられる。その事実から逃してはくれない。

「ただの踏み台だと！ 我らはそう言われているのだ！ 道上に無造作に置かれた石礫と同義だとみなされているのだ！」

大仰に太刀を抜き力任せに振りぬく。怒りを体に留めておくことが叶わぬと感情の昂りを示すようであった。

その流悟の姿を見て見苦しいと思うものはいない。この場にいる者全てが同じ気持ちであったからだ。出来ることならば自身も暴れ狂いたい、今すぐにでも曹操を討ちに飛び出したい。そんな感情であった。だがそれは許されないことであるとも感じている。

それが許されているのは真っ先にその事実に気付いた流悟だけなのだ。臣は何も気付かずに加えてただでなく理解することを拒んだ人間。この体でもって怒りを爆発させることすら愚かしい。

それでも、自然と体が震えることは抑えられない。主の怒りと同調出来なかった自身の不甲斐なさもある。だがそれ以上に自身の怒

りも背負って怒り猛ってくれる王への感動に打ち震えることは止められなかった。

もはや狂信というところまで行き着いた者たちだ。

だからこそ、流悟に応えることに些かの躊躇もない。軍議が始まるまでの目は消え去り、修羅の目へと変貌させていた。

「 良い目だ。私が為したいことを全て理解している顔だ。ならば軍議を始めよう。 霸王を殺すための軍議を 」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8394t/>

真・恋姫†無双 第三世界伝

2011年10月22日06時05分発行